

第4節 香川県中間西井坪遺跡出土動物遺存体

岡山理科大学理学部

富岡 直人

本報告文は、1989年に香川県埋蔵文化財調査センターの発掘により、香川県高松市中間町字西井坪所在の中間西井坪遺跡から検出された9世紀と18世紀に属すると考えられる動物遺存体について記述するものである。

1 検出状況と保存処理

本資料は、発掘時に6・7・11区の溝・包含層・土坑において確認・サンプリングされた。フルイによる資料の抽出は実施していない。特に、6-7区の18世紀の土坑SK II 11からは、ウシ5点と種不明の中型哺乳類2点がまとまって出土している。この土坑は砾を多量に含み、陶磁器類の供伴する遺構で、火を受けた遺物群もみられる。調査担当者の見解では、火災で焼けた屋敷地を破却、整地する際に残された土坑の可能性が指摘されている。遺存体類も一部変色しているものもあるが、白色化や亀裂の発生など高熱を受けた痕跡はみられず、熱を受けているかは証明されなかった。

No. 2・7を除き、いずれの資料の表面にも藍鉄鋼が生成しており、水分と鉄分の豊富な埋存環境であったことがうかがわれる。

保存処理は香川県埋蔵文化財調査センターにおいて実施し、パラロイドB-72を用いて樹脂による含浸・補強をおこなった。

哺乳綱	MAMMALIA
ウマ目（奇蹄目）	Perissodactyla
ウマ科	Equidae
ウマ	<i>Equus caballus</i> Linnaeus
ウシ目（偶蹄目）	Artiodactyla
ウシ科	Cavicornia
ウシ	<i>Bos taurus domesticus</i> Gracilis

第20表 中間西井坪遺跡出土動物遺存体種名表

2 動物遺存体の概要

脊椎動物門	Vertebrata
哺乳綱	Mammalia

後述するように、2目2科2種を同定した。その他種不明の骨格破片が4点含まれる。各資料とも骨幹部で、骨縫維方向に沿って破片化しており、目以下の同定は不可能であった。

ウマ目（奇蹄目）	Perissodactyla
ウマ科	Equidae
ウマ	<i>Equus caballus</i> Linnaeus

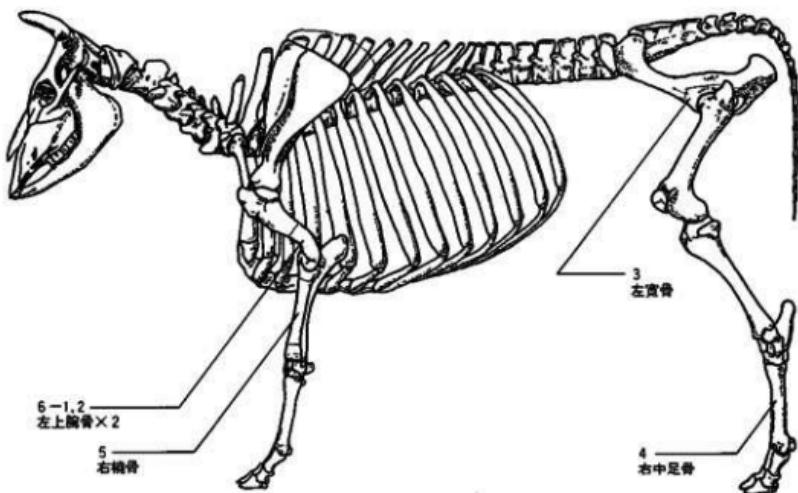
11区で検出された9世紀の溝S D II 71の埋土下層から左上顎第3後臼歯（No. 1）、7区で検出された18世紀の包含層から右上顎第3後臼歯（No. 2）が出土した。他の骨格や歯牙は腐食や破壊のため失損したと考えられ、無機質の成分の多い歯牙のエナメル質の保存は比較的良好であった。本2資料は、時代が異なるものの、同一部位の左右であることから、本来同一個体であった可能性も考慮し、マッチング（同一個体か否かの検討）を検討した。その結果、成長度や咬耗面の状況が著しく異なっており、別個体であることを確認した。年齢はNo. 1が萌出状況から3.5歳以上、咬耗の状況は7～10歳程度の資料よりも進行しており、年齢が高いと考えられる。No. 2が萌出状況から3.5歳以上で、咬耗の状況は7～10歳程度の資料に似ている。

これらの資料を林田重幸氏ら（1974）、金子浩昌氏（1985）、松井章氏（1986・88）や富岡（1998）による考古資料の測定値、西中川駿氏ら（1988）による在来馬の測定値と比較した（第21、22表）。

まず、現生種と比較すると出土資料の第1～3後臼歯と第2～4小臼歯の長さから、現生の鹿児島県トカラウマといった小型ウマから、長野県キソウマや宮崎県ミサキウマといった中型ウマの小型程度の大きさであると推定される。出土資料では、大阪府城山遺跡出土ウマとほぼ同じ程度の大きさであった。

ウシ目（偶蹄目）	Artiodactyla
ウシ科	Cavicornia
ウシ	<i>Bos taurus domesticus</i> Gmelin

日本では、弥生時代以降飼育が開始されている。中・近世には広く労役・運搬用に飼育され、食用や皮革用に屠殺されることもあったと考えられる。中・近世の遺跡ではウマと



第272図 ウシ出土部位（模式図）数字は整理番号 加藤1974：より作図、一部改変

共に出土することも多いが、その割合は遺跡の性格によって異なっている（富岡 1996）。

本遺跡では近世18世紀の土坑SK II 11から5点が出土している。その全てに解体の切痕がみられ、食用あるいは皮革用に利用されたと考えられる。また、No. 3・4・6は、一部が茶褐色から黒褐色に変色しており、火を受けた可能性が考ある。

No. 4 の右中足骨は全長が205.20mmと測定された。これは、西中川（1989）によると、御島牛～黒毛和牛より小さく、口之島産の平均より若干小さいものの標準誤差範囲程度であることが判明した。

さらに、西中川氏（前掲）の示されている出土資料と比較すると、大阪府西ノ辻遺跡（平安時代）の16.70cmより大きく、熊本県カキワラ貝塚（古墳時代～中世）の20.88cmや神奈川県千葉地東遺跡（中世）の21.82cmとはほぼ同じ大きさである。

さらに、西中川（前掲）がかかげる中足骨全長（GL）から推定体高をもとめる一次式 $Y = 5.78623X - 52.5034$ （相関係数0.65、単位cm）を用いて骨長から体高を復元したところ、66.23cmと極めて小さい値になってしまった。さらに近位端幅（Bp）から推定体高をもとめる一次式 $Y = 1.45082X + 151.988$ （相関係数0.75、単位cm、西中川 前掲）に測定値50.50mmを代入したところ159.314641という大きな値が得られた。また、林田、山内（1957）の一次式 $Y = 4.94X + 1.63$ に代入すると102.9988、2次式 $Y = -0.01X^2 + 5.34X -$

2.99に代入すると102.376096とほぼ同じ程度の値が得られた。林田らの計算式は小型ウマの資料が少ない中で算定されたものであることから、本資料のような小型の個体の推定値には比較的大きな誤差が含まれる可能性がある。

しかし、一方で西中川の提示した計算式は相関係数が低いことから信頼度は低く、西中川（前掲）の基礎データに照らすならば、実際は小型ウシとして知られる口之島牛の標準的な大きさである109~120cm程度の体高であったと推定される。

No. 3は寛骨である。恥骨と腸骨、座骨が既に化骨化によって接合しており、若~成獣と推定される。寛骨臼長 Length of acetabulum including lip (Driesch 1976) は69.50mmであり、西中川（前掲）のデータと比較すると御島牛と口之島牛の雌程度の大きさであり、小型ウシであることが判明した。この資料の座骨には、1.4cmの幅で外側の部分が押し割られた痕跡が残っている。孔は貫通しておらず、解体の際に用いられた道具の痕跡と考えられる。

No. 4は、小型ウシの右中足骨である。この資料の骨幹部中央から遠位端寄りにかけて中~小型刃器による切痕がほぼ全周している。これは中足骨周辺の筋肉の除去や、骨格からの皮革の分離を意図した切痕と考えられる。

No. 6-1と2は、左上腕骨遠位端付近の骨幹部を含む資料である。左側同一部位であることから、それぞれ別個体に由来している。いずれも中~大型刃器による切痕が観察された。両資料に上腕骨後位に位置する上腕三頭筋長頭筋や肘筋とそれに付属する腱を除去する際の切痕がみられ、No. 6-1には上腕骨前位に位置する上腕筋や上腕二頭筋を除去する際の切痕が確認された。いずれも大きな筋肉を除去する際の切痕であるから、肉と骨の分離の際に残されたものと考えられる。

3 中間西井坪遺跡出土動物遺存体の特徴

11区SD II 71埋土下層から出土したウマ左上顎第3後臼歯（No. 1）により、9世紀前後にこの遺構あるいはその周辺に小型ウマが廃棄あるいは遺棄・埋納されていたことがうかがわれた。

さらに近世の包含層や遺構から出土した遺存体からは、ウシ等の哺乳類が当地で廃棄されていたことがうかがわれた。まず、包含層出土の右上顎第3後臼歯（No. 2）により、近世において当地域で小~中型ウマが飼育されていたことがうかがわれた。さらに土坑から出土したウシ遺存体の全てにカットマーク（切痕）が残されており、この地域で解体処

理がおこなわれたことが推定される。特に寛骨（No. 3）は大型刃器による粗放な刺突あるいは打撲痕（1）と強い圧力によるスパイクル剥離痕を残すばかりでなく、座骨外側縁と内臓側各所に中・小型刃器による3～8mm程の切痕を多く残している。その他の切痕は、皮革加工の際にも残る可能性があるが、このような寛骨内臓側の細かい丁寧な切痕は、食肉用に加工する場合にしか残らないと考えられ、このウシは、食用に供された可能性が極めて高いことを裏付けている。さらに、No. 6-1・6-2の資料は左側同一部位であることから、2体以上のウシがこの地域で解体されたことになる。ただし、すべてが食肉用に加工されたとは断言できない。本来、ウシは近世において農耕用家畜として高い価値をもっており、頻繁に食肉用に供せられたとは考えにくい。ただし、食糧備蓄の欠乏や、ウシの事故死・病死の場合、またウシの働きが悪い場合などに、食用にまわされた可能性も考えられる。

(1) このような破壊痕跡は、松井章氏（1992：p.353）が香川県東山崎・水田遺跡（中～近世）で指摘している「斧様の鉈器で四肢骨を切断」という痕跡に似ていると考えられる。

謝辞

香川県埋蔵文化財調査センター 藏本晋司氏には貴重な資料の分析の機会を与えていた
だいたばかりでなく、保存処理と分析に御協力を頂いた。

奈良国立文化財研究所松井章先生、国立歴史民俗博物館西本豊弘先生には、同定と分析について御教示と御指導を賜った。岡山理科大学関係各位には多大な御援助と御協力を賜った。なかでも岡山理科大学助教授名取真人氏には、骨格資料の比較と同定に御教示を頂いた。同大学教授小林博昭先生には、御教示と御助力を賜った。さらに、同大学学生、藤田美美さん、同大学院沖田絵麻さんには、同定・記録・登録作業に多大なる御協力を賜った。記して深謝の意を表します。

参考文献

- 今泉吉典 1960 「原色哺乳類図鑑」(保育社)
- 今泉吉典他 1983 「学研生物図鑑 動物」(学研)
- 内田 亨他 1972 「谷津・内田 動物分類名辞典」(中山書店)
- 内田 亨 1979 「新編日本動物図鑑」(北隆館)
- 大江正直、木津博明、桜岡正信、友廣哲也 1990 「上野国国分僧寺・尼寺中間地域出土の動物遺存体」「上野国国分僧寺・尼寺中間地域(4)」本文編(2): pp.707-938
- 岡田 要(校閲) 今泉吉典(著) 1960 「原色日本哺乳類図鑑」(保育社)
- 岡田 要 内田清之助 内田 亨 1965 「新日本動物図鑑」下(北隆館)
- 加藤嘉太郎 1974 「家畜の解剖と生理」(養賢堂)
- 金子浩昌 1985 「豊田本郷遺跡出土のウマ橈骨について」「豊田本郷主要地方道平塚・伊勢原線新設工事に伴う発掘調査報告書」(豊田本郷遺跡発掘調査団): pp.201-214
- 金子浩昌 1985 「百間川沢田遺跡高輪手A調査区浜-113出土の馬歯」「百間川沢田遺跡2」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告59: pp.454-456
- 金子浩昌 1995 「津寺遺跡出土の動物遺体」「津寺遺跡2 山陽自動車道建設に伴う発掘調査」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告98: pp.597-604
- 金子浩昌 1996 「津寺遺跡中屋調査区出土のウマ遺骸」「津寺遺跡3 山陽自動車道建設に伴う発掘調査12」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告104: pp.282-285
- 久合田勉 1932 「馬学外貌編」(日本中央競馬会弘済会)
- 富岡直人 1996 「北目城出土動物遺存体」「北目城」(仙台市教育委員会文化財調査報告書)
- 富岡直人 1998 「津寺政所遺跡砂場地点出土ウマ遺存体」「津寺政所遺跡砂場地点」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書
- 西中川 駿 1989 「古代遺跡出土骨からみたわが国の牛・馬の起源、系統に関する研究—特に日本在来種との比較」(昭和63年文部省科学研究費補助金研究成果報告書)
- 西中川 駿 1997 「香川県川西北七条I 遺跡出土の牛骨及び馬骨」「四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財調査報告」第27冊: pp.292-300(香川県教育委員会)
- 林田重幸、山内忠平 1954 「日本石器時代馬について」「日本畜産会報」2 (2-4): pp.122-126
- 林田重幸、山内忠平 1957 「馬における骨長より体高の推定法」「鹿児島大学農学部学術報告」6: 146-156
- 林田重幸 1957 「中世日本の馬について」「日本畜産会報」28 (5): pp.301-306
- 林田重幸、鈴木孝司 1974a 「川入遺跡出土の馬骨について」「山陽新幹線建設に伴う調査II」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書2: pp.354-363
- 林田重幸、鈴木孝司 1974b 「倉敷市上東遺跡出土の馬歯について」「山陽新幹線建設に伴う調査II」(岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書2): pp.364-367
- 松井 章 1991 「家畜と牧-馬の生産」「古墳時代の研究」4 (雄山閣) pp.105-119
- 松井 章 1992 「動物遺存体」「高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告」第1冊: pp.352-357
- 益井 清 1943 「家畜比較解剖学」(養賢堂)
- Brown, Dorcas & Anthony, David 1998 'Bit Wear, Horseback Riding and the Botai Site in Kazakhstan' in "Journal of Archaeological Science" 25 : pp.331-347
- Driesch, A. 1976 "A Guide to the Measurement of Animal Bones from Archaeological Sites" (Peabody Museum Bulletin 1)

番号	出土遺物	時期	種類	部位	備考
1	II区 S D E71 下顎	古代(9世紀) ?	哺乳綱ウマ	左上顎第3後臼歯頸側(破片)	茶褐色に変色
2	7区包含層	近世	哺乳綱ウマ	右上顎第3後臼歯頸側(破片)	変色なし
3	6区 S K II 11	近世(18世紀)	哺乳綱ウシ	左寛骨開節臼部分	一部茶褐色に変色。 恵骨付け根に前位からのカットマーク
4	6区 S K III 11	近世(18世紀)	哺乳綱ウシ	右中足骨 遠位端 開節一部欠全長 205.20mm	骨幹部に一部茶褐色の変色あり。カットマークあり
5	6区 S K III 11	近世(18世紀)	哺乳綱ウシ	右換骨 骨幹部	カットマークあり
6-1	6区 S K III 11	近世(18世紀)	哺乳綱ウシ	左上腕骨 遠位端	カットマークあり
6-2	6区 S K III 11	近世(18世紀)	哺乳綱ウシ	左上腕骨遠位端	カットマークあり
7	6区 S K III 11	近世(18世紀)	哺乳綱中型哺乳 類種不明	不明骨幹部	カットマークに似た 傷が見られるが風化 が激しく不明
8	6区 S K III 11	近世(18世紀)	哺乳綱中型哺乳 類種不明	不明骨幹部	風化のため骨が剥け ている。カットマー クあり

第21表 出土動物遺存体属性表

遺跡名 地区 道 構 時 期 整理番号 上顎/下顎		岡山県政所 砂場2G区 住居4 7世紀前半 14-223(L) 左上顎	岡山県政所 砂場2G区 住居4 7世紀前半 14-220(L) 左上顎	岡山県政所 砂場2G区 住居4 7世紀前半 14-220(R) 右上顎	大阪府城山 Dトレント 溝S D0502 8世紀後半	大阪府城山 Dトレント 溝S D0502 8世紀後半	香川県中間西井坪 II SD II 71下層 9世紀 1 左上顎
性別		♀?	♀?	♀?	♀	♀	?
M 3 第3後臼歯	咬耗度 最大歯高 咬合面積大幅 咬合面積最大 歯冠高頭部 歯冠高舌側	d 測定不能 21.55 24.30 測定不能 測定不能	d? 53.25 20.70 27.15 測定不能 測定不能	d 測定不能 20.35 26.00 測定不能 測定不能	?	?	?
					?	?	42.20
					?	?	27.55
					?	?	測定不能
					?	?	測定不能

神奈川県西方A	神奈川県西方A	神奈川県西方A	神奈川県豊田本郷	香川県川西北七条1 第182団-2 溝: SD 03 中世~江戸時代 第182団-2 上部10枚位	香川県中間西井坪 7 包含層 近世 2 右上顎 ?
1 沸 古代 4 左上顎 ?	1 沸 古代 7 左上顎 ?	1 沸 古代 8 左上顎 ?	S D 46 室町時代後半 上部	?	d 包含層 近世 2 右上顎 ?
?	?	?	?	?	51.95
25.40 27.10 ?	22.10 22.60 ?	測定不能 27.40 ?	20.50 26.00 82.00	19.70 23.40 ?	測定不能 29.40 測定不能
?	?	?	?	?	測定不能

第22表 出土上顎第3後臼歯属性表

b : エナメル質咬耗開始 c : 小窓独立 d : 小窓連続
 咬合面積大幅 : breadth at binding surface 咬合面積大長 : Length at binding surface
 豊田本郷遺跡のデータは金子(1985)より
 西方、城山のデータは松井(1986・88)より
 岡山県政所遺跡砂場地点のデータは富岡(1998)より



写真10 出土動物遺存体

（ ）内の数字は第21表の番号に対応する

第4章　まとめ

第1節　遺構の変遷と個別遺構の検討

1. 弥生時代後期～古墳時代前期

当該時期の遺構には、調査区西端で検出された六つ目山北麓から派生する小規模な谷状地形（谷7）と、谷東岸に展開する掘立柱建物6棟、土坑、土器棺墓3基、溝状遺構等で構成された集落域がある。谷部より出土した膨大な土器量と比較して、集落内からはそれに相当するに充分な居住遺構等は検出されていない。残存する遺構の深度からしても、後世の削平等による相当量の遺構の消滅をまず想定する必要がある。

したがって、検出された遺構から当時の集落の内容・性格について論及できる部分は多くはないが、いくつか問題点を指摘し、まとめとしたい。

谷7出土の土器群は、一部弥生時代中期に遡るものもみられるが、後述するように主体となるのは弥生時代終末期から古墳時代前期初頭頃の僅か3～4型式分の土器群である。おそらく谷東側の微高地に展開した集落の経営期間も、土器内容からみる限り、谷出土の土器群と大きな時期差を認めない。したがって、谷周辺部に集落が経営された期間内に、急速に谷部への土砂供給が活発化し、谷内部の平準化が進行したものと考えられる。

その背景として、当該時期に集落等で消費する森林資源の無秩序な開発によって、谷上流域の山林が伐開され、雨水等による地表面の浸食が促進し、谷部への土砂供給量の一次的な急増へと繋がり、谷部の埋没が進行した可能性が強い。この点は、谷埋積後に単発的に発生した洪水堆積（谷7最上層群）が、いずれも7区周辺での古代集落の経営期間に相当することや、谷3周辺域での古墳時代前期後半の埴輪焼成遺構群の経営期間内に、谷3の埋没が進行したこと、当該時期における森林資源の開発に起因した共通する現象と理解される。

さて、当該期の建物遺構は、調査区北半部にのみ検出された。調査区南半部では、土器棺墓3基と土器焼成坑の可能性のある土坑1基を除くと明確な遺構は乏しく、居住遺構は北部に偏在する。例えば、普通寺市彼ノ宗遺跡（笹川1985）や寒川町森広遺跡（山本-ほ

か1997)等、集落内部で検出された土器棺墓の類例からも、一般的に建物遺構より土器棺墓が著しく深く掘り込まれることはなく、調査区南部の一定程度の遺構面の削平を考慮しても、土器棺墓周辺域に何らかの居住遺構の存在は証明し難く、本来的に居住区としては利用されていなかった可能性が高い。

つまり、調査区北半部と南半部及び谷部とでは、その空間に機能的な差異が抽出できる可能性がある。少なくとも、居住空間(建物群)と土器などの生活残滓の廃棄(谷部)及び墓域(土器棺墓)の3ゾーンは、隣接することはあっても空間を共有せずに集落内部で、空間的にも意識的にも明確に隔てられていた可能性が想定される。

次に、7b区で検出された土器棺墓について検討を加える。個別土器棺墓の詳細は、本文中に記したのでここでは大まかに、土器棺墓群を通した問題点と検討課題を提示する。

土器棺墓は、総数3基が検出されたが、内ST II 03については、削平により土器棺の破損が著しく、情報量が乏しいため参考資料とするにとどめておく。繰り返しになるが、ST II 03は上面を大きく削平され、土壤掘り方基部が残存するのみであった。こうした土器棺墓の存在からすれば、より浅い土器棺墓については、痕跡も残さずに完全に削平・消滅した可能性も考えられ、土器棺墓の実数は若干増加する可能性が高い。

構造的には、全ての土器棺墓に共通する点だが、地面を掘り窪めて棺を据え、掘削した土砂でもって埋め戻して構築される。構築位置は、時代性や地域性、あるいはそれを支える思想的背景によって、集落内や特定の墓域を有するものなど様々である。また、土壤内部での棺身の傾きやその開口方向、蓋の器種等、細かな点にも遺跡単位もしくは遺構単位で、個性が認められる可能性がある。本遺跡例では、上記したように集落域の南東端に偏在する可能性が高く、西に傾けて埋置し棺蓋に大形鉢を使用する。

さて、土器棺が良好に残存するST II 01・02の2基については、各々その規模の差は明瞭である。ST II 01が容量約11.2ℓの中形の壺を棺身とするのに対して、ST II 02の棺は同約73.7ℓの大形壺を使用する。土器棺の形態に連動して、棺を納める土壤の規模も異なる。こうした棺の使い分けは、火葬や風葬などによる骨化後の埋葬を想定しない限り、埋葬される被葬者の体格(年齢差)に起因することは明瞭で、おそらくST II 01には乳幼児が、ST II 02には小児が埋葬されたものと考えられる。また、中形壺は集落内部で煮沸・貯蔵具としてままみる形態だが、大形壺は普遍的な存在ではなく、集落内からの出土は限定され、土器棺にしばしば転用されて出土する。僅かなりとも集落内より廃棄されて出土することを考慮すれば、棺専用の土器として製作された蓋然性は乏しいだろう。しかし、

あえて貯蔵具として需要の乏しい形態を製作し続ける背景には、製作技術を風化させない配慮と共に、土器棺への転用を前提とした製作の契機も存在した可能性を考慮する必要もある。

ここで注目したいのは、土壙底面の標高値である。両棺墓のその差は僅か数cmしかなく、土器棺の規模に全く影響を受けない。したがってST II 01では良好に棺蓋まで検出されたのに比して、ST II 02では棺蓋はおろか棺身の一部も削平され消失していた。土壙の掘削深度が、土器棺の規模の差に反映せず概ね一定していることは、両土器棺墓の埋葬の同時性を説明する証左となりうる可能性を示唆する。おそらくこのことは、土器形態から考えられる時期差とも矛盾しないだろうが、単なる偶然性か他の要因であることも可能性として除去しきれず、今後類例の検討を必要としよう。

次に、赤色顔料について記しておきたい。本調査によって、7点の赤色顔料が付着した土器が出土している。内1点については、器種不明の小破片であったため報告書には掲載していない。84の1点を除いていずれも谷部よりの出土である。埋没時や洗浄時の器表面の剥落、調査精度の問題もあり、実質的な同種土器の出土量は若干の増加が見込まれる。しかし、他遺跡の例（例えば空港跡地遺跡等）を参考にしても20~30個体を大きく上回ることはないと考えており、土器全体量からみれば集落内においてそう普遍的な遺物ではないだろう。

器種は、広口壺（694）、甕（333・491）、高杯（390）、小・中形鉢（84・786）がみられ、資料数に問題があるが現状で器種の上に大きな偏りはみられない。壺・高杯・鉢については口縁部を中心に塗彩を意図した付着をみると、491の庄内甕については体部内面に広く付着しており、内容物として貯蔵されていた可能性が高い。また、本文中にも記したように、同土器については、蛍光X線分析により、ベンガラを使用したことが証されている。ベンガラをどのような状態で貯蔵していたのかは不詳だが、器表面の細かなクラックに染み込んだ状況もみられることから、液体状を呈していたことも可能性として推測される。なお、他の資料についても、実体顕微鏡下での観察では、いずれもベンガラの可能性が高く、水銀朱を使用したものは全く認められない。さらに、朱精製用の土器・石器も出土しておらず、本遺跡においては赤色顔料の素材として朱の使用は想定しえない。朱精製行為は極めて非日常的な行為であり、各集落において個別になされるものではなく、限られた「場」を必要とした（藏本1997）ことを追認しておきたい。

しかし、例えベンガラであっても、撒入された庄内甕に貯蔵されていた意味は重視して

おきたい。ベンガラを朱の代用物として捉えるなら、その意味はより重さを増す。現状で、弥生時代終末期前後の朱精製専用の広片口皿が出土しているのは川津一ノ又遺跡（古野1998）のみであり、また朱付着土器の出土遺跡も川津二代取遺跡（木下1995）や森広遺跡など数遺跡を数えるに過ぎない。今後の資料の増加を考慮しても、稀少価値の高い水銀朱の流通には、集落単位や地域単位での搬入の偏差が生じた可能性が高く、中間西井坪遺跡ではそれをベンガラで代用させることによって満足していたと考えざるをえない。またその代用物が搬入土器に入れられていたことは、ベンガラ自体の自給度がどの程度のものであったかは不詳だが、ベンガラも流通物資の一つとして搬入されていた可能性を示唆するものと受け取りたい。

2. 古代

本書で古代として報告した遺構・遺物は、6世紀後半から11世紀前後に位置付けられる。一部溝状遺構については、最終埋没時期が中世に下る遺構も存在するが、開削時期を重視して時期的な位置付けを行った。

さて、ここでは7・9区において検出された竪穴住居と掘立柱建物で構成される集落域と、11区の幹線水路SD II 71について特に取り上げる。

まずSD II 71は丘陵E東裾に南北に配された幹線水路である。開削時期は本文中に記したように9世紀初頭前後と考えられるが、8世紀後半にまで遡る可能性もある。この点は、後の改修により明確には捉えることができなかった。周辺遺構との関連からは後者の可能性がより高い点を指摘しておく。また、溝底西半部に辛うじて残存堆積していた人形・斎串を包含した開削期に近いと考えられる土層の存在から、本溝が開削当初より大形水路として計画・開溝されたことが確認できる。溝の継続期間は比較的長期に及び、出土資料より12世紀後半まで少なくとも機能していたことは確実である。

調査区上流域は六ツ目山山塊となり、平野部に開削された通有の灌漑水路とは異なり、本水路の場合自然河川に取水源を求めるることは困難である。おそらくは前記谷7が埋没した窪地の一端に造堤を行って塞ぎとめ、灌漑用の溜池が構築されたと考えられる。この溜池を水源として、本溝が開削されたと推測したい。また前記した谷7最上層にみられる突発的な洪水堆積が、本溝開削以後はほぼ停止することも、山腹に降雨した天水の谷部への流入が、池の構築によって一定程度管理されたことを意味しよう。

本文中にも記したように、SD II 71は単独で流下するだけでなく、東岸に数条の併走する支流群を従えている。こうした水路群の整備は、本遺跡の立地する丘陵緩斜面において計画的な用水管理がなされていたことを物語っている。つまり、本溝の開溝によって、丘陵斜面部においても比較的広範囲に計画的な用水配分を可能とした耕地の拡大がなされたと推測しうるのである⁽¹⁾。しかし、溝の方向は周辺地形に影響され、本地域の地表面にみられる条里型地割の方向に合致したものではない。当該期丸亀平野においては、既に条里型地割に合致した直線溝が開削されていたことが想定されており（森下1997b），平野部との間に明確な格差を指摘しうる。大型灌漑水路網の整備も、こうした丘陵斜面地においては地形的諸条件に制約される部分が多く、必ずしも統一的な地割り形成の契機とはならなかった可能性を確認しておきたい。あるいはそれは、投下される労働力の量的な問題なのではなく、造営主体側のある意図を反映したものであったかも知れない。この点については、今後他地域の様相の整理を行った上で、再度論及してみたいと考えている。

さて、本溝によって灌漑される耕地がどの範囲にあったかを想定することは、周辺地域の細かな地形環境を復元し、基礎的なデータの集積にも努めなければ困難であり、小稿においては充分な検討を行い得る資料の蓄積は乏しい。また、下流延長部についても、最終的には遺跡東部を北流する古川に排水されていたと考えられるが、古川までの直線距離約0.8kmを、どのような灌漑水路網で連絡されていたのかは不明である。つまり、SD II 70を開削した労働量やその結果得られる耕地の拡大については、明確な根拠・数値をもって説明することは現状では困難であり、その造営主体についても、一定程度の労働力を微発しうる強制力を有した人格以上に、具体的な検討には論及し得ない。

ここでSD II 70出土遺物に注目してみたい。SD II 70からは人形や斎串が、また調査区周辺からは布目瓦やいわゆる「畿内産土師器」が少量ながら出土している。これら遺物の出土は、それを所有あるいは使用した階層の存在を前提として、はじめて理解できるものと考える。それはSD II 70の造営主体を考察する上で、一定の有効性を有するものと考える。

文献側の研究によって、「地方における用水設備の開発・修理は、国司の指揮下、実際には郡司や里長などの手によって行われることが、奈良時代における一般的な現象であった」ということが明らかにされている（亀田1973）。ここでいう用水設備が、どの程度の規模までのものを指すのかは不明であるが、池の構築を伴ったSD II 70がこうした用水設備に該当する可能性は高い。

やや一般論に偏ってしまったが、上記したような理由から S D II 70 に伴う築池開溝事業の施行主体に、地方官的な性格を有する在地勢力が関与した可能性を考えておきたい。やや憶測めいたことを付け加えるなら、天平勝宝四（752）年に、奈良東大寺の封戸として香川郡中間郷に50戸が置かれたことが東大寺文書にみえる。あるいは、東大寺が中間郷の開発にあたって、用水溝の開設を指示したこともあったであろうし、S D II 70 の設置が具体的にはそうした契機を背景とした可能性も想像を逞しくすれば考えられなくもない。

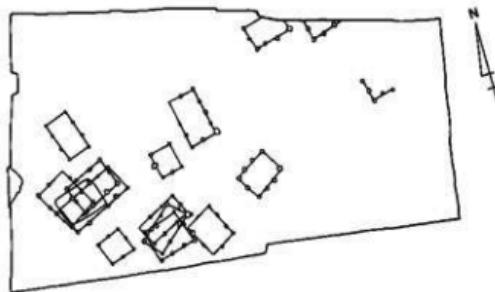
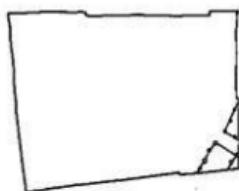
次に当該期の集落の様相をみてみよう。当該期の集落は、7区を中心に検出された。竪穴住居2棟と掘立柱建物26棟以上で構成され、その経営期間は最大6世紀後半頃から8世紀後半と比較的長期に及ぶ。しかしながらその主体となる時期は、集落域より出土した僅少な遺物から判断して、概ね6世紀後半から7世紀中葉ないしは後半と、8世紀中葉から後半の2時期に収斂されるようである。つまり、7世紀後半から8世紀前半に一旦集落は途絶した可能性が高いと判断される。

次に、具体的な建物造構の変遷について、出土遺物と建物の主軸方位等を軸に検討する。まず、遺物の出土した遺構から整理しよう。S H II 01・02の2棟の竪穴住居は、出土した遺物より T K 43ないしは T K 209型式期に位置付けられる。この2棟の竪穴住居を嚆矢として、集落の形成がスタートする。掘立柱建物では、S B II 11・16・17・20の4棟から出土した遺物が、T K 217型式期かその前後に位置付けられる。またS B II 21から出土した須恵器は、8世紀中葉ないしは後半に位置付けられると考えるが、遺物が出土した柱穴は他の柱穴と比して一回り大きく、後に別の建物に伴う柱穴が掘り直された可能性もあり、本土器が建物の時期を直接示すかどうかは検討を有する。S B II 13は出土した遺物より、8世紀後半とみてよいだろう。

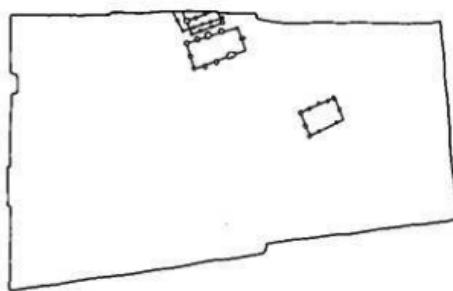
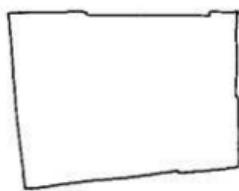
次に各建物の主軸方向を検討する。建物の主軸方向は第273図のように整理される。若

第273図 中間西井坪遺跡建物造構主軸方向

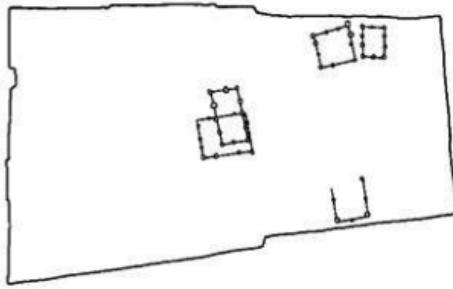
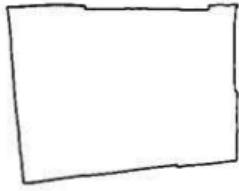
I a期



I b期



II期



第274図 中間西井坪遺跡古代建物遺構群変遷 (1/800)

干のバラツキがみられるが、概ね4つの群にまとめることができよう。つまり、SB II 07・13・18・19でまとまる1群（I群）と、SH II 02・SB II 25・38・39でまとまる1群（II a群）と、SH II 01・SB II 08・09・14・20～24・26～31でまとまる1群（II b群）と、SB II 11・15～17でまとまる1群（III群）である。II b群は20°程度の幅を有しておりややまとまりに欠けるが、前後のII a・III群との間に一定の空隙を認めるため、1群として把握する。

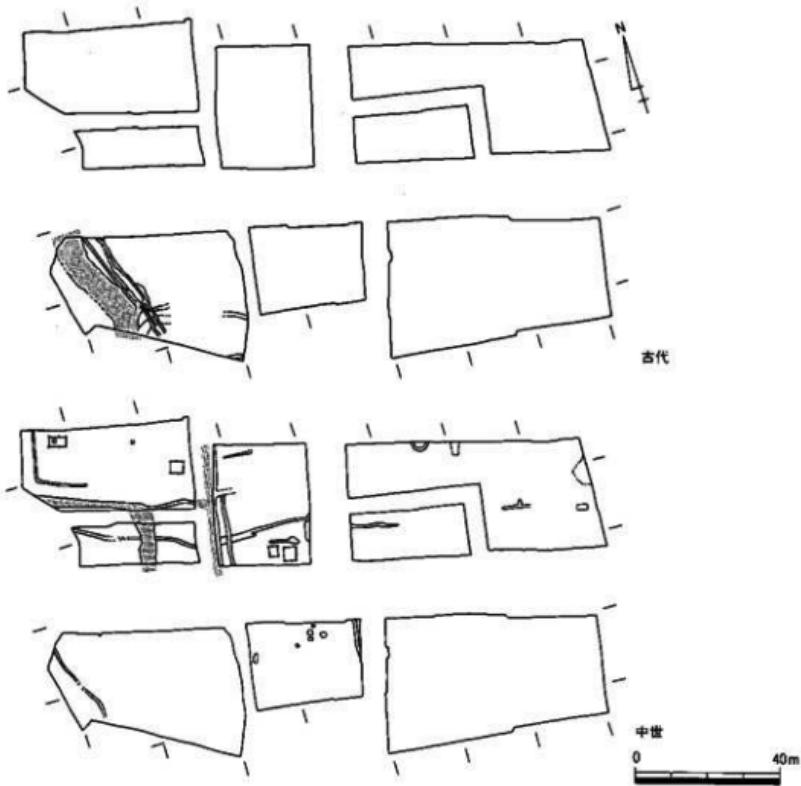
最後に建物相互の位置関係について検討を行う。本文中にも記したように、SB II 21の南辺がSB II 22の中軸ラインと一致し、SB II 27の東辺とSB II 28の東辺は概ね同一ライン上に配される。また、SB II 27の西辺とSB II 31の西辺や、SB II 38・39の西辺も概ね同一ライン上に設定され、相互に関係を認めることができよう。さらに、柱穴の切り合い関係より、SB II 18→SB II 19（矢印の右側の建物が後出することを示す。以下同じ）、SB II 20→SB II 19、SB II 30→SB II 29、SB II 30→SB II 28といった関係が設定しうる。

以上の検討を整理すれば、建物II・III群が最も先行し6世紀後半から7世紀後半（I期）に、建物I群のみ8世紀中葉ないしは後半（II期）に位置付けられると考える。さらに、建物II・III群の先後関係については、竪穴住居を含み主軸の方向性の共有に無頓着な建物II群が先行し（II a期）、一定程度の厳格な正方位軸を採用するIII群がそれより後出する（II b期）可能性を指摘しておく。ただし、III群とI群の一部建物の主軸方向の差異は顯著ではない等、やや問題点も指摘でき、今後の検討課題が多い。

3. 中世

前記した幹線水路SD II 71は、14世紀代には用水路としての機能は衰退し、浅い窪地状を呈して埋没過程にあったと考えられる。13世紀代の様相は資料が僅少なため不明瞭ながら、SD II 71が本来有していた機能は、14世紀以降は東約50mに開削されたSD II 30へ改修されたと考えられる。この幹線水路の付け替え（新たに異なる場所に溝を掘削していることから、新設とした方が妥当かも知れない）が、具体的に何を契機としたものかは不詳だが、土地区画の新たな再編を背景としたものであったことは容易に想像される。

SD II 30は、現状の地割りに合致して北流する直線溝であり、条里型地割の方向に概ね合致する。現状で確認できる地割りの形成が、少なくとも当該時期にまで遡ることは確実であろう。また、東西にほぼ規模を等しくする直線溝SD II 48a・39が交差し、他の水利



第275図 中間西井坪遺跡主要灌漑水路の変遷

系統との連接によって、田畠への灌漑網がより整備された可能性が高い。ここに至ってようやく、地形環境を克服した水利体系が出現したと考えられる。またそれは、耕地としてより安定した土地利用が推進されたことを反映している。

しかし、SD II 30は中世末期の16世紀代には、既に埋没過程にあったようである。これ以降の幹線水路の様相は、調査では明らかにできなかった。これは当時の水路が、現在も維持管理されている水路とほぼ重複して開削されたためと考えられ、おそらく中世末か近世初頭段階、後述する6区近世屋敷地の出現時には、こうした新たな水路網へ移行されたと推測される。

また上記SD II 30・48等で区画された方格地割りの内部には、小溝で区分された屋敷地が検出された。屋敷地の内部には2棟の掘立柱建物が復元され、検出した柱穴数からさら

に建物遺構が追加される可能性はあるが、遺構面の削平等により困難であった。建物の主軸方向は溝の方向、つまり周辺域の条里型地割の方向に合致する。建物規模は、床面積13m²と小規模であり、屋敷地の面積や位置関係から、北側に母屋となるより規模の大きな建物が配された可能性は高い。建物の時期を出土遺物からは特定することは困難であった。SD II 30・48の区画内部に整然と配されることを考慮すれば、区画溝と同時期の15ないしは16世紀代に位置付けられるものと考える。

さらに当該期の建物遺構は、8区においても検出されている。8区においても多数の柱穴が確認されたが、遺構面の削平等により、床面積12m²程度の小規模な掘立柱建物2棟が復元されたに留まる。出土遺物より14世紀代に位置付けられると考えられ、10区建物群よりは先行する。周辺に建物群を区切る明確な区画施設は認められない。なお、当該期の建物群は、丘陵Cの2区の調査においても「1辺20m前後の小規模な宅地1区画など」が検出されており（大久保1996a）、本遺跡周辺域では、中世後半代に小規模な屋敷地が一定程度の間隔をおいて散在した景観が復元される。

4. 近世

近世の遺構は、6区と7区において検出された。6区では、柱穴・土坑・井戸・溝状遺構・水溜状遺構等があり、7区では周辺の耕作域に伴う水溜めあるいは肥溜めといったものに限定され、居住遺構は確認されていない。なお6区では、遺構面の度重なる削平によって、多数の柱穴が検出されたにも関わらず、掘立柱建物の復元は困難であった。建物遺構こそ復元されなかつたが、検出された遺構内容から、屋敷地として利用されていたことは間違いない。その経営期間は、本文中にも記したように17世紀初頭より18世紀末頃の約200年間に及ぶ。

さて、6区屋敷地の遺構からは、明らかな混入の可能性のある遺物を除いても、17世紀初頭以降のかなりの時期幅のある遺物が出土しており、また同器種・同形態の遺物が一定量出土する。さらに、2次的被熱により煤が付着するか色調等が変色したものも散見される。つまり、6区屋敷地は18世紀末頃と推測される火災により焼失し、それによって破損した日常生活残滓は屋敷地内に廃棄され、以後再び宅地として使用されることとなかった可能性が考えられる。

また、7区において検出された遺構より、周辺域は19世紀代以降耕作域として利用されていたものと考えられる。

註1. 当該時期における遺跡周辺の開発行為は、西側の丘陵Cにおいても確認されている（大久保1996a）。本調査区と丘陵Cとの間には、2つの丘陵と谷地形が介在し、また丘陵頂部と谷部の比高差も大きく、SD II 71の灌漑範囲はこれら地形に制約され、丘陵Cがその範囲に包括されたかどうかは疑問である。おそらくは別の灌漑系統によって丘陵Cは耕地化されたと考えられる。こうした状況がどの程度本地域に普遍化されるかは今後の課題だが、複数の小規模な谷池の構築が促進され、丘陵周辺の耕地化が当該時期に大きく進展した可能性は高い。

第2節 中間西井坪遺跡谷7出土土器について

1. はじめに

本遺跡では、これまでに報告してきたように、谷7を中心として膨大な量の弥生時代終末期から古墳時代前期初頭頃の遺物が出土している。谷部出土の資料が主体を占め、その意味では良好な一括資料とは言い難い面もある。しかし、第2章で詳述したように、谷部埋土は洪水堆積と推測される砂礫層を指標として上・中・下の3層に大別され、各々が比較的短期間で堆積したことが想像された。したがって、各層位より取り出された土器片は、縄年作業を組み立てるに際して一定程度の有効性を有し、また豊富な器種組成を伴った資料群として検討するに足りうるものと考えている。

一方、本地域の当該時期の良好な一括資料は、未だ報告例が不足しており、土器縄年を組み立てる上で資料上の制約は極めて大きかった。そうした意味からも、今後良好な一括資料の出現により精緻な縄年案が組み立てられる時まで、一定程度の制約は伴うが、内容的には基礎資料として使用するに堪えうるものと考える。

以下では、谷7出土資料を中心に若干の検討を行い、当該時期の土器様相を概観する。なお、当該時期の資料の内、少なくともその後半部分、特に谷7中・上層出土の資料の大半については、古墳時代前期初頭に位置付けられるものと考えられ、古式土師器という名称を使用すべきであろう。しかし、出土状況から下層の終末期の弥生土器と、特徴的な器種・器形のものを除けば、特定の個体について両者を区別することは困難であり、あえて弥生土器という名称を使用する。名称は本稿での暫定的なものであり、今後の資料の蓄積とより詳細な検討によって、縄年上の位置付けが明確になれば、適切な名称に変更する必要性を否定するものではない。また、当該時期の資料に弥生土器という名称を使用することについて、弥生時代や古墳時代といった時代区分の概念とは全く次元の異なる名称であることをあらかじめことわっておきたい。

2. 主要器種の様相

以下に行う出土遺物の検討に際して、まずその主要器種の組成と基本形態を整理しておくこととする。

(1) 壺

壺は口頸部形態により、広口壺・細頸壺・二重口縁壺・複合口縁壺・直口壺に大別する。その上で、端部形状等を中心に細別を試みる。また、容量による分類も可能だが、大半が中形品で占められるため、参考程度に留め、将来的な分類案の作成に備えておきたい。

広口壺

広口壺は、口頸部形状により、直立する頸部を有する形態（A類）、内傾する頸部を有する形態（B類）、外傾する頸部を有する形態（C類）の3タイプに分類する。

A類は、いわゆる「下川津B類」系統のA1類と、在地系譜の形態のA2類に細分する。

B類も同様に、「下川津B類」系統をB1類、在地系譜の形態をB2類に細分する。

C類は、まず口縁部の形態から、口縁部の屈曲が比較的緩やかなC1類と、口縁部が強く折れて開くC2類に分類する。さらにC1類は、頸部が比較的長いC1a類と、頸部が短いC1b類に細分する。同様にC2類も、口頸部がよく発達したC2a類と、口頸部が矮小化したC2b類に細分する。

上記A～C類は、口縁部形態にかなりのバリエーションを認め、なお細分作業を必要とする。ここでは諸般の都合により細分案を示せず、今後の検討課題としたい。

なお、後述する二重口縁壺や複合口縁壺を含めて、当該期の本地域の壺形態の口頸部の成形手法には、かつて岩崎直也氏が指摘されたように（岩崎1984）、共通した独自の手法が認められる。岩崎氏は、各種壺形態が頸部へ内傾接合する口縁部によって特徴付けられる点を指摘したが、その接合方法をより詳細に観察すれば、一部の土器について分割して口・頸部の成形を行う、より複雑な成形手法の存在が窺える。本遺跡谷7出土の551や延命遺跡及び郡家原遺跡の阿波系壺（第300図1・2）に特徴的に示されるように、まず頸部に芯となる直立する円筒状の擬口縁を作り、外面にはハケ調整を内面はナデ調整を加え整形し、一旦乾燥させ作業を中断する。そして、内面側より粘土紐を巻き上げ口縁部を成形し、期待する口径を維持しつつ口頸部の外側への歪みを最小限に抑える目的で、さらに外面にも薄く延ばした粘土（板）を貼付して補強し、最終調整を加え完成する。したがって、頸部から口縁部下半の器壁は著しく厚くなる。これを「擬頸部分割成形手法」と仮称しよう。

また、肩部外面には、本文中で「放射状反復ミガキ調整」と呼んだ独特のミガキ調整が、しばしば上掲器種にみられる。このミガキ調整は、単に器面の平滑化を意図したものではなく、多分に装飾的な雰囲気を有する。また頸基部より放射状に施されるものの他、上腕

部のストロークを利用し反復して、ミガキ原体を器面より離さずに施されるもの（283等）も散見される。これも本地域の壺形態を特徴付ける調整手法の一つである。

細頸壺

口頸部は長く伸びる直口形態を呈し、体部は特徴的な玉葱形を呈するものを細頸壺とする。ほぼ完形に復元される資料は乏しく、細かな細分案は将来に委ねる。ここではとりあえず、いわゆる「下川津B類」系統をA類、在地系譜あるいはA類の模倣形態をB類として分類しておく。

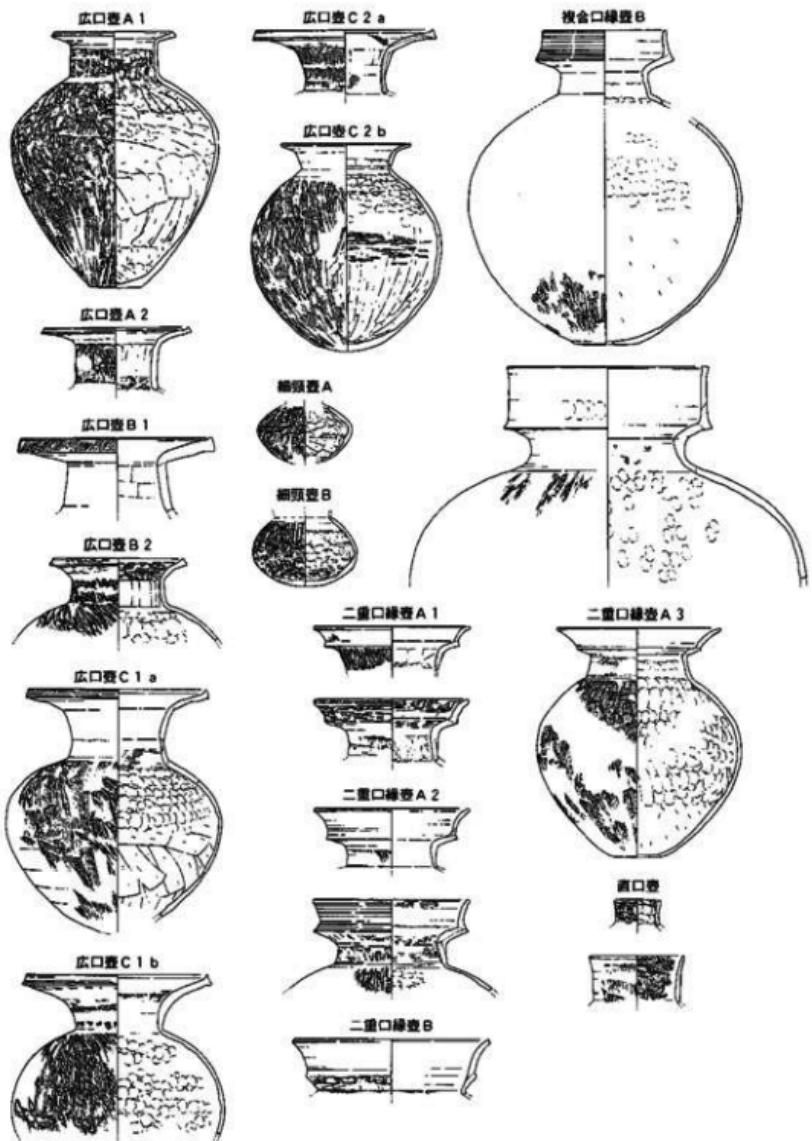
さて、細頸壺の成形について、菅原康夫氏は型成形の可能性を想定する（菅原1992b）。具体的には「体部下半を保持具により成形したのち1.5倍高の体中央部を継ぎ足す、胴接ぎ製作法」を考案する。晦渋な文章のため誤謬を犯している可能性もあるが、氏の説かれる胴接ぎ製作法とは、体部をいくつかのパートに分割して成形する、一種の分割成形のことと理解される。しかし、本遺跡出土の細頸壺の体部を仔細に観察したところ、菅原氏が想定するような分割成形の痕跡、特に体部中位付近での接合痕は認められなかった（図版57・77参照）。また口頸部も外型により成形され、別に成形された体部と接合させる工程が説かれているが、細く締まった頸部に指を入れて、体部と口頸部を接合することはかなり困難と思われ、何よりも保持具（外型）使用の目的（メリット）が今一つ不鮮明な感は拭えない。さらに、頸部内面にみられる顕著な縱方向のいわゆる「シボリメ」痕跡（菅原氏はこれを粘土接合痕と誤解されているようだが）は、明らかに粘土が半乾燥状態において外面より強い押圧を受けて生じたと考えられ。また一般に型成形の場合、土器本体が一定程度の乾燥後に型より取り外されることを想起すれば、これも型成形の可能性を積極的に裏付ける材料とはなりえない。以上のような理由から、私は型成形の可能性を否定したい。

二重口縁壺

二重口縁壺は、明確な頸部の有無によってA・B2形態に大別する。

二重口縁壺A類は、口縁部とは区別される明確な頸部を有し、二次口縁部が強く外反して開く形態。二次口縁が相対的に短いものをA1類、二次口縁が一定程度に伸張し、外反して開く形態をA2類として細分する。A2類は、いわゆる「東阿波型」二重口縁壺と称されてきた形態を一部内包する。A3類は、二次口縁が強く外傾して大きく開き、頸部内面屈曲部の稜が鋭い、いわゆる「茶臼山型二重口縁壺」の一定程度の影響が想定される形態である。

二重口縁壺B類は、明確な頸部を欠落し、一次口縁と頸部が一体化した感の強い形態。



第276図 中間西井坪遺跡谷7出土の器種組成1

二次口縁はA類と比して外反度が弱く直線的に外上方へ伸長し、二次口縁もA類にみられるような頸部より強く屈曲して開く明確な水平面を有しないことから、口縁部片のみからもA類とは容易に識別される。また概して大形品が多い。

口縁部の接合は、A3類を除いて一次口縁端部上面に二次口縁を接合し、一次口縁端部を外方へ強く摘み出す(図版78参照)。A3類は口縁部の接合方法は同じだが、一次口縁端部が接合後ナデ付けられ、明確な摘み出しを認めない点が異なる。二次口縁部が強く外反して開く点と、一次口縁端部を強く外方へ摘み出す点に、本地域の二重口縁壺の特色を見出すことができる。

複合口縁壺

西部瀬戸内系の複合口縁壺の系譜上に成立する形態と考えられることから、ここでは畿内を含めた東部瀬戸内系統の二重口縁壺とは区別して、「複合口縁壺」として扱う。内傾して立ち上がる二次口縁部を有する。いわゆる「下川津B類」系のものをA類、在地産を含めたB類土器以外のものをB類として分類する。A類の大形品は、しばしば壺棺へ転用されている。

なお、出現時のA類口縁部には、多条の鈍い凹線文を伴う。西部瀬戸内系の複合口縁壺には、凹線文による加飾は顕著ではなく、壺口縁部への凹線文の施文は、むしろ東部四国地域に散見することから、下川津B類土器群に取り込まれる段階で、付加された属性と考えられる。そして、凹線文による加飾は急速に衰退していくが、数条の沈線文としてより後出する形態にも根強く残存する。

また、上記二重口縁壺と共通して、一次口縁端部外面を外方へ摘み出す傾向が強く、後出する中間西井坪遺跡谷3出土資料では、この部分へ突帯を貼付して強調する。

直口壺

直立する短い口縁部を有する形態。出土個体が数個体のみと少ないため、細分は行わない。本地域の器種組成の主要な部分からは除外されるものであろう。

(2) 壺

出土遺物中、最も大きな比重を占める。それと同時に、下川津B類土器等特徴的な形態を除いて個体差が激しく、分類案の設定は大枠的なものにならざるを得ない。系譜関係の追求を主眼に、口縁部形態や体部内外面の調整を重視して分類を行う。

壺A類

いわゆる「く」字外反口縁を有する形態。体部外面にタタキメ痕が明瞭に残されるものをA1類、外面はハケ調整が卓越しタタキメ痕跡は徹底して消され、内面のケズリ調整が頸部付近まで達せず、肩部付近に指頭圧痕を多数認めるものをA2類、外面調整はA2類と共に通するが、内面のケズリ調整が頸部付近まで達するものをA3類と分類する。A1類はV様式系のタタキ壺、A2類は在地系譜の壺、A3類は他地域（畿内）系譜の壺形態である。

さらに、口縁端部形状には、端部を四角く納めるもの、丸く納めるか鈍く尖らせるもの、四角く納めつつ上方へ摘み上げるもの、端面へのヨコナデあるいは横板ナデ調整により上下に肥厚するもの、上方への拡張は乏しく主に下方へ摘み出されるものとバリエーションを認め、それぞれa～eと細分する。

壺B類

いわゆる「下川津B類」壺を分類する。形態や成形・調整手法上の特徴は、上記壺A2c類と共に通した内容を有するが、本章第3節で詳述する規格性や限定された製作集団の存在等から、本分類を設定する。

壺C類

上記壺B類の系譜上に成立する形態と考えているが、あえて後述するように、その後の本地域の土器様相を理解する上で非常に重要な位置を占めると考えられることから、壺C類として設定する。

口縁部は強く折り返されて、外反ないしややや内湾気味に開く。口縁端部は上方へ摘み上げられ内傾する小端面をなし、先行する形態ではしばしば数条の鈍い凹線文を施す。頸部内面は丸くナデ付けられるか鈍い稜をなし、壺B類にみられた強い稜線を有するものはない。体部は倒卵形ないしは球形に近く、底部は丸底を呈する。体部外面は上位右下がりの斜めハケ、下位は連続する右下がりのハケか縱方向のハケ調整を認める。内面は下半部に左上がりを基調としたケズリ調整を施し、上半部は指頭圧痕が顕著にみられる点は壺B類と大差がない。内底面には、しばしば数個の指圧痕を認めるが、これは池橋幹氏（池橋1985）や菅原氏（菅原1992b）が想定する保持具の使用を反映するものではなく、外底面への調整を行う際に手を口縁部より差し入れて支えとした痕跡と考えたい（高橋1988）。

壺D類

口縁部が上方へ引き伸ばされた複合口縁形態の壺を分類する。しばしば口縁部外面に横描並行沈線を施す、いわゆる吉備系の「ボウフラ壺」を分類の指標とする。また、在地で

の模倣形態には、口縁部外面の構造沈線が省略される傾向が強いが、本遺跡では出土していないため細分は行わない。

壺E類

口縁部は強く折り返して外反して開き、口縁端部は上方へ摘み上げられ、端面は鈍く凹線状に窪む。外面はタタキ痕が明瞭に残り、内面はケズリ調整が頸部まで及ぶ。従って頸部内面は強い棱をなす。いわゆる畿内産の「河内型庄内壺」を分類の指標とする。

(3) 高坏

出土量は乏しく、また全形を知りうる資料はないため、坏部形状により分類を行う。半球状の椀形ないしは浅い皿状の坏部を有する形態をA類、坏部中位で屈曲し、口縁部内面に鈍い数条の凹線を有するいわゆる下川津B類高坏をB類、坏部中位で屈曲する点はB類と同じだが、口縁部は外反して大きく開き、口縁部内面に凹線を持たない形態をC類とする。

高坏A類

浅い皿状坏部を有する形態をA 1類、半球状の椀形の坏部に裾部が大きく開いたいわゆる低脚形態の脚部が付するものをA 2類と細分する。出土数はいずれも1個体のみと少なく、本地域の伝統的な高坏形態ではない。なお、A 1類の脚部形状は不明である。

高坏B類

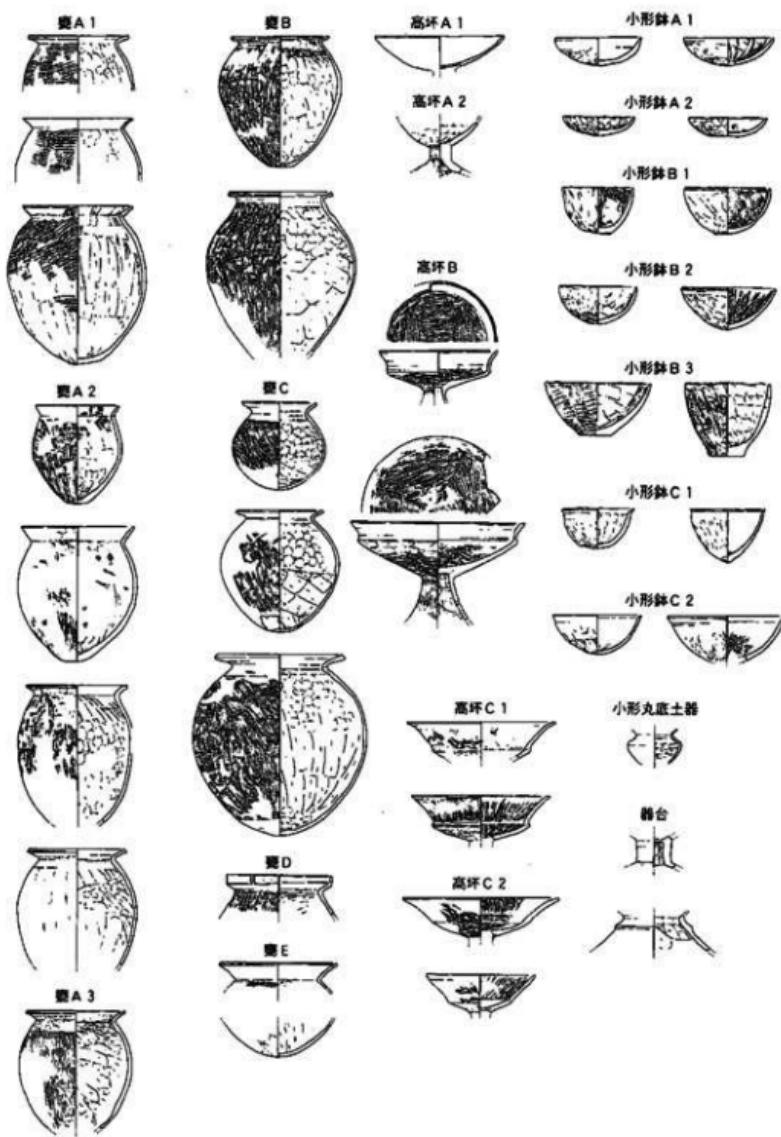
本遺跡の高坏の主体を占め、なおかつ後述するように高松平野中枢部からの搬入土器である。在地産高坏の構成比率が低く、搬入形態（下川津B類高坏）が主体を占めるのが本地域の高坏形態の特徴である。なお、形態的諸特徴は、第3節において詳述するため、ここでは省略する。

高坏C類

坏部中位の屈曲部外面が明確な段をなすものをC 1類、明確な段を認めず、沈線ないしは稜線をもって坏上半部に移行するものをC 2類とする。さらにC 2類は、口径に比して坏部深が相対的にやや浅い形態をa類、同様にやや深めとなる形態をb類として細分する。高坏B類に次いで量的な比重が高く、在地系譜の高坏の可能性を認める。

(4) 鉢

鉢は法量により、小形・中形・大形の3タイプに大別する。その上で、成形手法や形態



第277図 中間西井坪遺跡谷7出土の器種組成2

を中心に細別を試みる。

なお、菅原氏は鉢について内型成形の可能性を説かれる（菅原1992b）。しかし、内型成形の場合、粘土乾燥後の型からの取り外しの至難さや、内面と外面にみられる調整の差を合理的に理解することが困難である。さらに、特にある種小形鉢の外面には、縱方向の細かなクラックが顕著に認められる（図版69・70参照）が、これは粘土を型に押しつけた際や粘土乾燥時の収縮によって生じた一種の亀裂として理解できるものであり、それが外面にのみ認められることは、粘土乾燥時まで外面には顕著な調整が施されなかったことを反映しており、外型成形の可能性を示唆するものと受け止めたい。

小形鉢

口径16cm以下で、容量0.6ℓ以下のものを小形鉢とする。基本的な形態は、器高が著しく低い浅皿形態（A類）と、やや深めのボル状を呈する形態（B類）、外反する口縁部を有する形態（C類）の3タイプに分類する。前2者の分類については、口径/器高が概ね2.50以上のものをA類、2.50以下のものをB類とする。

A類は、外面にしばしば成形時のクラックを認め、外型成形の可能性が想定されるA1類と、内外面に指頭圧痕が卓越し、手すくねによる成形が想定されるA2類に細分される。A1類では、内面はハケや板ナデを多用して外面に比してやや丁寧な2次調整を加え、放射状のミガキ調整が施されるなど精製品もみられる。外面は微弱なナデ調整されるのみで最終調整が省略される場合もある。また外底面はケズリ調整により丸底化を指向する。一方A2類は、2次調整は基本的に省略され、成形時の指圧痕が明瞭に残される粗製品である。

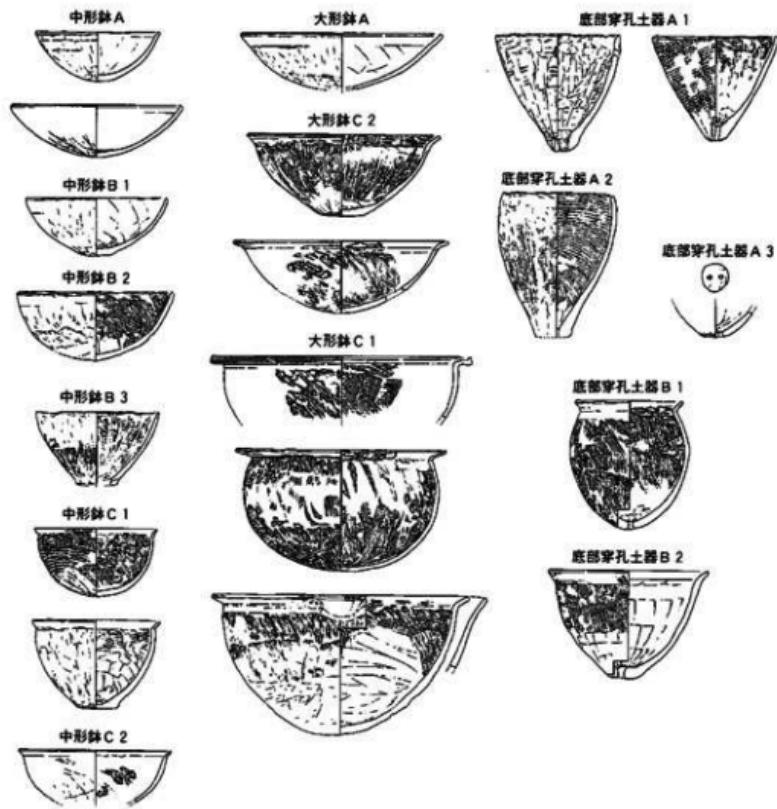
B類は、外型成形の可能性が想定され、底部平底を呈するB1類と、同様に外型成形だが底部丸底化が進展したB2類、外面にタタキメ痕等を明瞭に残し、粘土紐巻上げ成形の可能性が想定されるB3類に細分する。

C類は、口径/器高が1.5程度でやや深めの形態を呈するC1類と、口径/器高が2.0以上となる相対的にやや浅いC2類に細分する。いずれも外型成形の可能性が推測され、口縁部を付すまでの基本的な成形手法はA・B類と共通する。

中形鉢

口径16～26cmで、容量0.5～1.8ℓ程度のものを中形鉢とする。基本的な形態は小形鉢のそれと共にし、浅皿形態（A類）、深鉢形態（B類）、外反口縁形態（C類）に分類する。

A類は、小形鉢でみられた手すくね成形のものではなく、ほぼ外型成形によるとみられる



第278図 中間西井坪遺跡谷7出土の器種組成3

もののみである。底部は丸底が進展し、口縁端部は内上方へ小さく摘み上げるものが主体的である。

B類は、小形鉢で細分したB1～B3類がみられ、細分基準もほぼそれを踏襲する。B3類は、タキ調整痕をそのまま残したものではなく、外面はハケ調整が卓越する。

C類も基本的に小形鉢の分類の適用が可能で、口径/器高が1.8以下のC1類と、2.0以上のC2類に細分する。

大形鉢

口径26cm以上で、容量1.7ℓ以上のものを大形鉢とする。中形鉢との格差は漸移的で、

明確にどちらに属させるか躊躇を伴うものも少数みられる。基本的な形態は、中形鉢よりもより簡素化が進展し、浅皿形態（A類）と外反口縁形態（C類）のみ認められる。

A類の基本的な形態は中形鉢のそれと共に通する。外面のクラックより外型成形の可能性が想定されるが、法量的な面から断定するまでは至らない。

C類は、口径/器高が1.9以下のやや深い形態をC2類、同様に2.0以上の相対的に浅い形態をC1類にそれぞれ細分する。なお、外面にハケ調整が多用され一次調整が擦り消されているため成形については不明瞭ながら、いくつかタタキ調整痕の残存を認めることから、型成形ではなく粘土紐巻上げ成形の可能性が高い。

(5) 底部穿孔土器

ある種の大形鉢ないしは中形壺の底部に、1孔若しくは多孔の焼成前穿孔を施した土器で、従来「瓶」と称されてきた形態を内に含む。類似した形態であっても、焼成後穿孔したものには本器種には含めない。その用途については一定せず、口縁部に一对の円環状の把手を付したり、紐通しのための小円孔が穿たれた資料の存在から、濾過器の可能性を示唆する意見もある（大久保1996b）。内外面に煤や炭化物が付着した資料は未見であり、しばしば完形に近い状態で出土することからも、直接火にかけて使用する用途は想定しがたい。また形態からは供膳具としての使用も考えられず、調理具の一種もしくは食物加工以外の用途を想定したい。

直口形態のものをA類、外反する口縁部を有する形態をB類とする。下川津遺跡第1低地帯土器溜り5出土資料（藤好ほか1990）より、後期前葉の比較的古い時期より両形態が併存していた可能性が高い。

さてA類は、底部が尖底で1孔のみ穿孔されるものをA1類、底部が小平底を呈し1孔のみ穿孔されるものをA2類、底部が凸面状の小平底を呈し2孔以上の穿孔を伴うものをA3類と細分する。B類も、いわゆる中形壺の底部に穿孔を伴うものをB1類、ある種の大形鉢の底部に穿孔を伴うものをB2類と細分する。なお、B類で複数穿孔されるものは未見である。

(6) 小形丸底土器

ある種壺の小形品もしくはミニチュア品が、特殊に精製され成立したと推測するが、その祖形については明確ではない。後期後半段階には本地域において認められ、以後他地域

に影響を及ぼしつつ、小形精製器種として主要な位置を占める。

本遺跡では、B類土器に属する1例のみが出土している。

(7) 器台

本地域では弥生時代後期後半以降基本的な器種組成の中に、器台は組み込まれていない。本地域で出土する当該期の器台は、他地域からの搬入品かその模倣形態に限られる。本遺跡でも、脚部を中心に数個体が確認される。いずれも受部形状が不詳なため分類は行わないが、畿内系の小形器台とみられるものと、山陰系の鼓形器台が出土している。

3. 時期別特徴

上記分類案にしたがって、以下では各遺構出土土器を具体的に検討し、編年上の位置付けについて若干の考察を加えることとする。

a. 谷7下層

壺では、広口壺A・B2・C1、細頸壺A、二重口縁壺A1・B1、直口壺を認める。広口壺A2・C2b類は、頸基部に刺突文を巡らし、口縁部は短く、端部は拡張気味に四角く納めるなど、当該期の特徴をよく示す。広口壺C1b類は、口縁部が大きく開きやや後出する可能性を残す。また、細頸壺Bの可能性のあるものも認めるが、頸部径が太くやや疑問が残る。

壺では、A・B・Cの各種を認めるが、主体を占めるのは壺A2及び壺Bである。A1類は量的に少なく、また粗製品が多い。A2類は端部を矩形に納めるa類が多く、少数下方へ摘み出すe類を認める。なお、口縁部は強く折り返して外反して開く形態と、外反度が弱く立ち上がり角度が120°前後を示すもの（例えば154等）の2者が認められる。前者が主体を占めるものの、後者も小・中形壺を中心に一定量みられ、将来的にはA2類はより細分される可能性を残す。A3類は少数出土しているが、第3章第2節に述べたように、河内平野沖積低地域からの搬入品と考えられ、下層を中心に数個体程度が出土している。また、一定程度それを模倣した土器もみられる。B類は多数を中形壺が占めるが、少量小形及び大形壺を認める。また、在地産の可能性の高い中形模倣形態を少数認める。壺Cは、少数出土している。しかし、後述するように上位層からの混入の可能性が高く、検討からは除外しておきたい。なお、A・B類共平底形態が多数を占め、丸底化は達成されていない

い。

高坏では、やはりB類が主体を占める。その他は、A2・C1類をそれぞれ1個体認められるのみ。個体数が乏しく制約は大きいが、B類以外は本地域では普遍的な存在ではない可能性が高い。

鉢では、小形鉢の比重が高いが、量的な制約が大きく明瞭ではない。小形鉢A1・B1・B3・C1類、中形鉢A・B1・B2・B3・C1類、大形鉢C1・C2類がみられる。小形鉢A2類は出現していない可能性が高く、また丸底化の進展した小形鉢B2、大形鉢A類は普遍的な形態ではない。

底部穿孔土器では、A1・A2類のみ出土している。A1類では、体部形状が下半部の膨らみに乏しい逆円錐形の漏斗状を呈し、口縁部に穿孔を伴う古い様相を纏った個体も出土している。多孔形態は未だ出現していない可能性が高い。

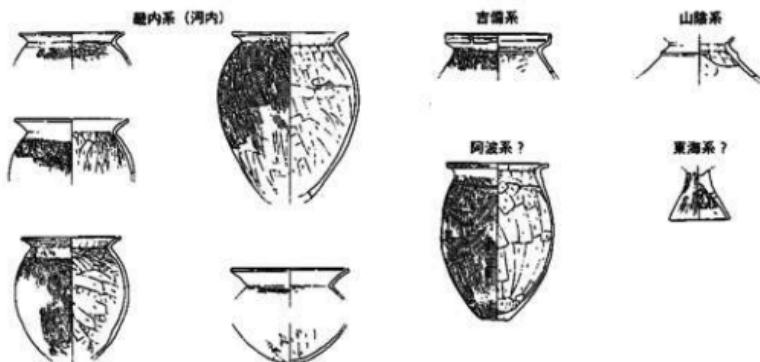
小形丸底土器は、谷7からの出土はみられなかったが、下層にほぼ併行と考えるSDII26より下川津B類形態が1個体出土している。

b. 谷7中・上層

中層資料と上層資料は、層位的には峻別して取り上げられたが、型式学的に両者を分離することは困難であり、以下では一括して記述する。したがって、一定程度の時期幅を見積もある必要があるが、明らかな混入資料を除けば土器型式2型式分で示される幅を大きく越えることはないと思われる。

壺には、広口壺A・B2・C類、細頸壺B、二重口縁壺A・B類、複合口縁壺B類がみられる。広口壺では、主体となるのはC1・C2b類であり、下川津B類系統を含めたA・B類は大きく衰退するとみてよい。細部形態は、下層資料との比較が困難なため不明瞭ながら、口径に比して頸部径がやや細身となる傾向がみられる。二重口縁壺でも、A1類は大きく衰退し、A2類が主体となる。A3類は単発的な存在であり、基本的な器種組成の中に組み込まれるものではないだろう。B類は量的には乏しいが、一定程度存在する。また下層資料と比較して、一次口縁と二次口縁の一体化が進展し、より新しい傾向を認める。複合口縁壺も、在地産と考えられるB類が少數出土している。中層出土の口縁部外面に鈍い凹線文を多用した形態は、古い様相の残存と考える。

壺では、壺C類の出現が大きな特徴である。後に本地域の壺形態の主体となるものであり、その性格については第4節に詳述する。A・C類では壺形態を誇る占有率を示す。



第279図 中間西井坪遺跡出土の外来系土器・搬入土器

なお、出現当初より一定の寡占状況を示し、かつ小・中・大形に法量分化した規格性を有する点に、壺Cの性格が端的に示されると考える。またA類では、A1類が下層と比較してやや量的に増加する。主体を占めるのはA2類であり、模倣形態を含めたA3類は皆無となる。少数出土した壺B類は、壺同様本来的に本層に伴うものではなく、下層からの混入の可能性が高い。底部形状も、安定した平底を呈するものはなくなり、小平底か丸底となるものが散見される。搬入土器として、壺D・Eが各1個体認められる。壺Dは吉備高橋編年のXb～Xc期（高橋1988）に、壺Eは中河内米田編年の庄内式期II（米田1985）に、それぞれ概ね位置付けられると考える。

高坏では、A1・B・C類がみられる。A1類は1個体のみの出土であり、基本的な器種組成に組み込まれたものではなかろう。B類も少數みられるが、壺・壺同様本来的に本層に伴うものではない。従ってC類が主体となるが、量的に乏しく安定した出土傾向を示さず、明確な位置付けについては不詳な点が多い。また、系譜関係についても明確さを欠くが、C2類がやや卓越する点は、新しい傾向を示しているとみてよいだろう。なお、A・B類を加えた高坏の器種組成上での占有率は10%以下と低く、未だ高坏の機能の大半は、鉢が代用していたものと考える。なお、中層より1個体のみ出土した、内面に放射状のミガキ調整を加えたC2類（391）は、壺C同様後の本地域の高坏の主体をなす形態である。

鉢では、確認されるほぼ全種が揃う。丸底化の進展が著しく、平底形態のものは極少量に限られる。鉢形態での大きな画期として、小形鉢A2類の出現がある。その他、小形鉢C類の出土比率も微増するようであり、大形鉢A類も確実に伴う。

	中間西井坪遺跡	東濃	中濃	西濃
I期		森広 S T302 △ I I	日暮松林 S D05 川津中塙 S K 109 川津元祐木 S D04・11 郡家原 S D107 榎木 S B05	一の谷コ37・38土器列
II期	谷7下層 S D II 26・27		空港跡地 S D e 122・138 下川津 S H II 25床底 川津下横 S R01上層 三条番ノ原 S H02	
III期	△ I I		三条番ノ原 S H04 郡家原 S D158 彼ノ原 S T15	
IV期	谷7中・上層 S K II 38 S X II 21・22 S T E01・02	鴨部南谷 S R8901 森広 S H208	六条・上所 S K01 下川津 S H II 32 道下 S D09 仲村魔寺 S H24	延命城周 S D19 延命八反地 S D21 一の谷 S B318
V期			川津下横 S D24 川津二代敷 O39・40 S D05	
VI期				
VII期	谷3			
VIII期	S X01	鴨部南谷 S H8801	空港跡地 S D e 137 下川津 S H D02上位 郡家田代 S D35 龍川五条 S H01	

第23表 譜岐地域の土器編年とその併行関係

底部穿孔鉢では、B類が出現する。A類は、逆円錐形を呈するものから、体下半部に膨らみを有する球形化が進行するとみられるが、明確な資料を欠く。

小形丸底土器については、資料がなく不明。山陰系の鼓型器台は本層出土資料の中でも、最も新しい一群に併存すると考える。また、10a区中層出土の内湾脚形態(401)は東海系高坏の影響が想定され、やや直線化した形状から廻間編年4～5期(赤塚1990)に位置付けられると考える。

谷7出土資料については、以上のように整理されたが、以下では各層位の編年上の位置付けについて若干の検討を試みよう。

阿波	讃岐 大久保（1997） ほか	大和 寺沢（1986）
	下川津IV	
黒谷川郡頭SB304 黒谷川郡頭SD122	下川津V	
	郡家原II	
黒谷川郡頭SE101 庄・鮎喰SD105第2層	下川津VI	布留0
高畠第1調査区清B	黄田岡下	布留1
	+	布留2
	+	布留3
	中間西井坪	布留4（古）

まず、下層資料では、B類土器群が一定量の比重を占める点が注意される。要では、球形化を指向した体部に、口縁部は矮小化したもののが目立ち、また頭部内面屈曲部の稜は鈍化したものが多い。高坏では、坏部が深いものが多く、口縁端部内面にみられた明瞭な匙面や端部直下の瘤状の隆起は衰退し、緩やかな外反口縁形態のものが多くなる。裾部も大きく開き、端部は摘み出しによる拡張傾向の乏しいものが目立つ。上記した特徴は、B類土器の最終末期の様相をよく示し、やや先行する形態をも認めるものの、概ね大久保編年下川津V式（大久保1997）

に位置付けられると考える。

供伴する資料についても、広口壺C1b類等にやや新しい傾向を認めるが、概ね上記年代幅を大きくは逸脱しないと考える。下層出土の搬入土器壺A3類についても弥生終末期前葉頃に位置付けられ、畿内地域の編年観との間に大きな齟齬は認めない。

次に、中・上層資料についてであるが、B類土器の激減と、要Cに代表される新しい様相を呈した器種の登場が特徴とされる。上記した諸器種の特徴から、概ね大久保編年郡家原II式から下川津VI式（大久保1997）に相当し、また主体となるのは下川津VI式の資料と考える。なお、搬入土器壺D（吉備系要）については、上記編年観との間に大きな齟齬はみられないが、要E（庄内要）及び東海系の内湾脚部は若干先行する様相を示す。混入と

みなすべきか、相応のタイムラグを考慮すべきか、あるいは別の要因を想定すべきか、現状では判断に躊躇を伴う。資料の増加を待って再度検討したい。

以上の検討から、個別造構の編年上の位置付けは第23表のように整理される。他地域との併行関係についてはなお多くの実証作業を必要とし、今後細かな点で変更の生じる可能性は大きいが、大枠での時間的な併行性は概ね妥当性のあるものと信じる。以下、後節での検討は、上掲編年私案に依拠しながら検討することとしよう。

第3節 弥生時代終末期の讃岐地域の土器様相について —下川津B類土器の動向を中心として—

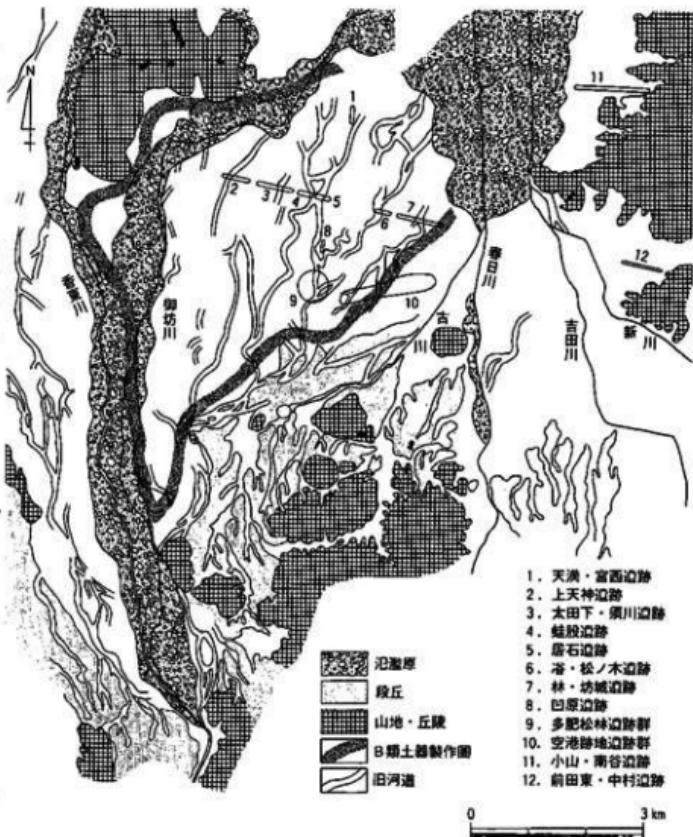
1. はじめに

本県における弥生時代後期の土器様相の特徴の一つに、いわゆる「下川津B類」土器（以下、B類土器と略する）と一般に呼称されている一群の土器がある。この土器群は、角閃石を多量に含む特殊で緻密な胎土と、極めて精巧な作り、後期初頭以降終末期に至るまで伝統的な製作手法を頑なに保持し、東部瀬戸内各地から畿内周辺域にしばしば搬入されるといったことが明らかにされている。一時、「雲母土器」、「四国系土器群」などと称されていた時期もあったが、現在では用語の抱える問題はなお解決されないものの、B類土器という呼称は一般に定着し普及している。

大久保徹也氏は、かつて下川津遺跡の出土遺物の整理を通して、こうした一群の土器を抽出してB類土器という名称を付与し、その編年と製作地などについて推定を試みられた（大久保1990）。特にその製作地については、香川県内各遺跡の出現頻度を集計し、B類土器の分布の中心が高松平野にあり、旧香東川下流域の上天神遺跡を中心とした半径4km圏内が最も可能性が高いことを示された（大久保1995）。つまり、かつて「讃岐系土器」と称されることもあった土器群だが、その製作地は讃岐内部においても極めて限定され、周辺域へは搬入品としてのみ出土する可能性が高まった。

一方、その間森下友子氏や筆者らによる考察も試みられた。森下氏は、太田下・須川遺跡出土土器について、先の大久保氏の推定と奥田尚氏が行った胎土分析の結果（奥田1995）を踏まえて、B類土器が閃綠岩質岩起源の素地粘土を使用しており、その採取地は高松平野中央部の石清尾山丘陵南端付近に求められる可能性が高いことを指摘し、具体的な素地粘土採取地について提示された（森下友1995）。また筆者は、大久保氏が推測した製作域を、高松平野中央部の旧地形の中に投影することによって、B類土器を製作した集団は、「旧香東川の中小支流を取水源とする幹線水路網を軸に連結された協業関係にある集団」の可能性を提示し、地図上で単なる集団単位の把握から一步進めて、その集団の性格について指摘を行った（藏本1997）。B類土器の焼成構造が未検出の現状にあっては、その製作地論は仮説の域を出るものではない。しかし、B類土器様式の持つ特殊性は、その製

作集団が極めて限定されていた可能性を示唆するものであろうし、その背景として農業生産を機軸とした協業関係にある集団を想定する筆者の考えは、あながち無意味なこととは思われない。この範囲は、かつて都出比呂志氏(都出1989)が、「農業共同体的結合」集団の基礎的単位として想定した「領有権」に概ね相当するものと考えられる。



第280図 高松平野の旧地形とB類土器製作圏

こうした点を踏まえて以下、前稿での筆者の考え方を訂正・補強しつつ、弥生時代終末期を中心としたB類土器製作集団の性格や、その周辺部の集団との関係性について素描することしたい。

さて、B類土器の胎土の注目すべき特徴の一つに、火山ガラスを一切含有しない点があげられる。既に数百点にのぼるB類土器について、筆者は実体顕微鏡下でその胎土の観察を行ってきたが、胎土中に火山ガラスが混入している例は、1点も検出していない。おそらくB類土器は、火山ガラスを全く含まない粘土を使用して製作されたと考えられる。つ

まり、角閃石と黒雲母を多量に含む母岩が風化堆積して生成された1次粘土が使用され、他の粘土や砂礫の混入も一切行われなかつた可能性が最も高い。

では、なぜこの集団は、このように特殊な素地粘土に固執したのであろうか。B類土器が他の土器と比して、入念な内面のケズリ調整を多用することによって、器壁が異常なまでに薄く仕上げられる点から、ケズリ調整に同種粘土が適していた可能性もある。あるいは、胎土中に含まれる角閃石や黒雲母の光沢に、ある種の価値を認めていたのかもしれないが、推測される要因はいずれも実証性を伴うものではない。しかしながら、前章第2節の清水芳裕氏の分析にもあるように、この集団の同種粘土への執着は明確であり、素地粘土の選択に強い意志を窺うことができる。

一方、中間西井坪遺跡出土のB類以外の土器では、ほぼ9割以上の土器に火山ガラスの混入が確認された。おそらくこれらの土器は、遺跡近辺の沖積平野部の表土下に再堆積した2次粘土層より素地粘土を採取したと考えられる。したがって、始良Tn火山灰や鬼界アカホヤ火山灰などに含まれる火山ガラスを、量の多寡さえ問わなければ普遍的に含有する。一定程度の集団単位で、粘土採取地は限定されていたものと推定しうるが、土器の製作に適した素地土ならば特に採取地や含有鉱物には固執しなかつたようである。この点で、製作する土器に対する観念的な部分での明確な相違を読みとることができよう。

また、B類土器には、他地域からの土器の影響が乏しく、一貫して自らの伝統的な製作手法や形態をその終末に至るまで頑なに固執し、他地域の土器あるいは土器製作集団にはない特殊性を兼備している。同種胎土での他地域系土器の模倣形態の製作は極めて稀であり、胎土や製作技術の特殊性からするB類土器製作集団は、特定集落での集中的でかつ排他的な土器製作の可能性を示唆するものとも考えられる。

なお、多量の角閃石・黒雲母を含有し、火山ガラスを全く含まない特徴的な胎土は、考古学的手法から得られる調整手法や形態的特徴と合わせて、B類土器を識別する上で明確な指標となるものであろう。また、当該期の薄壺の内、いわゆる庄内壺や吉備系壺などには、総じて角閃石の含有が報告されており、角閃石を含む特殊な素地粘土の選択の共通性にある一定の背景を想定することも、あながち無稽なこととは思われない。

2. 挿入量について

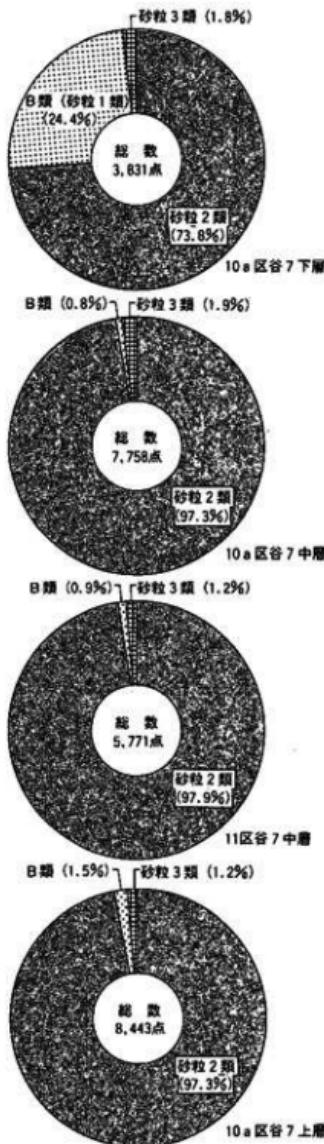
B類土器は、上記したような胎土・形態に特徴を有しており、一定程度その観察に習熟すれば、他の土器と識別することは比較的可能である。従って、各遺跡への挿入の量的問

題については、かなりの確度で議論しうる土器群の一つでもある。そのことは、上記したように、製作地の推定にも大きく貢献した。また、その具体的な検討は、比較的多くの研究者によっても行われている。

例えば、播磨川島遺跡では、山本三郎氏の分析によって1割前後のB類土器搬入量が提示されており（松下1990），同様に阿波黒谷川郡頭遺跡での菅原康夫氏による分析では、最大13%の搬入が報告されている（菅原1987）。

本遺跡においても、谷7出土土器を中心にB類土器の出現頻度について検討を行った。計測を行ったのは、10a区谷7上層・中層・下層・11区谷7中層の4地点についてである。遺物量が比較的豊富で、層位的に安定して遺物の取り上げが可能であった土器群を特に選択した。分析の方法は、総破片数に占めるB類土器の破片数を百分率で示した。

10a区谷7上層では、総破片数8,443点中B類土器破片数は127点で、出現頻度は僅かに1.50%にとどまる。同様に、10a区谷7中層（総破片数7,758点）では0.80%，11区谷7中層（同5,771点）では0.85%と極めて微量のB類土器が出土しているに過ぎない。一方、10a区谷7下層（同3,831点）では一転して24.41%を示し、上・中層に比してやや高率を占める。両層のB類土器の在り方は極めて対照的であり、中・上層での出土は、むしろ本来下層に包含されていたものが、上位の流路の浸食により移動し再堆積したものか、



第281図 中間西井坪遺跡 B類土器出現頻度

あるいは別の要因で混入したものである蓋然性が濃厚である。この点は、下層出土のB類土器と、中・上層出土のそれとの間に明確な型式差を認めない点からも首肯しうる。つまり、谷7下層段階（後述するように弥生時代終末期前葉から中葉に併行する）には、全土器量の1/4程度がB類土器で占められていたものが、谷7中層段階以降（同様に古墳時代前期初頭頃に併行する）には、ほぼ搬入が途絶えたと理解してよいだろう。

さて、大久保氏の集計によると、高松平野周縁部の諸遺跡では、新川流域の前田東・中村遺跡の弥生時代後期中葉の資料で37.2%，南谷遺跡の同前葉～中葉の資料で24.9%，春日川上流の竹元遺跡の同中葉～後葉の資料で34%のB類土器の搬入量が報告されている（大久保1995）。遺跡によって資料の絶対量が異なるため、直接に細かな数値を比較することにはあまり意味を有さないであろうが、概ねこの1/4から1/3という出現率が、現状では平野周縁部（B類土器製作圏周縁部）に位置する遺跡群での通時的な搬入の量的傾向として捉えることが可能だろう。

一方、谷7中層段階以降の資料は、平野周辺域では良好な資料に乏しい。以前、平野中央部に位置する空港跡地遺跡で、当該期の遺物について同様の作業を行った（藏本1997）。その結果、空港跡地遺跡では概ね30%程度の出現率を示し、本遺跡の数値と比して著しく高率であった。しかしながら、空港跡地遺跡では、先行する弥生時代後期後半～終末期の遺構との重複が顕著で、遺物の時期的な問題から、示された数値が当時のオリジナルな様相を反映しているとするには、やや問題点が多いと考えるに至った。古墳時代前期初頭以降のB類土器の消長を考察するためには、製作地周辺におけるより良好なデータの蓄積が必要と思われる。

さて、一方で本遺跡での出現頻度の低下は客観的な事実であり、どのような要因がその背景に宿されているのであろうか。各遺跡でのB類土器の搬入量をみると、弥生時代終末期中葉を境に、その搬入量は器種を問わず軒並み各遺跡で衰退する⁽¹⁾。B類土器製作圏内部の動向は不詳で、現状で捉えられる周辺遺跡での搬入状況から、その製作の消長について具体的に言及できる部分は乏しいが、以下2つの可能性を想定しておきたい。一つは、B類土器そのものの製作が放棄ないしは大きく変質し、周辺部の土器生産と同化した。つまり、特殊な土器様式としてのB類土器様式は消滅した可能性である。もう一つは、B類土器は依然継続して製作されているが、周辺集落においてそれを搬入する吸引力が大きく衰退した。つまり、B類土器が搬出されなくなった可能性である。

製作圏内の集落遺跡の様相は不詳ながら、古墳出土資料にB類土器あるいはその系譜に

位置付けられる資料を若干みることができる。石清尾山古墳群を中心としたいくつかの前期古墳には、B類広口壺の系譜に属する壺形埴輪や類似した胎土を有する円筒埴輪等が散見され、素地粘土の採取を含めたB類土器の技術的系譜が、古墳時代前期を通して維持されている可能性が高い（大久保1996a）。

上記した事実関係を踏まえるなら、土器そのものの形態や器種組成は大きく変質した可能性を認めるが、B類土器様式は古墳時代前期初頭以降も継続して製作されている可能性が高く、当該時期には自集落内で消費する土器のみを製作する体制へと変化したと考えられる。B類土器が本来有していた機能の大きな部分で、変化が生じたと考えられるのである。その変化の具体像とは、どのようなものであったのであろうか。以下では、取りあえず憶測めいた仮説を提示して、後の考察に備えることとしたい。

結論から述べるならば、前方後円墳の築造に代表される大きな時代の転換点に際して、B類土器が本質的に内在する特殊性（それは弥生時代においては、集団間の関係を確認する上で極めて有効に機能したが）に、他集落への搬出が大きく後退した直接的な要因を求めたい。後述するように、B類土器の搬入形態から推測される集団関係は、日常的な交流を通じて維持された、同じ規範を共有することから生じる内在的で互恵的なものであったと考えられる（そのことは、儀礼的な行為を通して集団間の同族関係の確認を執り行つたとされる埋葬の場に、しばしばB類土器が供獻されていること¹⁰からも推測される）。しかし、時代の変革は、そうした社会に、内部に格差や序列を伴った広域的な集団関係の再編を要求したのであり、各集団間に極めて高い緊張関係が生起し、集団内の絆帯が強く意識されるようになったと考える。つまり、B類土器を共有することによって維持されていた集団は、他集団からの強い圧力に抗しつつ、自らの領域を可能な限り維持し再生産するため、他集団に対して自己のアイデンティティを主張する必要性に迫られた。こうした時代の変化に対応して、その集団を象徴するアイテムとしてB類土器をシンボル化することには、大きな限界に直面したのであろう。B類土器の諸属性—胎土の特殊性や製作技術の保守性、また高度に洗練された技術体系など—は、B類土器そのものの集団間の普遍化（素材と技術の双方）を大きく阻む障壁として作用したに違いない。B類土器が本質的に内在する限界性とは、前記した特定集団（集団）での集中生産と一元的拡散といった生産体制そのものに集約される。そしてそこでは、新たな集団関係に対応した、各地域単位で独自に製作が可能で、かつ基本的な製作技術や器種組成が共通する条件を満たす、シンボル化された新たな土器群の創出が必要とされたであろう。次節で具体的な検討を行うが、

B類土器の搬出行為の衰退は、こうした土器群の創出と相關した関係にある。なお、前章第2節で検討した胎土中に黒雲母を多量に含有する弥生時代終末期の特異な土器群は、善通寺地域や長尾平野東部地域の集団が、B類土器製作集団へ同化・統合する過程で生じた、ある種試行錯誤的な特殊な現象であったと理解したい。

2. B類土器の器種組成

ここでは、以下に具体的な検討を行う前に、弥生時代終末期を中心としたB類土器の主要器種について整理しておくことにする。一部前節で行った谷7出土遺物の分類と重複する部分があるが、今後のB類土器の分析を見据えてあえて前記分類と整合させずに、B類土器のみの分類名称を付与しておく。

壺

壺は、主に口縁部の形状を基本的な要素として分類を試みる。広口壺2種と細頸壺1種、複合口縁壺1種がみられる。

a. 広口壺A

広口壺Aは、内傾する頸部より強く折れて水平ないしは斜上方に開く口縁部を有する広口壺である。次の広口壺Bと共に、弥生後期初頭以来伝統的な広口壺の系譜上に位置付けられると考える。口径30~40cm程度の大形品と、同30cm以下の中形品の2者があるが、ここでは一括して分類しておく。

口縁部は、直線状ないしはやや外反して開き、端部は内上方へ摘み上げられる。端面は内傾し、強いヨコナデにより凹線状に窪むものが多い。大形品を中心に、口縁端部へ刺突文などの装飾がみられるが、少数に限られる。口縁部内面も、しばしばヨコナデや板ナデにより数条の凹線状の段を認める点は、後記壺・高坏・鉢等の口縁部のそれに通じる。頸部は直線的に内傾し、口縁部との折り返し部分は、強い稜をなす。頸部外面は、ヨコナデないしは縱方向のハケ調整が、内面はヨコナデ調整があまく、指頭圧痕やいわゆる絞り目がしばしば残される。体・底部の形状や調整手法は、後記壺のそれと概ね共通する。一部製作手法に器種を越えた共通性がみられる点は、各器種の製作が個別分散的に行われていたのではなく、同一集落内ないしは工人によってなされていたことを推測させる。

b. 広口壺B

広口壺Bは、直立する頸部より強く折れて水平に開く口縁部を有する。時期的に短頸化

傾向が窺え、これは本形態の祖形がある種長頸壺の系譜上にあることを示唆するものと考える。なお、現状では中形品に限られるようである。頸部形態を除いた、体部を中心とした形状は上記広口壺Aと大きな差異を認めない。頸部外面には、稀に数条の範描並行沈線が施されるが、これは後期初頭以来の広口壺にしばしば認められた数条の凹線文のなごりと考えられるものであり、終末期までにはほぼ廃れてしまうと考えている。

c. 細頸壺

細頸壺は、長く伸びた長頸形態の口頸部に、玉葱型の体部が付す。体部の容量は1.3~1.7l程度と小さく、実用品としてよりもむしろある種祭祀具としての用途の比重が高いと思われる。終末期段階までは、墳墓への供献土器としてしばしば出土する。後期段階では口頸部は直線的にラッパ状に開くが、終末期には内湾する傾向がある。口縁端部は、丸く納めるか鈍く尖る。口頸部外面は継方向のハケ調整、内面は指頭圧痕を明瞭にとどめる。体部外面は、通常入念な継ミガキ調整の後体部最大径部を横ミガキ調整を加える。内面は、下半ケズリ調整を施し、上半部は指頭圧痕を顯著にとどめ、また強い絞り目痕を残す。本章第2節で記したように、型成形の可能性を示唆する意見もあるが、本形態への型成形の応用は困難であろう。

d. 複合口縁壺

複合口縁壺は、弥生終末期に西部瀬戸内地方の影響下に本土器様式に取り込まれる。現状では大形品に限定され、しばしば壺棺墓として出土する。口縁上半部は内傾し、外面に数条の凹線文を施す。口縁部外面への凹線文の多用は、西部瀬戸内系の複合口縁壺には存在しない特徴で、本土器様式に取り込まれる過程において、付加された属性である。より後出する形態では、口縁部長は延伸し、外面凹線文は口縁部下端の数条の沈線文へ省略される傾向にある。端部は四角く納める。口縁下半部は頸部より強く折れて、斜め上方へ直線的に開く。頸部は内傾し短い。完形に復元される個体が少ないため、体部の形状は不明な点が多い。現状では、体部は倒卵形ないしは球形に近い形状を呈し、底部は鈍い凸面底を呈するものと思われる。体部外面はタタキ調整の後横・斜めハケ調整でタタキメを消し去り、内面はケズリ調整もしくはハケ調整の後上半部に指頭圧痕を認める。

壺

壺は、法量によって小形（壺A）・中形（壺B）・大形（壺C）に分類する。

壺Aは容量2.5ℓ以下、壺Bは同3.5~5.0ℓ、壺Cは同11.0~12.0ℓ程度を指標とする。

しかし、容量が計測可能な個体は限られるため、ここでは口径を指標に、壺Aは口径13cm前後、壺Bは同15cm前後、壺Cは同17cm前後をおおよその基準としておく。形態的な相違は、こうした法量差には反映されず相似形を呈する。

形態上の特徴を示せば、口縁部は強く折り返して直線状ないしはやや内湾して開き、端部は僅かに肥厚しつつ上方へ鋭く摘み上げる。内傾する端面は、ヨコナデないし横方向に板ナデ調整され、しばしば鈍い凹線文を認める。口縁部内面も、同様に板ナデによる凹線状の段を認めるが、これは広口壺や高坏、鉢類の口縁部の調整技法と共通する。頸部は、内外面ともヨコナデ調整され、終末期になると内面は強くシャープな稜をなすものと、屈曲部をヨコナデ調整することにより、稜が極めて鈍化し丸みを帯びるもの2者が併存する。口縁部形態は、第292図に示されるようにかなりのバリエーションを認めることができ、時系列上での小異と共に、併存する複数の製作集団の可能性を示唆する。体部は、肩部の張りの強い倒卵形を呈する。後出する形態では、体下半部は球形を指向し、それと共に体部最大径の位置も下降し、全体的に丸味を帯びる。体部外面は、タタキ調整の後、肩部に右下がりのハケ調整、同下半部は逆に右下がりのハケ調整を加えタタキ痕を丁寧に消し、また下半部へは入念な縦方向のミガキ調整を加える。なお、ごく稀に一次調整のタタキ痕が確認される個体もある。内面は、縦ないしは左上がりのケズリ調整を行い、肩部には顕著な指頭圧痕を加える。しばしば、指頭圧痕の以前に肩部内面に横方向の板ナデないしはハケ調整を認めるが、これはケズリ調整時の凹凸をならす目的でなされたものと思われる。また、頸部屈曲の下位に、内面の稜を引き立たせるためのヨコナデ調整が通例施される。以上の調整技法は、ほぼ全個体に共通し、後期初頭以来の同種壺の伝統的製作手法として頑なに墨守される。底部は、体部よりやや突出した安定した平底ないしは凸面底を呈する。外底面には、一定方向のミガキ調整が施され、内面は、体部より連続するケズリ調整の後、外底面へのミガキ調整を行った際、土器内に手を入れて指で支えるなどして付いたと考えられる浅い指頭圧痕を認める。

高坏

高坏は法量差により、中形と小形の2形態に大別する。小形形態は資料的に乏しく、全形を窺える資料は現状では乏しい。従って坏部口径を指標に分類を行う。両形態の口径は、重なり合うことがなく、口径の差と坏部形態の差異も合致し、指標となる条件を満足するものと判断する。なお、基本的な脚部形態は両者間で異ならないと考えられる。前者を高

坏A、後者を高坏Bと仮称する。

a. 高坏A

坏部口径18~28cm前後と、若干の幅を有する。将来的には、中形と大形に細分される可能性もあるが、ここでは資料的な制約もあり一括して分類しておく。なお、両者の形態上の差は乏しい。坏部中位で屈曲して、上半部は強く外反して開く。口縁端部は、ヨコナデにより窪み、匙面状を呈する。古い形態ではこの匙面は明瞭で、匙面下端が小さな瘤状を呈するものもあるが、新しい形態ではやや不明瞭となるなど、時期により若干のバリエーションを認める。坏下半部は直線状に開き、内面は特徴的な4分割のミガキ調整、外面は横ケズリの後同様に4分割のミガキ調整を加える。脚部は、緩やかに外反してスカート状に開く。内面は基本的に横方向のケズリ調整、外面は縦ミガキ調整を丁寧に施し、内外端部付近をヨコナデする。端部は四角く納め、より古い形態では端部を鈍く肥厚し、端面はヨコナデにより鈍く窪む。裾部に2孔1対の小円形の透し孔が穿たれ、脚柱部にも3ないし4方向の小円形の透し孔を穿つものもある。

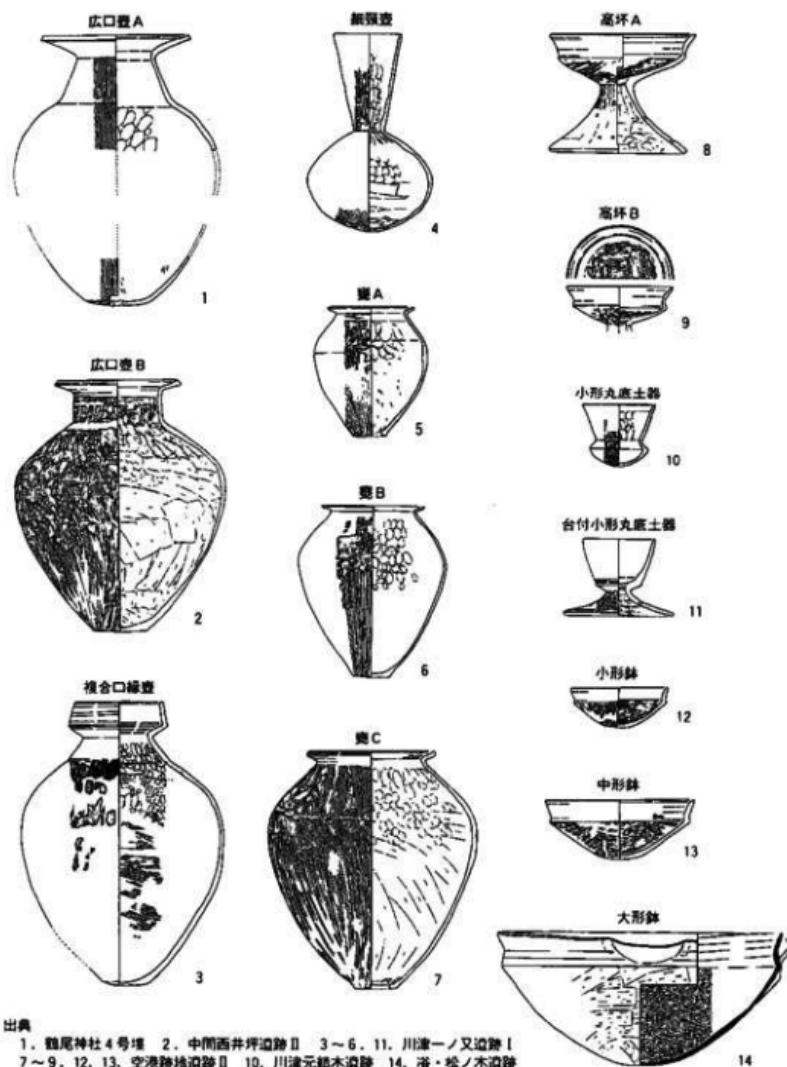
b. 高坏B

基本的な形状は高坏Aと異ならない。坏部口径13~16cmで、坏上半部が直立気味に立ち上がり、外傾度にやや劣る点が高坏Aと異なる。口縁部形態は若干のバリエーションが認められ、内外面の調整手法を含め概ね高坏Aと共通する。脚部形態は良好な資料に乏しく詳細は不明ながら、基本的な形態や調整手法等は高坏Aと大きくは異ならない可能性が高い。本形態は、初現が谷7下層出土資料(211)等より、私案の編年Ⅰ期と考えられ、後期段階まで遡るかどうかは現状では不明。おそらく高坏Aに系譜を有し、高坏Aを補完する目的のもとA類よりやや遅れて成立するものと考える。

鉢

鉢も法量差により、大形、中形、小形の3形態に分類する。3形態とも完形に復元される個体は乏しく、口径を主な指標に分類を行う。なお、小形鉢は類例に乏しく、型式として成立するかどうかは平野中枢部の資料の蓄積を未だ必要とする。

いずれも、基本的な形態が当該期の高坏坏部形状に近似することから、中・小形鉢の機能的側面は高坏のそれと大きくは異ならなかったことを想像させる。しかし、高坏に比すると中・小形鉢の出現頻度は一方的に低く、その機能的側面の大きな部分は高坏が賄っていたと考えられる。一方本地域のB類土器以外の諸土器様式では、高坏に比して中・小型鉢



出典

1. 鶴尾神社 4号墳 2. 中間西井坪追跡Ⅱ 3~6, 11. 川津一ノ又追跡Ⅰ
7~9, 12, 13. 空港跡地追跡Ⅱ 10. 川津元結木追跡 14. 岩・松ノ木追跡

第282図 下川津B類土器主要器種 (1/8, 3のみ1/12)

の出現頻度が卓越し、B類土器とは明確な逆転現象を生じている。これは、小型鉢出現前の弥生時代後期中葉以前の土器組成における高坏の優位性を、B類土器製作集団が終末期に至るまで頑なに保持した結果であり、こうした点からもB類土器様式の特殊性の一端が示されている。

a. 大形鉢

口径30~43cm、器高16~18cm程度のものを分類する。法量的に後掲中・小形鉢との格差は大きい。形態的には、上記したように高坏部形状と近似するが、口縁部が直線的に直立ないしは上外方へ開く形態と、鈍く外反して開き内面に数条の鈍い凹線文を施す形態の2者があり、将来的には細分される可能性を有する。なお、調整手法も高坏部のそれと共に通し、内外面の最終調整に分割ミガキ調整が多用される。また、本形態に限り口縁部の一端に片口を付すものが散見される。底部は丸底ないしは、きわめて不明瞭な平底を呈する。

b. 中形鉢

口径18~23cm、器高6~8cm、容量0.9~1.3ℓ程度のものを分類する。大型鉢同様、形態のみならず調整手法においても、高坏のそれと極めて近似する。底部は丸底ないし鈍い平底を呈し、口縁端部は丸く納める。

C. 小形鉢

口径13cm程度、器高5.5cm、容量0.38ℓの空港跡地遺跡S D e 122出土例のみ。形態的特徴は中形鉢に極似するが、空港跡地遺跡例では、体部外面調整が放射状のミガキ調整に省略されている点が唯一異なる。

小形丸底土器

算盤玉形の体部に、内湾気味に外傾して開く口縁部を付す精製土器。外面にはミガキ調整が多用され、内面はナデ・ヨコナデにより調整される。系譜関係は不明ながら、弥生時代後期後半頃にB類土器の組成に加わるようである。終末期段階では、体部の異常なまでの縮小傾向と、それに反比例して口縁部は大きく発達し、一種定型化した丸底土器が出現する。器形や出土傾向から日常生活の食器としての性格は弱く、やはり祭祀専用の器として製作された可能性は高い。

台付小形丸底土器

上記小形丸底土器の底部に、八字形に緩やかに外反して開く脚部を付した形態。丸底土器と基本的な形態は共通するが、体部が著しく扁平となり底部とほぼ同化して、むしろ凸面状の底部外縁に鈍い沈線状の段を付したような退化形態のものもみられる。口縁部は内湾しつつ長く伸び、口径は体部径を凌駕する。脚部は基本的には高壺の脚部形態に準じる。外面は継ミガキ、内面は横ケズリ調整され、据部に小円形の穿孔を伴うものも散見される。また、体部と脚部の接合も高壺と同様の充填法が用いられ、技法の共有が窺える。系譜的には、小形丸底土器に連れて出現するが、赤塚次郎氏の指摘する東海系の影響（赤塚1994）を想定する必然性は乏しく、中部瀬戸内地方で一時流行する壺等への脚部付加のバリエーションのひとつとして理解すべきと考える⁽³⁾。

以上、B類土器の主要器種について分類を行った。複合口縁壺と高壺B、小形丸底土器、台付小形丸底土器の4器種は、B類土器様式成立時ではなく、終末期前後に新たに加わる形態である。B類土器様式も時期によって器種組成に異なりをみせるが、終末期段階には上記器種は全て揃う。他に、製塩土器に同種胎土が用いられている資料を認める（空港跡地遺跡S D e 138上層等）が、報告例が乏しく、周辺地域の様相が不明なため上掲分類案には含めていない。また、底部穿孔土器や器台、西讃地域に普遍的な土製支脚の3器種は、遂にB類土器様式には採用されないまま終焉する。特に底部穿孔土器は、後期初頭の上天神遺跡周辺において同種胎土で製作された資料を認めるが、以後高松平野中枢地域では継続せず、B類土器様式に取り込まれた形跡は認められない。平野中枢域でも底部穿孔土器は普遍的に出土するが、それらは全て搬入土器で賄われる。

B類土器を製作した集団は、後期初頭以来の伝統的な器形を頑なに保持し、その形態や調整手法の変化にさえも消極的であった。また新来の器種をその組成に取り込むに際しても、強い選択意識が働いた可能性が高い。土器胎土における特殊性を持ち出すまでもなく、極めて個性的な集団であったことは疑い得ない。

3. 各地域での搬入偏差

B類土器の搬入量における各地域（遺跡）間の格差については、前項に述べたとおりである。しかしながら、器種単位での搬入の偏りやその模倣形態については、個別遺跡において搬入器種を取り上げることはあっても、地域を広げてより広域的な偏差については、これまで充分な検討が行われたことはなかった。以下では、弥生時代後期末から終末期に

時期を限って、香川県下の各地域のB類土器の器種単位での搬入の偏差について若干の検討を試みる。

A. 三豊平野地域（三豊地域）

大麻山以西に展開する諸平野部を一括して地域圏を設定する。高瀬川・財田川などの中小河川や小丘陵等自然地形によって、将来的にはいくつかの小地域単位に区分する必要性を痛感するが、調査例が僅少なため、ここでは一括して地域圏を設定しておく。前面は燧灘に面しており、備讃瀬戸及び播磨灘に面する後述する普通寺地域以東の各地域とは、海域を異なる。

本地域では、財田川中流域に位置する觀音寺市延命遺跡（片桐1990）と一の谷遺跡群（西岡ほか1990）、燧灘に面した海岸付近の丘陵上に位置する仁尾町南草木遺跡（秋山ほか1980）に調査例がある。いずれも弥生終末期中葉から布留式最古相伴行期に位置付けられ、遺構内容から良好な一括資料に乏しいが、当該時期の豊富な資料が紹介されている。その内、前2遺跡からB類土器の出土が報告されている。

B類土器は、いずれも中形壺が数点図示されているのみで、他の器種は一切報告されていない。遺跡の経営時期が、B類土器搬出の衰退期に相当することもあるが、その搬入量は全体の遺物量からすれば極少量に限られるようであり、おそらくは百分率で示される程度ではないだろう。延命、一の谷の2遺跡をもって本地域の状況を代表させるには、やはり時期的な偏りや遺跡数の僅少さは拭えない。また、B類土器製作圏からの地理的な距離関係も、後述する諸地域と比較する場合考慮しなければならないだろう。しかし、距離の点では、直線距離でやや遠方に位置する徳島県吉野川下流域の諸遺跡からは、細頸壺や複合口縁壺、高坏等が報告されており、B類土器の搬入形態が必ずしも地図上の空間的な距離関係に反映されない可能性は高い。また、B類土器の模倣形態についても、一の谷遺跡群で中形壺が少量報告されているに過ぎず、さらに胎土の点からいずれも在地産ではなく、搬入土器と考えられることは、B類土器の搬入傾向をある程度反映するものと考えても良い。

つまり、本地域では在地の土器組成の中にB類土器様式を受容しなかった可能性が高く、このことは受容する側において強い選択意識が働いた可能性を示唆する。具体的には、本地域の集団は、高松平野中枢域の集団とは土器様式レベルにおいて疎遠であった可能性が高い。三豊地域の集団がB類土器の搬入を拒絶した点を、まずここでは指摘しておきたい。

B. 丸亀平野西部金倉川下流西岸域（善通寺地域）

丸亀平野西縁、讃岐山脈に源を発する金倉川左岸平野部を地域単位とする。先の三豊地域とは、標高300m以上の丘陵によって隔たれ、自然地形の面から、後述する東部地域とのより頻繁な接触が容易に推測される。

本地域では、丸亀平野中央部以東や三豊地域と異なり、広口壺や複合口縁壺を中心に、口縁部への加飾が顕著な地域色として指摘できる。周辺諸地域と比較した場合、際だった地域色として捉えることが可能であり、上記地域単位設定の妥当性を証するものとも考えられる。その加飾方法には、凹線文や鋸歯文、円形浮文、横描波状文、円形刺突文や頸基部への刻み目突堤などがある。丸亀平野中央部以東でみられるこうした加飾の顕著な壺のいくつかは、本地域からの搬入品であることが多い。

彼ノ宗遺跡（笠川1985）、稻木遺跡（西岡ほか1989・善通寺市ほか1986）、九頭神遺跡（笠川1988・1995）、仲村廐寺（笠川1989）、金蔵寺下所遺跡（廣瀬1994）、永井遺跡（笠川1993）他で当該時期の遺構・遺物が報告されており、海岸部を除いて豊富な資料の蓄積がある。

B類土器は、細頸壺、壺A・B、高坏A・B、中形鉢、小形丸底土器が出土している⁽¹⁾。いずれの遺跡においても、量的には土器組成の主体を占めるものではなく、おそらく占有率は10%以下程度しか搬入されていないと推測される。しかし、複数器種に跨り、數型式間連続して搬入されており、単なる偶発的な搬入形態ではない点は、先の三豊地域と大きく異なる。

一方、模倣形態には、複合口縁壺（金蔵寺下所）、壺A・B・C、広口壺A・B、細頸壺、高坏A、小型丸底土器（以上、稻木・彼ノ宗）、台付小型丸底土器（仲村廐寺）等がみられ、器種及び量的にもむしろ搬入土器を圧倒する。この模倣土器の中には、前章第2節で検討した砂粒分類3類に分類される黒雲母を多量に含有した特殊な素地粘土を用いた土器（稻木他）も一定量含まれており、本地域が模倣土器の確実な製作域であることが確認された。

上記より、本地域はB類土器そのものを製作した痕跡は見えないが、同種土器が複数器種に亘り一定量搬入もしくは模倣され、在地の土器組成に一定程度の影響を与えたことが実証された。こうした土器様相を呈するエリアを「B類土器共有圏」と称することとしたい。こうしたエリア内部では、集落遺跡より出土する土器棺墓にB類土器が使用され、また墳丘墓の供獻土器にも同種土器が散見される⁽²⁾。土器棺に使用される土器や、供獻土

器の種類が、その被葬者の出自系譜や集団間の関係性の表出に関連するとの想定に立てば、こうした事例はB類土器共有圏の性格を追求する上で興味深い視点となる。

また、B類土器の模倣形態には、祖形となるB類土器の形態や調整手法等、型式学的諸属性すべてを満足するものと、一定の模倣は指向するが、形態や調整手法に省略や稚拙さ、あるいは変容が窺えるものの2者がある。前者は、基本的に在地の土器製作技術の系統にはない調整手法などが駆使される例もあり、その習得には一定の時間や経験が必要と考えられる。おそらくはB類土器製作集団に関与した工人によって、各地域の粘土を用いて製作・模倣されたと考えられる土器群である⁽⁶⁾。この場合、素地粘土のみをB類製作圏に搬入し、そこで製作した土器を再び各地域へ搬出したとの想定はやや合理性に欠けること、及び特定器種に偏らない複数器種の模倣形態が製作・使用されていることから、B類土器製作圏からの直接的な工人の移動を想定すべきである。具体的には、B類土器製作圏からの婚姻・移住・派遣等による可能性を想定する。忠実な模倣形態の分布範囲は、当時の通婚圏や頻繁な交流・交易圏を反映しているよう。このような工人の移動範囲は、当然B類土器共有圏を大きく逸脱しては生じえない現象と考えられる。

C. 丸亀平野中央部土器川下流西岸域（丸亀地域）

金倉川右岸から土器川左岸下流域の平野部を地域単位とする。東西を河川に画され、北に開けた自己完結的な地域圏が設定される。旧金倉川と旧土器川の中小支流群を取水源とする灌漑用水路網によって連結された地域圏が復元される。

近年の大規模開発によって、龍川五条遺跡（宮崎1996）、龍川四条遺跡（西岡ほか1995）、道下遺跡（宮崎1991）、三条黒島遺跡（森下1997a）、三条番ノ原遺跡（片桐孝1992）、郡家原遺跡（山下ほか1993）、郡家田代遺跡（佐藤ほか1996）等が調査され、良好な一括資料を含む豊富な資料群が提示されている。基本的には先の普通寺地域と土器様相において均質的な内容を有し、普通寺地域での製作の可能性が推測される黒漆母粒を多量に含む特殊な胎土を有する土器の一群が、比較的多量に出土している点が後述する坂出地域との明確な差異として抽出される。

B類土器には、広口壺A、細頸壺、壺B・C、高壺A・B、小形丸底土器が出土しております⁽⁷⁾、先の普通寺地域と同様に鉢類を欠落することが特徴である。また、資料的に比較的まとまった内容を有する郡家原遺跡SD107出土資料でも、同種土器の占有率は数%程度しかなく、量的に土器組成の主体を占めるものではない。しかし、一定量の壺B・複合

口縁壺を中心とした模倣形態も存在し、B類土器共有圏に包括される。

D. 丸龜平野東部大東川下流域（坂出地域）

丸龜平野東部の大東川下流平野部の遺跡を地域単位として設定する。旧大東川の中小支流群を取水源とする、灌漑システムを共有する地域集団を単位設定の根拠とする。

本地域も大規模開発による資料増加が顕著な地域である。下川津（藤好ほか1990）、川津中塚（西岡ほか1994）、川津下埴（片桐1996）、川津二代取（木下1995）、川津一ノ又Ⅲ区（山下1997）、同Ⅳ区（古野1998）、同河川改修区（片桐ほか1997）、川津元結木（片桐孝1992）等で、当該時期の遺構・遺物が検出されており、良好な一括資料も提示されている。

さて、複合口縁壺や支脚形土器によって示される西部瀬戸内系土器様式は、当該時期前記した三豊地域には在地の土器組成に部分的ながらも組み込まれ、より東に向かうにつれて漸移的にその色彩を弱めつつ広く分布する。そして、本地域は同種土器が一定量製作される地域圏の東限を画する⁽⁵⁾。より以東の地域では、同種壺・支脚の報告例は皆無に等しく、確実なものとしては僅かに高松市空港跡地遺跡S D e 115より、弥生時代終末期の角形支脚1点が報告されているのみである（藏本1997）。

B類土器は、広口壺A類と大・小形鉢を除いた代表的なほぼ全ての器種が出土している⁽⁶⁾。子細にみれば、壺Bと高坏A類は安定して搬入されており、高松平野では僅少な小形丸底土器と台付小形丸底土器も一定程度搬入されているが、細頸壺を除く壺・鉢類の搬入率はやや低い点に特徴を認める。また、模倣形態についても複合口縁壺を除いた各器種が確認される。製作地である高松平野中枢部を除けば、現状でこうした搬入・模倣傾向を見る地域は他に例がない。報告資料数が他地域と比較して多く、直接地域間を比較することは現状ではあまり意味を持たないだろうが、後述する中枢部に隣接した高松平野東・西縁部でさえ、小形丸底土器や台付小形丸底土器の一定量の搬入は見込めないことからすれば、やはり特殊な地域として捉えることができよう。

当時本地域は、北西の季節風を遮る丘陵（青ノ山）を擁した入り江状を呈する地形環境にあったと想像され、海浜部に良好な港の存在が推測される点は、その背景を説明する上で看過できない。下川津遺跡での小型仿製鏡や舶載鏡？、鐵鏡、銅鏡、板状鉄斧等、川津中塚遺跡の舶載鏡？や鐵鏡、ガラス玉等に示されるように、本地域の諸遺跡からは、他地域と比較して青銅器類に代表される非自給物資の出土が頻出する傾向にある。こうした点

も、物資流通の拠点として、坂出地域の有する地理的優位性を示唆する。また、川津一ノ又遺跡（古野1998）からは、讃岐諸地域にあっては上天神遺跡周辺域以外では出土例に皆無な「把手付広口壺」が出土しており⁽¹⁶⁾、さらに他遺跡にはない多量の朱付着土器をみる点は、坂出地域と高松平野中枢部との密接な関係を想定させるに充分であろう。

E. 高松平野西縁本津川下流域（高松西部地域）

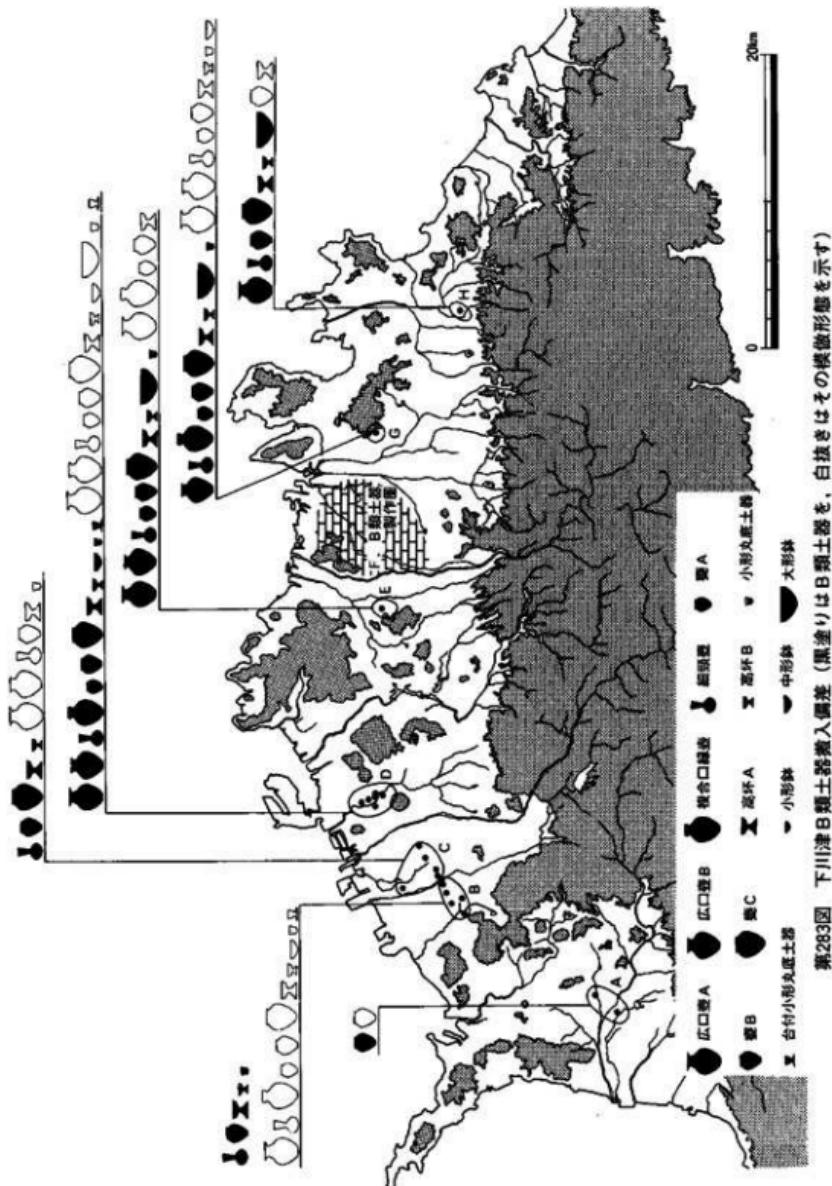
高松平野西縁の香東川下流域左岸、本津川下流域平野部と本津川の支流である古川流域の平野部を地域単位とする。灌漑水利系統を重視すれば、さらに3～4の小地域単位に区分することが可能だが、ここでは調査例が少ないため、一括して地域単位を設定する。後述するB類土器製作圏の高松中枢域に西接する。本地域では、中間西井坪遺跡が唯一内容が判明しているが、他に高松市西打遺跡（北山ほか1998）より当該時期の遺構・遺物が出土しているようである。

B類土器は、本文中に記しているため細かな点は省略する。広口壺A・B、細頸壺、壺A・B・C、高坏A・B、小形丸底土器が出土しており、複合口縁壺、台付小型丸底土器、小・中形鉢を欠落する。大形鉢は小片のため、高坏坏部との判別は困難で、搬入の有無については不詳である。また、模倣形態として広口壺A、複合口縁壺、壺A・B、高坏Aが出土している。

F. 高松平野中央香東川下流域（高松中枢地域）

後期初頭から終末期にかけて、B類型胎土の土器群を製作・消費したエリアである。上天神遺跡（大久保ほか1995）、太田下・須川遺跡（北山ほか1995）、林・坊城遺跡（宮崎1993）、空港跡地遺跡（西岡1996・蔵本1997）、浴・松ノ木遺跡（山元ほか1994a）、井出東I遺跡（山元ほか1995a）、浴・長池II遺跡（山元ほか1994b）、居石遺跡（山元ほか1995c）、蛙股遺跡（山元ほか1995b）、日暮・松林遺跡（山本英ほか1997）より、当該時期の遺構・遺物が報告されている。調査された遺跡数は多いが、一部の遺跡を除いて良好な一括資料に乏しく、実体はやや不明瞭である。

B類土器は、台付丸底土器を除くTKての器種が出土している。特に、他地域では搬入例の乏しい広口壺や鉢類も一定量出土しており、日常容器として普遍化していたものと考えられる。また日暮・松林遺跡（山本ほか1997）では、3点の小形丸底土器が報告されているが、いずれもB類土器ではなく、内2点は黒雲母粒を多量に含む前章に詳述した砂粒



第283図 下川津日焼土器焼入偏差（黒塗りは日焼土器を、白抜きはその模倣形態を示す）

分類3類土器である。こうした諸点は、より類例の蓄積を必要とするが、台付丸底土器の欠落と共に、小型丸底土器各種が他地域への搬出専用の器種として製作された可能性を示唆するものとも受け取れ興味深い。

模倣形態では、太田下・須川遺跡や六条・上所遺跡より中形壺が少量出土しており、搬入土器と考えられる。

G. 高松平野東縁春日川下流域（高松東部地域）

高松平野東縁部の新川右岸平野部を地域区分とする。東に丘陵を擁し、四周を自然地形に遮断された極めて閉鎖的な地域が設定される。東部の丘陵より舌状に張り出す小尾根によって、いくつかの灌漑単位に分割される。

本地域では、前田東・中村遺跡（森ほか1995）が唯一資料化されているのみで制約は大きい。他に小山・南谷遺跡（片桐ほか1994）においても、当該時期の資料が出土しているようである。

前田東中村遺跡からは、後期初頭以降布留式新相伴行期の遺構・遺物が出土しているが、谷部流路や溝からの遺物が大半を占め、細かな時期を特定することはやや困難である。B類土器は、広口壺B、細頸壺、複合口縁壺、甕A・B・C、高壺A・B、大型鉢、小形丸底土器が出土している⁽¹¹⁾。甕では、甕Bが主体で、甕A・Cが少量に限られる。壺では、明確な広口壺Aを欠落する。壺の搬入量は限られ、壺形態に占める割合は微量でしかない。高壺では、高壺Aが普遍的に出土しているのに対して、高壺Bは少数に限られる。小形丸底土器は、10点が図示されており、内1点のみB類土器の可能性が高い。台付小形丸底土器は出土しておらず、同形態の出土傾向は製作圏内部での様相に近似する。

また、模倣土器には、広口壺A・B、細頸壺、甕A・B・C、高壺A・B、中形鉢がみられる。胎土の点から遺跡周辺で製作されたと考えられる模倣土器の他、前章第2節で詳述した砂粒分類3類に分類される土器群の模倣形態も一定量出土している。なお、模倣形態を含めたB類系高壺は、本遺跡の高壺の主体を占める。

H. 長尾平野奥部鶴部・津田川中流域（長尾地域）

高松平野東縁より東に連続する平野部を地域単位として括る。長尾低地・寒川台地と呼ばれる地形単位に相当する。津田川と鶴部川、及び両河川に合流するいくつかの支流群によって、複数の灌漑水系単位に区分されるが、志度町鶴部南谷遺跡（國木1990）と寒川町

森広遺跡（山本ほか1997）の2遺跡が資料化されているのみで、制約が大きく細かな様相については明らかではない。

鴨部南谷遺跡では、遺跡の経営期間の主体がIV期以降にあたるため、B類土器の報告例は皆無である。

森広遺跡では、断続的ながら弥生後期後半からIV期にかけての遺構・遺物が出土している。掲載された遺物量が乏しく、他地域と直接的に比較するには制約が大きい。各器種共B類土器が主体とならないことは確実なようである。

B類土器は、大形広口壺、細頸壺？、壺B・C（529）、高坏A・B、大形鉢が出土している^[12]。点数は乏しいが、複数器種が認められる点は重視したい。また、口頸部を欠くため器種は不詳ながら、B類大形壺が土器棺墓に使用されている。また、B類模倣土器には、壺Bと高坏が認められる。

上記した各地域以外にも、志度溝に面した原中村遺跡（西村ほか1997）では、B類土器は広口壺A、細頸壺、壺B・C、高坏A、中形鉢等が搬入されており、模倣形態は不詳ながらB類土器共有圏に包括されるものと考える。

以上、各地域の様相を詳細に検討した結果、三豊地域と普通寺地域以東の各地域で、B類土器の搬入形態に大きな格差の存在することが明らかとなった。前者の地域では、B類土器の搬入は極めて限られ、壺Bが少量偶発的に搬入されるのみと考えられる。また、少量ながらも普通寺地域の胎土の特徴を有する搬入土器（砂粒分類3類土器）もみられるところから、B類土器は隣接する普通寺地域を経由して2次的に搬入された可能性が高い。このことは、普通寺地域において西部瀬戸内系土器群が、一定量出土することと表裏の関係にあると考える。

一方、普通寺以東の各地域では、B類土器は地域によって搬入量や器種にやや偏りを有しながらも、複数の器種が一定量搬入され、さらに模倣土器も製作されている。また、高坏におけるB類土器への傾斜等からも、B類土器の搬入が各地域の土器組成に一定の影響を及ぼしたことが推測された。さらに、僅かながら土器棺墓にB類土器の使用が確認される。つまり、普通寺以東の各地域は、B類土器を積極的に受容したエリアとして位置付けることができ、そのようなエリアをB類土器共有圏と称することとした。そして、共有圏内部の諸地域においては、B類土器製作圏との間の直接的な接触が、恒常に保たれていたと考えられる。

B類土器共有圏の成立について、その具体的プロセスを復元することは、弥生後期段階の資料が乏しく現状では困難である。以下では、土器資料以外の資料を援用しつつ、共有圏成立の背景について考察を試みよう。

4. 壺穴住居の様相

本県では、現在までに優に300棟を越える弥生後期から古墳前期の壺穴住居跡が検出されている。これら壺穴住居については、個別の遺跡での評価を別にすれば、これまでに総括的な検討はなされておらず、円形住居に方形の張り出しを設ける例が、讃岐・阿波・播磨・摂津西部に分布していることが僅かに指摘され、これら地域間に強い親縁関係が想定されているに過ぎない（宇垣1995）。以下では、やや視点を変えて、壺穴住居の平面形態を軸に、弥生後期から古墳前期初頭頃の住居形態について検討を行い、上記B類土器の搬入偏差の背景を考察する一助としよう。

検討作業を行う前に、まず当該期の壺穴住居の集成を試みた（第24～26表）。集成表中には、正式報告書が刊行され位置付けが確定されているものを中心に、また損壊や未調査部分が少なく、内容が一定程度判明しているものを意図的に選択して取り上げた。記載内容は、報告書に掲載された平・断面図を元に検討を行ったため、一部報告書とは評価を違える部分もある。また、方形住居については、短辺長を長辺長で除した値が0.9以上のものを方形（a類）、以下のものを長方形（b類）とした。

そして、以上の検討を踏まえた上で、平面形態と床面積を基準に形態分類を試みた。つまり、床面積20m²以下を小型、同20～40m²を中型、40m²以上を大型とし、平面形より小型方形をI類、中型方形をII類、大型方形をIII類、小型円形をIV類、中型円形をV類、大型円形をVI類、多角形をVII類の7分類を行った（第284～287図）。多角形住居については、平面形（五角形・六角形等）や規模（中・大型）によってより細分することは可能だが、検出例が乏しく、現状では細分類に意味を見出しえないため行わない。なお、多角形住居については、20m²以下の小型のものは現状では皆無である。

さて、本地域においては、中期以来伝統的な平面円形を呈する住居群の中で、後期以降には方形基調の住居が占める比重が徐々に大きくなるようである。方形住居は、中期中葉頃には既に本地域に出現した可能性が高く、確実な検出例は乏しいが、三木町西浦谷遺跡（石井1988）、高松市浴・長池Ⅱ遺跡SH01（山元ほか1994b）、大野原町平岡遺跡群（片桐節1992）等においてその可能性のあるものが検出されている。

一般に発掘調査によって検出された竪穴住居の平面形態の相違は、おそらく上屋構造の相違を反映するものと考えて大過ないものと思われる。基本となる建築構造は共通しても、その相違は建築技術や用途・機能、あるいはそこに居住する集団の慣習や生活意識の差異をも包括する可能性を有する。以下に述べる住居形態の相違を軸にした集団関係の検討は、そうした前提の上に成り立っている。

まず、各地域の様相を整理することからはじめよう。

三豊地域では、資料数に乏しく、一の谷遺跡群（西岡ほか1990）と南草木遺跡（秋山ほか1980）の2遺跡・30例のみが報告されており、その内資料化されたのは27例に過ぎない。

後期前葉の資料は乏しく、一の谷遺跡群で3方向に張り出しが付す円形住居1例（SB306）が検出されているのみである。出土した土器の内容は、中部瀬戸内的色彩が強く、土器様相からみる限り中東讃地域との差異は乏しい。

終末期以降の資料数は増加するが、細かな時間差での住居形態の変化を辿ることは、現状ではやはり困難である。限られた資料から、少なくとも終末期と古墳前期初頭頃の住居間に大きなヒアタスを認めることはできない。つまり、終末期以降には張り出しを有する住居はみられず、平面形も中・小型住居では方形を基調とし、大型住居を中心に少数円形ないしは多角形住居が存在する傾向を認めることができる。こうした状況が三豊地域に普遍化できるかどうかは不安だが、終末期以降の張り出しを有する住居比率の減少と、方形小・中型住居の多数化傾向に大きな特徴が認められ、後述する他地域と比較して独自的な住居形態における小地域色と捉えておきたい。

次に、丸亀平野西部地域（善通寺・丸亀地域）では、8遺跡10地点において当該時期の住居遺構が検出されており、資料化された住居数も65例に達する。三豊地域に比して資料数は倍増するが、時期的な偏りは抗しがたい。

後期前半段階の住居は、円形2例と方形1例の計3例がある。資料数は僅ながら、資料化されなかった検出例なども検討し、円形優位の可能性を指摘しておきたい。なお、張出部の有無については、明確ではない。次に後期後半以降の住居については、先の三豊地域とは異なり方形住居の占める比率は低く、三豊地域84%に対し本地域では約63%に低下する。しかも、大型方形住居の検出例はなく、本地域で方形住居は小・中型に限られるのが大きな特徴である。また、小・中型円形住居も一定数存在し、円形住居は三豊地域のように限られた存在ではなくより普遍的な様相が強い。さらに、張り出しを有する住居も10

棟が確認されており、確実にその存否が判明する住居の比率は約30%に達する。つまり、3棟に1棟は張り出しを有する可能性が多く、またその平面形も円形ないし多角形に限られることではなく、方形住居の一隅に張り出しを付設する例も散見される。

しかし、時期的な変遷を細かく検討すれば、弥生後期後半段階では、方形住居6例、円形住居9例、多角形住居2例となり、方形住居の占有率は僅か約35%程度と低率だが、終末期段階では円・多角形住居12例に対し、方形住居は30例と急増し、その占有率も約71%に達する。以降、古墳時代前期初頭段階の2例、同後半段階の1例が検出されているが、いずれも方形住居であり、資料数は僅少ながら円形住居の検出例は皆無となる。なお、小型方形住居では2本主柱、中形方形住居では4本主柱が支配的であり、住居構造においては三疊地域との間に根本的な相違は抽出できない。張出部も終末期段階までは確実に伴うが、古墳時代前期初頭の住居には認められない。各時期の資料数が僅少で不均等なため、各々の時期を直接に比較し、また古墳時代前期以降における張出部の欠落を大きく評価することも困難だが、弥生時代後期後半以降における方形住居の卓越化状況は概ね看取することができ、古墳時代前期初頭段階に一つの画期を設定することも可能かとも思える。

上記した状況は、丸亀平野東部（大東川下流）地域でも概ね共通する。本地域では3遺跡で当該期の住居遺構が検出されており、54例が資料化された。しかし、時期的な偏りは本地域でも共通し、後期前半段階の明確な資料は欠落する。

また、後期後半段階では、23例の住居が報告され、その中で方形住居は僅か7例で占有率も約30%に止まる。しかし終末期段階には、28例の報告例のうち方形住居は18例で約64%に急増し、古墳時代前期初頭以降には円形住居の検出例はなく、住居平面プランの推移は概ね丸亀平野西部地域と歩調を等しくする。しかし、丸亀平野西部地域が終末期には小・中形方形住居を主体とするのに対して、本地域では中型方形住居が卓越し、また少數ながら丸亀平野西部地域では欠落していた大型方形住居も検出されており、若干の地域的差異が抽出される。こうした小地域色は円形住居にも認められ、後期後半段階では中・大型住居の卓越と、終末期段階での多角形住居の衰退に、丸亀平野西部域と比較した場合の本地域の特徴がみられる。なお、張出部を付設する住居は、後期後半段階で6棟、終末期段階でも6棟が検出され、存否率はそれぞれ約33%と約26%となり、後期後半以降緩やかな衰退化の可能性が窺える。さらに、古墳時代前期初頭以降の住居には認められず、古墳時代前期には張出部の消滅として顕在化する可能性が高い。とすれば、円形ないしは多角形住居に普遍的であった張出部も、終末期段階にはむしろ中型以上の方形住居に選択的に

付設される点も、住居平面プランの推移と共に、張出部付設の末期的な状況と捉えることも可能であろう。

最後に、高松平野以東地域では、調査された遺跡数は多いが、報告書が刊行された良好な資料に乏しく、資料化された住居数は僅かに20棟に過ぎない。概要報告のみの西打遺跡や、東讃鶴部川下流域の鷲部南谷遺跡の2遺跡を含めて検討するが、資料数の僅少さは解消できない。

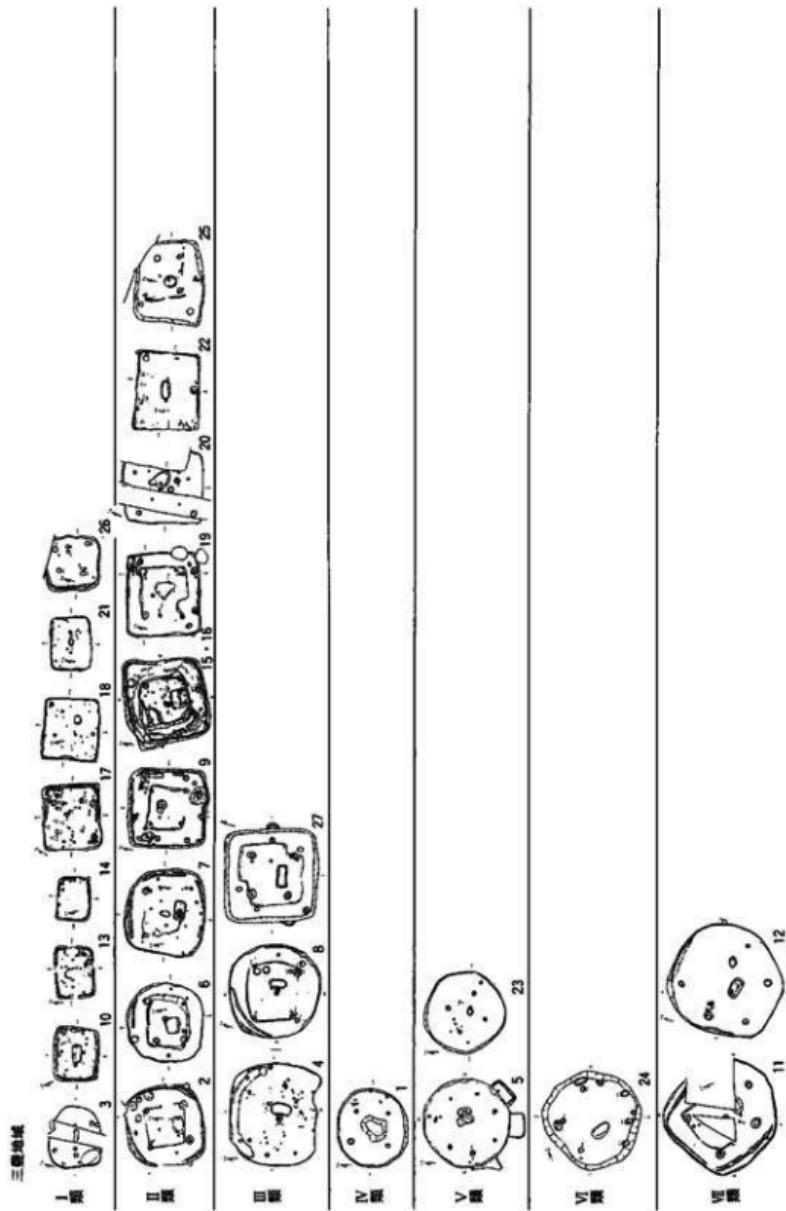
後期前半段階の住居は、円形住居2棟と長方形が1棟検出されているのみである。資料数が僅少なため全体の傾向を推量することは困難だが、上天神遺跡での削平された住居の様相などからも円形優位の可能性は高い。後期後半以降の資料は16例と乏しく、細かな時期的推移を窺うことは困難なため、一括して扱わざるを得ない。本地域でも後期後半以降、数字上は方形住居の占有率が約75%に達し、大半は終末期段階の資料であることから、当該期には上記2地域と同様方形住居の卓越化が指摘される。しかし、資料数の偏りから、直接上記地域と比較することは困難であり、方形住居の卓越化以上にこの数値に大きな意味を見出すことはできない。一方で、空港跡地遺跡では終末期から古墳時代前期初頭の円及び多角形住居が数棟検出されており、当該期での住居平面プランの多様性が指摘される。また、張出部を付設する古墳時代前期初頭に下る可能性のある円形住居も検出されており、他地域と比較して張出部の伝統が意外に根強く残存する可能性も指摘される。

以上をまとめると、後期前葉段階では、各地域とも張出部を付設する中・大型円形住居の存在に大きな特徴を有し、一定の共通性、言い換えれば地域色を共有していた可能性が高い。しかし、後期中葉ないしは後半段階以降には、三豊地域と丸龜平野以東の両地域で住居平面プランや張出部の付設に若干の相違が生じ、小地域色が顕在化する可能性が指摘できる。

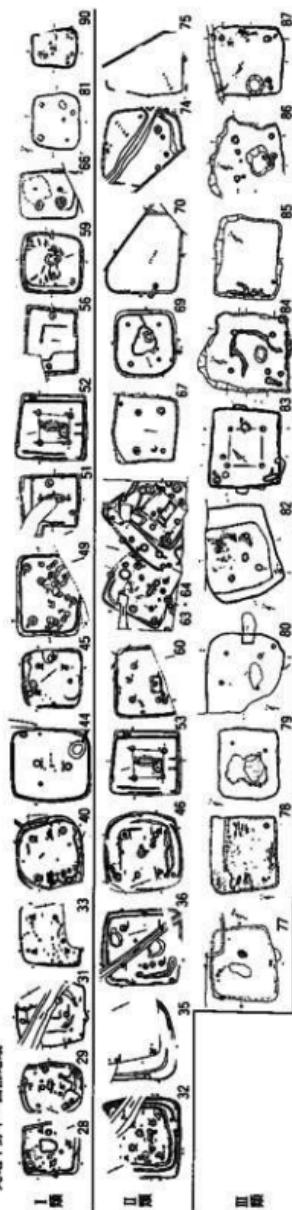
つまり、三豊地域では、終末期以降小型はⅠb類の長方形タイプのものが主流を占め、中型ではⅡa類の方形タイプが最も多く、長方形タイプはやや少なくなり、大型では方形タイプが多いが円形と多角形も少数混在し、平面プランや規模を問わず張出部の付設はみられなくなるといった様相に整理される。こうした各規模の住居形態に方形プランが卓越し、かつ張出部が欠落する様相を、方形基調（住居様式）と称しよう⁽¹³⁾。

一方、終末期段階までの丸龜平野以東の地域では、小型住居では方形のものが半数近くを占め、中型住居でも方形のものが多数を占めるが、円形住居も約30%前後存在し、大型住居では円形が多数を占め、一定量の多角形が混在する。また張り出しを付設する住居が、

第284図 壁穴住居平面形態分類1 (1/400、番号は一覧表と同じ)



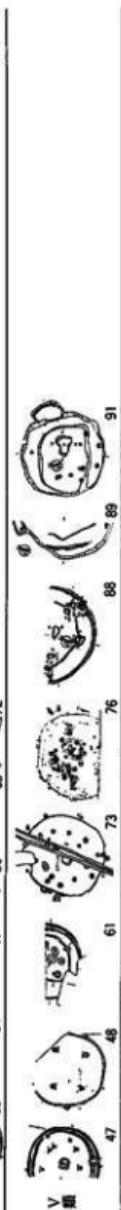
丸島平野中・西側地域



III類



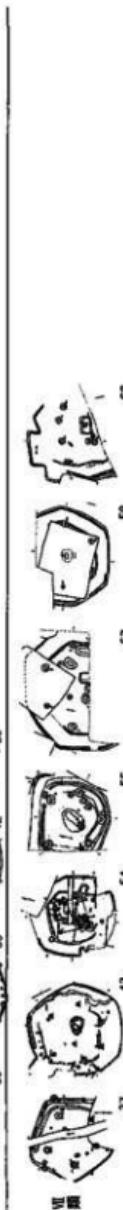
IV類



V類

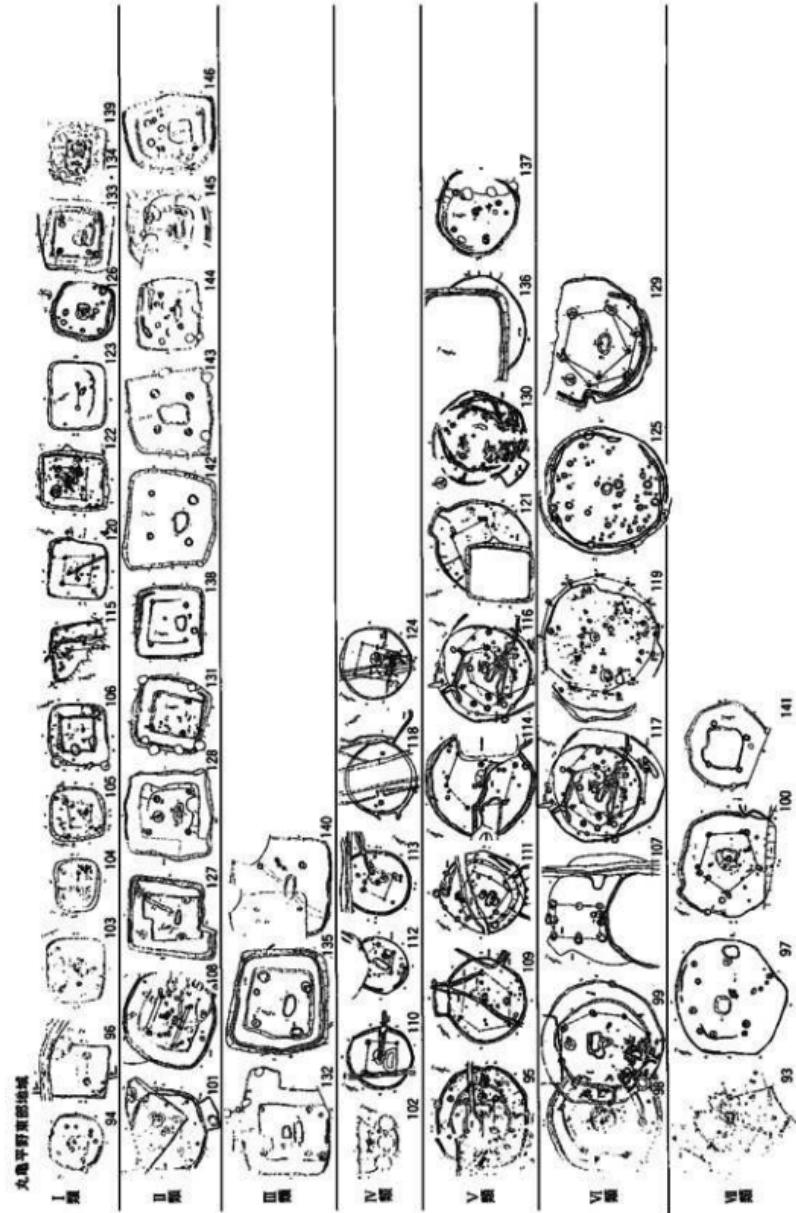


VI類



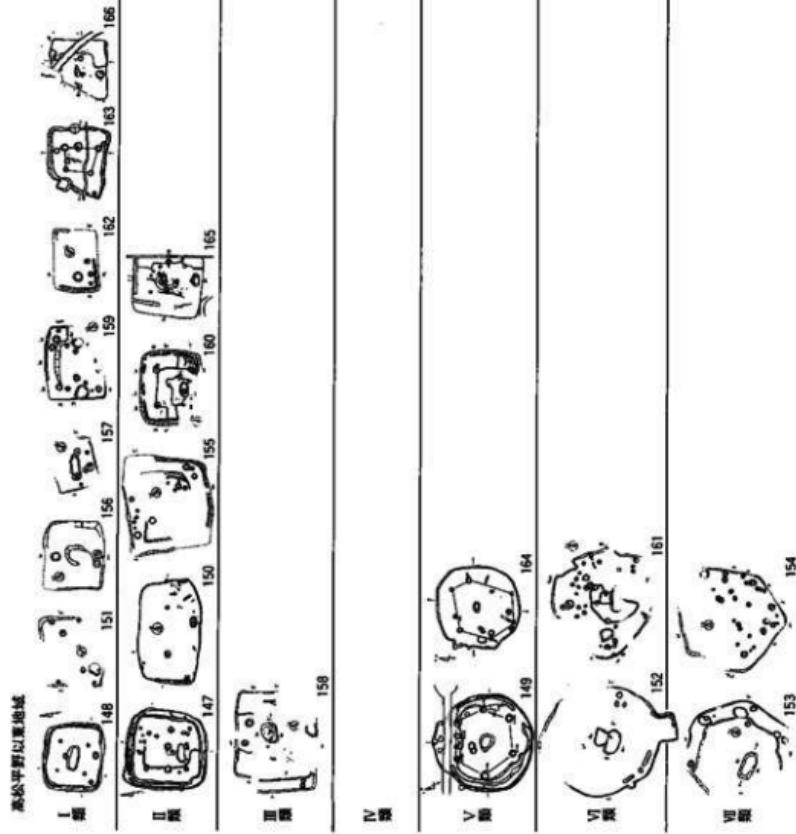
VII類

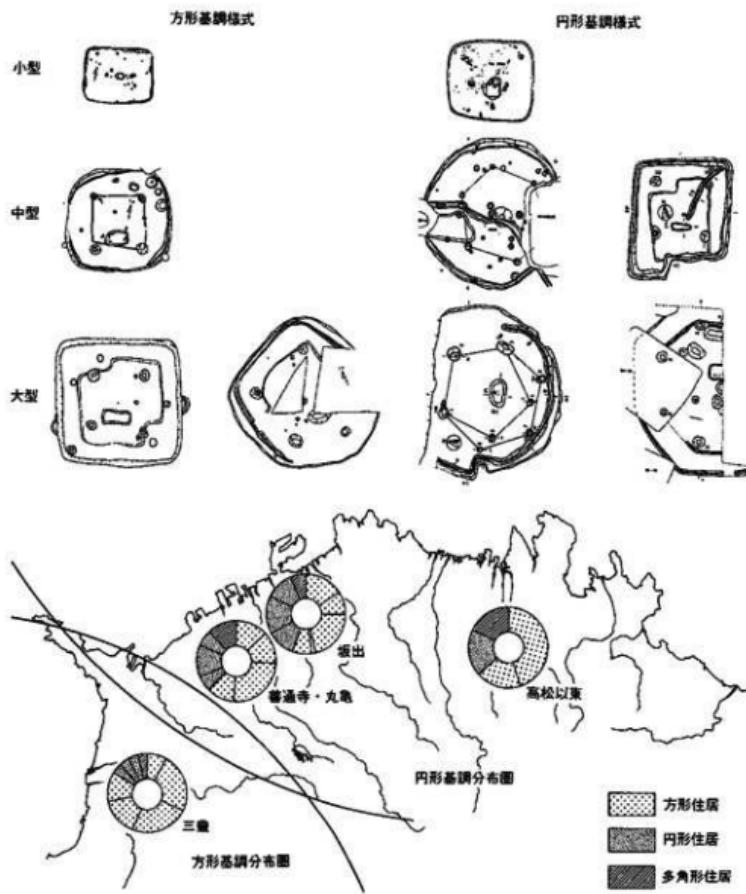
第285図 墓穴住居平面形態分類2 (1/400、番号は一表と同じ)



第26図 竪穴住居平面形態分類3 (1/400、番号は一覧表と同じ)

第287図 墓穴住居平面形態分類4（1/400、番号は一覧表と同じ）





第288図 弥生時代後期後半から古墳時代前期の竪穴住居地域別分類

全住居数の30%近く（削平深度が著しいか全体を検出していない例を除外すれば、張り出しを付設する住居の比率はより高くなる）存在することも重要な要素である。こうした様相を同様に円形基調（住居様式）と称しよう。

上記のように、円形基調式と方形基調式は、住居平面形態のみならず付帯施設の有無によっても明確な相違を描出することが可能と考える。さらに、円形基調から方形基調への漸移的な変化は、各地域共通してみられるが、三豊地域では後期中葉から後半代に、丸亀

平野以東の各地域では古墳時代前期初頭頃に求められ、両地域でかなりの時間差を認めることができる。この点を重視したい。

終末段階でのB類土器共有圏の範囲は、上記円形基調式の分布エリアとほぼ合致する可能性が高く、さらに古墳時代前期初頭段階での方形基調への転換は、B類土器の拡散現象の衰退期と概ね一致する。今少しやや憶測めいたことを付加すれば、三豊地域の後期中葉から後半段階での円形基調式からの離脱は、そうしたB類土器共有圏の集団からの離別と合致する可能性が高い。

上記した検討には、柱数やベッド状遺構の形状など、分類上の属性数を増やせば、より細かな地域色を抽出することも可能かも知れない。また、両地域の地域色を実証するには、さらに張出部の機能や用途、伝播経路や細かな出現時期、三豊地域での消滅過程の検討などが不可欠である。しかし、各地域の資料数の問題もあって、踏み込んだ検討をなすことは当面不可能であろう。ここでは、土器様式のエリアと住居形態のエリアが合致する可能性が高い点を指摘するに留めたい。上記地域における生活習慣やイデオロギーの共通性が、弥生時代後期後半段階には存在する点を確認しておきたい。

5. B類土器共有圏形成の背景

前項までの検討によって、B類土器という特殊な土器様式を取り上げ、その各地域への搬入形態は均質なものではなく、顕著な偏差が認められること。さらに、旧国内部においてさえ、偶発的な搬入を除いては同種土器は持ち込まれず、B類土器様式の受容を拒絶した地域と、独自の土器様式は保有しつつB類土器様式の一部もしくはその大半を受容した地域との2者が存在することが明らかとなった。そして後者によって括られる地域を、B類土器共有圏と呼称することを提案した。

また、竪穴住居平面形態とその規模の検討を行い、讃岐において、B類土器共有圏内部に、円形基調式と称した住居群が分布することを指摘した。そして、弥生時代後期中葉から後半段階には共有圏の外部に位置する三豊地域との間に、住居様式においても格差がみられる可能性を指摘した。

では、こうしたB類土器共有圏によって示される地域圏形成には、どのような背景が考察されるであろうか。土器及び住居様式を共有する地域的な結びつきは、どのような経緯によって生じたのであろうか。

B類土器共有圏内部での同種土器の出現頻度は、各遺跡での報告例を参照すれば、B類土器製作圏を除けば最大でも20~30%程度に収まる。この程度の搬入量であれば、B類土器製作圏からの一方的な土器供給体制を想定することは困難であり、おそらくは集団間の関係性の確認行為、社会関係を維持するためのアイテムとして土器の贈答が行われたことを反映するものと理解したい。共有圏内部でのB類土器の在り方は、経済的な側面よりも社会性をより表出しているものと考えられる。

さて、共有圏内部でのB類土器の搬入形態を再度整理してみると、複数器種の搬入と精緻な模倣形態の製作、土器棺へのB類土器の採用と墳墓への供献といった点が挙げられる。さらに、住居形態においても、平面プランや張出部といった特殊な構造に、一定の共通性が認められた。こうした諸点は、少なくとも讃岐地域においては、共有圏内部の諸集団の日常生活の中に、共通した慣習や規範が醸成されていたことを物語る。そして、上記した土器の搬入形態は、既に都出比呂志氏が畿内周辺での弥生時代中期の土器資料の検討から設定された「通婚圏」の要件に概ね該当する（都出1989）。共通した慣習・規範の存在は、一定規模の集団の移住といった人的交流を助長させる余地を多分に認める（田崎1995）ものであり、「通婚圏」に代表される人的かつ物的交流の頻繁な交流圏といったものが、共有圏成立の具体相であった可能性が高い。

現在、B類土器共有圏として認識される地域は、普通寺地域以東の讃岐中・東部域と阿波東部域、さらに播磨西部の揖保川下流の一部地域であり、第289図に示される。弥生終末期以降これらの地域では、前方後円墳の一部に積石塚を採用し、墳墓の構築面で強い地域色を共有する。例えば、阿波東部域では萩原1号墓（萩原ほか1983）、奥谷2号墳（一山1983）、揖保川下流域では岩見北山積石塚4号墳（芝ほか1997）がある。また、積石塚ではないにしろ、後円部を丘陵下方に選地し、東西方位を優先する埋葬施設を有する讃岐地域との親縁性を認める前方後円墳（藏本1995）の分布域とも合致する（例えば、播磨では吉島古墳・養久山1号墳・金剛山6号墳があり、阿波では宝幢寺1号墳・愛宕山古墳がある）。やや時期を異にするものの、極めて地域色が強く個性的な墳墓の分布と土器様式のそれの重複から、各地域間の上部構造の密接な関係を基盤とした、人や物資の移住・移動が生じたと考える。

東阿波型土器の拡散の背景に、吉野川水系を物流幹線とした非自給物資の流通網の存在を想定した菅原氏の説（菅原1992a）は、こうした地域圏の形成要因を考察する上で極めて魅力的である。稲持遺跡の蛇紋岩製勾玉、若杉山遺跡の朱、普通寺地域の流紋岩製砥石、



第289図 B類土器共有圏と前期積石塚前方後円墳の分布（1/2,000,000）

それに瀬戸内沿岸部の塩などの物資の流通網の統括主体を東阿波型土器保有集団に求め、「讃岐地域と連動しつつも、阿波地域としての独自性」を強調する。東阿波型土器を核とする吉野川下流域の集団の位置付けにはやや異論があるが、菅原氏が想定するように、B類土器共有圏内部での上掲物資の分布から、その流通網の形成を契機とした、一定程度に成熟した広域的な分業生産体制が確立されていたことは間違いない。つまり、これら地域が、互恵的な非自給物資の交易によって強固に連結されており、微妙なパワーバランスの上に極めて個性的な土器様式を創出していった可能性が想定される。

前記した弥生時代後期中葉ないし後半段階における、三豊地域と丸亀平野以東地域との乖離は、こうした流通網の変化から推測することも可能であろう。よく説かれているように、当該期石器の消滅とそれに代わる鉄製利器の普及が急速に進展していたことは間違いない（森岡1998）。例えば、石器の特定器種における素材の寡占状況（石錆や打製石庖丁におけるサヌカイトや磨製石斧各種における片岩系統の石材など）は、安定した石材供給体制の充実と、各地域単位での石器製作の限定を背景とした、弥生時代を通じて連綿と受け継がれてきた広域的かつ系統的に整備された互恵を原理とする物資流通網、つまり「石器の流通システム」（福宜田1998）の存在を想起させる。しかし、後期中葉段階には決定的となる鉄素材の普及によって、そうした既存の流通網は寸断され、おそらくはきわめて強い緊張関係を生じたと考えられる。こうした緊張関係への対応の如何によって、諸集団間の結合関係は再編され、地域間のイデオロギー的側面での紐帯も徐々に変質し、やが

ては政治的な空間領域の変化をも招來したものと考える。

非自給物資、特に鉄素材の交易を通して各集団間に頻繁な接触を生じ、その接触の中から、物資や人間の移動・移住が生起した。しかしそれは、等質的で単調なものではなく、B類土器の搬入偏差にみられるごとく拠点的で格差をともなったものであった。その物流システムの中核の一つに、B類土器製作圏を位置付ける。やや時期は遅るが、B類土器製作圏に位置する上天神遺跡では、多量の朱精製土器と共に、畿内から西部瀬戸内の各地域の土器の搬入が確認されており（大久保1995）、非自給物資の管理と共に海上交通路の結節点に位置した後の貿易港的な流通のターミナルとして位置付けることが可能であろう。そしてこのような地域では、集団のアイデンティティを強調するため、地域集団を象徴する特色ある土器様式が成立すると考えられている（佐々木1997）。B類土器の成立する素地、さらには積石塚古墳に代表される政治的な空間領域の形成は、弥生後期初頭段階には既に準備されていたのである。

註1. 例えば、下川津V式期に後続する郡家原遺跡SD158では、小形のB類高壺1点が報告されているのみである（山下ほか1993）。おそらくほぼ同時期に位置付けられる道下遺跡SD09出土資料には、B類土器は報告されていない（宮崎1991）。また、下川津VI式期にやや後出するが、下川津遺跡SHII32や彼ノ宗遺跡ST15出土資料でも、同様にB類土器の報告は皆無である。

註2. 墓へのB類土器供獻例として、寒川町奥10号墓（大久保1993）、綾歌町石塚山2号墳（國木1993）、徳島県萩原1号墓（菅原ほか1983）等がある。

註3. しかし、本地域の土器様式において東海系の影響は微弱ながら認められる。中間西井坪遺跡出土の内湾脚部例については前節において指摘したが、空港跡地遺跡前方後方形周溝墓ST05出土の直口壺（真下ほか1993）についても、在地系譜の土器系列では理解できず、やはり東海系の影響が想定され、廻間7～8式期の壺D1の系譜上（赤堀1990）に位置付けられると考える。さらに、三条番ノ原遺跡包含層出土の内湾した口縁部を有する長頸壺（251）についても、東海系の影響を想定すべきであろう。

註4. 稲木遺跡（西岡ほか1989）出土のB類土器として、下記のものがある（数字は、報告書中の遺物番号）。

94-3, 115-115·128, 122-63, 124-128·135, 125-156, 130-59, 134-132·133·145, 144-43, 153-42, 195-3, 230-20, 235-131·132·135, 245-12, 249-99, 250-102·122

註5. 土器棺の例として、寒川町森広遺跡8号土器棺棺身（山本一ほか1997）、兵庫県龍野市新宮東山古墳群3号土器棺（岸本1996）等がある。また墳墓への供獻土器については、註1を参照。

註6. このようなB類土器の模倣形態に、下記のような例がある（数字は、報告書中の遺物番号）。

稻木遺跡 99-1, 112-38, 113-68, 115-112, 121-48, 134-131, 148-29, 153-47, 156-103·106, 232-67·69, 238-188, 248-71, 250-111

郡家原遺跡 206·292

川津中塚遺跡 686・875

川津一ノ又遺跡Ⅲ区 472・498・505・540・700・800・805・1491・1546

川津一ノ又遺跡Ⅳ区 1804・1891

前田東・中村遺跡 C176・E27・F95・F275・G258・G275・G502

註7. B類土器として、下記のものがある（数字は、報告書中の遺物番号）。

郡家原遺跡 18, 21, 92, 117~118, 175, 176, 206, 210, 264, 266, 293~295, 375

龍川五条遺跡 1766

註8. 例えば、川津一ノ又遺跡（山下1997）では当該時期の土器資料約1,000点に対し、同種壺6点、支脚1点が、下川津遺跡（藤好ほか1990）では同様に約2,000点の資料（後期中葉以降の資料含む）に対し、同種壺16点、支脚8点が報告されている。いずれも、総量に対する占有率は1%程度と少ないが、在地で製作されている可能性のある土器を含むことから、分布圏に含めておく。

註9. B類土器は各遺跡より出土しており、量的に膨大な資料の蓄積をみる。ここでその全てを提示することは困難であり、代表的なもののみ例示しておく。（数字は、報告書中の遺物番号）

広口壺A 川津二代取193, 川津一ノ又Ⅲ区1596?

広口壺B 川津一ノ又Ⅲ区1061・1561,

細頸壺 川津元結木311・313, 川津一ノ又Ⅲ区924・993, 川津一ノ又Ⅳ区507

複合口縁壺 川津一ノ又Ⅲ区1684

壺A 下川津 I 81~21（第1分冊第81図21の土器の略、以下同じ）、川津一ノ又Ⅲ区1697

壺B 下川津 I 88~4, 川津一ノ又Ⅲ区581・1574, 川津一ノ又Ⅳ区1631, 川津一ノ又 246・248

壺C 下川津 I 84~4, 川津下縫484, 川津一ノ又Ⅲ区1074・1240・1577

高坏A 下川津 I 124~1, 川津一ノ又Ⅲ区841・1588, 川津一ノ又Ⅳ区354

高坏B 下川津 I 90~17・II 95~3, 川津一ノ又Ⅲ区1299, 川津一ノ又Ⅳ区352・512

中形鉢 川津一ノ又Ⅲ区1581

小形丸底土器 下川津 II 110~21, 川津元結木51, 川津一ノ又Ⅳ区361・582

台付小形丸底土器 下川津 II 48~5, 川津元結木208・209, 川津一ノ又Ⅲ区500・794, 川津一ノ又Ⅳ区516・1588

註10. 前田東・中村遺跡からは、百個体に近い数量のB類土器が報告されている。その内、E~G地区出土の代表的なものを抽出して、以下例示しておく。（数字は、報告書中の遺物番号）

410~69, 413~115, 527~783, 562~76, 563~82, 564~96, 566~116, 580~271・274, 585~316
・317, 647~87, 671~269, 672~277, 673~279, 681~323・325・328, 698~524, 735~781

註11. B類土器として、下記のものが報告されている。（数字は、報告書中の遺物番号）

148, 183, 213, 215, 268~270, 285, 400, 458, 477, 520, 529, 544, 557

註12. 一ノ又遺跡出土の把手付広片口皿の胎土は、角閃石や黒雲母粒をほとんど認めず、いわゆる高松平野中権部の「胎土1類」土器のそれとは明らかに異なる。つまり、遺跡周辺を含めた高松平野中権以外の地域で製作された可能性が高いと考える。しかし、このことは必ずしも本地域と高松平野中権との関係が希薄であったことを示す根拠とはならない。一ノ又遺跡でも上天神遺跡同様、朱の使用に鉢が多く用されており、把手付広片口皿の共有の点からも、習俗的な部分での共通した規範の存在が窺える。

なお、報告者は一ノ又遺跡出土の片口皿を後期前半代に位置付ける（古野1998）。しかし、供伴する資料はいずれも弥生終末期に下り、また他の朱付着資料のはばすべてが終末期に位置付けられることからすれば、片口皿の時期を終末期に下らせるに躊躇する必要はないだろう。

註13. 時期的に限定された僅か2遺跡の資料をもって、1類型を設定することには大きな躊躇を伴う。ここで類型設定する根拠は、土器様相や後の古墳の分布ともうまく整合性をもって理解できる見通しが得られるからである。今後資料の増加に伴って筆者の理解に変更の余地は認めるが、現状での認識には誤りないものと考える。

遺跡名	遺構名	平面形	張り出し	柱数	規模	形態分類	時期	文献	備考
1 一の谷遺跡群	S B301	円形	-	4	B	IV類	古・前期初	西岡ほか1990	
2	S B302	方形	-	4	C	II a類	弥・終末期		
3	S B304	長方形?	-	2	B	I b類	?		削平顕著
4	S B305	方形?	-	7?	E?	III a類	弥・終末期?		削平顕著
5	S B306	円形	3	7	C	V類	弥・後期前業		
6	S B307	方形	-	4	C	II a類	弥・終末期		
7	S B308	方形	-	4	D	II a類	吉・前期初		
8	S B309	方形	-	4	D	III a類	弥・終末期		削平顕著
9	S B310	方形	-	4	C	I a類	古・前期初		
10	S B311	長方形	-	2	B	I b類	弥・終末期?		
11	S B312	五角形?	?	5	E~F	VII類	弥・終末~古・前期初		削平顕著
12	S B313	六角形?	無	5?		VII類	古・前期初		
13	S B314	長方形	-	2?	A	I b類	古・前期初?		
14	S B315	長方形	-	?	A	I b類	弥・終末期		
15	S B316	方形	-	?	C?	II a類	弥・終末期		
16	S B317	方形	-	4	D	II a類	弥・終末期		
17	S B318	長方形	-	4	B	I b類	古・前期初		
18	S B319	方形	-	?	B	I a類	?		削平顕著
19	S B320	長方形	-	4	C	II b類	古・前期初		
20	S B321	長方形?	?	4	C	II b類	弥・終末期?		削平顕著
21	S B322	長方形	-	2	A	I b類	?		管玉
22	S B323	長方形	-	2?	C	II b類	古・前期初		
23	S B324	円形?	-	4	D	V類	弥・終末期		砥石
24	S B325	円形?	-	4	E	VI類	古・前期初		砥石
25	S B327	長方形	-	4?	C	II b類	弥・終末期?		
26	S B328	方形	-	4?	B	I a類	古・前期初		
27 南草木遺跡	住居跡	方形	-	4		III a類	弥・終末期	秋山ほか1980	
28 後ノ奈遺跡	S T01	長方形	?	2?	B	I b類	弥・終末期	笛川1985	
29	S T02	長方形	?	2	B	I b類	弥・後期後半~		
30	S T03	長円形?	2	4	B	IV類?	弥・後期後半?		
31	S T06	長方形	?	2?	B	I b類	弥・終末期?		
32	S T09	方形	?	4	C	II a類	弥・終末期		鏡片
33	S T12	方形	?	4	B	I a類	弥・終末期		玉類・搅乱顕著
34	S T13	円形	?	4?	B	IV類	弥・後期前半		玉類
35	S T14	方形	?	4?	C	II a類	弥・終末期?		搅乱顕著
36	S T15	方形	-	4	C	II a類	古・前期初		
37	S T16	五角形?	?	5?	C	VII類	弥・終末期		
38	S T18	円形	1	6	E	VI類	弥・終末期?		
39	S T20	円形	-	4?	F	VI類	弥・終末期		ガラス玉・鐵器
40	S T21	方形	?	4	B	I a類	弥・終末期		
41	S T23	円形	-	4	B	IV類	弥・後期後半		
42	S T24	円形?	?	?	F	VI類	弥・終末期		玉類・銅鏡・鐵器
43	S T26	六角形?	1	6?	D	VII類	弥・終末期		玉類
44	S T27	方形	-	2	B	I a類	弥・終末期		ガラス玉
45	S T31	方形	-	4?	B	I a類	弥・終末期		
46	S T33	方形	-	4	C	II a類	弥・終末期		
47	S T34	円形	?	?	C	V類	弥・後期中葉?		
48	S T37	円形?	?	4	C	V類	弥・終末期		西部瀬戸内系
49 旧跡兵塙遺跡 (保育所付地)	S H01	長方形	-	2	A	I b類	弥・後期後半~	森下1994	
50	S H02	円形	?	4	B	IV類	弥・後期前業		
51	S H04	長方形	1	2	B	I b類	弥・終末期		
52	S H06	長方形	-	2	B	I b類			
53	S H07	多角形	1	4	D	VII類	弥・終末期		
54	S H09	五角形	?	5	C	VII類	弥・終末期		玉類

第24表 講岐地域の竪穴住居集成表1

遺跡名	遺構名	平面形	張り出し	柱数	規模	形態分類	時期	文献	備考
55	S H10	長方形	—	2	B	I b類	古・前期初		
56	S H11	八角形	?	8	F	VI類	弥・後期後半～		
57	S H12	六角形	?	6	D	VI類	弥・終末期		
58	S H13	方形	—	2	B	I a類	弥・終末期		
59	S H17	方形	?	4	C	II a類	弥・終末期		
60	S H18	円	?	4?	C	V類?	弥・後期後半		
61	S H19	五角形?	1以上	5?	C	VI類	弥・後期後半～		
62	(香齋学校教場等地点)	S H08	方形	?	4	C	II a類	弥・終末期	森下1994
63		S H10	方形	?	4	C	II a類	弥・終末期	
64	(品質管理実験場地点)	S H01	円形?	?	4	B	IV類?	弥・後期後半?	森下英1995
65		S H03	長方形	?	2	B	I b類	弥・後期後半	
66	仲村魔寺	S H31	方形	—	4	C?	II a類?	弥・終末期	篠川1989
67	九頭神遺跡	S T01	円形?	?	E?	VI類	弥・後期後半	篠川1968	
68		S T03	方形	—	4	B	II a類	弥・終末期	鉄錐・銅製品
69		S T06	方形	—	?	C	II a類	弥・終末期	
70		S T08	方形	?	?	B?	I a類?	弥・後期前葉	
71		S T09	円形?	?	?	B	IV類?	弥・終末期	
72		S T10	円形	1?	10?	D?	V類	弥・終末期?	
73		S T12	方形	—	4?	C	II a類	弥・後期後半～	
74		S T14	長方形	?	?	C	II b類	弥・後期後半～	
75	稻木遺跡	S H01	円形?	?	?	C	V類	弥・終末期	善通寺市ほか 1987
76		S H02	方形	—	?	C	II a類	弥・終末期	
77		S B01	方形	—	4	C	II a類	弥・終末期	西岡ほか1989
78		S B02	長方形	—	4	C	II b類	弥・終末期	刀子?
79		S B03	長方形?	?	4?	C?	II b類?	弥・終末期	刀子?
80		S B04	方形	—	4	B	I a類	弥・終末期	
81		S B05	長方形?	?	4	D	II b類	弥・終末期	ヤリガンナ
82	龍川五条道路	S H01	方形	3?	?	C	II a類	古・前期後半	宮崎1996
83	三条番ノ原道路	S H01	長方形	1?	4	D	II b類	弥・後期後半～	片桐1992
84		S H02	長方形	—	?	C	II b類	弥・終末期	
85		S H03	長方形?	?	4?	C?	II b類?	弥・終末期	
86		S H04	方形	—	4	C	II a類	弥・終末期	
87	郡家原遺跡	S H01	円形?	?	D	V類	弥・後期後半	山下ほか1993	
88		S H02	円形	1以上?	?	D	V類	弥・後期後半	
89		S H03	方形	—	?	A	I a類	弥・終末期	
90		S H04	円形?	1	C	V類	弥・終末期		
91		S H06	方形	—	?	B	I a類	弥・終末期?	
92	下川津遺跡	S H01	多角形?	1以上	6?	F	VI類	弥・後期中期	藤好ほか1990
93		S H02	方形	—	4	B	I a類	弥・終末期	
94		S H03	円形?	—	4	D	V類	弥・後期後半	
95		S H04	長方形?	?	4?	B	I b類	古・前期後半	
96		S H05	多角形?	—	4?	F	VI類	弥・後期後半～	
97		S H06	円形?	1以上	6	F	VI類	弥・終末期?	
98		S H07	円形?	—	6	F	VI類	弥・終末期	
99		S H08	多角形?	2	5	E	V類	弥・終末期	
100		S H09	方形	1	4	C	II a類	弥・終末期	銅鏡
101		S H11	円形?	?	2	B	IV類	弥・終末期	
102		S H12	方形	—	2	B	I a類	弥・後期後半～	
103		S H13	長方形	—	2	B	I b類	弥・後期後半～	
104		S H14	方形	—	4	B	I a類	弥・終末期	
105		S H15	方形	—	4	B	I a類	弥・終末期?	
106		S H16	円形	1以上?	?	F	VI類	弥・後期後半～	
107		S H17	方形	—	4	D	II a類	弥・終末期	
108		S H18	円形	1	6	C	V類	弥・終末期	

第25表 謹岐地域の堅穴住居集成表2

遺跡名	構造名	平面形	張り出し	柱数	規模	形態分類	時期	文献	備考
109	S H II 19	円形	-	4	B	V類	弥・終末期?		
110	S H II 20	円形	-	6	C	V類	弥・終末期~		
111	S H II 21	円形	-	5	B	V類	弥・終末期		
112	S H II 22	円形	-	4	B	V類	弥・後期後半?		
113	S H II 23	円形	?	6?	C	V類	古・前期初?		
114	S H II 24	長方形?	?	2?	B	I b類	弥・後期後半~		
115	S H II 25	円形	-	6	D	V類	弥・終末期		
116	S H II 26	円形?	?	7	E	V類	弥・後期後半?		
117	S H II 28	円形	-	?	B	V類	弥・終末期		
118	S H II 29	円形	?	?	F	V類	弥・後期後半~		
119	S H II 30	方形	-	4	B	I a類	弥・終末期		
120	S H II 31	円形	1以上	4?	D	V類	弥・後期後半		
121	S H II 32	長方形	-	4	B	I b類	古・前期初		
122	S H II 33	長方形	-	2	B	I b類	古・前期初?		
123	S H II 34	円形	-	4	B	V類	弥・後期後半		
124	川津中塚遺跡	S H II 01	円形	-	7?	大型	V類	弥・後期後半	西岡他1994 玉・鉄錐
125		S H II 02	長方形	-	4?	小型	I b類	弥・後期後半?	銅鏡
126	川津一ノ又遺跡	S H 02	方形	1	4	C	I a類	弥・終末期	山下1997
127		S H 04	方形	-	4	D	I a類	弥・終末期	
128		S H 05	円形	1	5	F	V類	弥・終末期	
129		S H 08	円形	1	6	D	V類	弥・終末期	
130		S H 08	円形	1	6	D	V類	弥・終末期	
131		S H 07	方形	2	4	E	I a類	弥・終末期	
132		S H 28	方形	-	4	B	I a類	弥・後期後半	
133		S H 08	方形	-	4	B	I a類	弥・終末期	
134		S H 09	方形	-	4	E	I a類	弥・終末期	
135		S H 10	円形	?	?	D	V類	弥・後期後半	
136		S H 13	円形	?	4?	C	V類	弥・後期前半?	
137		S H 18	方形	-	4	C	I a類	弥・後期後半	
138		S H 20	方形	-	4	B	I a類	弥・終末期	
139		S H 22	方形	?	4	E	I a類	弥・終末期	
140		S H 23	多角形?	?	4	C	V類	弥・終末期	
141		S H 24	方形	-	4	D	I a類	弥・終末期	
142		S H 25	方形	-	4	D	I a類	弥・終末期	
143		S H 26	方形	-	4	C	I a類	弥・終末期	
144		S H 29	方形	?	4	D	I a類	弥・終末期	
145		S H 33	長方形	1?	4?	D	I b類	弥・終末期	
146	西町遺跡	S H 01	方形	-	4	C	I a類	弥・終末期?	北山ほか1998
147		S H 02	長方形	-	4	B	I b類	弥・終末期?	
148	上天神遺跡	S H 01	円形	1	6	D	V類	弥・後期初	大久保ほか1995 玉
149	太田下・須川臺跡	S H 01	長方形	-	2	C	I b類	弥・後期初	北山ほか1995 銅平鏡著
150	空港跡地遺跡	S H c 01	方形	?	?	B	I a類	弥・後期後半~	西岡1996
151		S H c 02	方形?	?	?			弥・後期中期~	
152		S H c 03	方形?	?	?			弥・終末期	
153		S H c 04	円形	1	?	C	V類	弥・終末期	
154		S H c 06	六角形?	?	?	E	V類	弥・終末期	
155		S H c 07	六角形?	?	?	D?	V類	弥・終末期	
156		S H c 11	長方形	?	4?	D	I b類	弥・終末期	
157		S H c 12	方形	?	2	A	I a類	弥・後期後半~	
158		S H c 17	方形	?	2	A	I a類	?	
159	前田東・中村遺跡	E区S H 方形?	-	4?	B	I a類?	弥・終末期	森ほか1995	
160		F区S H 円形	?	6?	c	V類	弥・後期初頭		
161	鶴郷南谷遺跡	S H 8801	長方形?	?	2	C	I b類	古・前期後半	園木1990
162		S H 8902	方形?	?	2	B	I a類?	弥・後期後半~	

第26表 講岐地域の堅穴住居集成表3

第4節 讃岐における古墳出現の背景

—東四国系土器群の提唱とその背景についての若干の考察—

1. はじめに

本章第2節において指摘したように、本遺跡より出土した壺Cをはじめとする一群の土器は、本地域の古墳時代前期の土器様相を理解する上で、非常に重要な位置を占めるものと考えられる。以下では、この壺を中心には本地域の主に古墳時代前期の土器様相について、若干の考察を加えることとする。

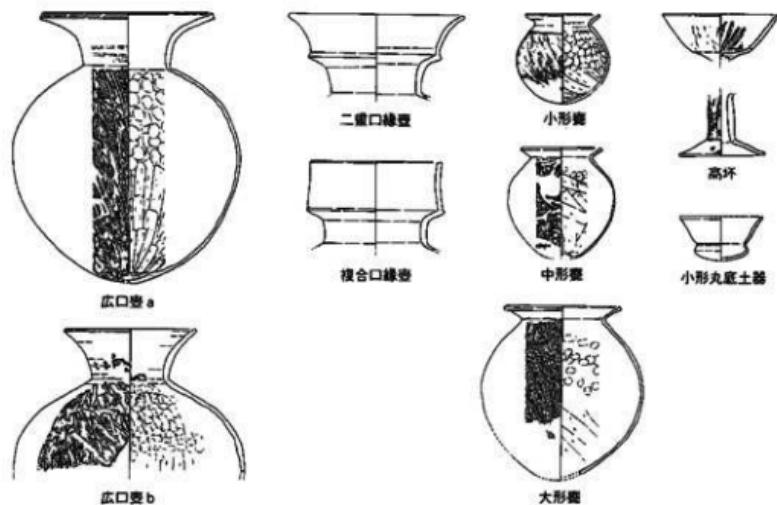
なお、壺C及びその系譜上にある壺形態については、かつて木下晴一氏が「菅原康夫氏が設定する「東阿波型土器」と形態・調整技法が酷似する」ことを指摘（木下1995）し、また大久保徹也氏も阿波東部地域の影響を想定する（大久保1993）。しかし、私は阿波東部地域のみからの一元的な影響関係を想定するのではなく、多元的でかつ自律的な動きとして、Ⅲ期段階での本壺Cの成立背景を理解しようと考えている。詳細は以下本文に委ねるが、本稿での目的は定型化した壺Cを「東四国系壺」と称し、また壺Cに特徴付けられる一群の土器群を「東四国系土器群」と称することの提唱にある¹¹⁾。

2. 東四国系土器群の器種組成

まず、以下に東四国系土器群を検討するに際して、その器種組成を整理することから始めよう。

東四国系土器群について、現在確認できる主要な器種に、広口壺2種、二重口縁壺、複合口縁壺、壺、高壺、小型丸底土器がある。しかし、これら各器種が、一定量セット関係を有して安定して出土した遺跡の報告例は乏しく、普遍的な器種組成として把握できるのかどうかやや疑問が残る。その要因として、当該期の調査された良好な遺跡数の僅少さもさることながら、その成立当初においては各地域単位での特定遺跡（集団）での集中製作の可能性¹²⁾も否定できず、その出土傾向に一定の偏差が生じた可能性も想定される。器種組成の詳細については、今少し調査例の増加を待って判断したい。

また、これにおそらく在地系譜の壺・壺類や大・中・小の各鉢類等が加わって、各地域単位での器種のセット関係を構成するが、これら壺・鉢類は東四国系土器群のみに普遍的



第290図 東四国系土器群主要器種

に現れる器形ではなく、形態や調整手法等に若干の地域色も認められるため、一応東四国系土器群からは除外しておく。以下、各器種の系譜関係を交えながら、形態の特徴を概説しよう。なお、壺については次項で検討を行うため、ここでは省略する。

広口壺は、頸部が外傾ないしは直立し、やや強く折り返して大きく外反して開く口縁部を有する広口壺aと、明確な頸部を有さず基部より緩やかに外反して開く広口壺bの2者がある。

広口壺aは、B類土器群以外の在地の広口壺の系譜上に位置付けられる。口縁端部形状は若干のバリエーションが認められ、時期や地域により複雑な様相を呈する。体部は、球形ないしは倒卵形を呈し、底部は丸底化する。内外面の調整手法は壺等のそれと共に通し、在地の伝統的製作手法を継承する。

広口壺bは遅くともIV期には出現するとみられるが、その系譜については明確ではない。少なくとも在地の土器に、その直接的な系譜関係を求めるることは困難である。畿内系直口壺C（寺沢1986）に類似した口頸部形態を認めるが、その系譜関係については、資料数が乏しく充分な検討を加えるまでには至っていない。体部は球形化が進展しており、内面上半部には本地域の壺・壺のそれに共通するケズリ調整後の指圧痕が明瞭に認められ、広口

壺 a 同様に伝統的成形手法に則って製作される。

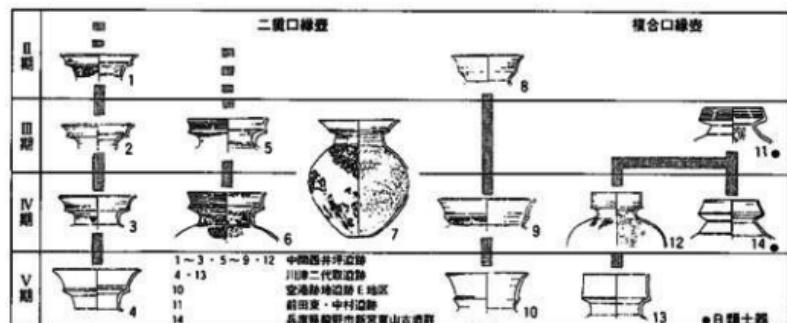
二重口縁壺は、畿内系のそれとは異なり、頸部は内傾ないしは直立して立ち上がり、一次口縁部への屈曲部内面は鈍く丸味を帯びる。二次口縁は直立気味に外反して開き、大きさは発達しない。一次口縁端部を強く斜下方へ摘み出す点に、特徴を認める。体部形状は、広口壺のそれと大きさは異なる。弥生終末期段階までは確実に本地域に系譜を求めることができるが、それ以前の様相については、断片的な資料しかなく明確ではない。少なくとも B 類土器群には存在しない器種であり、B 類土器以外の在地土器に系譜を求める。

複合口縁壺は、直立ないしはやや内傾する二次口縁に特徴を認める。頸部より一次口縁にかけての形態は、上記二重口縁壺のそれに類似する。頸部は、直立ないしはやや内傾して立ち上がり、強く折り返して 1 次口縁は短く開く。二次口縁は直立して長く延び、外面への装飾は乏しい。端部を主に内側に肥厚する点は、B 類複合口縁壺のそれに共通する。また、一次口縁端部を強く外方へ摘み出す手法は、上記二重口縁壺のそれと共に、B 類複合口縁壺にも同手法を認める。基本的には B 類複合口縁壺に直接的な系譜関係を有しつつ、上記二重口縁壺の影響下に成立した可能性を考えている。IV 期段階には定型化するのみられ、B 類複合口縁壺と時期的に一部併存する⁽³⁾。体部が完存する資料に乏しいが、当該期には球形化が進展しているようである。B 類土器では大型品に限定されたが、本土器群では中形品も出現する。

高坏は、小形品に限られる。内湾ないしは直線的に大きく開く坏上半部に対して、坏下半部は平板的小さなものとなる。口径に比して坏部深は深い。坏上半部内面には特徴的な放射状のミガキ調整を認める。脚部は、円柱状の細身の軸部と強く屈曲して開く小さな裾部からなる。軸部内面はケズリ調整され、外面は継ハケ調整が一般的である。坏部と脚部の接合は、いわゆる接合法による。形態のみならず、内外面の調整手法や脚部との接合など基本的な点で、畿内系の高坏 A (一瀬1989) の影響を色濃く認める。在地の高坏に直接的な系譜関係を求めるることは困難で、III~IV 期に唐突に本地域に出現し拡散する点も、他地域系土器の移入とした方が理解しやすい。本土器群の中で唯一、他地域に直接的な系譜が求められる確実な器種である。

小形丸底土器は、下川津 B 類土器を含めた本地域の小型丸底土器に直接的系譜を求める。しかし、III~IV 期段階の資料数に乏しく、その成立の経緯については必ずしも明確ではない。

以上より、複合口縁壺と小形丸底土器は B 類土器を含めた在地の土器に、広口壺 a と二



第291図 二重口縁壺・複合口縁壺の主要系譜（縮尺不同）

重口縁壺はB類土器以外の在地の土器に、高坏は畿内地域にそれぞれ直接的な系譜を求めることが明らかとなった。なお、広口壺bは畿内系の影響を認めるがなお不明な点が多く、また壺は後述するようにB類土器に主に系譜を求める。つまり、東四国系土器群はある特定地域の土器組成の単純な型式変化の上に成立した土器群（様式）ではなく、B類土器を含めた複数地域の個別器種の集合体といった感が強い。こうした点に、東四国系土器群が成立した背景の実態が、よく反映されていると考える。

3. 東四国系壺の系譜関係

東四国系土器群の評価を行うに際しては、まず個別各器種についてその系譜関係を整理し、位置付けを明確にする必要がある。しかし、筆者の力量不足から、上記したように充分な評価を行うことは未だ困難である。したがってここでは、最も主要でかつ普遍的な器種である壺について、その系譜関係を整理することから始めよう。なお、後述するように、私は東阿波型壺（この場合は近藤編年のⅢ-3期の壺形態を指す）を、東四国系壺のバリエーションの一つとして捉えている。東阿波型壺あるいは讃岐地域で出土する同種壺の従来の評価とは、この点で大きく異なる。

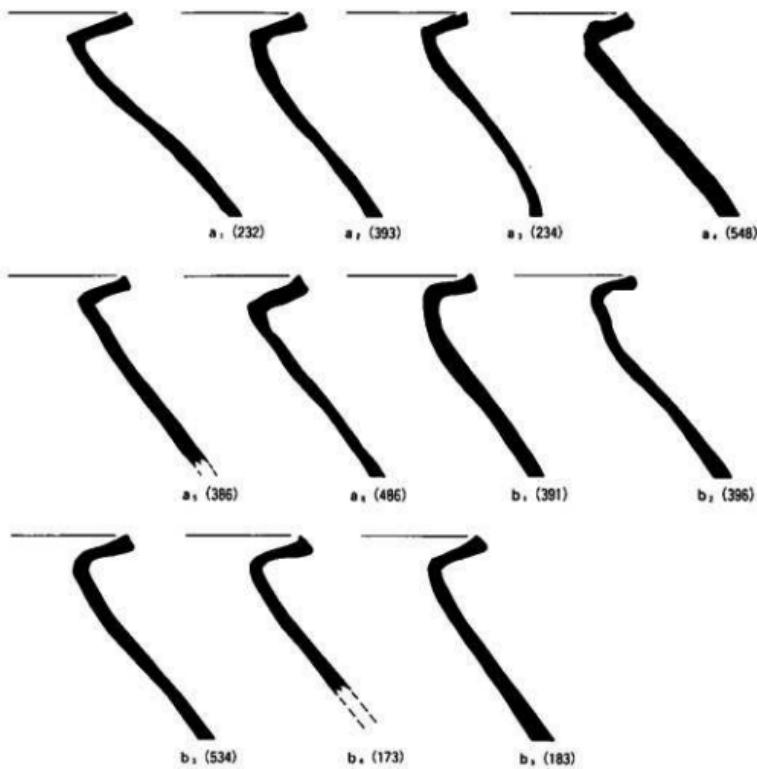
さて、東阿波型壺の定義として近藤玲氏は、「胎土に結晶片岩を含むこと」と、「壺と壺の体部の形状に特徴があり、肩のあまり張らない倒卵形を呈し、他地域に搬入されてもわりと簡単にみわけられる」点を指摘する（近藤1996）。胎土の差異は、土器製作時における粘土採取地の差異を反映し、特徴的な岩石・鉱物の含有は極めて限定された製作地の存在を示唆するものではあるが、型式学的な意味において壺形態を規定するものではない。

体部が倒卵形を呈することが主要な形態的特徴となるが、それが東阿波型壺に限られたものかどうかは不詳である。

近藤氏は、上記したことをもって氏の編年案の後期Ⅲ-2期に、東阿波型壺の成立を想定する。当該期は前掲した私案の編年案のⅡ期に概ね併行し、讃岐において定型化した壺Cは未だ成立していないと考えている。一方、当該期の東阿波型とされる壺形態は、体部形状や内外面の調整手法（例えば、およそ倒卵形とは呼べない体部形状や肩部外面の左下がりのハケ調整）等に、後述する定型化した東四国系壺と比較して強い違和感を覚える。確かに後出形態への連続性は首肯されるが、一方で直前型式の後期Ⅲ-1期への系統関係については、両者間に型式的な格差が大きく、直接的な系統関係を想定することは困難であろう。したがって、Ⅲ-2期における画期は今のところ評価が困難で、讃岐地域での壺の動向を考慮するなら、Ⅲ-3期における画期こそ重視されるべきと考える。実際、近藤氏も指摘するように、「もっとも多く東阿波型土器が収出されるのは、後期Ⅲ-3期」であることは、安定した同種壺の製作が当該期に下る可能性を示すものとも受け取れる。

私は、近藤編年の後期Ⅲ-2期において、東阿波型壺と称されるある種壺形態が成立することを否定するつもりはない。私が強調したいのは、私案の時期区分のⅢ期に讃岐と阿波の一定地域における壺形態の齊一化現象である。

さて、東四国系壺の系譜関係に話を戻そう。再度繰り返しにはなるが、その型式的特徴について記しておく。法量は、内容量1升程度の小形壺と、同3升程度の中形壺と、同5升程度の大型壺の3形態に分かれる。法量による、器形や内外面の調整手法の差異は明瞭ではない。口縁部は強く折り返して外反して開く。口縁部は端部を中心にかなりのバリエーションを認める。これらは系統差よりもむしろ時期的な差異として理解されるが、異なる端部形態を有する壺が共存することもあり、厳密に時期を区分できるものでもない。頸部内面は丸くナデ付けられ、辛うじて鈍い稜を認める。体部は倒卵形を呈し、若干肩部に張りを認める。体部の成形は粘土紐巻き上げによるとみられ、稀に粘土紐の接合痕が観察される個体もある。体部外面はタタキ調整の後、丁寧な右下がりのハケ調整によってタタキ痕は消し去られる。ハケ上端は、頸部のヨコナデ調整によりナデ消される。体部内面は左上がりのケズリ調整の後、上半部は指頭圧痕やナデ調整される。頸部直下には口縁部より連続するヨコナデ調整が一般的である。内底面には、若干の指圧痕を認めるが、これは本章2節でも述べたように、外底面の調整時に付されたものと考えられる。底部は丸底。



a,~a₁: b,~b₁: 空港跡地遺跡Ⅱ
b₂: b₃: 中間西井坪遺跡Ⅱ
()内は、報告書中の遺物番号

第292図 終末期B類壺の口頸部形態分類 (1/2)

外底面にナデ調整を加えるものもあるが、一般にはハケ調整と思われる。

さて、上記した東四国系壺の系譜はどこに求められるであろうか。私は、法量差による3形態の存在や体部内外面の成形・調整手法を重視して、やはり下川津B類壺にその直接的な系譜を求めておきたい。また、最も差異の大きいと考えられてきた口頸部形態についても、第292図に示すように、終末期のある種のB類壺には、頸部内面の稜が鈍く、口縁部は外反しつつやや長く伸び、端部を内上方へ摘み上げる (b₃~b₅類) 形態が出現する。これらの形態は、それまでのB類壺の口頸部形態の基本的な形式変化の延長上に成立

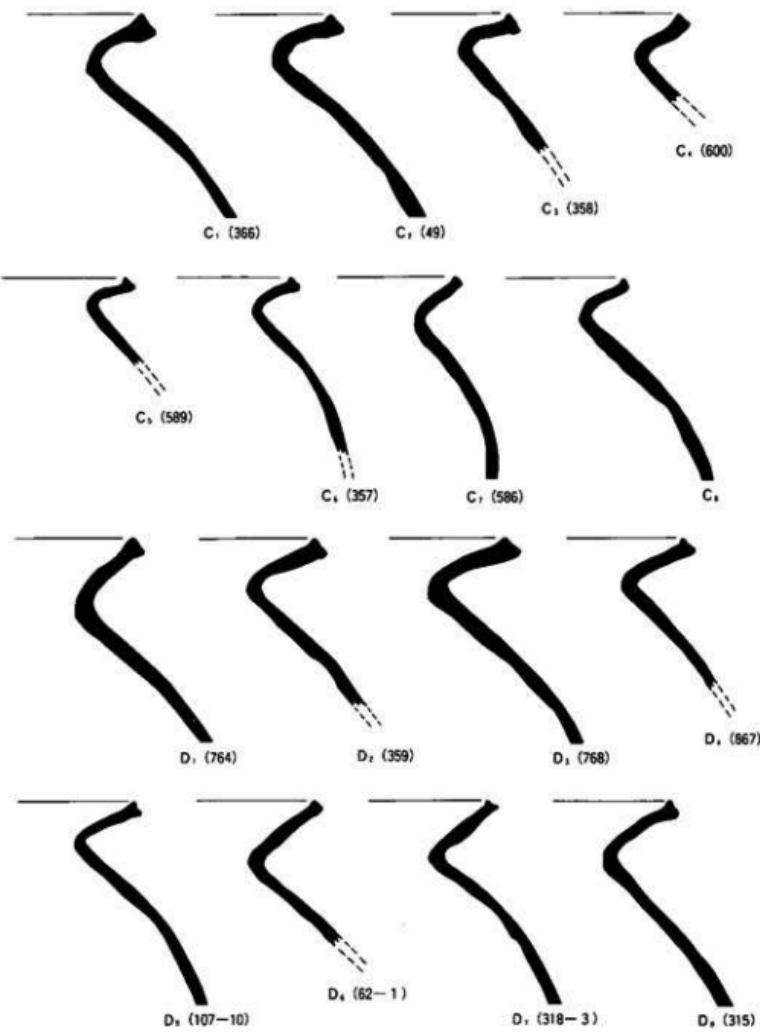
する b 1・2 類とは異なり、口縁部の延伸と端部のシャープな摘み上げに大きな特徴を有しており、おそらく口頭部の製作手法はその末期に至って大きく 2 系統に分解する可能性が高い。後者の極めて特徴的な口頭部形態は、第293図に示す東四国系壺の口頭部形態の c 2 及び d 2・3 類と明確な系譜関係が想定され、その直前に位置付けられるものと考える。

しかし、体部外面のハケ調整、特に東四国系壺肩部の右下がりのハケ調整は、B 類壺が終末に至るまで頑なにこの部分へは左下がりのハケ調整を墨守することから、直接的な系譜は想定できない。一方、黒谷川郡頭遺跡 S B 304 や S B 306（菅原ほか1989）出土資料の壺の肩部外面には、右下がりのハケ調整で、B 類壺からの系譜が想定可能な左下がりのハケ調整を消去しようとする動きが看取される。この右下がりのハケ調整の卓越化の終着に、東四国系壺が存在すると考える。後の東四国系壺成立に至る要素の一部が、弥生終末期の阿波地域において既に準備されつつあった状況が窺える。また、東四国系壺の体下半部外面には、B 類壺に通有のミガキ調整は認められない。こうした体部外面の調整手法には、阿波地域の一定程度の影響を想定しておきたい。

一方、Ⅳ期の東四国系壺における体部の球（倒卵）形化や底部丸底化、及び口縁部の伸張は、B 類壺の自立的な型式変化からはその方向性を認識し難いものがある。例えば終末期のB 類壺は、肩部の張りを消失し体部最大径の位置が下がり球形化を一定程度指向はするが、底部形状は頑なに平底を踏襲する。東四国系壺に類似した体・口縁部形状を他地域の土器に求めるなら、古式の布留系壺にその可能性を認める。東四国系壺の一部に、口縁部が内湾傾向を示すものが存在することや、布留系壺の体部外面に右下がりのハケ調整が施されていることも、布留系の影響を想定する傍証の一つとなりうるだろう。

つまり、東四国系壺は下川津 B 類壺を直接的な母体としつつも、その自立的な変化とともに、阿波や畿内地域の一定程度の影響を受けつつ成立したと理解したい。模式図的に示せば、第294図に示される関係になる。なお布留系壺の影響は、東四国系壺の成立にやや遅れる可能性を想定しているが、成立期の布留系壺との併行関係については明確さを欠くため、暫定的な考えでしかない。

上記した私案は、同種壺を東阿波型壺の模倣形態もしくはその影響下に成立した形態とする従来の認識とは大きく相違する。その根本的な要因は、上記したように東阿波型壺そのものの認識の相違と共に、阿波地域の土器製作の評価に起因する。菅原氏が説かれるように（菅原1992a），弥生時代後期後半階に、B 類壺が一定程度阿波地域の壺形態に影



C₁～C₂・D₁～D₂ 中間西井坪遺跡Ⅱ

C₁ 高松市茶臼山古墳

D₁ 福木遺跡

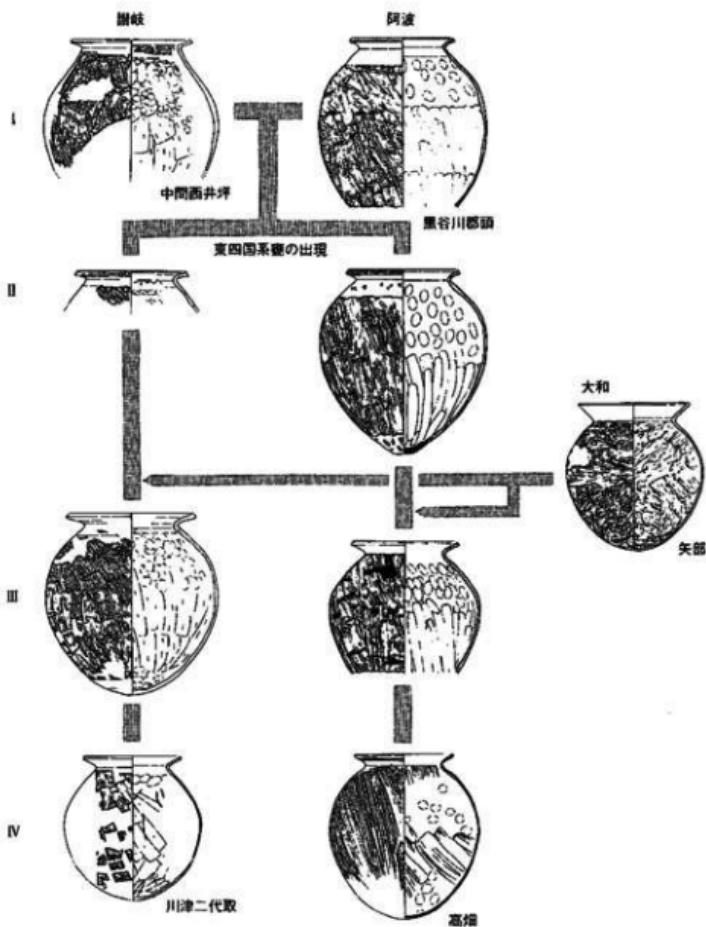
D₂ 仲村庵寺

D₁ 一の谷遺跡群

D₂ 川津二代冢遺跡

() 内は、報告書中の遺物番号

第293図 東四国系壺の口頭部形態分類 (1/2)



第294図 東四国系壺の主要系譜

響を及ぼしたことは確実であろう。それによって阿波独自の変形態が成立した可能性も認める。しかしそれは、B類壺から的一方的なものであり、阿波地域からの相互方向的な影響の痕跡は、当該期のB類壺には認められない。したがって、少なくとも同種壺の製作においては、当時の阿波地域の主体性を大きく評価することは困難と考えられ、東四国系壺成立時に一定程度の影響の可能性は認めるが、変形態そのものの変革を促すような、その

波及効果を阿波東部地域内部のみに期待することはできない。

現在古式の東四国系壺が出土している遺跡は、一の谷遺跡群、延命遺跡、仲村廃寺、稻木遺跡、三条番ノ原遺跡、下川津遺跡、中間西井坪遺跡、空港跡地遺跡、前田東・中村遺跡、森広遺跡がある⁴⁴⁾。丸亀平野西部、丸亀平野東部、高松平野周辺、長尾平野周辺では、同種壺の胎土は各々相違しており、各地域単位で製作された可能性が高い。確かに遺跡単位によってその出土量に明確な多寡は認められるが、各地域単位での製作の可能性を考慮すれば、同種壺は成立当初より三畳地域を除く讃岐各地域において一定程度の普遍化を達成していると考えてよいだろう。さらに、東四国系壺の分布域は、概ね前節で検討を行ったB類土器共有圏のエリアと合致しており、B類土器群から東四国系土器群への移行が、前者を否定した上に成立するのではなく、緩やかに継承しつつも、本質的な部分では大きな変革の上になされたことを推測させる。この点は、東四国系壺の成立を考える上で、非常に重要な意味を有していよう。

また菅原氏が、同種壺の製作地を吉野川下流南岸の鮎喰川流域に求める点も重要である。讃岐においては、上記のように各地域単位での製作の可能性が想定されるが、阿波においても同様に、製作地が一定程度限定される可能性が高い。しかし、その実体については未だ不明な部分が多く、讃岐地域と同列に位置付けることは困難である。阿波地域において同種壺の製作地論については、まだ議論の余地を残していると考える。

以上のように、東四国系壺の系譜関係について整理を行った。しかし、阿波東部地域の様相が今一つ不明瞭なため、讃岐地域との関係を含めて、議論を深化させることが十分ではない。今後、阿波地域の様相が明らかになれば、上記した私案の修正の余地も生じてこよう。

4. 東四国系壺成立の背景

上記したように、東四国系壺は下川津B類壺を母体としつつ、それに阿波東部地域と布留系壺の製作技術を取り込みながら成立したものと考えた。また、東四国系土器群については、阿波・讃岐地域の在地の器種の他、一部畿内地域の系統を選択的に取り込んで成立したものと考えられた。では、このような複雑な展開を経ながら成立に至った東四国系壺あるいは東四国系土器群には、どのような背景が想定されるのであろうか。

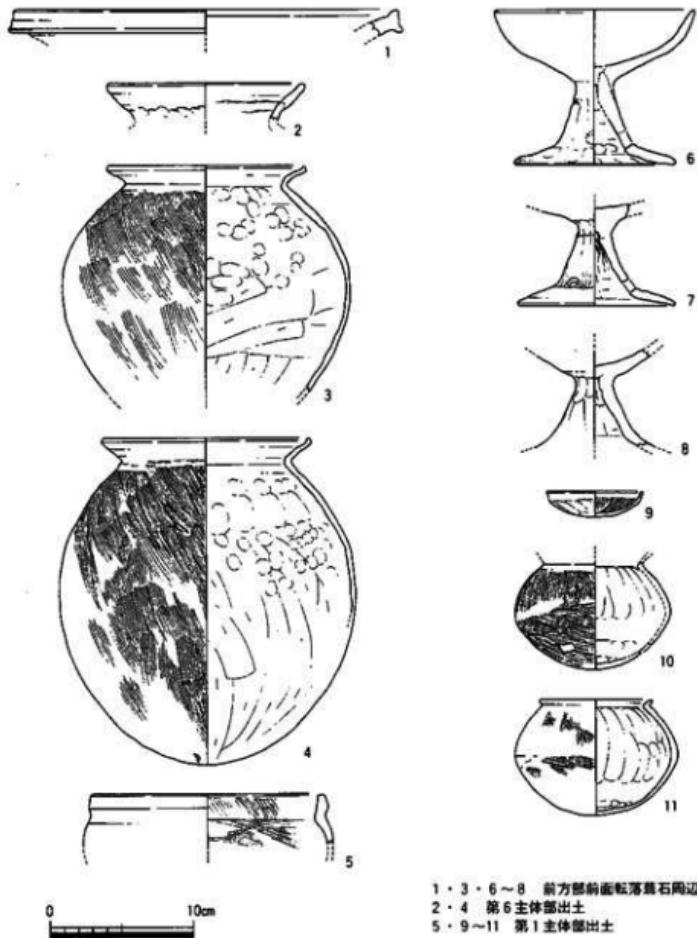
前節において、B類土器群の拡散現象の衰退の背景として、広域的な集団関係の再編・変質と、その集団を表象する必須のアイテムとしてB類土器をシンボル化することの限界

性に、その直接的要因を求め、さらにB類土器様式に代わる新たな土器様式の創出が必要とされたことを想定した。つまり、東四国系土器群がまさにそうした新たな土器様式に他ならない。ここでいう大きな政治的変動とは、都出比呂志氏が説かれる前方後円墳体制（都出1991）の成立であり、古墳時代の開始を意味する。東四国系土器群の創出は、こうした集団間関係の再編に即応した動きとして理解される。

東四国系土器群では、胎土の特殊性はもちろん、製作技術上の保守性やミガキ調整の多用にみられる装飾性や技巧上の精緻さは一定程度消失し、画一化されたよりシンプルな機能性のみが追求された。これらはB類土器に代表される著しい小地域色の衰退を意味し、つまりは在地の土器様式の伝統性を突き破る胎動となって、新たな社会構造の創出へと結び付くものと考える。

その伏線は弥生後期段階に遡る。ほぼ一方的とも言えるB類土器の阿波への流入とその製作技術の伝播は、阿波・讃岐における土器様式の共通した基盤を醸成し、東四国系土器群成立への内在的な規定的要因となったものと考える。そして、こうした共通した規範の共有（それは土器様式のみならず、住居構造や墳墓祭祀にも認められる）を基礎として、弥生時代終末期における新たな政治システムの波及により、讃岐・阿波両地域の諸集団間の上部構造の再編・淘汰が推進されたと考えたい。それを、阿讃連合体と呼称する。なお、土器様式の大きな転換点を、東四国系土器群の成立に求める。つまりそこには、時間軸上で連続する単系譜的な土器型式の変化ではなく、画期となる土器製作者の強い意志を読みとることができると考えるからであり、東四国系土器群を本地域の古墳時代の土器様式として評価したい。

そして、その具体的契機となったのは、やはり弥生時代終末期前半における萩原1号墳（菅原ほか1983）の築造に象徴されると考える。積み石による墳丘の構築、後円部を丘陵下方に設定し、極めて低平な前方部形態と、後円部の造作に主眼をおいた築造規格、後円部における複数段の石積段築、墳丘主軸に斜行し東西方位を採用する埋葬施設、墳丘へのB類土器の供獻、埋葬施設における特殊な構築墓壙壁の採用など、多様な面で讃岐地域との強い親縁性（藏本1997）が認められるからである。「阿波物流拠点域への橋頭堡」（菅原1992a）となるかどうかは疑問だが、その築造に讃岐集団が大きく関与したことは疑え得ない。こうした構築技術や祭祀的演出は、画一化された祭祀専用土器の出現とその多量供獻や多重の階段状列石など、より整備された内容で讃岐中枢部で完成される。つまり、鶴尾神社4号墳の築造である



1・3・6～8 前方部前面転落蓋石周辺出土
2・4 第6主体部出土
5・9～11 第1主体部出土

第295図 高松茶臼山古墳出土土器 (1/4)

上記した前方後円墳の諸属性は、後の東部四国地域の前方後円墳にやや変質を伴いながらも継承され、本地域の前方後円墳様式において地域色を顕在化する要因となる（藏本1995）。そして、そうした前方後円墳への供獻土器として、ようやく東四国系土器群が用意されるのである。なお鶴尾神社4号墳へのB類土器諸器種の供獻は、それが未だ弥生墓的な様相を多分に残存したものであった点を象徴すると考える。

現在、東四国系土器群の前期古墳への供獻例として、奥14号墳（二重口縁壺）、丸井古墳（広口壺・甕）、稻荷山古墳（広口壺）、高松茶臼山古墳（広口壺・甕）⁽⁵⁾、姫塚古墳（広口壺）、石清尾山石舟塚古墳（広口壺）、六ツ目古墳（広口壺）、野田の院古墳（甕）⁽⁶⁾等がある。古墳によって供獻される器種にやや偏りがみられ、在地での伝統性もしくは被葬者の主体的な選択が働いたとみられる。

さて、畿内地域の弥生終末期の庄内系甕の分布に目を転じると、畿内にあっても庄内甕の分布は著しい遍在性を示し、製作域に近接する和泉・東摂・西摂東部でさえ20%前後の浸透度を示すに過ぎない（森岡1991）。庄内形甕にもB類甕同様の地域アイデンティティを強調する象徴性が付与されており、その共有には一定の制約がともなったのであろう。そうした地域的枠組みを打破する胎動として、布留系甕の創出を位置付けるのであれば、その象徴性や政治性とは比肩すべくもないが、類似した背景を宿した土器として東四国系甕を位置付けることも可能ではなかろうか。

5. 各地域の外来系土器の様相

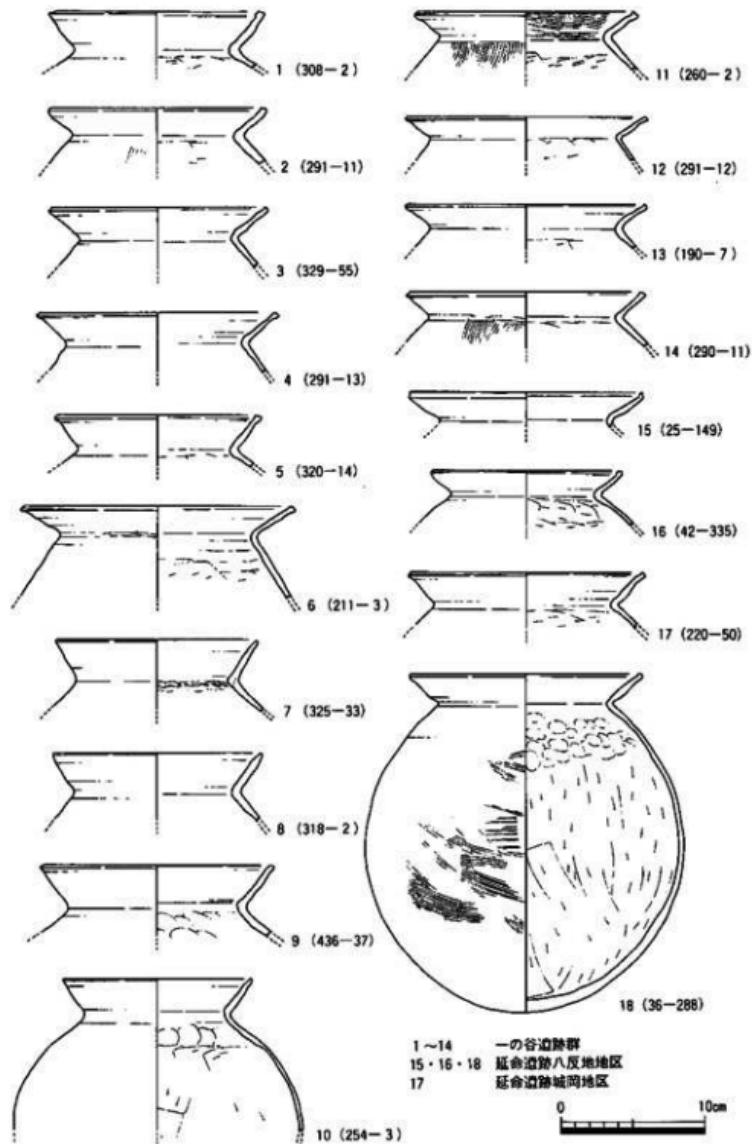
以下では、具体的に讃岐各地域において、東四国系甕を中心に当該期の土器様相、特に他地域からの搬入土器やその模倣形態に注目して若干の整理を行い、東四国系甕の在り方を検討する一助としよう。

三豊地域

延命遺跡と一の谷遺跡群が当該期のまとまった資料を提供している。いずれも、Ⅲ期あるいはそれ以前に遡る若干の夾雜物を伴うが、Ⅳ期以降の良好な資料が提示される。

東四国系甕の報告例は極めて乏しい。確実なものは、一の谷遺跡で2個体（254-2, 320-13：括弧内は報告書の遺物番号を示す、以下同じ）、延命遺跡で1個体（293）があるのみである。いずれも胎土の点から搬入品の可能性が高く、遺跡周辺で製作されたものではない。前節で検討したB類甕と同様な出土傾向を示している。

東四国系甕の僅少さに対して、古式の布留系甕は後述する他地域と比較して出土量が著しく多い。一の谷遺跡群では14個体以上（第296図）が、延命遺跡でも6個体以上（第296・297図）が報告されている。しかし、形態や調整手法の点で典型的な布留系甕と違和感が強く、古式布留系甕に特徴的な肩部施文を一切欠落し、同時に胎土の面からも、ほぼすべて在地での模倣形態であることは疑えない。また、口縁部形態はバリエーションに富み、



第296図 香川県内出土古式布留系壺 1
 (各報告より再トレース・一部改変、括弧内は報告書番号)

その立ち上がり角度も概ね90°前後に集中はするが、81~106°と誤差は大きく、矢部遺跡での計測値（寺沢1986）とズレがみられることも、模倣形態であることを傍証しよう。その他、畿内系の遺物として一の谷遺跡群では小形器台（241-36~38, 260-10等）が、延命遺跡では「茶臼山型」二重口縁壺（第298図1）、有段高杯（229-164）、小形器台（28-197, 36-295等）、小形丸底土器（28-198）が一定程度出土している。量的な多さと共に、複数器種がセット関係で出土している点を重視したい。

山陰系の土器には、一の谷遺跡群より二重口縁壺や甕、鼓形器台（第299図）が出土しており、延命遺跡では大形鉢（第299図9）もみられる。量的に多数を占めるものではないが、複数器種が出土しており注意される。なお、いずれも胎土の面から在地での模倣形態と考えられる。また、観音寺市鹿隈前ノ原7号石棺墓周辺から小型の鼓形器台1点（第299図1）が採集されている^⑦。小型の鼓形器台は山陰地域には希薄で、畿内を中心とした地域より少数出土例が知られている（中川1997）。本例も、受部外面に縦方向のミガキ調整が施され、また胎土の点からも、山陰地域以外の地域で製作された可能性が高い。

吉備系の土器は、いわゆる「ボウフラ」甕が一定量搬入されており、また若干の模倣形態も存在する。後掲する他の地域と比較すると、1遺跡あたりの搬入量はやや多く、一の谷遺跡では、遺物総量にもよるが15個体余が報告されている。

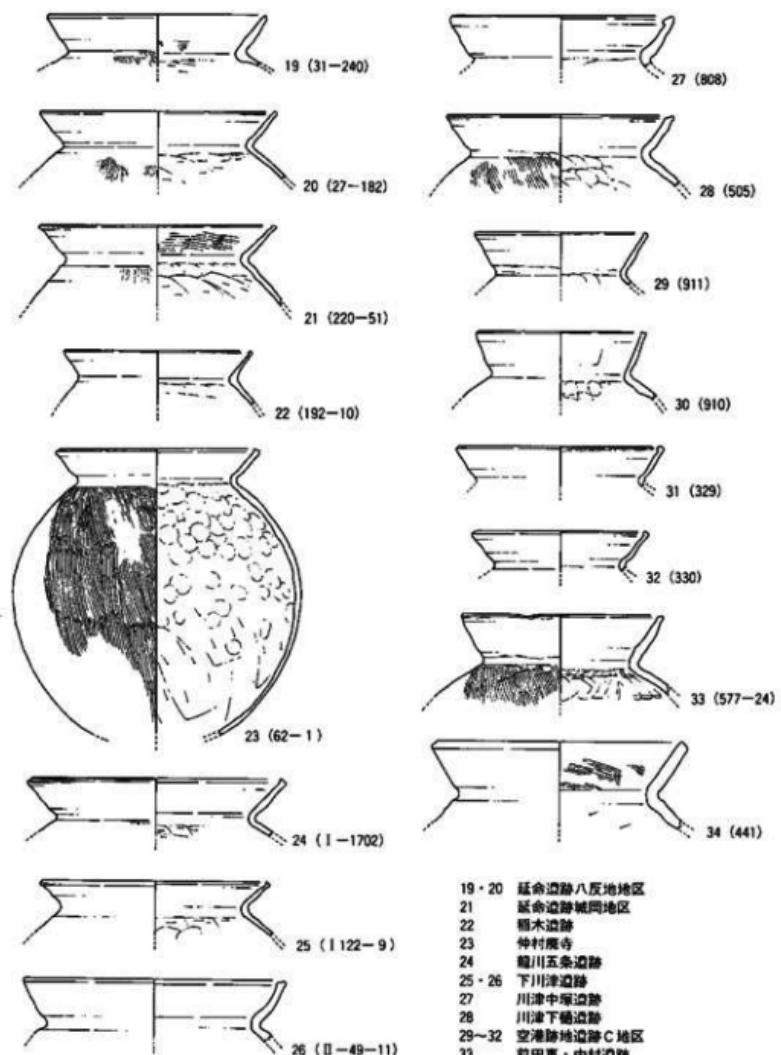
阿波系の土器は極めて乏しく、延命遺跡より片岩粒を含む二重口縁壺1点（第300図1）が搬入されているのみである。

丸亀平野西部地域

夾雜物を多く含み良好な一括資料が乏しく、詳細は不明瞭な部分が多い。断片的な資料ながら、IV期の資料が仲村廃寺SH24・龍川五条遺跡SD07、V期の資料が郡家田代遺跡SD35・龍川五条遺跡SH01等より出土している。

東四国系甕は、報告の絶対量は少ないものの、三条番ノ原遺跡（134）、稻木遺跡（107-10, 113-71）、仲村廃寺（62-1）に出土例がある。なお、稻木遺跡と仲村廃寺出土のものには、前章第2節で検討を行った黒雲母を多量に含む特殊な胎土が用いられており、本地域での製作を示唆する点で重要と考える。

一方、古式布留系甕は三豈地域と異なり極めて例外的な存在でしかない。仲村廃寺（第297図23）^⑧や、TK217型式期の須恵器をも含むため確実な資料ではないが龍川五条遺跡（第297図24）に出土例がある。胎土の点から、搬入品ではなく在地での模倣形態と考えら



- 19・20 延命道路八反地地区
 21 延命道路城岡地区
 22 鳴木道路
 23 仲村魔寺
 24 龍川五条道路
 25・26 下川津道路
 27 川津中塚道路
 28 川津下塚道路
 29～32 空港跡地道路C地区
 33 前田東・中村道路
 34 森広道路



第297図 香川県内出土古式布留系臺2
(各報告書より再トレース・一部改変、括弧内は報告書番号)

れる。その他畿内系土器には、同じく龍川五条遺跡より小形丸底土器（1697）が、道下遺跡より小形器台（35）がそれぞれ報告されている。

山陰系土器も、先の三豊地域には及ばないものの稻木遺跡（第299図10・11）に極微量が認められる。Ⅲ期を中心とした包含層資料ながら、二重口縁壺と小形壺が出土しており、特に後者は胎土こそ在地産だが、熟練した土器製作工人の移動を想起させる精巧な模倣形態である。

吉備系土器も、稻木遺跡を除けば、Ⅱ～Ⅲ期を中心に壺が1遺跡数個体程度搬入されるにとどまる。仲村庵寺（63-10）、彼ノ宗遺跡（88-6）、郡家原遺跡（44、50）、龍川五条遺跡（1696）よりそれぞれ出土している。一方稻木遺跡では、壺（123-90～92、143-28～30・33等）、高坏（115-111）、台付直口壺（121-35・125-155、252-164）と複数器種が搬入・模倣されており、また量的にもやや多量に搬入されており、他遺跡とは様相が大きく異なる。

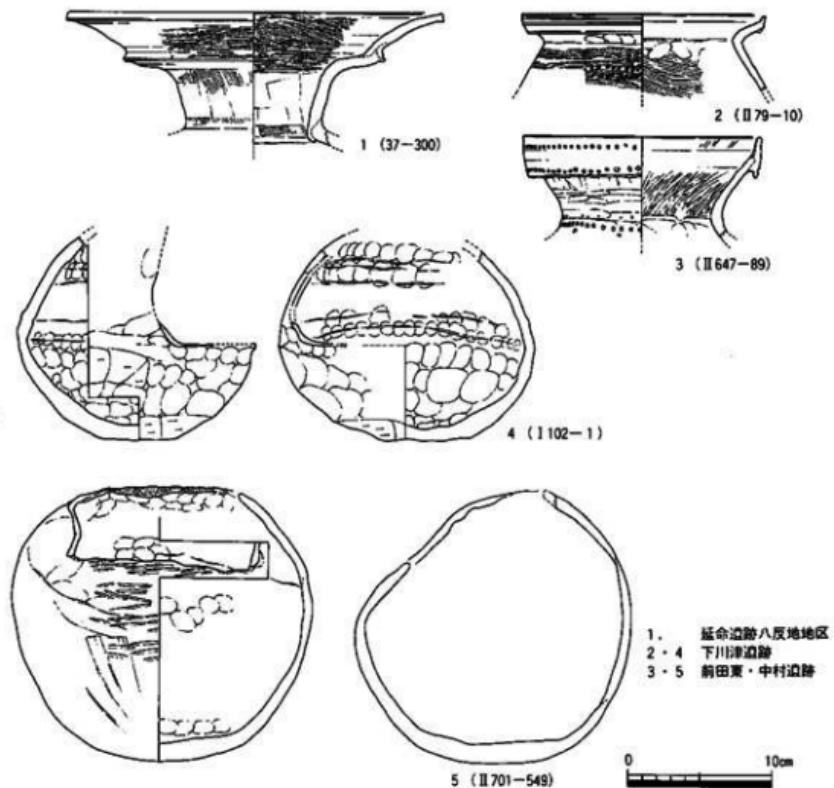
阿波系土器（第300図）もⅢ～Ⅳ期を中心に、龍川五条遺跡や道下遺跡より壺が、郡家原遺跡より広口壺がそれぞれ1個体搬入されている。阿波系土器は、量的に多数を占めるものではなく、遺物総量にもよるが、むしろ搬入をみない遺跡の方が多い。

丸亀平野東部地域

本地域も、良好な一括資料の提示は乏しい。Ⅳ期の資料が下川津遺跡SH II 32、V期の資料が川津中塚遺跡SD 07、川津下塚遺跡SD 24・川津二代取遺跡SD 05、Ⅵ期の資料が下川津遺跡SH II 02上層等より出土している。

東四国系壺は、Ⅲ～Ⅳ期の資料が下川津遺跡（I 87-25、I 119-10～13、II 48-14等）にみられ、V期の資料が川津中塚遺跡（23、24）、川津下塚遺跡（408、450等）、川津二代取遺跡（314～316等）より出土している。限られた小地域内ながら、V期段階で急速に遺跡数が増加する傾向が窺える。

本地域でも古式布留系壺は、主体的な存在ではない。Ⅳ～V期の資料が下川津遺跡、川津中塚遺跡、川津下塚遺跡（以上第297図）、川津二代取遺跡（413）よりそれぞれ最大数個体程度の出土が報告されているのみである。その他畿内系の土器には、下川津遺跡より手焙形土器（第298図4）や小形器台（I 122-12・13）が、川津中塚遺跡より小形器台（59）が出土している。また、近江系とされた下川津遺跡出土の壺（第298図2）は、口縁部下端に刺突文がなく、また胎土の面からも山城南部地域産の可能性が高い⁽⁴⁾。



第298図 香川県内出土畿内系土器
 (各報告より再トレス・一部改変。括弧内は報告書番号)

山陰系土器は、下川津遺跡より低脚杯（第299図12）の模倣形態が1点出土している。供伴遺物よりⅣ期に位置付けられる。

吉備系の土器は、下川津・川津中塚・川津下桶の各遺跡よりⅡ～Ⅳ期を中心にボウフラ型の搬入土器と模倣形態が少量出土しているが、目立った存在ではない。また、時期がやや遅れる可能性は高いが、細頸壺や台付直口壺等の搬入・模倣土器が下川津遺跡（II 48-1・2）より少量出土している。

阿波系の土器は、下川津遺跡と川津中塚遺跡より二重口縁壺が各1点（第300図3・4）搬入されているのみである。

高松平野地域

資料数は他地域と比して恵まれてはいるが、良好な一括資料に乏しい点は他地域と変わらない。IV期の資料が中間西井坪遺跡谷7中・上層、六条・上所遺跡SK01、居石遺跡SR01、空港跡地遺跡SHc04・23等に、IV～V期の資料が空港跡地遺跡SHc05・07・09、VII期の資料が中間西井坪遺跡谷3等に、VIII期の資料が空港跡地遺跡SDe137、前田東・中村遺跡C区SR02等に各々みられる。

東四国系壺は、III～IV期の資料が中間西井坪遺跡谷7中・上層より、IV期の資料が太田下・須川遺跡(210)、六条・上所遺跡(6)、前田東・中村遺跡(F202、G218等)より、IV～V期の資料が空港跡地遺跡(I512・514・741、II84・84・859等)より出土している。六条・上所遺跡出土のものは、胎土中に多量の黒雲母粒を含んでおり、前章2節で検討したように長尾平野東部域からの搬入の可能性がある。

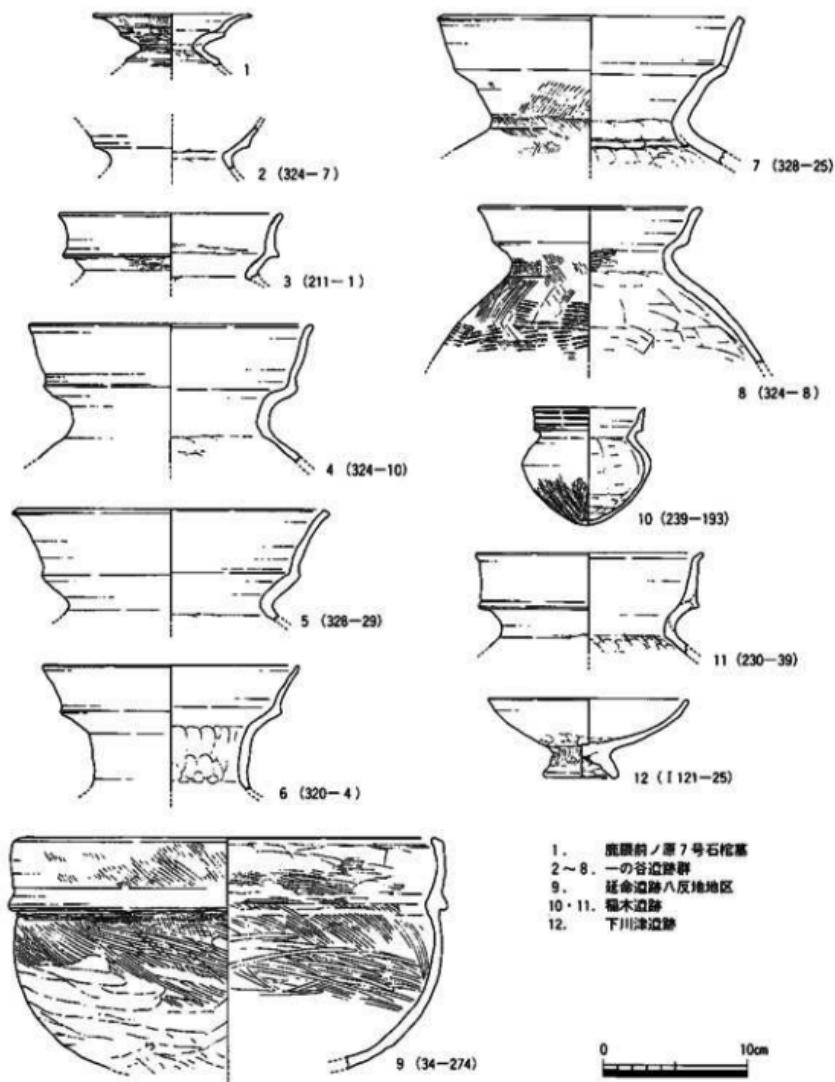
古式布留系壺は、極少量が模倣されているに過ぎない。空港跡地遺跡(第297図29～32)と前田東・中村遺跡(第297図33)が代表的なものである。いずれもIV期を中心とした時期に位置付けられよう。なお、前田東例は胎土中に黒雲母粒を多量に含んでおり、長尾平野東部域からの搬入の可能性がある。その他畿内系の土器として、中間西井坪遺跡より河内平野低地部産の壺や河内型庄内壺が、空港跡地遺跡で小形器台(I233・739)が、前田東・中村遺跡で小形器台(G526、527等)や手焙形土器(第298図5)、伊勢系の口縁部に列点文を巡らせる加飾壺(第298図3)が出土している。また、前節に記述したように、空港跡地遺跡の前方後方形周溝墓より出土した直口壺(真下ほか1993)には東海系の影響が窺える。上記した遺物は、中間例を除いて時期を特定することは困難だが、概ねIV期を中心とする時期と考えておく。

布留系壺は、VIII期の中間例で在地での導入・製作が指摘されるが、それが他地域にも普遍化できるかどうかは現状では不明。VIII期の空港跡地や前田東例では、確実に普遍化は達成されているようだ。

山陰系土器は、僅かに中間西井坪遺跡谷7より鼓形器台の模倣形態が1点出土しているのみである。

吉備系土器は、中間西井坪・空港跡地の各遺跡でボウフラ壺の搬入土器と模倣形態が極少量出土しているのみである。特に前田東・中村遺跡でボウフラ壺が1点も報告されていない点は、吉備系土器の動向を端的に示していると考える。

阿波系土器の報告例も乏しい。空港跡地遺跡(第300図5・6)で広口壺と二重口縁壺



第299図 香川県内出土山陰系土器
(各報告書より再トレース・一部改変、括弧内は報告書番号)

が各1個体報告されているのみである。

長尾平野地域

本地域では調査例が少ないためもあり、資料数は乏しい。IV期の資料が森広遺跡 S H 208や鴨部南谷遺跡 S R 8901等に、VII期の資料が鴨部南谷遺跡 S H 8801にみられる。

東四国系壺は、IV期の資料が森広遺跡（191, 206~208等）と鴨部南谷遺跡（19-21・26, 26-1・3等）より、各々数個体程度が報告されている。遺物総量と比較すれば、量的にはやや多いと言えるだろう。なお、森広遺跡より出土した同種壺は、いずれも胎土中に多量の黒雲母粒を含み、長尾平野東部地域からの搬入品である可能性が高い。

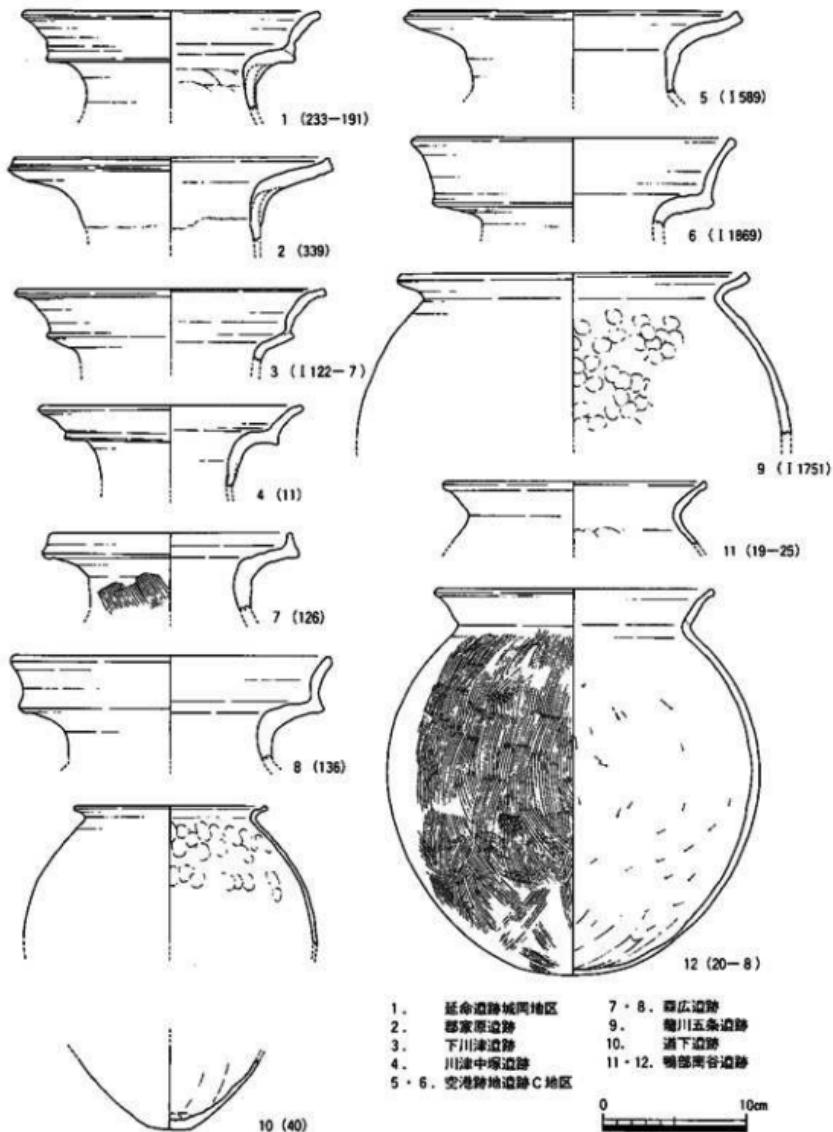
古式布留系壺の出土は極めて乏しい。確実なものとしては森広遺跡（441）より出土したものに限られる。資料数に制約が大きく、他地域と直接比較することは困難だが、今後の調査の進展によっても、こうした傾向が大きく変化することはないだろう。その他畿内系土器には、森広遺跡より小形器台（102, 364）が少量出土している。また、鴨部南谷遺跡より出土した直口壺（17-13, 23-2等）は、基本的には在地系譜の壺組成ではなく、畿内地域の影響を認める。

吉備系土器の出土も乏しく、僅かに鴨部南谷遺跡にボウフラ壺2点（19-16・17）が搬入されているのみである。その他弥生後期に遡るが、脚台（21-16）や台付壺（26-14）も吉備系の影響を認める。

阿波系土器（第300図）は、森広遺跡より広口壺と二重口縁壺が、鴨部南谷遺跡より壺等が、IV期を中心に出土している。資料数の絶対量からすれば他地域と比してやや多出傾向にあり、やはり地理的な要因によるところが大きいと思われる。

以上個別地域単位に、東四国系壺の動向と他地域系土器の搬入・模倣形態の様相について整理を行った。他地域系土器については、胎土や形態からその判断を行ったが、各遺跡の全ての土器を実見した訳ではないので、多くの遗漏があろうと思われる⁽¹⁰⁾。ここで示された様相が、どの程度実体を反映しているかどうかははだ心許ないが、形態的に明確な特徴を有するものについては、おおよそ網羅したのではないかと思われる。以下では、上記した様相のまとめを行い、若干の地域色の抽出を試みたい。

まず、東四国系壺は、量の多寡さえ問わなければほぼ各地域の遺跡より出土している。前述したように、IV期には既に各地域で普遍化を達成した可能性が高い。しかし、三豊地



第300図 香川県内出土阿波系攢入土器
(各報告書より再トレース、一部改変、括弧内は報告書番号)

域では、遺物総量に対する同種甕の占有率は著しく低く、またいすれも在地産の土器の胎土や色調とは異なることから、搬入品と考えられる。つまり、三豊地域では同種甕は、在地の土器組成の中に組み込まれておらず、搬入品として極少量が出土する可能性が高い。こうした傾向を三豊地域全域に普遍化できるかどうかは、資料数が僅少なため判断できないが、一応その可能性を認めておきたい。

こうしたⅣ期での同種甕の分布傾向は、前節で検討を行ったB類土器共有圏の広がりとほぼ合致する。そのことは、前項で検討したように、同種甕がB類甕を母体とすることからすれば至極当然のことなのだが、B類甕と東四国系甕の交替が、後者が前者を否定した上に成立するような劇的な変化ではなく、B類甕に代表される弥生時代の諸関係を多分に残しつつ穏やかに、しかし急速に移行したことを探像させる。

また、胎土の点では、丸亀平野西部地域と、高松平野東端の前田東・中村遺跡以東の各遺跡から出土した同種甕の多数には、共通して黒雲母粒が一定量含まれる特殊な素地粘土が選択されている。両地域は、直線距離でも30km以上離れており、採土地を同じくすることは考え難く、また一方の地域から他方の地域へ中間地域を経由せずに多量の土器が移動したとも考えがたいため、各々の地域で個別に土器の製作が行われた可能性が高い。そして、少なくとも成立当初にあっては、こうした胎土の特殊性から個別地域内の特定遺跡での集中的な製作と、地域内各遺跡への流通の可能性が示唆される。

こうしたⅣ期での東四国系甕の拡散傾向は、Ⅴ期の遺跡が乏しい丸亀平野西部及び長尾平野地域は不詳ながら⁽¹⁾、基本的にはⅤ期へそのまま継続されると考える。上記地域においては今後の調査の進展による資料の増加を期待したい。なお、Ⅳ期段階で同種甕以外の主要器種のいくつかを欠落する地域でも、Ⅴ期段階になると器種の装備が進展する可能性が高い。

次に、布留系甕は、三豊地域と丸亀平野西部以東の各地域で、その分布傾向に大きな相違を認める。布留系甕の出現時期は、各地域においてⅣ期段階には確実に認められ、周辺諸地域と比較して大きく立ち遅れることはない。しかし、丸亀平野以東の各地域では、布留系甕は1遺跡で多くて数個体程度が模倣されているに過ぎず、おそらくその占有率は百分比で示せる数量ではない。また、その他布留系土器群では、小形器台と小形丸底土器が極少量伴うのみである。これに対して三豊地域では布留系甕は、例えば一の谷遺跡群では報告書に掲載された甕の中での占有率は約2割に達する。吉備系甕も同様に1割程度認められ、これに山陰系甕等を合わせた非在地系統甕の占有率は3割程度に達する。その他布

留系土器群も、延命遺跡で「茶臼山型」二重口縁壺が出土しているほか、有段高杯や小形器台、小形丸底土器の出現頻度も丸龜平野以東の各地域と比較すると明確に高い傾向にある。

しかし、本来小形器台の上に載せられていたであろう小形丸底土器や小形丸底鉢は、小形器台に比較すれば、その出現頻度が乏しい点は否めない。小形器台には、主に在地系譜の小形鉢などが載せられていたのである。つまり、小形三種土器はセット関係を有して在地の土器組成の中に取り込まれたのではなく、本来在地の組成に存在していなかった小形器台のみを主に採用し、他の小形土器群は在地系譜のもので代用したと考えられる。ここには、小形三種土器が本来有するイデオロギー的側面は希薄であり、特定器形の選択的採用にとどまった可能性が高い。こうした様相は、布留系壺の多様性と共に、畿内系土器群を製作していた集団の直接的な移動を背景としているのではなく、移動地周辺域への2次の波及の可能性を端的に示しているものと考えられる。

山陰系土器も、布留系土器の動向と酷似し、IV期以降に出現する。三豊地域では、二重口縁壺、壺、鼓形器台、大型鉢といった複数器種が一定量模倣されている。しかし、丸龜平野以東の各地域では僅かに稻木遺跡と中間西井坪遺跡等で、二重口縁壺、小形壺、鼓形器台、低脚杯が極少量出土しているに過ぎず、在地の土器組成に影響を与えるようなものではない。

吉備系土器は、弥生時代後期以降量的には限られるが各遺跡で普遍的に搬入されており、その傾向はIV期以降も大きな変化は認めない。しかし、三豊地域では丸龜平野以東の各地域と比較すると、相対的に多出傾向にある点は注意しておきたい。

こうした山陰系あるいは吉備系土器の動向は、布留系壺の成立に吉備及び山陰系壺が大きく関与したこと（寺沢1986・次山1995）と無関係ではないだろう。布留系土器群の拡散には、畿内地域の集団以外にも、吉備や山陰、北部九州地域の諸集団の関与の可能性が想定されている。

一方阿波系土器は、各地域で大きな差異を認めない。III～IV期段階で、広口壺や二重口縁壺といった壺形態を中心に、若干量の搬入例を認める。やや、丸龜平野以東の地域で多出する傾向があるが、現状で量的な格差を見出すまでには至らない。おそらく弥生時代後期以降、継続して一定量が搬入されていると考えられ、その傾向はIV期以降にも大きく変化はしないものと考えられる。

以上の点から、三豊地域と丸亀平野以東の各地域間で、Ⅳ期段階において非在地系統の土器の流入の明確な相違が存在することが明らかとなった。つまり、三豊地域では、布留系壺を中心に山陰系土器群や吉備系壺の搬入・模倣が顕著であり、壺形態における外来系土器への依存は3割程度に達する可能性がある。一方丸亀平野以東の地域では、東四国系壺が一定量を占め、壺形態のみならず布留系土器群を含めた外来系土器の流入は極めて例外的な存在に限られる。

こうした両地域での土器様相の相違は、前期前方後円墳の分布の相違とも合致し興味深い。つまり、三豊地域では現状で前期前方後円墳は皆無であり、今後の調査例の増加によっても、丸亀平野以東の地域との分布の格差は到底埋まりそうにない。こうした前方後円墳分布の偏在性を評価すれば、布留系壺と前方後円墳の分布との間に明確な相関関係を認めることは可能であり、両地域の集団の政治的な枠組みが異なっていたと考えることは許されよう。しかし、布留系土器の多寡が直接的に「初期ヤマト政権中枢との政治的関係性」(寺沢1987)と相關するかどうかは疑問が残る。例えば、三豊地域唯一の前期古墳である鹿隈鐘子塚古墳では、埋葬施設に北部九州色の強い堅穴石棺が採用されており、布留系や山陰系土器群の流入が、北部九州ないしは西部瀬戸内を媒介としたものであった可能性も考えられる。三豊地域での布留系壺の評価については、隣接する伊予東部地域や備後地域との関係も考慮せねばならず、いずれ機会を改めて言及することとしよう。

さて、一方で東四国系壺を共有した集団は、畿内や吉備、三豊地域を含めた西部瀬戸内地域といった周辺諸地域に対抗する必要上、極めて強固な連帯性が要求されたと想像される。繰り返し述べてきたように、そのことが東四国系土器群といった独自の土器様式を創出し、地域色の豊かな前方後円墳を創出した背景となったと理解される。そうした諸点に、自己のアイデンティティーの表出を求めたのであろう。本地域に特徴的な積石塚古墳に、未だに三角縁神獣鏡が一面も出土していない点も、畿内地域との関係性をネガティブに示していると考える。

6. 東四国系土器群の終焉

上記したように、讃岐と阿波の中核域の強固な連帯性を象徴する土器群として成立した東四国系土器群であったが、意外にその終焉は迅速である。

少なくともⅦ期段階には、讃岐中核域の一角（中間西井坪遺跡谷3等）に、布留系土器群と山陰系土器群で装備された畿内系土器製作集団が出現している。極めて整ったセット

関係を有することからすれば、当該遺跡での状況は畿内地域からの一定数の人間の直接的な移住を背景とする可能性が高い。中間遺跡での様相の普遍化については、当該期の遺跡数が限られるため不詳である。さらに当該遺跡が、埴輪や土製棺の製作遺跡である特殊性を考慮すれば、布留系土器の普遍化が東四国系土器の共有集団内部で大きく進展していたことを証するものとはなりえないだろう。

こうした状況もⅦ期段階には、鴨部南谷遺跡、空港跡地遺跡、下川津遺跡、郡家田代遺跡、龍川五条遺跡等で布留系土器群の出土が確認され、なお遺跡数が乏しい点は否めないが、讃岐諸地域で普遍化を達成するとみてよい。当該段階には東四国系土器群は、その残滓さえも認めず払拭される。

ⅧからⅨ期段階にかけての布留系土器群の拡散と呼応して、前方後円墳の築造は急速に衰退する。第301図に示したように、讃岐諸地域における前方後円墳の築造は、Ⅳ～Ⅵ期をピークとして急速にその築造数を減少させる。また、阿波・讃岐地域に多い墳長20m前後の小規模な前方後円墳は、Ⅵ期以降にはほぼその築造が終焉する可能性が高い。つまり、Ⅵ期を境に前方後円墳の築造は、何らかの規制を受け数系列程度に淘汰・再編される傾向があり、Ⅶ～Ⅸ期にかけてそうした傾向は徐々に強まる様相がみられる。地域によって若干の遅速はあるが、Ⅷ期段階で確実に前方後円墳を築造しているのは、津田湾周辺（けほ

	大内	寒川	三木山田	香川	阿野	轟多	那珂多度
II～III期				■20			
IV期		■2 ■3 ■4 ■5		■21	■32 ■33 ■38 ■39	■48	
V期		■6 ■7 ■8 ■9	■15 ■16 ■17	■22 ■23 ■24	■34 ■35 ■36	■40 ■41 ■42 ■43	■49 ■50 ■51 ■52
VI期		■1	■10 ■11	■18	■25 ■26 ■27	■37	■44 ■45 ■53 ■54 ■55 ■56
VII期			■12	■19	■28 ■29		■46 ■57
VIII期			■13		■30		■58
IX期		■14		■31		■47 ■59	

1. 大日山古墳
2. 鶴ノ部山古墳
3. 奥 3号墳
4. 丸井古墳
5. 福荷山古墳
6. 畠14号墳
7. 古桂古墳
8. 川東古墳
9. 中代古墳
10. 赤山古墳
11. 岩13号墳
12. 岩崎山 4号墳
13. けば山古墳
14. 富田茶臼山古墳
15. 高松茶臼山古墳
16. 蘆山 1号墳
17. 池戸八幡神社 1号墳
18. 長崎鼻古墳
19. 三谷石舟古墳
20. 鶴尾神社 4号墳
21. 銀鉢谷 9号墳
22. 銀塚古墳
23. 姫塚古墳
24. 北大寺古墳
25. 銀塚古墳
26. 飛萬山飯塚古墳
27. 舟岡山古墳
28. 横立山蛭塚古墳
29. 石船塚古墳
30. 今岡古墳
31. がめ塚古墳
32. ハカリゴロ古墳
33. 雄山 2号墳
34. 六ツ目古墳
35. 白砂古墳
36. 鶴ヶ谷古墳
37. タイハイ山古墳
38. 横山塚 1号墳
39. 石塚山 3号墳
40. 横山塚 2号墳
41. 鹿川山 2号墳
42. 古河神社古墳
43. 石塚山 1号墳
44. 伏天山古墳
45. 脇の丸 1号墳
46. 脇の丸 2号墳
47. 尾田茶臼山古墳
48. 大麻山椎塚古墳
49. 大麻山徑塚古墳
50. 野田院古墳
51. 鶴ヶ路 4号墳
52. 丸山 2号墳
53. 大庭塚古墳
54. 鶴ヶ路 2号墳
55. 丸山 1号墳
56. 麻臼山古墳
57. 御座屋山古墳
58. 北向八幡社古墳
59. 菊塚古墳

第301図 讃岐地域前方後円墳編年案

山古墳)と高松平野西部域(今岡古墳),丸龜平野西部域(菊塚古墳?)等の数系列に限定される可能性が高い。そこにはなお、前方後円墳の築造に際して讃岐地域特有の前記した地域色の残存を認める系列もあるが、同時に東四国系土器群の供獻の衰退と、円筒埴輪の樹立の盛行といった畿内的な墳墓祭祀の浸透をも合わせ持つものである。

こうした布留系土器群の淘汰と、在地色の強い前方後円墳の衰退といった次元の異なる現象を、短絡的に関連付けて扱うことは慎まなければならないだろう。しかし、前節以降の検討を踏まえ、また極めて相関的な関係にあるこうした現象を、ここでは畿内系勢力の伸張といった視点で捉えようと考える。土器様式と前方後円墳の諸属性に顕現された、阿波・讃岐地域の自立性は、Ⅶ～Ⅷ期段階にかけて大きくその方向性が修正されたと考える。しかし、その具体相については、四国系土器群の衰退期であるV～VI期の遺跡数が乏しく、ここではその詳細を語ることはできない。

一方、布留系土器群は、極微量ではあるが東四国系土器群分布圏内においても、Ⅳ期以降には確実に搬入もしくは在地で模倣形態が製作されている。また、東四国系壺の成立に、古式布留系壺の影響が認められる可能性について上記した。阿波・讃岐における自立性は、必ずしも畿内や周辺諸地域との関係性を否定した上に成立したものではない。畿内地域からのインパクトは、断続的ながらも地域内の諸古墳において認められ、在地の古墳の展開に多様性をもたらす要因となっている。例えば阿波中枢域では、おそらくⅢ期に位置付けられる奥谷2号墳で、積石塚が採用され讃岐地域との親縁性がみられるが、続くⅣ期の段階では、複数面の三角縁神獣鏡を副葬し、畿内的な立地や墳形を呈する宮谷古墳が突如として築造される。しかし、宮谷古墳にみられた強烈な畿内的様相も、後出する古墳には継承されず、極めて一過性の高いもので終始する。讃岐中枢域での、空港跡地遺跡S T05の前方後方形墳墓の築造(真下ほか1993)も同様な現象の一例として理解すべきであろう。

また、讃岐津田湾周辺では、Ⅳ期段階に積石塚古墳の鶴の部山古墳が築造されるが、讃岐諸地域に先駆けてⅦ期段階の岩崎山4号墳で畿内色が強い前方後円墳が築造され、その様相はⅦ期のけは山古墳へと継承される(大久保・藏本1997)。

東四国系土器群と積石塚古墳という、強烈な個性をもって周辺諸地域に対峙した阿譙連合体も、極めて短期間の内にその自立性を喪失し、徐々に畿内地域との融合化の途を摸索し始める。その大きな画期をⅦ期における、中間西井坪遺跡への布留系土器群の流入に求めたい。

以上、阿波・讃岐地域の古墳出現期の様相について、土器様相と古墳の動向を中心に極めて荒削りな考察を試みてきた。また、検討した論旨は多岐に亘り、まとまりの乏しい内容となってしまった。論じ残した点も少なくない。いずれ機会を改めて、再度上記した課題に取り組みたいと考える。

註1. 木下氏は、本稿で東四国系土器群と捉える土器群のうちの一部について、「下川津C類土器」という名称を提唱されている。「下川津C類土器」は、多量の火山ガラスを含有する特殊な素地粘土が選択され、また「東阿波型土器」として報告される土器群の中の「壺」と「甕」と酷似する形態・製作技法をもつものを含む反面、「東阿波型土器」には認められないタイプの「高杯」・「小型丸底甕」が含まれていることが指摘でき、形態や技法のうえでも一群の土器として把握することができる」ことを、主な指標とする。しかしながら、これら土器群の系譜関係については明言されておらず、「形態や技法のうえでも一群の土器として把握」できることの説明も充分なされていとは言い切れない。以上の理由から、私は「下川津C類土器」という呼称の使用を控える。

また、菅原氏は下川津B類土器と東阿波型土器群を総称して「東四国土器群」という呼称を使用している（菅原1992b）。「四国系」あるいは「東部四国系」という名称は、菅原氏に限らず散見されるようになってきた。しかし、下川津B類土器についていえば、前節でも検討したように、同種土器はあくまで高松平野中枢部でのみ製作された土器群であり、讃岐周辺諸地域には搬入品として出土するものである。東阿波型土器については詳細を知り得ないが、上記の点から「東四国土器群」という名称は用語として誤解を生じかねない難点がある。私の称する「東四国系土器群」は、詳細は本文に掲られたいが、これらとはややニュアンスを異なる土器群を指すことを強調しておきたい。

註2. 例えば、大東川下流域の川津中塚・川津下樋・川津二代取の各遺跡から出土した同種土器群には、胎土中に火山ガラスが多量に混入した特徴的な素地粘土が採用されている。また、同様に森広遺跡や稻木遺跡・仲村廐寺遺跡出土例では、黒雲母の多量混入が確認された。こうした特殊な胎土の採用は、粘土採取地の限定と共に特定集団での專業的な製作の可能性を推測させる。

註3. IV期のB類複合口縁甕として、龍野市新宮東山古墳群3号棺（岸本1996）と神戸市玉津田中遺跡S D54001（多賀ほか1995）を挙げておく。

註4. 近年、県東部に位置する大川郡大内町住屋遺跡より、IV期に位置付けられる東四国系壺の出土が確認された。調査を担当された小野秀幸氏のご教示による。

註5.瀬戸内海歴史民俗資料館所蔵。今回、同館のご厚意により、資料を観察する機会を与えて頂き、また本書への掲載をご許可頂いた。資料調査時には、様々なご助力・ご教示を頂いた松本豊胤氏、真鍋篤行氏に記して感謝いたします。

なお、同古墳出土の東四国系壺（第295図3・4）については、川津二代取遺跡S D05や大阪府萱振遺跡S E03（国版第36-42、大野1983）出土資料との比較から、布留1式併行期に位置付けられるものと考える。

註6. 1997年の善通寺市教育委員会の調査によって、V期に位置付けられる東四国系壺の出土が確認された。同市教育委員会笹川龍一氏には、調査中にも関わらず資料を実見する機会を与えて頂

いた。記して感謝いたします。

註7. 観音寺市教育委員会所蔵。同教育委員会のご厚意により、今回資料を観察する機会を与えて頂いた。資料調査時には、久保田昇三氏より様々にご助力・ご教示を得た。記して感謝いたします。

註8. 善通寺市教育委員会所蔵。仲村庵寺SH24出土の布留系壺は、筆者に実見によれば、口縁部の形状（法量・端部形状等）や体部の調整手法、胎土（布留系壺には黒雲母の含有は乏しく、東四国系壺には多量の黒雲母が含有される）等あらゆる点において微妙に異なる。接合関係にはない別個体の土器が図面上で接合復元され、図示されている。その別個体とは、東四国系壺である。図示した布留系壺は、今回実測作業を行い掲載したものである。

今回、同教育委員会のご厚意により、資料を観察する機会を与えていただき、また本書への掲載をご許可頂いた。資料調査時には、並川龍一氏より様々にご助力・ご教示を得た。記して感謝いたします。

註9. 森岡秀人氏のご教示による。

註10. 例えば、太田下・須川遺跡では、弥生時代後期中葉を前後する時期の4点の阿波系搬入土器が報告されている（奥田1995）。しかし、土器の形態は、当該期の本地域の土器と明確な差異に乏しく、形態からこれらの土器を阿波系として抽出することは至難である。近隣地域の搬入土器について確度の高い議論をしようすれば、このように全ての土器について詳細な胎土の観察を行う必要がある。今回の検討ではそこまでの作業は行えておらず、阿波系土器の搬入量については今後の検討によって増加する可能性は高い。

註11. 丸龜平野西部野田の院古墳より、V期に位置付けられる東四国系壺の出土が知られるのみ。集落の様相については、不詳な点が多い。

引用・参考文献

- 赤塚次郎 1990「愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第10集 遠間遺跡」 財團法人愛知県埋蔵文化財センター
- 赤塚次郎 1994「3・4世紀の東海地域」「東日本の古墳の出現」 山川出版社
- 秋山忠ほか 1980「仁尾町・南草木遺跡調査報告」 香川県教育委員会
- 池橋幹 1985「弥生後期土器の地域性とその背景 一中国地方東部を中心にー」「考古学研究 第32卷第3号」
- 石井健一 1998「三木町内遺跡発掘調査報告書 西浦谷遺跡」 三木町教育委員会
- 石野博信 1988「古墳前期の薄壺と厚壺」「網干善教先生華甲記念 考古学論集」
- 一瀬和夫 1989「久宝寺・加美遺跡の古式土師器」「大阪文化財論集 一財團法人大阪文化財センター設立15周年記念論集ー」
- 一山典 1983「徳島県奥谷2号墳」「日本考古学年報33 1980年版」 日本考古学協会
- 井上裕弘 1991「北部九州における古墳出現期前後の土器群とその背景」「古文化論叢児嶋隆人先生喜寿記念論集」
- 岩崎直也 1984「四国系土器群の撤出」「大阪文化誌 第17号」
- 宇垣匡雅 1995「大和王権と吉備地域」「古代王権と交流6 濑戸内海地域における交流の展開」 名著出版
- 大久保徹也 1990「下川津遺跡における弥生時代後期から古墳時代前半の土器について」「瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅳ 下川津遺跡」 香川県教育委員会他
- 大久保徹也 1993「讃岐地方における古墳時代初期の土器について 一下川津VI式以降の様相ー」「財團法人香川県埋蔵文化財調査センター研究紀要Ⅰ」
- 大久保徹也 1995「上天神遺跡の「在地」土器と「搬入」土器」「高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第6冊 上天神遺跡」 香川県教育委員会他
- 大久保徹也ほか 1995「高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第6冊 上天神遺跡」 香川県教育委員会他
- 大久保徹也 1996a「四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第25冊 中間西井坪遺跡Ⅰ」 香川県教育委員会他
- 大久保徹也 1996b「各地域における弥生時代後期土器の様相 一讃岐ー」「古代学協会四国支部第10回松山大会資料 弥生後期の瀬戸内海」
- 大久保徹也 1997「」「第16回庄内式土器研究会 「庄内併行期の古墳出土土器」発表資料」
- 大久保徹也・藏本晋司 1997「香川県における前方後円墳の再検討作業」「中四研だより 第6号」 中国四国前方後円墳研究会
- 大野薫 1983「萱振遺跡発掘調査概要・I」 大阪府教育委員会
- 奥田尚 1995「太田下・須川遺跡の土器の砂礫」「高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第4冊」 香川県教育委員会他
- 片桐節子 1992「平岡遺跡群発掘調査報告書」 大野原町教育委員会
- 片桐孝浩 1990「四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第8冊 延命遺跡」 香川県教育委員会他
- 片桐孝浩 1992「四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第11冊 三条番ノ原遺跡」 香川県教育委員会他
- 片桐孝浩ほか 1994「県道高松志度線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報 小山・南谷

- 遺跡 平成5年度』 香川県教育委員会他
- 片桐孝浩 1996『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第21冊 川津下越遺跡』
香川県教育委員会他
- 片桐孝浩ほか 1997『中小河川大東川改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 川津一ノ又遺跡』
香川県教育委員会他
- 亀田隆之 1973『八世紀における律令国家の用水支配』『日本古代用水史の研究』 吉川弘文館
観音寺市誌増補改訂版編集委員会編 1985『観音寺市誌(通史編)』
- 岸本道昭 1996『龍野市文化財調査報告16 新宮東山古墳群』 龍野市教育委員会
- 北山健一郎ほか 1995『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第4冊 太田下・須川遺跡』
香川県教育委員会他
- 北山健一郎ほか 1998『高松港頭土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報平成9年度
西打遺跡』 香川県教育委員会他
- 木下晴一 1995『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第16冊 川津二代取遺跡』
香川県教育委員会他
- 藏本晋司 1995『香川県高松市三谷石舟古墳の再検討』『香川考古』第4号
- 藏本晋司 1997『空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第2冊 空港跡地遺跡Ⅱ』
香川県教育委員会他
- 國木健司 1990『鶴部南谷遺跡発掘調査概報』 志度町教育委員会
- 國木健司 1993『石塚山古墳群』 綾歌町教育委員会
- 近藤玲 1996『各地域における弥生時代後期土器の様相 一阿波一』『古代学協会四国支部第10回
松山大会資料 弥生後期の瀬戸内海』
- 笹川龍一 1985『彼ノ宗遺跡』 善通寺市教育委員会
- 笹川龍一 1988『九頭神遺跡発掘調査報告書』 九頭神遺跡発掘調査団他
- 笹川龍一 1989『仲村廃寺』 善通寺市教育委員会
- 笹川龍一 1993『水井遺跡発掘調査報告書』 善通寺市埋蔵文化財発掘調査団
- 笹川龍一 1995『九頭神遺跡・宮が尾古墳群接地調査報告書』 善通寺市教育委員会
- 佐々木憲一 1995『地域間交流の考古学—最近の歴史における動向—』『展望考古学』
- 佐々木憲一 1997『日本考古学における中位理論 一弥生・古墳時代の地域間交流論を素材にし
て—』『古代』第104号
- 佐藤竜馬ほか 1996『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第24冊 郡家田代遺跡』
香川県教育委員会他
- 芝香寿人ほか 1997『御津町埋蔵文化財分布調査報告書』 御津町教育委員会
- 菅原康夫ほか 1983『萩原墳墓群 一鳴門市大麻町所在一』 德島県教育委員会
- 菅原康夫 1987『黒谷川郡頭遺跡Ⅰ』 德島県教育委員会
- 菅原康夫ほか 1989『黒谷川郡頭遺跡Ⅲ・Ⅳ』 德島県教育委員会
- 菅原康夫 1992a『阿波弥生時代終末期社会の特質』『同志社大学考古学シリーズV 考古学と
生活文化』
- 菅原康夫 1992b『保持具から型へ』『真朱 創刊号』 財團法人徳島県埋蔵文化財センター
- 善通寺市ほか 1986『県道西白方善通寺線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 昭和61年
度』
- 高橋謙 1988『弥生時代終末期の土器編年』『研究報告9』 岡山県立博物館
- 多賀茂治ほか 1995『兵庫県文化財調査報告第135-3冊 玉津田中遺跡 第3分冊』 兵庫県教育

委員会

- 田崎博之 1995 「瀬戸内における弥生時代社会と交流 一土器と鏡を中心として」 『古代王権と交流6 瀬戸内海地域における交流の展開』 名著出版
- 次山淳 1995 「波状文と列点文 一布留形甕にみられる肩部文様の分類・系譜・分布」 『奈良国立文化財研究所創立40周年記念論文集 文化財論叢II』
- 都出比呂志 1989 「地域圈と交易圏」 『日本農耕社会の成立過程』 岩波書店
- 都出比呂志 1991 「日本古代の国家形成論序説—前方後円墳体制の提唱」 『日本史研究』 343号
- 寺沢薰 1986 「畿内古式土器の編年と二、三の問題」 『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第49冊 矢部遺跡』 奈良県教育委員会
- 寺沢薰 1987 「布留0式土器拡散論」 『同志社大学考古学シリーズIII 考古学と地域文化』
- 中川寧 1997 「いわゆる「山陰系土器」についての若干の考察 一古墳時代初頭に見られる小型の鼓形器台を中心にして」 『立命館大学考古学論集I』
- 西岡達哉ほか 1989 「四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第6冊 稲木遺跡」 香川県教育委員会他
- 西岡達哉ほか 1990 「四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第7冊 一の谷遺跡群」 香川県教育委員会他
- 西岡達哉ほか 1994 「四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第14冊 川津中塚遺跡」 香川県教育委員会他
- 西岡達哉ほか 1995 「四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第15冊 龍川四条遺跡」 香川県教育委員会他
- 西岡達哉 1996 「空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第1冊 空港跡地遺跡」 香川県教育委員会他
- 西村尋文ほか 1997 「県道関係埋蔵文化財発掘調査概報平成8年度 原中村遺跡」 香川県教育委員会他
- 福宜田佳男 1998 「石器から鉄器へ」 『古代国家はこうして生まれた』 角川書店
- 広瀬和雄 1991 「前方後円墳の畿内編年」 『前方後円墳集成 中国・四国編』 山川出版社
- 廣瀬常雄 1994 「四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第10冊 金藏寺下所遺跡・西殿碑遺跡」 香川県教育委員会他
- 廣瀬常雄 1995 「四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第17冊 郡家大林上遺跡」 香川県教育委員会他
- 藤好史郎ほか 1990 「瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅷ 下川津遺跡」 香川県教育委員会他
- 古野徳久 1998 「四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第30冊 川津一ノ又遺跡II」 香川県教育委員会他
- 真下拓也ほか 1993 「空港跡地遺跡発掘調査概報 平成4年度」 香川県教育委員会他
- 松下勝 1990 「播磨のなかの四国系土器」 『今里幾次先生古稀記念 播磨考古学論叢』
- 宮崎哲治 1991 「県道多度津九鬼線緊急地方道路整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 道下遺跡」 香川県教育委員会他
- 宮崎哲治 1993 「高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第2冊 林・坊城遺跡」 香川県教育委員会他
- 宮崎哲治 1996 「四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第23冊 龍川五条遺跡I」 香川県教育委員会他

- 森格也ほか 1995 「高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第3冊 前田東・中村遺跡」 香川県教育委員会他
- 森岡秀人 1991 「土師器の移動」「古墳時代の研究6 土師器と須恵器」 雄山閣出版株式会社
- 森岡秀人 1998 「年代論と邪馬台国論争」「古代史の論点4 権力と国家と戦争」 小学館
- 森下英治 1994 「旧練兵場遺跡 一平成5年度国立善通寺病院内発掘調査報告一」 香川県教育委員会
- 森下英治 1995 「旧練兵場遺跡II 一平成6年度四国農業試験場内発掘調査報告一」 香川県教育委員会
- 森下英治 1997 a 「四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第27冊 三条黒島遺跡・川西北七条I遺跡」 香川県教育委員会他
- 森下英治 1997 b 「丸龟平野条里型地割の考古学的検討」「財団法人香川県埋蔵文化財調査センター研究紀要V」
- 森下友子 1995 「胎土1類土器について」「高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第4冊 太田下・須川遺跡」 香川県教育委員会他
- 山下平重ほか 1993 「四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第13冊 郡家原遺跡」 香川県教育委員会他
- 山下平重 1997 「四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第26冊 川津一ノ又遺跡I」 香川県教育委員会他
- 山本一伸ほか 1997 「大型店舗建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 森広遺跡」 寒川町教育委員会
- 山本英之ほか 1997 「都市計画道路福岡多肥上町線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 日暮・松林遺跡」 高松市教育委員会他
- 山元敏裕ほか 1994 a 「一般国道11号高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第二冊 浴・松ノ木遺跡」 高松市教育委員会他
- 山元敏裕ほか 1994 b 「一般国道11号高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第三冊 浴・長池II遺跡」 高松市教育委員会他
- 山元敏裕ほか 1995 a 「一般国道11号高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第四冊 井手東I遺跡」 高松市教育委員会他
- 山元敏裕ほか 1995 b 「一般国道11号高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第六冊 蛙股遺跡」 高松市教育委員会他
- 山元敏裕ほか 1995 c 「一般国道11号高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第七冊 居石遺跡」 高松市教育委員会他
- 米田敏幸 1985 「中河内の庄内式と搬入土器について」「考古学論集」 考古学を学ぶ会

四国横断自動車道建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告
第三十二冊

中間西井坪遺跡Ⅱ

本文編

平成11年3月19日発行

編集 財団法人香川県埋蔵文化財調査センター

香川県坂出市府中町字南谷5001-4

電話 0877-48-2191（代表）

発行 香川県教育委員会

財団法人香川県埋蔵文化財調査センター

日本道路公団

印刷 富士印刷株式会社



四国横断自動車道建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告

第三十二冊

中間西井坪遺跡Ⅱ
観察表・写真図版編

1999.3

香川県教育委員会
助成
香川県埋蔵文化財調査センター
日本道路公団

四国横断自動車道建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告

第三十二冊

中間西井坪遺跡Ⅱ
観察表・写真図版編

1999.3

香川県教育委員会
助成
香川県埋蔵文化財調査センター
日本道路公団

表目次

土器・陶磁器觀察表	3	平瓦觀察表	84
軒瓦觀察表	83	石器・石製品觀察表	85
軒平瓦觀察表	83	木製品觀察表	87
棟瓦觀察表	83	金屬器觀察表	87
瓦觀察表	84		

図版目次

図版 1	遺跡周辺航空写真 (上が北、国土地理院1962年撮影)	91	7 b 区全景(東→)	
図版 2	遺跡全景(東→)	92	7 a 区北壁土層断面(南→)	107
	7 a 区全景(左が北)		7 b 区北壁土層断面(南北→)	
図版 3	6 区全景(左が北)	93	7 b 区SH II 01全景(南→)	108
図版 4	8 区全景(左が北)	94	7 b 区SH II 01全景(東→)	
	9 区全景(上が北)		7 b 区SH II 01窓検出状況(南→)	109
図版 5	7 b 区全景(左が北)	95	7 b 区SH II 01窓断面(東→)	
	6 区西半全景(北東→)		7 b 区SH II 01壁溝断面(北→)	
図版 6	6 a 区SB II 03全景(南→)	96	7 b 区SH II 02全景(東→)	110
	6 b 区SB II 04全景(南→)		7 b 区SH II 02土層断面(北西→)	
図版 7	6 b 区南壁土層断面(北西→)	97	7 a 区SB II 05全景(南→)	
	6 a 区SP II 330と鏡出土状況(南→)		7 b 区SB II 15-16-17全景(東→)	111
	6 a 区SK II 01漆器椀出土状況(東→)		7 b 区SB II 20全景(東→)	
	6 a 区SK II 02集石出土状況(西→)		7 b 区SB II 26全景(南→)	
	6 a 区SK II 02土層断面(南→)		7 b 区SB II 27全景(南→)	112
図版 8	6 a 区SK II 03上面集石出土状況(北→)	98	7 b 区SB II 28全景(西→)	
	6 a 区SK II 03全景(北→)		7 b 区SB II 31全景(南→)	
	6 a 区SK II 03桶出土状況(西→)		7 b 区SK II 26土層断面(南→)	113
図版 9	6 a 区SK II 05全景(東→)	99	7 b 区SK II 27土層断面(南→)	
	6 a 区SK II 05遺物出土状況(東→)		7 b 区SK II 28土層断面(南→)	
	6 a 区SK II 05遺物出土状況(東→)		7 b 区SK II 29土層断面(南→)	
	6 a 区SK II 05土層断面(東→)		7 b 区ST II 01-02土器棺出土状況(西→)	114
図版 10	6 a 区SK II 06集石出土状況(南→)	100	7 b 区ST II 01-02全景(北→)	
	6 a 区SK II 07集石出土状況(北→)		7 b 区ST II 01土器棺蓋出土状況(西→)	115
図版 11	6 b 区SK II 12遺物出土状況(北→)	101	7 b 区ST II 01土層断面(西→)	
	6 a 区SK II 23遺物出土状況(西→)		7 b 区ST II 01土器棺身(北西→)	
	6 a 区SK II 23土層断面(西→)		7 b 区ST II 02土器棺(西→)	
図版 12	6 b 区SE II 01上面丸太材出土状況(北→)	102	7 b 区ST II 02土層断面(西→)	
	6 b 区SE II 01石組上面(北→)		7 b 区ST II 02棺内埋土除去後(北西→)	
	6 b 区SE II 01石組検出状況(南→)		7 b 区SX II 14遺物出土状況(西→)	116
図版 13	6 a 区SK II 11-SD II 01全景(東→)	103	7 b 区SX II 14遺物出土状況(北→)	
	6 a 区SK II 11土層断面(西→)		7 b 区SX II 14土層断面(東→)	
	6 a 区SD II 01-SX II 02土層断面(西→)		7 b 区SX II 14遺物出土状況(東→)	117
図版 14	6 a 区SD II 02全景(北→)	104	7 b 区SX II 14遺物出土状況(西→)	
	6 a 区SD II 08全景(北→)		7 b 区SX II 14遺物出土状況(東→)	
	6 a 区SD II 08土層断面(南→)		7 b 区SX II 14遺物出土状況(西→)	
図版 15	6 a 区SX II 02全景(北→)	105	7 b 区SX II 16遺物出土状況(西→)	
	6 a 区SX II 06全景(北→)		7 b 区SX II 17遺物出土状況(北→)	
図版 16	7 a 区全景(西→)	106	7 b 区SX II 15全景(東→)	118

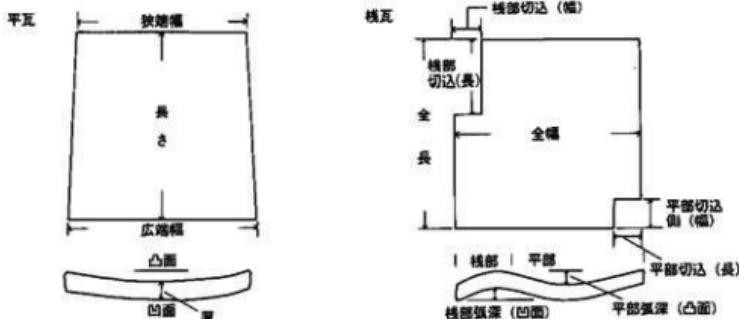
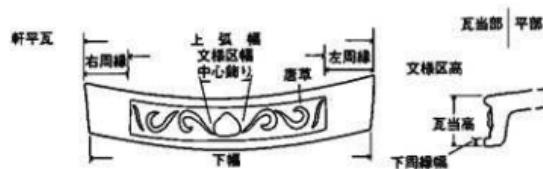
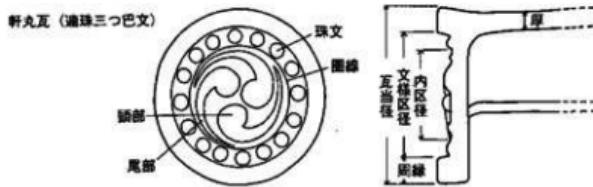
7 b 区 S X II 16全景(西→)	11区北壁谷7土层断面(南西→)
图版29 7 b 区 S X II 17全景(北→) 119	图版46 10 a 区谷7西肩立木出土状况(东→) 136
7 b 区 S X II 17遗物出土状况(北→)	10 a 区谷7中层遗物出土状况(南→)
7 b 区 S D II 22~25全景(西→)	10 b 区谷7最上层遗物出土状况(西→)
图版30 7 b 区 S X II 18土层断面(北→) 120	10 b 区谷7最上层遗物出土状况(西→) 137
7 b 区 S X II 19遗物出土状况(北→)	10 b 区谷7遗物出土状况(南→)
7 b 区 S X II 19土层断面(北→)	10 b 区谷7遗物出土状况
图版31 8区全景(北→) 121	10 b 区谷7遗物出土状况
8区北壁土层断面(南西→)	
图版32 8区S B II 33全景(西→) 122	图版48 出土土器(1) 138
8区S B II 34全景(西→)	图版49 出土土器(2) 139
8区S B II 35全景(西→)	图版50 出土土器(3) 140
图版33 8区S D II 12全景(东→) 123	图版51 出土土器(4) 141
8区S D II 30~31, S X II 21全景(南→)	图版52 出土土器(5) 142
8区S D II 30土层断面(南→)	图版53 出土土器(6) 143
图版34 9区全景(西→) 124	图版54 出土土器(7) 144
9区S B II 38~39全景(南→)	图版55 出土土器(8) 145
图版35 9区S K II 33~36全景(南→) 125	图版56 出土土器(9) 146
9区S D II 35完掘状况(南→)	图版57 出土土器(10) 147
图版36 9区S X II 22完掘状况(南→) 126	图版58 出土土器(11) 148
9区S X II 22土层断面(北东→)	图版59 出土土器(12) 149
9区S X II 22土层断面(南西→)	图版60 出土土器(13) 150
图版37 10 a 区 1面全景(北→) 127	图版61 出土土器(14) 151
10 b 区 1面东半全景(南→)	图版62 出土土器(15) 152
10 b 区 1面西半全景(南→)	图版63 出土土器(16) 153
图版38 10 a 区西壁土层断面(东→) 128	图版64 出土土器(17) 154
10 b 区东壁土层断面(西→)	图版65 出土土器(18) 155
11区东壁土层断面(南西→)	图版66 出土土器(19) 156
图版39 11区 1面全景(东→) 129	图版67 出土土器(20) 157
11区西半 1面全景(南→)	图版68 出土土器(21) 158
图版40 11区 1面S D II 71土层断面(北→) 130	图版69 出土土器(22) 159
11区南壁S D II 71土层断面(北→)	图版70 出土土器(23) 160
11区 1面S D II 71人形出土状况(东→)	图版71 出土土器(24) 161
图版41 10 b 区 2面S K II 46全景(南→) 131	图版72 出土土器(25) 162
10 b 区 2面S K II 46完掘状况(西→)	图版73 出土土器(26) 163
10 b 区 2面S K II 46遗物出土状况(西→)	图版74 出土土器(27) 164
10 b 区 2面S K II 46遗物出土状况(东→)	图版75 出土土器(28) 165
图版42 10~11区谷7完掘状况全景(上为北) 132	图版76 出土土器(29) 166
图版43 10~11区谷7完掘状况(北→) 133	图版77 出土土器(30) 167
10 a 区谷7东肩完掘状况(南→)	图版78 出土土器(31) 168
10 a 区谷7完掘状况(北→)	图版79 出土土器(32) 169
图版44 10 b 区谷7完掘状况(西→) 134	图版80 出土土器(33) 170
11区谷7东肩完掘状况(北→)	图版81 出土土器(34) 171
11区谷7西肩完掘状况(北→)	图版82 出土土器(35) 172
图版45 10 a 区北壁谷7土层断面(南东→) 135	图版83 出土土器(36) 173
10 b 区南壁谷7土层断面(北西→)	图版84 出土土器(37) 174

図版85 出土土器(38)	175	図版92 出土石器・石製品(3)	182
図版86 出土土器(39)	176	図版93 出土石器・石製品(4)	183
図版87 出土土器(40)	177	図版94 出土金属器	184
図版88 出土土器(41)	178	図版95 出土木製品(1)	185
図版89 出土土器(42)・貝類遺体	179	図版96 出土木製品(2)	186
図版90 出土石器・石製品(1)	180	図版97 出土木製品(3)	187
図版91 出土石器・石製品(2)	181	図版98 出土木製品(4)	188

遺物観察表

凡例

1. 遺物観察表は、土器（陶磁器等含）・石器（石製品含）・木製品・軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・棟瓦・金属器に分けて作成した。各表ごとに挿図番号順に編集している。
2. 残存率は、遺物の図化部分に占める実物の割合を示しており、完形品に対するそれではない。
3. 観察表中の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖1992年度版』を参照した。しかし、一部陶磁器釉薬等の色調についてはこの限りではない。
4. 土器胎土は、主に30倍ライトスコープを用いて、石英・長石・雲母・角閃石・赤色粒についてのみ、その粒径や多寡を観察し記録した。また、含まれる石粒の大きさが0.5mm以下を「微」、同0.6~1.0mmを「細」、同1.1~3.9mmを「中」、同4.0mm以上を「粗」と表記した。さらにその多寡については、「多」・「普」・「少」の3段階に区分したが、それは観察者の主觀にもとづいており、明確な基準は特に定めていない。
5. 土器観察表中の法量について、復元される口径等に焼成時等のひずみなどがあり、確度が落ちるものについては（ ）を付して記載した。
6. 各観察表中の単位については、大きさはcmで、重さはgでそれぞれ統一した。
7. 瓦類観察表中の計測位置については別記のとおりである。



土器・陶磁器觀察表

番号	出土地	遺跡名	遺物名	器種	口径	腹深	底深	柄寸	外表面	内面調査	保存状	備考
形質	色調											
1	S K 034	赤・黒							口輪は黒く、底は灰として外反して開く。縁 部は上方へ小く傾く。	ヨコナデ	ハタリ	細片
2	S K 034	赤・黒			10.9				口輪は黒く、底は灰として外反して開く。縁 部は上方へ小く傾く。	ヨコナデ	ハタリ	細片
3	S K 034	赤・黒			10.2	6.0			口輪より内円につづき、底は灰として外反して開 く。縁部は灰として外反して開く。	ヨコナデ	ハタリ	細片
4	S K 034	赤・黒			14.2	3.3			口輪より内円につづき、底は灰として外反して開 く。縁部は灰として外反して開く。	ヨコナデ	ハタリ	細片
5	S K 034	赤・黒			22.0				口輪より内円につづき、底は灰として外反して開 く。縁部は灰として外反して開く。	ヨコナデ	ハタリ	細片
6	S K 034	赤・黒			22.2				口輪より内円につづき、底は灰として外反して開 く。縁部は灰として外反して開く。	ヨコナデ	ハタリ	細片
7	S K 015	赤・黒			4.5				口輪より内円につづき、底は灰として外反して開 く。縁部は灰として外反して開く。	ヨコナデ	ハタリ	細片
8	S K 015	赤・黒			14.0				口輪より内円につづき、底は灰として外反して開 く。縁部は灰として外反して開く。	ヨコナデ	ハタリ	細片
9	S K 015	赤・黒			14.0				口輪より内円につづき、底は灰として外反して開 く。縁部は灰として外反して開く。	ヨコナデ	ハタリ	細片
10	S K 015	赤・黒			18.6				口輪より内円につづき、底は灰として外反して開 く。縁部は灰として外反して開く。	ヨコナデ	ハタリ	細片
11	S K 015	赤・黒			18.6				口輪より内円につづき、底は灰として外反して開 く。縁部は灰として外反して開く。	ヨコナデ	ハタリ	細片
12	S K 036	赤・黒			18.6				口輪より内円につづき、底は灰として外反して開 く。縁部は灰として外反して開く。	ヨコナデ	ハタリ	細片
13	S K 036	赤・黒			20.0				口輪より内円につづき、底は灰として外反して開 く。縁部は灰として外反して開く。	ヨコナデ	ハタリ	細片
14	S K 036	赤・黒			13.4				口輪より内円につづき、底は灰として外反して開 く。縁部は灰として外反して開く。	ヨコナデ	ハタリ	細片
15	S K 036	赤・黒			13.4				口輪より内円につづき、底は灰として外反して開 く。縁部は灰として外反して開く。	ヨコナデ	ハタリ	細片
16	S K 036	赤・黒			13.6				口輪より内円につづき、底は灰として外反して開 く。縁部は灰として外反して開く。	ヨコナデ	ハタリ	細片
17	S K 036	赤・黒			16.4				口輪より内円につづき、底は灰として外反して開 く。縁部は灰として外反して開く。	ヨコナデ	ハタリ	細片
18	S K 036	赤・黒?							口輪より内円につづき、底は灰として外反して開 く。縁部は灰として外反して開く。	ヨコナデ?	ハタリ?	細片

番号	回数	種類名	回数	回数	回数	回数	回数	回数	回数	回数	回数	回数
19	S K 036	体・小形林	12.0	3.7	中：石英多・黑色少	(外) 黄(内) 黄(外)	無感より内側に浅く感覚	口呼吸部は内側へ偏る。感覚	外周感覚	内周感覚	浅感覚	無
20	S K 036	体・小形林	13.7	中：石英多・黑色少	(外) 黄(内) 黄(外)	感覚より内側に浅く感覚	口呼吸部は内側へ偏る。感覚	ナメタマツ	ナメタマツ	ハカリ	ハカリ	ハカリ
21	S K 036	体・中形林	(21.2)	中：石英多・黑色少	(外) 黄(内) 黄(外)	感覚よりやや内側に浅く感覚	口呼吸部は内側へ偏る。感覚	ヨコナデ	ヨコナデ	ハカリ	ハカリ	ハカリ
22	S K 044	体・葉	13.2	中：石英多・黑色少	(外) 黄(内) 黄(外)	感覚より強く感覚	口呼吸部は内側へ偏る。感覚	ヨコナデ・ハカリ	ヨコナデ・ハカリ	ハカリ	ハカリ	ハカリ
23	S K 044	体・葉	1.9	中：石英多・黑色少	(外) 黄(内) 黄(外)	感覚より強く感覚	口呼吸部は内側へ偏る。感覚	ヨコナデ・ハカリ・アゲツ	ヨコナデ・ハカリ・アゲツ	ハカリ	ハカリ	ハカリ
24	S K 044	体・小形林	16.2	5.3	中：石英多・黑色少	(外) 黄(内) 黄(外)	感覚より強く感覚	口呼吸部は内側へ偏る。感覚	ヨコナデ・ハカリ	ヨコナデ・ハカリ	ハカリ	ハカリ
25	S K 045	体・中口器	15.4	(30.2)	中：石英多・黑色少	(外) 黄(内) 黄(外)	感覚より強く感覚	口呼吸部は内側へ偏る。感覚	ヨコナデの後ヨコナデ	ヨコナデの後ヨコナデ	ハカリ	ハカリ
26	S K 045	体・法口器	1.6	中：石英多・黑色少	(外) 黄(内) 黄(外)	感覚より強く感覚	口呼吸部は内側へ偏る。感覚	ヨコナデの後ヨコナデ	ヨコナデの後ヨコナデ	ハカリ	ハカリ	ハカリ
27	S K 046	体・法口器?	15.4	中：石英多・黑色少	(外) 黄(内) 黄(外)	感覚より強く感覚	口呼吸部は内側へ偏る。感覚	ヨコナデの後ヨコナデ	ヨコナデの後ヨコナデ	ハカリ	ハカリ	ハカリ
28	S K 046	体・葉	(1.4)	中：石英多・黑色少	(外) 黄(内) 黄(外)	感覚より強く感覚	口呼吸部は内側へ偏る。感覚	ヨコナデの後ヨコナデ	ヨコナデの後ヨコナデ	ハカリ	ハカリ	ハカリ
29	S K 046	体・中形林	22.0	(5.7)	中：石英多・黑色少	(外) 黄(内) 黄(外)	感覚より内側に浅く感覚	口呼吸部は内側へ偏る。感覚	ヨコナデ	ヨコナデ	ハカリ	ハカリ
30	S K 046	体・中形林	26.6	中：石英多・黑色少	(外) 黄(内) 黄(外)	感覚より内側に浅く感覚	口呼吸部は内側へ偏る。感覚	ヨコナデの後ヨコナデ	ヨコナデの後ヨコナデ	ハカリ	ハカリ	ハカリ
38	S K 047	体・中口器?	—	中：石英少・黑色少	(外) 黄(内) 黄(外)	感覚より内側に浅く感覚	口呼吸部は内側へ偏る。感覚	ヨコナデ	ヨコナデ	ハカリ	ハカリ	ハカリ
40	S K 021	体・中口器	25.0	中：石英多・黑色少	(外) 黄(内) 黄(外)	感覚より内側に浅く感覚	口呼吸部は内側へ偏る。感覚	ハカリ	ハカリ	ハカリ	ハカリ	ハカリ
41	S K 021	体・中口器	26.2	中：石英多・黑色少	(外) 黄(内) 黄(外)	感覚より内側に浅く感覚	口呼吸部は内側へ偏る。感覚	ヨコナデ	ヨコナデ	ハカリ	ハカリ	ハカリ
42	S K 021	体・葉	15.4	中：石英多・黑色少	(外) 黄(内) 黄(外)	感覚より内側に浅く感覚	口呼吸部は内側へ偏る。感覚	ヨコナデ	ヨコナデ	ハカリ	ハカリ	ハカリ
43	S K 021	体・葉	16.0	中：石英多・黑色少	(外) 黄(内) 黄(外)	感覚より内側に浅く感覚	口呼吸部は内側へ偏る。感覚	ヨコナデ	ヨコナデ	ハカリ	ハカリ	ハカリ
44	S K 021	体・葉	14.4	中：石英多・黑色少	(外) 黄(内) 黄(外)	感覚より内側に浅く感覚	口呼吸部は内側へ偏る。感覚	ヨコナデ	ヨコナデ	ハカリ	ハカリ	ハカリ

下川井町土
器下川井町土
器

序号	登録名	目録名	口語	翻訳	解説	形態	外見特徴	骨格特徴	骨存率	編号
65	48 SX 821	体・頭部上部	5.2 頭・舌	5.2 頭・舌	(外)頭部(内)にぶ い頭部	頭はハゲた状態に頭小小さな頭台を付す。	頭はハゲた状態に頭小小さな頭台を付す。	骨存率：ナダ、ハタリ	6/6	
66	5 SX 821	体・頭部上部	5.0 中・舌	5.0 中・舌	(外)にぶい頭部(内) にぶい頭部	頭部はハゲた状態に頭小小さな頭台を付す。	骨存率：ナダ、ナダ	骨存率：ナダ	6/6	
67	5 SX 821	体・ヒュニア +頭	6.1	中・舌	中・舌	頭部は頭の中央に所に凹む頭部(内)に ぶい頭部	頭部は頭の中央に所に凹む頭部(内)に ぶい頭部	口縁：ヨコナダ 頭部：ナダ	1/6	
68	5 SX 822上部 体・化口腔	25.7	中・舌	中・舌	(外)頭(内)頭	頭部は頭の中央に所に凹む頭部(内)に ぶい頭部	頭部は頭の中央に所に凹む頭部(内)に ぶい頭部	口縁：ヨコナダ 頭部：ナダ	1/6	
69	5 SX 822上部 体・二重口被冠	30.7	中・舌	中・舌	(外)頭(内)頭	頭部は頭の中央に所に凹む頭部(内)に ぶい頭部	頭部は頭の中央に所に凹む頭部(内)に ぶい頭部	口縁：ヨコナダ 頭部：ナダ	1/6	
70	5 SX 822下部 体・広口型	31.2	中・舌	中・舌	(外)頭部(内)頭部 +舌	頭部は頭の中央に所に凹む頭部(内)に ぶい頭部	頭部は頭の中央に所に凹む頭部(内)に ぶい頭部	頭部ナダの後ヨコナダ	1/6	
71	5 SX 822下部 体・垂		中・舌	中・舌	(外)頭部(内)頭部 +頭部	頭部は頭の中央に所に凹む頭部(内)に ぶい頭部	頭部は頭の中央に所に凹む頭部(内)に ぶい頭部	ハタリ	1/6	
72	5 SX 822下部 体・垂	13.4	中・舌	中・舌	(外)頭(内)頭	頭部はやや内凹した頭部に開き、頭部は頭部 三角形状に所に凹む頭部	頭部はやや内凹した頭部に開き、頭部は頭部 三角形状に所に凹む頭部	ヨコナダ	1/6	
73	5 SX 822下部 体・垂	[17.4]	中・舌	中・舌	(外)頭(内)頭	頭部はやや内凹した頭部に開き、頭部は頭部 三角形状に所に凹む頭部	頭部はやや内凹した頭部に開き、頭部は頭部 三角形状に所に凹む頭部	ヨコナダ	1/6	
74	5 SX 822下部 体・垂	12.8	中・舌	中・舌	(外)頭(内)頭	頭部は頭の中央に所に凹む頭部(内)に ぶい頭部	頭部は頭の中央に所に凹む頭部(内)に ぶい頭部	口縁：ヨコナダ 頭部：ナダ	1/6	
75	5 SX 822下部 体・垂	14.3	中・舌	中・舌	(外)頭(内)頭	頭部はやや内凹した頭部に開き、頭部は頭部 三角形状に所に凹む頭部	頭部はやや内凹した頭部に開き、頭部は頭部 三角形状に所に凹む頭部	口縁：ヨコナダ 頭部：ナダ	1/6	
76	5 SX 822下部 体・大頭部	26.4	中・舌	中・舌	(外)頭部(内)頭部 +舌	頭部は頭の中央に所に凹む頭部(内)に ぶい頭部	頭部は頭の中央に所に凹む頭部(内)に ぶい頭部	頭・鰓・咽の後ヨコナダ	2/6	
77	5 SX 822下部 体・垂?		中・舌	中・舌	(外)頭(内)頭	頭部は頭の中央に所に凹む頭部(内)に ぶい頭部	頭部は頭の中央に所に凹む頭部(内)に ぶい頭部	ハタリ	1/6	
78	5 SX 822下部 体・小頭部	10.0	中・舌	中・舌	(外)頭部(内)頭部 +舌	頭部は頭の中央に所に凹む頭部(内)に ぶい頭部	頭部は頭の中央に所に凹む頭部(内)に ぶい頭部	ハタリ・マツヅ	1/6	
79	46 SX 822下部 体・小形体	13.5	3.7	中・舌	(外)頭(内)頭	頭部は頭の中央に所に凹む頭部(内)に ぶい頭部	頭部は頭の中央に所に凹む頭部(内)に ぶい頭部	ヨコナダの後ヨコナダ	7/6	
80	5 SX 822下部 体・小形体	13.0	中・舌	中・舌	(外)頭(内)頭	頭部は頭の中央に所に凹む頭部(内)に ぶい頭部	頭部は頭の中央に所に凹む頭部(内)に ぶい頭部	ヨコナダの後ヨコナダ	2/6	
81	5 SX 822下部 体・小形体	12.8	4.0	中・舌	(外)頭(内)頭	頭部は頭の中央に所に凹む頭部(内)に ぶい頭部	頭部は頭の中央に所に凹む頭部(内)に ぶい頭部	ヨコナダの後ヨコナダ	1/6	
82	46 SX 822下部 体・小形体	10.2	5.2	中・舌	(外)頭(内)頭	頭部は頭の中央に所に凹む頭部(内)に ぶい頭部	頭部は頭の中央に所に凹む頭部(内)に ぶい頭部	ヨコナダの後ヨコナダ	7/6	
83	49 SX 822下部 体・小形体	12.1	6.0	中・舌	(外)頭(内)頭	頭部は頭の中央に所に凹む頭部(内)に ぶい頭部	頭部は頭の中央に所に凹む頭部(内)に ぶい頭部	ヨコナダの後ヨコナダ	7/6	
84	5 SX 822下部 体・中形体	[25.6]	中・舌	中・舌	(外)頭(内)頭	頭部は頭の中央に所に凹む頭部(内)に ぶい頭部	頭部は頭の中央に所に凹む頭部(内)に ぶい頭部	ヨコナダの後ヨコナダ	1/6	

標番	出羽名	習性	口吐	毒毛	歯	歯毛	外泄毛	内泄毛	被付毛	繭毛
85	S X 0277号 水・黒泥土器	4.6中・毒毛少	黑色幼少(外)にぶい黒(内)	底部は断面のV字状で、底に小さな筋を付す。	毒毛少エ・ナデ	毒毛少エ・ナデ	口吐サエ	口吐サエ	口吐サエ	口吐サエ
86	48 S X 0277号 水・ニニチャア	3.5	中・石毒多・黒泥少(外)黒(内)無	底部は中央がやや高いので、底に大きな窪みがある。底部丸く曲がる。	毒毛少エ・ナデ	毒毛少エ・ナデ	口吐サエ・ナデ	口吐サエ・ナデ	口吐サエ・ナデ	口吐サエ・ナデ
87	49 S X 0277号 水・瓶外	36.4	中・石毒多・黒色幼少(外)黒(内)	底部は断面で外側に凸起して、底に大きな窪みがある。	毒毛少エ・ナデ	毒毛少エ・ナデ	口吐サエ・ナデ	口吐サエ・ナデ	口吐サエ・ナデ	口吐サエ・ナデ
91	S X 023上号 水・口唇	19.6	中・石毒多・黒泥少(外)にぶい黒(内)	口唇部はやや厚めにして、立ち上がり強く張り立つ。口唇部は上に張り出している。口唇部は内側で凹角で、外側で丸く曲がる。	ヨコナデ	ヨコナデ	口吐ハクリ	口吐ハクリ	口吐ハクリ	口吐ハクリ
92	S X 023上号 水・葉	14.0	中・石毒多・黒泥少(外)にぶい黒(内)	口唇部はやや強めにして、立ち上がり強く張り立つ。口唇部は上に張り出している。口唇部は内側で凹角で、外側で丸く曲がる。	ヨコナデ	ヨコナデ	口吐ハクリ	口吐ハクリ	口吐ハクリ	口吐ハクリ
93	S X 023上号 水・葉	13.0	中・石毒多・黒泥少(外)にぶい黒(内)	口唇部は強めで、立ち直りよく張り立つ。口唇部は上に張り出している。口唇部は内側で凹角で、外側で丸く曲がる。	ヨコナデ	ヨコナデ	口吐ハクリ	口吐ハクリ	口吐ハクリ	口吐ハクリ
94	S X 023上号 水・葉	13.7	中・石毒多・黒泥少(外)黒(内)	口唇部は強めで、立ち直りよく張り立つ。口唇部は上に張り出している。口唇部は内側で凹角で、外側で丸く曲がる。	ヨコナデ	ヨコナデ	口吐ハクリ	口吐ハクリ	口吐ハクリ	口吐ハクリ
95	S X 023上号 水・葉	14.8	中・石毒多・黒泥少(外)黒(内)無	口唇部は強めで、立ち直りよく張り立つ。口唇部は上に張り出している。口唇部は内側で凹角で、外側で丸く曲がる。	ハクリ	ハクリ	口吐ハクリ	口吐ハクリ	口吐ハクリ	口吐ハクリ
96	S X 023上号 水・葉	12.0	中・石毒多・黒泥少(外)黒(内)無	口唇部はやや強めで、立ち直りよく張り立つ。口唇部は上に張り出している。口唇部は内側で凹角で、外側で丸く曲がる。	ヨコナデ	ヨコナデ	口吐ハクリ	口吐ハクリ	口吐ハクリ	口吐ハクリ
97	S X 023上号 水・葉	(14.0)	中・石毒多・黒泥少(外)黒(内)無	口唇部は強めで、立ち直りよく張り立つ。口唇部は上に張り出している。口唇部は内側で凹角で、外側で丸く曲がる。	ヨコナデ	ヨコナデ	口吐ハクリ	口吐ハクリ	口吐ハクリ	口吐ハクリ
98	S X 023上号 水・葉	13.4	中・石毒多・黒泥少(外)黒(内)無	口唇部は強めで、立ち直りよく張り立つ。口唇部は上に張り出している。口唇部は内側で凹角で、外側で丸く曲がる。	ヨコナデ	ヨコナデ	口吐ハクリ	口吐ハクリ	口吐ハクリ	口吐ハクリ
99	S X 023上号 水・葉	(14.4)	中・石毒多・黒泥少(外)黒(内)無	口唇部は強めで、立ち直りよく張り立つ。口唇部は上に張り出している。口唇部は内側で凹角で、外側で丸く曲がる。	ヨコナデ	ヨコナデ	口吐ハクリ	口吐ハクリ	口吐ハクリ	口吐ハクリ
100	S X 023上号 水・葉?	(25.6)	中・石毒多・黒泥少(外)黒(内)無	口唇部は強めで、立ち直りよく張り立つ。口唇部は上に張り出している。口唇部は内側で凹角で、外側で丸く曲がる。	ハクリ	ハクリ	口吐ハクリ	口吐ハクリ	口吐ハクリ	口吐ハクリ
101	S X 023上号 水・葉杯	20.4	中・石毒多・黒泥少(外)黒(内)無	口唇部は上に張り出している。口唇部は内側で凹角で、外側で丸く曲がる。	ヨコナデ	ヨコナデ	口吐ハクリ	口吐ハクリ	口吐ハクリ	口吐ハクリ
102	S X 023上号 水・葉杯	20.6	中・石毒多・黒泥少(外)黒(内)無	口唇部は上に張り出している。口唇部は内側で凹角で、外側で丸く曲がる。	ヨコナデ	ヨコナデ	口吐ハクリ	口吐ハクリ	口吐ハクリ	口吐ハクリ
103	S X 023上号 水・甲壳体	20.0	中・石毒多・黒泥少(外)黒(内)無	口唇部は上に張り出している。口唇部は内側で凹角で、外側で丸く曲がる。	ヨコナデ	ヨコナデ	口吐ハクリ	口吐ハクリ	口吐ハクリ	口吐ハクリ
104	S X 023上号 水・葉瓶	13.5	中・石毒多・黒泥少(外)黒(内)無	口唇部は強めで、立ち直りよく張り立つ。口唇部は上に張り出している。口唇部は内側で凹角で、外側で丸く曲がる。	ヨコナデ	ヨコナデ	口吐ハクリ	口吐ハクリ	口吐ハクリ	口吐ハクリ
105	S D 026 水・葉	(13.0)	中・石毒多・黒泥少(外)黒(内)無	口唇部は強めで、立ち直りよく張り立つ。口唇部は上に張り出している。口唇部は内側で凹角で、外側で丸く曲がる。	ヨコナデ	ヨコナデ	口吐ハクリ	口吐ハクリ	口吐ハクリ	口吐ハクリ

学年	部活名	部活名	回数	回数	回数	回数	回数	回数	回数	回数	回数	回数	回数	回数	回数	回数	回数	回数	回数
130	谷7下場	赤・黒	1回	1回	中：赤青春・黒青春シソ														
140	谷7下場	赤・黒			15.8				15.2										
141	谷7下場	赤・黒				17.0													
142	谷7下場	赤・黒					15.4												
143	谷7下場	赤・黒						15.0											
144	51 谷7下場	赤・黒	1回	1回	中：赤青春・黒青春シソ														
145	谷7下場	赤・黒			12.6	17.6	3.0	中：赤青春・黒青春シソ											
146	谷7下場	赤・黒						14.2											
147	谷7下場	赤・黒							14.0										
148	谷7下場	赤・黒								13.9									
149	谷7下場	赤・黒									14.6								
150	谷7下場	赤・黒										16.2							
151	谷7下場	赤・黒											14.0						
152	谷7下場	赤・黒												15.2					
153	谷7下場	赤・黒													16.3				
154	51 谷7下場	赤・黒		1回	1.9	中：赤青春・黒青春シソ													
155	52 谷7下場	赤・黒								15.8									

種類	回数	通名	部位	口径	器械	操作	色調	外因影響	内因影響	操作半 周期	備考			
219	谷7下槽	体・中形鉗	口徑	器械	操作	(外)に古い黒苔	黒	体部：ナメハタリ カズリ	斜ハタの下で半周を 外に流す。黒苔は小さく 外に流れ、口器部は小さく 外に出る。	3/8				
220	谷7下槽	体・中形鉗	17.4	中・石英管	中・赤色较少	(外)に古い黒苔	黒	体部：ナメハタリ カズリ	斜ハタの下で半周を 外に流す。黒苔は小さく 外に出る。	1/8				
221	谷7下槽	体・中形鉗	16.0	中・石英管	中・赤色较少	(外)に古い黒苔	黒	体部：ナメハタリ カズリ	斜ハタの下で半周を 外に流す。黒苔は小さく 外に出る。	1/8				
222	谷7下槽	体・中形鉗	16.6	5.6	中・石英管	中・赤色较少	(外)に古い黒苔	黒	体部：ナメハタリ カズリ	斜ハタの下で半周を 外に流す。黒苔は小さく 外に出る。	1/8			
223	谷7下槽	体・中形鉗	9.5	5.5	中・石英管	中・赤色较少	(外)に古い黒苔	黒	体部：ナメハタリ カズリ	斜ハタの下で半周を 外に流す。黒苔は小さく 外に出る。	1/8			
224	谷7下槽	体・小形鉗	11.6	中・石英管	中・赤色较少	(外)に古い黒苔	黒	体部：ナメハタリ カズリ	斜ハタの下で半周を 外に流す。黒苔は小さく 外に出る。	1/8				
225	谷7下槽	体・小形鉗	9.5	9.2	4.5	中・石英管	中・赤色较少	黒	体部：ナメハタリ カズリ	斜ハタの下で半周を 外に流す。黒苔は小さく 外に出る。	1/8			
226	谷7下槽	体・小形鉗	11.6	4.5	中・石英管	中・赤色较少	(外)に古い黒苔	黒	体部：ナメハタリ カズリ	斜ハタの下で半周を 外に流す。黒苔は小さく 外に出る。	1/8			
227	谷7下槽	体・中形鉗	11.6	10.0	4.5	中・石英管	中・赤色较少	(外)に古い黒苔	黒	体部：ナメハタリ カズリ	斜ハタの下で半周を 外に流す。黒苔は小さく 外に出る。	1/8		
228	谷7下槽	体・大形鉗	17.7	12.0	5.3	中・石英管	中・赤色较少	(外)に古い黒苔	黒	体部：ナメハタリ カズリ	斜ハタの下で半周を 外に流す。黒苔は小さく 外に出る。	1/8		
229	谷7下槽	体・大形鉗	26.0	26.4	11.1	6.0	中・石英管	中・赤色较少	(外)に古い黒苔	黒	体部：ナメハタリ カズリ	斜ハタの下で半周を 外に流す。黒苔は小さく 外に出る。	1/8	
230	谷7下槽	体・大形鉗	25.0	13.4	6.0	中・石英管	中・赤色较少	(外)に古い黒苔	黒	体部：ナメハタリ カズリ	斜ハタの下で半周を 外に流す。黒苔は小さく 外に出る。	1/8		
231	谷7下槽	体・大形鉗	26.2	中・石英管	中・赤色较少	(外)に古い黒苔	黒	体部：ナメハタリ カズリ	斜ハタの下で半周を 外に流す。黒苔は小さく 外に出る。	1/8				
232	谷7下槽	体・大形鉗	30.0	中・石英管	中・赤色较少	(外)に古い黒苔	黒	体部：ナメハタリ カズリ	斜ハタの下で半周を 外に流す。黒苔は小さく 外に出る。	1/8				
233	谷7下槽	体・底盤穿孔鉗	14.5 (18.6)	4.8	中・石英管	中・赤色较少	(外)に古い黒苔	黒	体部：ナメハタリ カズリ	斜ハタの下で半周を 外に流す。黒苔は小さく 外に出る。	1/8			
234	谷7下槽	体・底盤穿孔鉗	26.5	14.3	中・石英管	中・赤色较少	(外)に古い黒苔	黒	体部：ナメハタリ カズリ	斜ハタの下で半周を 外に流す。黒苔は小さく 外に出る。	1/8			
235	谷7下槽	体・底盤穿孔鉗	16.8	16.1	中・石英管	中・赤色较少	(外)に古い黒苔	黒	体部：ナメハタリ カズリ	斜ハタの下で半周を 外に流す。黒苔は小さく 外に出る。	1/8			

種別	固有名	通名	部位	口腔	咽頭	食道	胃	小腸	大腸	回盲部	直腸	肛門	泄殖腔	外因性	内因性	発汗	尿
241	谷7丁番	井・北口坂	歯・舌	口唇	咽頭	食道	胃	小腸	大腸	回盲部	直腸	肛門	泄殖腔	ヨコナダ	ヨコナダ	川床	尿
242	谷7丁番	井・北口坂	歯・舌	口唇	咽頭	食道	胃	小腸	大腸	回盲部	直腸	肛門	泄殖腔	ヨコナダ	ヨコナダ	川床	尿
243	谷7丁番	井・北口坂	歯・舌	口唇	咽頭	食道	胃	小腸	大腸	回盲部	直腸	肛門	泄殖腔	ヨコナダ	ヨコナダ	川床	尿
244	56 谷7丁番	井・北口坂	歯・舌	口唇	咽頭	食道	胃	小腸	大腸	回盲部	直腸	肛門	泄殖腔	ヨコナダ	ヨコナダ	川床	尿
245	56 谷7丁番	井・北口坂	歯・舌	口唇	咽頭	食道	胃	小腸	大腸	回盲部	直腸	肛門	泄殖腔	ヨコナダ	ヨコナダ	川床	尿
246	57 谷7丁番	井・南側坂	歯・舌	口唇	咽頭	食道	胃	小腸	大腸	回盲部	直腸	肛門	泄殖腔	ヨコナダ	ヨコナダ	川床	尿
247	57 谷7丁番	井・南	歯・舌	口唇	咽頭	食道	胃	小腸	大腸	回盲部	直腸	肛門	泄殖腔	ヨコナダ	ヨコナダ	川床	尿
248	57 谷7丁番	井・南	歯・舌	口唇	咽頭	食道	胃	小腸	大腸	回盲部	直腸	肛門	泄殖腔	ヨコナダ	ヨコナダ	川床	尿
249	57 谷7丁番	井・南	歯・舌	口唇	咽頭	食道	胃	小腸	大腸	回盲部	直腸	肛門	泄殖腔	ヨコナダ	ヨコナダ	川床	尿
250	57 谷7丁番	井・南	歯・舌	口唇	咽頭	食道	胃	小腸	大腸	回盲部	直腸	肛門	泄殖腔	ヨコナダ	ヨコナダ	川床	尿
251	57 谷7丁番	井・南?	歯・舌?	口唇	咽頭	食道	胃	小腸	大腸	回盲部	直腸	肛門	泄殖腔	ヨコナダ	ヨコナダ	川床	尿
252	57 谷7丁番	井・南	歯・舌	口唇	咽頭	食道	胃	小腸	大腸	回盲部	直腸	肛門	泄殖腔	ヨコナダ	ヨコナダ	川床	尿
253	58 谷7丁番	井・小池坂	歯・舌	口唇	咽頭	食道	胃	小腸	大腸	回盲部	直腸	肛門	泄殖腔	ヨコナダ	ヨコナダ	川床	尿
254	58 谷7丁番	井・小池坂	歯・舌	口唇	咽頭	食道	胃	小腸	大腸	回盲部	直腸	肛門	泄殖腔	ヨコナダ	ヨコナダ	川床	尿
255	58 谷7丁番	井・小池坂	歯・舌	口唇	咽頭	食道	胃	小腸	大腸	回盲部	直腸	肛門	泄殖腔	ヨコナダ	ヨコナダ	川床	尿
256	58 谷7丁番	井・小池坂	歯・舌	口唇	咽頭	食道	胃	小腸	大腸	回盲部	直腸	肛門	泄殖腔	ヨコナダ	ヨコナダ	川床	尿

問題	流域	支川名	河段名	河口	断面	延長	断面	断面	河口	断面	延長	断面	外断面形状	外断面形状	外断面形状	外断面形状
257	谷7中野	谷、庄口河	谷、庄口河	23.0	■	■	■	■	谷、庄口河	谷、庄口河	23.0	■	■	■	■	■
258	谷7中野	谷、庄口河	谷、庄口河	13.8	■	■	■	■	谷、庄口河	谷、庄口河	13.8	■	■	■	■	■
259	谷7中野	谷、庄口河	谷、庄口河	17.6	■	■	■	■	谷、庄口河	谷、庄口河	17.6	■	■	■	■	■
260	谷7中野	谷、庄口河	谷、庄口河	15.3	■	■	■	■	谷、庄口河	谷、庄口河	15.3	■	■	■	■	■
261	谷7中野	谷、庄口河?	谷、庄口河?	19.0	■	■	■	■	谷、庄口河?	谷、庄口河?	19.0	■	■	■	■	■
262	谷7中野	谷、庄口河	谷、庄口河	17.0	■	■	■	■	谷、庄口河	谷、庄口河	17.0	■	■	■	■	■
263	谷7中野	谷、庄口河	谷、庄口河	21.7	■	■	■	■	谷、庄口河	谷、庄口河	21.7	■	■	■	■	■
264	谷7中野	谷、庄口河	谷、庄口河	20.6	■	■	■	■	谷、庄口河	谷、庄口河	20.6	■	■	■	■	■
265	谷7中野	谷、庄口河	谷、庄口河	25.6	■	■	■	■	谷、庄口河	谷、庄口河	25.6	■	■	■	■	■
266	谷7中野	谷、庄	谷、庄	14.7	■	■	■	■	谷、庄	谷、庄	14.7	■	■	■	■	■
267	谷7中野	谷、庄口河	谷、庄口河	14.7	■	■	■	■	谷、庄口河	谷、庄口河	14.7	■	■	■	■	■
268	谷7中野	谷、庄口河	谷、庄口河	19.0	■	■	■	■	谷、庄口河	谷、庄口河	19.0	■	■	■	■	■
269	谷7中野	谷、庄口河	谷、庄口河	18.3	■	■	■	■	谷、庄口河	谷、庄口河	18.3	■	■	■	■	■
270	谷7中野	谷、庄口河	谷、庄口河	20.6	■	■	■	■	谷、庄口河	谷、庄口河	20.6	■	■	■	■	■

種別	回数	通算名	回数	筋	口吸	筋吸	筋吸	筋吸	筋吸	筋吸	筋吸	筋吸	筋吸	筋吸	筋吸	筋吸	筋吸	筋吸	筋吸
271	55	合子4回	筋・肱二頭	18.0	筋吸	筋吸	筋吸	筋吸	筋吸	筋吸	筋吸	筋吸	筋吸	筋吸	筋吸	筋吸	筋吸	筋吸	筋吸
272	合子7回	筋・肱二頭	20.2	中・肱三頭筋・筋膜多 ・筋膜少	筋吸	筋吸	筋吸	筋吸	筋吸	筋吸	筋吸	筋吸	筋吸	筋吸	筋吸	筋吸	筋吸	筋吸	筋吸
273	合子7回	筋・肱二頭	19.8	中・肱三頭筋・筋膜少 ・筋膜多	筋吸	筋吸	筋吸	筋吸	筋吸	筋吸	筋吸	筋吸	筋吸	筋吸	筋吸	筋吸	筋吸	筋吸	筋吸
274	合子7回	筋・肱二頭	17.0	中・肱三頭筋・筋膜少 ・筋膜多	筋吸	筋吸	筋吸	筋吸	筋吸	筋吸	筋吸	筋吸	筋吸	筋吸	筋吸	筋吸	筋吸	筋吸	筋吸
275	合子7回	筋・肱二頭	15.6	中・肱三頭筋・筋膜少 ・筋膜多	筋吸	筋吸	筋吸	筋吸	筋吸	筋吸	筋吸	筋吸	筋吸	筋吸	筋吸	筋吸	筋吸	筋吸	筋吸
276	合子7回	筋・肱二頭	21.8	中・肱三頭筋・筋膜少 ・筋膜多	筋吸	筋吸	筋吸	筋吸	筋吸	筋吸	筋吸	筋吸	筋吸	筋吸	筋吸	筋吸	筋吸	筋吸	筋吸
277	合子7回	筋・肱二頭	20.9	中・肱三頭筋・筋膜少 ・筋膜多	筋吸	筋吸	筋吸	筋吸	筋吸	筋吸	筋吸	筋吸	筋吸	筋吸	筋吸	筋吸	筋吸	筋吸	筋吸
278	58	合子7回	筋・肱二頭	22.1	中・肱三頭筋・筋膜少 ・筋膜多	筋吸	筋吸	筋吸	筋吸	筋吸	筋吸	筋吸	筋吸	筋吸	筋吸	筋吸	筋吸	筋吸	筋吸
279	合子7回	筋・肱二頭	23.4	中・肱三頭筋・筋膜少 ・筋膜多	筋吸	筋吸	筋吸	筋吸	筋吸	筋吸	筋吸	筋吸	筋吸	筋吸	筋吸	筋吸	筋吸	筋吸	筋吸
280	58	合子7回	筋・肱二頭	12.0	17.3	3・4	中・肱三頭筋・筋膜少 ・筋膜多	筋吸											
281	合子7回	筋・肱二頭	30.1	中・肱三頭筋・筋膜少 ・筋膜多	筋吸	筋吸	筋吸	筋吸	筋吸	筋吸	筋吸	筋吸	筋吸	筋吸	筋吸	筋吸	筋吸	筋吸	筋吸
282	合子7回	筋・肱二頭	24.4	中・肱三頭筋・筋膜少 ・筋膜多	筋吸	筋吸	筋吸	筋吸	筋吸	筋吸	筋吸	筋吸	筋吸	筋吸	筋吸	筋吸	筋吸	筋吸	筋吸
283	58	合子7回	筋・肱二頭	25.0	中・肱三頭筋・筋膜少 ・筋膜多	筋吸	筋吸	筋吸	筋吸	筋吸	筋吸	筋吸	筋吸	筋吸	筋吸	筋吸	筋吸	筋吸	筋吸

学年	教科	題名	著者	出版社	出版年	価格	内容	評価	参考書
							外観	内面裏面	
296	新日本出版	基礎生物学	伊藤洋一	新・改訂版	597	7年中	解・応用問題	口語：基礎生物学 内面：(外)に古い貴重 (内)に古い貴重	口語：基礎生物学 内面：(外)に古い貴重 (内)に古い貴重
297	谷7小中	解・応用問題	解・応用問題	解・応用問題	17.9	31.1	解・応用問題	口語：基礎生物学 内面：(外)に古い貴重 (内)に古い貴重	口語：基礎生物学 内面：(外)に古い貴重 (内)に古い貴重
298	谷7中高	解・応用問題	解・応用問題	解・応用問題	19.8	解・応用問題	解・応用問題	口語：基礎生物学 内面：(外)に古い貴重 (内)に古い貴重	口語：基礎生物学 内面：(外)に古い貴重 (内)に古い貴重
299	谷7中高	解・応用問題	解・応用問題	解・応用問題	12.4	解・応用問題	解・応用問題	口語：基礎生物学 内面：(外)に古い貴重 (内)に古い貴重	口語：基礎生物学 内面：(外)に古い貴重 (内)に古い貴重
300	谷7中高	解・応用問題	解・応用問題	解・応用問題	14.0	解・応用問題	解・応用問題	口語：基礎生物学 内面：(外)に古い貴重 (内)に古い貴重	口語：基礎生物学 内面：(外)に古い貴重 (内)に古い貴重
301	谷7中高	解・応用問題	解・応用問題	解・応用問題	13.2	解・応用問題	解・応用問題	口語：基礎生物学 内面：(外)に古い貴重 (内)に古い貴重	口語：基礎生物学 内面：(外)に古い貴重 (内)に古い貴重
302	谷7中高	解・応用問題	解・応用問題	解・応用問題	14.3	解・応用問題	解・応用問題	口語：基礎生物学 内面：(外)に古い貴重 (内)に古い貴重	口語：基礎生物学 内面：(外)に古い貴重 (内)に古い貴重
303	谷7中高	解・応用問題	解・応用問題	解・応用問題	17.2	解・応用問題	解・応用問題	口語：基礎生物学 内面：(外)に古い貴重 (内)に古い貴重	口語：基礎生物学 内面：(外)に古い貴重 (内)に古い貴重
304	谷7中高	解・応用問題	解・応用問題	解・応用問題	14.8	解・応用問題	解・応用問題	口語：基礎生物学 内面：(外)に古い貴重 (内)に古い貴重	口語：基礎生物学 内面：(外)に古い貴重 (内)に古い貴重
305	谷7中高	解・応用問題	解・応用問題	解・応用問題	14.4	解・応用問題	解・応用問題	口語：基礎生物学 内面：(外)に古い貴重 (内)に古い貴重	口語：基礎生物学 内面：(外)に古い貴重 (内)に古い貴重
306	谷7中高	解・応用問題	解・応用問題	解・応用問題	13.5	13.3	解・応用問題	口語：基礎生物学 内面：(外)に古い貴重 (内)に古い貴重	口語：基礎生物学 内面：(外)に古い貴重 (内)に古い貴重
307	谷7中高	解・応用問題	解・応用問題	解・応用問題	11.0	13.0	解・応用問題	口語：基礎生物学 内面：(外)に古い貴重 (内)に古い貴重	口語：基礎生物学 内面：(外)に古い貴重 (内)に古い貴重
308	谷7中高	解・応用問題	解・応用問題	解・応用問題	13.0	中・高級多・高級多少	解・応用問題	口語：基礎生物学 内面：(外)に古い貴重 (内)に古い貴重	口語：基礎生物学 内面：(外)に古い貴重 (内)に古い貴重
309	谷7中高	解・応用問題	解・応用問題	解・応用問題	17.0	中・高級多・高級多少	解・応用問題	口語：基礎生物学 内面：(外)に古い貴重 (内)に古い貴重	口語：基礎生物学 内面：(外)に古い貴重 (内)に古い貴重
310	谷7中高	解・応用問題	解・応用問題	解・応用問題	14.9	中・高級多・高級多少	解・応用問題	口語：基礎生物学 内面：(外)に古い貴重 (内)に古い貴重	口語：基礎生物学 内面：(外)に古い貴重 (内)に古い貴重

学年	品種名	品種別	花色	葉色	葉形	葉質	葉総長	葉幅	葉表面	葉裏	外観性状		内面性状		開花期	果実外觀
											花	果	花	果		
1年	358 谷7中型	休・葉	黒・黄	黒・黄	卵形	厚	14.9	-	-	-	口頭：ヨコナデ 花：セイヨウ	新鮮：鮮ハ ケ	口頭：ヨコナデ 花：セイヨウ	新鮮：鮮ハ ケ	2/24	口錐形外輪花 付
1年	359 谷7中型	休・葉	黒・黄	黒・黄	卵形	厚	17.0	-	-	-	口頭：ヨコナデ 花：セイヨウ	新鮮：鮮ハ ケ	口頭：ヨコナデ 花：セイヨウ	新鮮：鮮ハ ケ	1/8	口錐形外輪花 付
1年	360 谷7中型	休・葉	黒・黄	黒・黄	卵形	厚	14.7	-	-	-	口頭：ヨコナデ 花：セイヨウ	新鮮：鮮ハ ケ	口頭：ヨコナデ 花：セイヨウ	新鮮：鮮ハ ケ	1/8	口錐形外輪花 付
1年	361 谷7中型	休・葉	黒・黄	黒・黄	卵形	厚	17.2	-	-	-	口頭：ヨコナデ 花：セイヨウ	新鮮：鮮ハ ケ	口頭：ヨコナデ 花：セイヨウ	新鮮：鮮ハ ケ	1/8	口錐形外輪花 付
1年	362 谷7中型	休・葉	黒・黄	黒・黄	卵形	厚	16.0	-	-	-	口頭：ヨコナデ 花：セイヨウ	新鮮：鮮ハ ケ	口頭：ヨコナデ 花：セイヨウ	新鮮：鮮ハ ケ	1/8	口錐形外輪花 付
1年	363 谷7中型	休・葉	黒・黄	黒・黄	卵形	厚	14.0	-	-	-	口頭：ヨコナデ 花：セイヨウ	新鮮：鮮ハ ケ	口頭：ヨコナデ 花：セイヨウ	新鮮：鮮ハ ケ	1/8	口錐形外輪花 付
1年	364 谷7中型	休・葉	黒・黄	黒・黄	卵形	厚	15.7	-	-	-	口頭：ヨコナデ 花：セイヨウ	新鮮：鮮ハ ケ	口頭：ヨコナデ 花：セイヨウ	新鮮：鮮ハ ケ	2/26	口錐形外輪花 付
1年	365 谷7中型	休・葉	黒・黄	黒・黄	卵形	厚	14.0	-	-	-	口頭：ヨコナデ 花：セイヨウ	新鮮：鮮ハ ケ	口頭：ヨコナデ 花：セイヨウ	新鮮：鮮ハ ケ	2/26	口錐形外輪花 付
1年	366 谷7中型	休・葉	黒・黄	黒・黄	卵形	厚	16.0	-	-	-	口頭：ヨコナデ 花：セイヨウ	新鮮：鮮ハ ケ	口頭：ヨコナデ 花：セイヨウ	新鮮：鮮ハ ケ	1/8	口錐形外輪花 付
1年	367 谷7中型	休・葉	黒・黄	黒・黄	卵形	厚	16.9	-	-	-	口頭：ヨコナデ 花：セイヨウ	新鮮：鮮ハ ケ	口頭：ヨコナデ 花：セイヨウ	新鮮：鮮ハ ケ	2/26	口錐形外輪花 付
1年	368 谷7中型	休・葉	黒・黄	黒・黄	卵形	厚	9.5	-	-	-	口頭：ヨコナデ 花：セイヨウ	新鮮：鮮ハ ケ	口頭：ヨコナデ 花：セイヨウ	新鮮：鮮ハ ケ	1/8	口錐形外輪花 付
1年	369 谷7中型	休・葉	黒・黄	黒・黄	卵形	厚	12.9	-	-	-	口頭：ヨコナデ 花：セイヨウ	新鮮：鮮ハ ケ	口頭：ヨコナデ 花：セイヨウ	新鮮：鮮ハ ケ	3/8	口錐形外輪花 付
1年	370 谷7中型	休・葉	黒・黄	黒・黄	卵形	厚	11.3	16.9	-	-	口頭：ヨコナデ 花：セイヨウ	新鮮：鮮ハ ケ	口頭：ヨコナデ 花：セイヨウ	新鮮：鮮ハ ケ	2/26	口錐形外輪花 付
1年	371 谷7中型	休・葉	黒・黄	黒・黄	卵形	厚	13.4	-	-	-	口頭：ヨコナデ 花：セイヨウ	新鮮：鮮ハ ケ	口頭：ヨコナデ 花：セイヨウ	新鮮：鮮ハ ケ	1/8	口錐形外輪花 付

標本番号	採取地點	通名	番号	口徑	器高	底径	出土	色調	形態	外観観察		内部観察	測定
										内面	外側		
445	谷7中段	井・中尾井	1	18.8			中・石英質・黒紫色少 ・赤色斑少	(外)に赤い斑(内) に赤い斑	体部はやや斜めにして立っており、縁や軸から 引け出している。縁は丸みをもつていて、縁の 内側は滑らかである。	口縁：ヨコナデ 底盤：ハタケ	口縁：ヨコナデ 底盤：ハタケ	1/6	
446	65 谷7中段	井・中尾井	19.5	12.6			中・石英質・黒紫色少 ・赤色斑少	(外)に赤い斑(内) に赤い斑	体部は内側で立ち上がり、縁から斜めにして 外反して居る。口縁部はやがて直角に 直角に曲がる。	口縁：ヨコナデ 底盤：ハタケ	口縁：ヨコナデ 底盤：ハタケ	3/6	
447	谷7中段	井・中尾井	22.3				中・石英質・黒紫色少 ・赤色斑少	(外)に赤い斑(内) に赤い斑	体部は内側で立ち上がり、縁はやがて直角に 直角に曲がる。口縁部はやがて直角に 直角に曲がる。	口縁：ヨコナデ 底盤：ハタケ	口縁：ヨコナデ 底盤：ハタケ	3/6	
448	谷7中段	井・大前井	26.3				中・石英質・黒紫色少 ・赤色斑少	(外)に赤い斑(内) に赤い斑	口縁部はやがて直角に曲がり、口縁部はや がて直角に曲がる。	口縁：ヨコナデ 底盤：ハタケ	口縁：ヨコナデ 底盤：ハタケ	3/6	
449	谷7小窓	井・大前井	30.2				中・石英質・黒紫色少 ・赤色斑少	(外)に赤い斑(内) に赤い斑	口縁部はやがて直角に曲がり、口縁部はや がて直角に曲がる。	口縁：ヨコナデ 底盤：ハタケ	口縁：ヨコナデ 底盤：ハタケ	3/6	
450	谷7中段	井・大前井	29.8	9.8			中・石英質・黒紫色少 ・赤色斑少	(外)に赤い斑(内) に赤い斑	体部は内側で立ち上がり、口縁部はや がて直角に曲がる。	口縁：ヨコナデ 底盤：ハタケ	口縁：ヨコナデ 底盤：ハタケ	3/6	
451	谷7中段	井・大前井	34.2				中・石英質・黒紫色少 ・赤色斑少	(外)に赤い斑(内) に赤い斑	口縁部は内側で立ち上がり、口縁部はや がて直角に曲がる。	口縁：ヨコナデ 底盤：ハタケ	口縁：ヨコナデ 底盤：ハタケ	3/6	
452	65 谷7中段	井・大前井	32.7				中・石英質・黒紫色少 ・赤色斑少	(外)に赤い斑(内) に赤い斑	口縁部は内側で立ち上がり、口縁部はや がて直角に曲がる。	口縁：ヨコナデ 底盤：ハタケ	口縁：ヨコナデ 底盤：ハタケ	3/6	
453	65 谷7中段	井・大前井	35.3	19.0			中・石英質・黒紫色少 ・赤色斑少	(外)に赤い斑(内) に赤い斑	口縁部は内側で立ち上がり、やや斜めに 傾いて居る。	口縁：ヨコナデ 底盤：ハタケ	口縁：ヨコナデ 底盤：ハタケ	3/6	
454	65 谷7中段	井・大前井	4.0				中・石英質・黒紫色少 ・赤色斑少	(外)に赤い斑(内) に赤い斑	口縁部は内側で立ち上がり、やや斜めに 傾いて居る。	口縁：ヨコナデ 底盤：ハタケ	口縁：ヨコナデ 底盤：ハタケ	3/6	
455	谷7中段	井・大前井	28.5	16.6			中・石英質・黒紫色少 ・赤色斑少	(外)に赤い斑(内) に赤い斑	口縁部は内側で立ち上がり、やや斜めに 傾いて居る。	口縁：ヨコナデ 底盤：ハタケ	口縁：ヨコナデ 底盤：ハタケ	4/6	
456	谷7中段	井・ミニチュア	6.0	2.0			中・石英質・黒紫色少 ・赤色斑少	(外)に赤い斑(内) に赤い斑	口縁部は丸みをもつていて、縁は斜めにして 立っている。	口縁：ヨコナデ 底盤：ハタケ	口縁：ヨコナデ 底盤：ハタケ	3/6	
457	谷7中段	井・ミニチュア	6.7	4.2			中・石英質・黒紫色少 ・赤色斑少	(外)に赤い斑(内) に赤い斑	口縁部は丸みをもつていて、縁は斜めにして 立っている。	口縁：ヨコナデ 底盤：ハタケ	口縁：ヨコナデ 底盤：ハタケ	3/6	
458	谷7中段	井・大前井	4.0	1.8			中・石英質・黒紫色少 ・赤色斑少	(外)に赤い斑(内) に赤い斑	口縁部は丸みをもつていて、縁は斜めにして 立っている。	口縁：ヨコナデ 底盤：ハタケ	口縁：ヨコナデ 底盤：ハタケ	2/6	
461	谷7中段	井・大前井	16.9				中・石英質・黒紫色少 ・赤色斑少	(外)に赤い斑(内) に赤い斑	口縁部より口縁部は直角に立ち上がり、直角的 に内側へ傾いて居る。	口縁：ヨコナデ 底盤：ハタケ	口縁：ヨコナデ 底盤：ハタケ	4/6	
462	谷7中段	井・大前井	17.8				中・石英質・黒紫色少 ・赤色斑少	(外)に赤い斑(内) に赤い斑	口縁部より口縁部は直角に立ち上がり、直角的 に内側へ傾いて居る。	口縁：ヨコナデ 底盤：ハタケ	口縁：ヨコナデ 底盤：ハタケ	4/6	

研究組別	組別名	器種	口幅	跡高	通量	色斑	内面形態	外面形態	被毛	備考
1453	谷子中槽	牛・豚口型	19.6			(外)灰青(内)にぶい 色斑少・黑色斑少	頭部は外側にして立ち上がり、頭の中心に所れで、解・新ヶの後一毫ヨコナデ	被毛ナガの後ヨコナデ	2/6	
1454	65 谷子中槽	牛・豚口型	15.2	27.2		中・石青斑・黑色斑少 ・黑色斑少・黑色斑少	頭部は外側にして立ち上がり、頭の中心に所れで、解・新ヶの後一毫ヨコナデ	被毛ナガの後ヨコナデ	2/6	
1455	65 谷子中槽	牛・豚口型	17.6	28.3		中・石青斑・黑色斑少 ・黑色斑少・黑色斑少	頭部は外側にして立ち上がり、頭の中心に所れで、解・新ヶの後一毫ヨコナデ	被毛ナガの後ヨコナデ	7/6	
1456	牛・豚口型	牛・豚口型	27.2			中・石青斑・黑色斑少 ・黑色斑少・黑色斑少	頭部は外側にして立ち上がり、頭の中心に所れで、解・新ヶの後一毫ヨコナデ	被毛ナガの後ヨコナデ	2/6	
1457	65 谷子中槽	牛・豚口型	23.0			中・石青斑・黑色斑少 ・黑色斑少・黑色斑少	頭部は外側にして立ち上がり、頭の中心に所れで、解・新ヶの後一毫ヨコナデ	被毛ナガの後ヨコナデ	4/6	
1458	65 谷子中槽	牛・豚口型	21.2	(33.7)	(11.4)	中・石青斑・黑色斑少 ・黑色斑少・黑色斑少	頭部は外側にして立ち上がり、頭の中心に所れで、解・新ヶの後一毫ヨコナデ	被毛ナガの後ヨコナデ	4/6	
1459	65 谷子中槽	牛・二重口型	17.4			中・石青斑・黑色斑少 ・黑色斑少・黑色斑少	頭部は外側にして立ち上がり、頭の中心に所れで、解・新ヶの後一毫ヨコナデ	被毛ナガの後ヨコナデ	2/6	
1470	65 谷子中槽	牛・二重口型	16.4	(52.4)	9.0	中・石青斑・黑色斑少 ・黑色斑少・黑色斑少	頭部は外側にして立ち上がり、頭の中心に所れで、解・新ヶの後一毫ヨコナデ	被毛ナガの後ヨコナデ	2/6	
1471	谷子中槽	牛・猪	11.5			中・石青斑・黑色斑少 ・黑色斑少・黑色斑少	頭部は外側にして立ち上がり、頭の中心に所れで、解・新ヶの後一毫ヨコナデ	被毛ナガの後ヨコナデ	2/6	
1472	谷子中槽	牛・猪	13.2			中・石青斑・黑色斑少 ・黑色斑少・黑色斑少	頭部は外側にして立ち上がり、頭の中心に所れで、解・新ヶの後一毫ヨコナデ	被毛ナガの後ヨコナデ	2/6	
1473	谷子中槽	牛・猪	17.9			中・石青斑・黑色斑少 ・黑色斑少・黑色斑少	頭部は外側にして立ち上がり、頭の中心に所れで、解・新ヶの後一毫ヨコナデ	被毛ナガの後ヨコナデ	2/6	
1474	65 谷子中槽	牛・猪	15.8	(20.3)		中・石青斑・黑色斑少 ・黑色斑少・黑色斑少	頭部は外側にして立ち上がり、頭の中心に所れで、解・新ヶの後一毫ヨコナデ	被毛ナガの後ヨコナデ	3/6	
1475	谷子中槽	牛・猪	19.2			中・石青斑・黑色斑少 ・黑色斑少・黑色斑少	頭部は外側にして立ち上がり、頭の中心に所れで、解・新ヶの後一毫ヨコナデ	被毛ナガの後ヨコナデ	1/6	
1476	谷子中槽	牛・猪?	(26.6)			中・石青斑・黑色斑少 ・黑色斑少・黑色斑少	頭部は外側にして立ち上がり、頭の中心に所れで、解・新ヶの後一毫ヨコナデ	被毛ナガの後ヨコナデ	1/6	

種類	回数	地名	学名	部位	口音	研究	種類	施工	外観観察	内面観察	内面手	裏手
493	谷7中槽	井・脚			19.6							
494	谷7中槽	井・脚			17.0							
495	谷7中槽	井・小底脚			7.6	5.1						
496	谷7中槽	井・小底脚			10.0	4.0	(4.2)					
497	谷7中槽	井・小底脚			10.4	3.6						
498	谷7中槽	井・小底脚			11.6							
499	谷7中槽	井・小底脚			11.3							
500	谷7中槽	井・小底脚			12.7	5.7						
501	谷7中槽	井・小底脚			8.8	2.1						
502	谷7中槽	井・小底脚			8.6	2.3						
503	谷7中槽	井・小底脚			9.6	2.6						
504	谷7中槽	井・小底脚			12.6							
505	谷7中槽	井・小底脚			12.4	(4.5)						
506	谷7中槽	井・小底脚			13.4	(4.0)						
507	谷7中槽	井・小底脚			13.2	4.1						
508	谷7中槽	井・小底脚			14.0							
509	谷7中槽	井・小底脚			14.8							
510	谷7中槽	井・小底脚			15.2							
511	谷7中槽	井・小底脚			16.7							
512	谷7中槽	井・中底脚			17.0							
513	谷7中槽	井・中底脚			17.0							
514	谷7中槽	井・中底脚										
515	谷7中槽	井・中底脚			16.9	9.4						

種別	回数	地名	音韻	口語	書籍	歴史	色調	形容	外形容	内形容	発音字
和歌山	537	谷子中郷	ホ・ヒロ	24.6	中・石良音・黒田音少 (外)に古い音 (内)に	口語調はやかに外れて火多くへ進みく。端はねはね	端は強く火多くへ進みく。端はねはね	ハタリ	ハタリ	細片	
	538	谷子中郷	ホ・ヒロ	26.4	中・石良音・黒田音少 (外)に古い音 (内)に	口語調はやかに外れて火多くへ進みく。口語調はやかに外れて火多くへ進みく。	特ハタの後ヨコナデ	ハタリ	ハタリ	口語調形容	
	539	谷子中郷	ホ・ヒロ	26.5	中・石良音・黒田音少 (外)に古い音 (内)に	口語調はやかに外れて火多くへ進みく。端はねはね	端は強く火多くへ進みく。	ヨコナデ	ヨコナデ	細片	
	540	谷子中郷	ホ・ヒロ	26.6	中・石良音・黒田音少 (外)に古い音 (内)に	口語調はやかに外れて火多くへ進みく。端はねはね	端は強く火多くへ進みく。	ハタリ	ヨコナデ・ハタリ	ハタリ	
	541	谷子中郷	ホ・ヒロ	27.0	中・石良音・黒田音少 (外)に古い音 (内)に	口語調はやかに外れて火多くへ進みく。端はねはね	端は強く火多くへ進みく。	ハタリ	ハタリ	細片ナガ後ヨコナデ・一部斜	ハタ
	542	谷子中郷	ホ・ヒロ	30.2	中・石良音・黒田音少 (外)に古い音 (内)に	口語調はやかに外れて火多くへ進みく。端はねはね	端は強く火多くへ進みく。	ハタリ	ハタリ	細片ナガ後ヨコナデ	ハタ
	543	谷子中郷	ホ・ヒロ	31.0	中・石良音・黒田音少 (外)に古い音 (内)に	口語調はやかに外れて火多くへ進みく。端はねはね	端は強く火多くへ進みく。	ハタリ	ハタリ	細片ナガ後ヨコナデ	ハタ
	544	谷子中郷	ホ・ヒロ	31.6	中・石良音・黒田音少 (外)に古い音 (内)に	口語調はやかに外れて火多くへ進みく。端はねはね	端は強く火多くへ進みく。	ハタリ	ハタリ	細片ナガ後ヨコナデ	ハタリ
	545	谷子中郷	ホ・ヒロ	32.9	中・石良音・黒田音少 (外)に古い音 (内)に	口語調はやかに外れて火多くへ進みく。端はねはね	端は強く火多くへ進みく。	ハタリ	ハタリ	細片ナガ後ヨコナデ	ハタリ
	546	谷子中郷	ホ・ヒロ	33.6	中・石良音・黒田音少 (外)に古い音 (内)に	口語調はやかに外れて火多くへ進みく。端はねはね	端は強く火多くへ進みく。	ハタリ	ハタリ	細片ナガ後ヨコナデ	ハタリ
	547	谷子中郷	ホ・ヒロ	32.8	中・石良音・黒田音少 (外)に古い音 (内)に	口語調はやかに外れて火多くへ進みく。端はねはね	端は強く火多くへ進みく。	ハタリ	ハタリ	細片ナガ後ヨコナデ	ハタリ
	548	谷子中郷	ホ・ヒロ	35.0	中・石良音・黒田音少 (外)に古い音 (内)に	口語調はやかに外れて火多くへ進みく。端はねはね	端は強く火多くへ進みく。	ハタリ	ハタリ	細片ナガ後ヨコナデ	ハタリ
	549	谷子中郷	ホ・ヒロ	30.8	中・石良音・黒田音少 (外)に古い音 (内)に	口語調はやかに外れて火多くへ進みく。端はねはね	端は強く火多くへ進みく。	ハタリ	ハタリ	細片ナガ後ヨコナデ	ハタリ
	550	谷子中郷	ホ・ヒロ	35.6	中・石良音・黒田音少 (外)に古い音 (内)に	口語調はやかに外れて火多くへ進みく。端はねはね	端は強く火多くへ進みく。	ヨコナデ	ヨコナデ	細片ナガ後ヨコナデ	ハタリ
	551	谷子中郷	ホ・ヒロ	21.4	中・石良音・黒田音少 (外)に古い音 (内)に	口語調はやかに外れて火多くへ進みく。	端は強く火多くへ進みく。	ハタリ	ハタリ	細片ナガ後ヨコナデ	ハタリ

部屋番号	部屋名	面積	口直室	断続	断続	外間調理室	内間調理室	洗面室	便所
552	付7中場	87.74m ²	第一一口直室	16.8	断続	断続	一口直室	ココナデ	7.6
553	付7中場	9.7	水・便	10.6	断続	断続	一口直室	ココナデ	7.6
554	付7中場	9.7	水・便	9.9	断続	断続	一口直室	ココナデ	7.6
555	付7中場	9.7	水・便	12.6	断続	断続	一口直室	ココナデ	7.6
556	付7中場	9.7	水・便	14.7	断続	断続	一口直室	ココナデ	7.6
557	付7中場	9.7	水・便	11.0	断続	断続	一口直室	ココナデ	7.6
558	付7中場	9.7	水・便	11.6	断続	断続	一口直室	ココナデ	7.6
559	付7中場	9.7	水・便	11.6	断続	断続	一口直室	ココナデ	7.6
560	付7中場	9.7	水・便	11.3	断続	断続	一口直室	ココナデ	7.6
561	付7中場	9.7	水・便	13.0	断続	断続	一口直室	ココナデ	7.6
562	付7中場	9.7	水・便	12.5	断続	断続	一口直室	ココナデ	7.6
563	付7中場	9.7	水・便	13.2	断続	断続	一口直室	ココナデ	7.6
564	付7中場	9.7	水・便	12.3	断続	断續	一口直室	ココナデ	7.6
565	付7中場	9.7	水・便	13.8	断続	断續	一口直室	ココナデ	7.6
566	付7中場	9.7	水・便	12.4	断續	断續	一口直室	ココナデ	7.6
567	付7中場	9.7	水・便	12.2	断續	断續	一口直室	ココナデ	7.6
568	付7中場	9.7	水・便	14.2	断續	断續	一口直室	ココナデ	7.6

標題	出版者	著者	口述	断片	題名	内面語彙	外面語彙	発行年	備考
569	谷7中絶	休・慶	13.8	中: 石音 - 黒雲母 - 金色粒少	(休)に古い貴賤(内) に古い貴賤	口頭語は確かに所り返して外反して開 く。口頭語は西向へ転じる。	口頭: (休)コナデ 休語: (休)ハ タケ	1/3	
570	谷7中絶	休・慶	13.6	中: 石音 - 黒雲母 - 金色粒少	(休)に古い貴賤(内) に古い貴賤	口頭語は確かに所り返して外反して開 く。口頭語は西向へ転じる。	口頭: (休)コナデ 休語: (休)ハ タケ ? の他コナデ	1/3	
571	谷7中絶	休・慶	12.4	中: 石音少 - 黑色粒少	(休)黒(内)黒	口頭語は確かに所り返して外反して開 く。口頭語は西向へ転じる。	口頭: (休)コナデ 休語: (休)ハ タケ	1/3	
572	谷7中絶	休・慶	14.9	中: 石音少 - 黑色粒少	(休)明か透(内)透	口頭語はやや強く所り返して外反して開 く。口頭語は西向へ転じる。	口頭: (休)コナデ 休語: (休)ハ タケ	1/3	
573	谷7中絶	休・慶	15.0	中: 石音少 - 黑色粒少	(休)に古い貴賤(内) に古い貴賤	口頭語はやや強く所り返して外反して開 く。口頭語は西向へ転じる。	口頭: (休)コナデ 休語: (休)ハ タケ	1/3	
574	谷7中絶	休・慶	13.0	中: 石音多 - 黑雲母 - 金色粒少	(休)に古い貴賤(内) に古い貴賤	口頭語はやや強く所り返して外反して開 く。口頭語は西向へ転じる。	口頭: (休)コナデ ? 休語: (休)ハ タケ	1/3	休場下等外用 符
575	谷7中絶	休・慶?	14.4	中: 石音少 - 黑色粒少	(休)に古い貴賤(内)	口頭語はやや強く所り返して外反して開 く。口頭語は西向へ転じる。	口頭: (休)コナデ ? 休語: (休)ハ タケ ?	1/3	
576	谷7中絶	休・慶	14.0	中: 石音少 - 黑色粒少	(休)に古い貴賤(内) に古い貴賤	口頭語はやや強く所り返して外反して開 く。口頭語は西向へ転じる。	口頭: (休)コナデ 休語: (休)ハ タケ	1/3	
577	谷7中絶	休・慶	16.4	中: 石音少 - 黑色粒少	(休)に古い貴賤(内) に古い貴賤	口頭語はやや強く所り返して外反して開 く。口頭語は西向へ転じる。	口頭: (休)コナデ 休語: (休)ハ タケ	1/3	
578	谷7中絶	休・慶	14.0	中: 石音少 - 黑雲母 - 金色粒少	(休)に古い貴賤(内) に古い貴賤	口頭語はやや強く所り返して外反して開 く。口頭語は西向へ転じる。	口頭: (休)コナデ 休語: (休)ハ タケ	1/3	休場下等外用 符
579	谷7中絶	休・慶	13.0	中: 石音多 - 黑雲母 - 金色粒少	(休)黒(内)黒	口頭語はやや強く所り返して外反して開 く。口頭語は西向へ転じる。	口頭: (休)コナデ ? ハタリ 休 語: (休)ハタケ ? ハタリ	2/3	
580	谷7中絶	休・慶	13.0	中: 石音多 - 黑雲母 - 金色粒少	(休)明か透(内)透	口頭語はやや強く所り返して外反して開 く。口頭語は西向へ転じる。	ハタリ、開ササエ	3/3	
581	谷7中絶	休・慶	11.9	中: 石音少 - 黑雲母 - 金色粒少	(休)に古い貴賤(内)	口頭語はやや強く所り返して外反して開 く。口頭語は西向へ転じる。	口頭: (休)コナデ 休語: (休)ハ タケ	1/3	
582	谷7中絶	休・慶	11.9	中: 石音少 - 黑色粒少	(休)に古い貴賤(内)	口頭語はやや強く所り返して外反して開 く。口頭語は西向へ転じる。	口頭: (休)コナデ 休語: (休)ハ タケ	2/3	
583	谷7中絶	休・慶	14.0	中: 石音少 - 黑色粒少	(休)浅黄透(内)透	口頭語はやや強く所り返して外反して開 く。口頭語は西向へ転じる。	口頭: (休)コナデ 休語: (休)ハ タケ	3/3	口頭・結果 手等外用符
584	谷7中絶	休・慶	16.3	中: 石音多 - 黑雲母 - 金色粒少	(休)に古い貴賤(内) に古い貴賤	口頭語はやや強く所り返して外反して開 く。口頭語は西向へ転じる。	口頭: (休)コナデ 休語: (休)ハ タケ ? の他コナデ	2/3	口頭・結果 手等外用符 手等外用符
585	谷7中絶	休・慶	15.9	23.2	4.4	口頭語はやや強く所り返して外反して開 く。口頭語は西向へ転じる。	口頭: (休)コナデ ? 休語: (休)ハ タケ ? ハタリ	5/3	口頭・結果 手等外用符 手等外用符

登録番号	登録名	管轄	口徑	掘深	直径	断土	色調	断面	付記箇所	件件年	備考
646 71 谷 7 甲号	井・小判井	9.8	5.7	中：土質好、泥質少 ・半径少	(外)にぶい(内)に ・半径少	口	口	口様	ヨコナデ 体形：横板	7/8	
647 71 谷 7 甲号	井・小判井	11.5		中：土質好、泥質少 ・半径少	(外)にぶい(内)に ・半径少	口	口	口様	ヨコナデ 体形：横板 テの後ヨコナデ	4/8	
648 71 谷 7 甲号	井・小判井	8.2		中：土質好、泥質少 ・半径少	(外)にぶい(内)に ・半径少	口	口	口様	ヨコナデ 体形：横板 テの後ヨコナデ	1/8	
649 71 谷 7 甲号	井・小判井	16.2		中：土質好、泥質少 ・半径少	(外)にぶい(内)に ・半径少	口	口	口様	ヨコナデ 体形：横板 テの後ヨコナデ	1/8	
650 71 谷 7 甲号	井・小判井	14.4		中：土質好、泥質少 ・半径少	(外)にぶい(内)に ・半径少	口	口	口様	ヨコナデ 体形：横板 テの後ヨコナデ	2/8	
651 71 谷 7 甲号	井・中判井	19.2		中：土質好、泥質少 ・半径少	(外)にぶい(内)に ・半径少	口	口	口様	ヨコナデ ハタメフ 体 形：横板テナメフ	1/8	
652 71 谷 7 甲号	井・中判井	19.2		中：土質好、泥質少 ・半径少	(外)にぶい(内)に ・半径少	口	口	口様	ヨコナデ 体形：ナ ・横板テナメフ	6/8	
653 71 谷 7 甲号	井・中判井	19.0		中：土質多、泥質少 ・半径少	(外)にぶい(内)に ・半径少	口	口	口様	ヨコナデ 体形：横板テナメフ	2/8	
654 71 谷 7 甲号	井・中判井	19.0	7.8	中：土質多、泥質少 ・半径少	(外)にぶい(内)に ・半径少	口	口	口様	ヨコナデ ハタメフ 体 形：横板テナメフ	4/8	
655 71 谷 7 甲号	井・中判井	23.2		中：土質多、泥質少 ・半径少	(外)にぶい(内)に ・半径少	口	口	口様	ヨコナデ ハタメフ 体 形：横板テナメフ	6/8	
656 71 谷 7 甲号	井・中判井	21.2	9.3	中：土質多、泥質少 ・半径少	(外)にぶい(内)に ・半径少	口	口	口様	ヨコナデ ハタメフ 体 形：横板テナメフ	7/8	
657 71 谷 7 甲号	井・大判井	25.0		中：土質多、泥質少 ・半径少	(外)にぶい(内)に ・半径少	口	口	口様	ヨコナデ ハタメフ 体 形：横板テナメフ	2/8	
658 71 谷 7 甲号	井・大判井	27.6		中：土質多、泥質少 ・半径少	(外)にぶい(内)に ・半径少	口	口	口様	ヨコナデ ハタメフ 体 形：横板テナメフ	1/8	
659 71 谷 7 甲号	井・大判井	(28.2)		中：土質好、泥質少 ・半径少	(外)にぶい(内)に ・半径少	口	口	口様	ヨコナデ 体形：横板 テナメフ	3/8	
660 71 谷 7 甲号	井・大判井	26.8		中：土質少、泥質少 ・半径少	(外)にぶい(内)に ・半径少	口	口	口様	ヨコナデ 体形：横板 テナメフ	3/8	
661 71 谷 7 甲号	井・大判井	(29.8)		中：土質少、泥質少 ・半径少	(外)にぶい(内)に ・半径少	口	口	口様	ヨコナデ 体形：横板 テナメフ	1/8	
662 71 谷 7 甲号	井・大判井	(37.0)		中：土質少、泥質少 ・半径少	(外)にぶい(内)に ・半径少	口	口	口様	ヨコナデ 体形：横板 テナメフ	1/8	
663 71 谷 7 甲号	井・深穿井			中：土質好、泥質少 ・半径少	(外)にぶい(内)に ・半径少	口	口	口様	ヨコナデ ハタメフ 体 形：横板テナメフ	5/8	
664 71 谷 7 甲号	井・小判丸井土	10.7	6.7	中：土質好、泥質少 ・半径少	(外)にぶい(内)に ・半径少	口	口	口様	ヨコナデ ハタメフ 体 形：横板テナメフ	2/8	
665 71 谷 7 甲号	井・ニニユニア	10.8		中：土質少、泥質少 ・半径少	(外)にぶい(内)に ・半径少	口	口	口様	ヨコナデ 体形：横板 テナメフ	2/8	
666 71 谷 7 甲号	土器	5.4		中：土質好、泥質少 ・半径少	(外)にぶい(内)に ・半径少	口	口	口様	ヨコナデ ハタメフ ・ナメフ	2/8	

番号	地名	通称名	面積	口徑	航路	出力	色調	外因強度	航行条件
667	72 7 中間	井、二ニチエヨ	3.3	1.6	中：石英岩・赤色粘土 外：赤色粘土	(外)赤色(内)黄	口経済は久く新め。西形生長礁の丸底。	弱オキニ、マメツ	7/6
668	72 7 中間	井、二ニチエヨ	5.6	3.3	中：石英岩・赤色粘土 外：赤色粘土・灰岩	(外)に赤い黄岩(内)	口経済丸底。口経済は小さく外底ある。	弱オキニ、ナデ	5/6
669	72 7 中間	井、二ニチエヨ	4.2	2.9	中：石英岩・赤色粘土 外：赤色粘土	(外)赤色(内)灰岩	口経済丸底やや小傾斜。礁頭は高く尖る。	弱オキニ、ナデ	4/6
670	72 7 中間	井、製造土器	-	-	中：石英岩・黑岩(内) 外：灰岩	(外)灰岩(内)灰岩	口経済丸底を形成し、礁頭部のコナヂア?にうち外側に小さく突出する。	礁板ナデ	航行
671	72 7 中間	井、製造土器	-	-	中：石英岩	(外)に赤い礁(内)灰	口経済丸底内に野なる。テッキナヘタリ	ナデ	航行
672	72 7 中間	井、製造土器	-	-	中：石英岩	(外)に赤い礁(内)灰	手引礁板ナデによりシラカベ内に野なる。テッキナヘタリ	礁板ナデ	航行
673	72 7 中間	井、製造土器	-	-	中：石英岩・黑岩(内) 外：灰岩(内)灰岩	(外)灰岩(内)灰岩	口経済丸底を形成し、礁頭部はコナヂア?を構成する。	ナデ	航行
674	72 7 中間	井、製造土器	6.5	7.2	中：石英岩・黑岩(内) 外：灰岩(内)灰岩	(外)灰岩(内)灰岩	体経はやや弱めで正とうとが。	ナダウハカリ	航行
675	72 7 中間	井、製造土器	4.7	5.6	中：石英岩・黑岩(内) 外：灰岩(内)灰岩	(外)灰岩(内)灰岩	礁頭部はやや小底らしく台形付。	弱オキニ、ナデ	航行
676	72 7 中間	井、製造土器	4.5	5.6	中：石英岩・黑岩(内) 外：灰岩(内)灰岩	(外)灰岩(内)灰岩	礁頭部はやや小底らしく台形付。	弱オキニ、ナデ	航行
677	72 7 中間	井、製造土器	4.3	5.6	中：石英岩・黑岩(内) 外：灰岩(内)灰岩	(外)灰岩(内)灰岩	礁頭部はやや小底らしく台形付。	弱オキニ、ナデ	航行
678	72 7 中間	井、製造土器	4.8	5.6	中：石英岩・黑岩(内) 外：灰岩(内)灰岩	(外)灰岩(内)灰岩	礁頭部はやや小底らしく台形付。	弱オキニ、ハカリ	航行
679	72 7 中間	井、製造土器	4.5	5.6	中：石英岩・黑岩(内) 外：灰岩(内)灰岩	(外)灰岩(内)灰岩	礁頭部はやや小底らしく台形付。	体経：ナタア? 間合：船オキニ エウハカリ	航行
680	72 7 上端	井、宜	7.1	-	中：石英岩・黑岩(内) 外：灰岩(内)灰岩	(外)灰岩(内)灰岩	礁頭部はやや小底らしく台形付。	ハカリ	航行
681	72 7 上端	井、宜	-	-	中：石英岩・黑岩(内) 外：灰岩(内)灰岩	(外)灰岩(内)灰岩	口経済丸底に3条の凹凸を認める。	弱ハゲ・ヨリチャド・アツク	航行
682	72 7 上端	井、宜	-	-	中：石英岩・黑岩(内) 外：灰岩(内)灰岩	(外)灰岩(内)灰岩	礁頭部はやや小底らしく台形付。	弱ハゲ・ヨリチャド・アツク	航行
683	72 7 上端	井、宜	14.8	-	中：石英岩・黑岩(内) 外：灰岩(内)灰岩	(外)に赤い礁(内)灰	礁頭部はやや小底らしく台形付。	弱ハゲ・ヨリチャド・アツク	航行
684	72 7 上端	井、宜	17.9	-	中：石英岩・黑岩(内) 外：灰岩(内)灰岩	(外)に赤い礁(内)灰	礁頭部はやや小底らしく台形付。	弱ハゲ・ヨリチャド・アツク	航行
685	72 7 上端	井、宜	18.8	-	中：石英岩・黑岩(内) 外：灰岩(内)灰岩	(外)に赤い礁(内)灰	礁頭部はやや小底らしく台形付。	弱ハゲ・ヨリチャド・アツク	航行
686	72 7 上端	井、宜	18.3	-	中：石英岩・黑岩(内) 外：灰岩(内)灰岩	(外)に赤い礁(内)灰	礁頭部はやや小底らしく台形付。	弱ハゲ・ヨリチャド・アツク	航行
687	72 7 上端	井、宜	20.8	-	中：石英岩・黑岩(内) 外：灰岩(内)灰岩	(外)に赤い礁(内)灰	礁頭部はやや小底らしく台形付。	弱ハゲ・ヨリチャド・アツク	航行
688	72 7 上端	井、宜	21.6	-	中：石英岩・黑岩(内) 外：灰岩(内)灰岩	(外)に赤い礁(内)灰	礁頭部はやや小底らしく台形付。	弱ハゲ・ヨリチャド・アツク	航行

種別	説明	説明	説明	説明	説明	説明	説明	説明
669	谷7上槽 赤・赤口槽	赤・赤口槽	口槽	赤	赤	赤	赤	赤
670	谷7上槽 赤・赤口槽?	赤・赤口槽?	2.4	赤・赤口槽・黒苦味少	赤・赤口槽・黒苦味少	口にぶい黒味(内)赤苦味	口にぶい黒味(内)赤苦味	口にぶい黒味(内)赤苦味
691	谷7上槽 赤・赤口槽?	赤・赤口槽?	25.4	赤・石苦味・黒苦味少	赤・石苦味・黒苦味少	口にぶい黒味(内)赤苦味	口にぶい黒味(内)赤苦味	口にぶい黒味(内)赤苦味
692	谷7上槽 赤・赤口槽	赤・赤口槽	25.4	中・赤苦味・黒苦味少	中・赤苦味・黒苦味少	口にぶい黒味(内)赤苦味	口にぶい黒味(内)赤苦味	口にぶい黒味(内)赤苦味
693	谷7上槽 赤・赤口槽	赤・赤口槽	16.6	赤・赤苦味・黒苦味少	赤・赤苦味・黒苦味少	口にぶい黒味(内)赤苦味	口にぶい黒味(内)赤苦味	口にぶい黒味(内)赤苦味
694	73 谷7上槽 赤・赤口槽	赤・赤口槽	26.2	赤・赤苦味・黒苦味少	赤・赤苦味・黒苦味少	口にぶい黒味(内)赤苦味	口にぶい黒味(内)赤苦味	口にぶい黒味(内)赤苦味
695	73 谷7上槽 赤・赤口槽	赤・赤口槽	16.8	30.2	6.4	赤・石苦味・黒苦味少	赤・石苦味・黒苦味少	赤・石苦味・黒苦味少
696	73 谷7上槽 赤・二重口槽?	赤・二重口槽?	20.9	赤・石苦味・黒苦味少	赤・石苦味・黒苦味少	口にぶい黒味(内)赤苦味	口にぶい黒味(内)赤苦味	口にぶい黒味(内)赤苦味
697	73 谷7上槽 赤・二重口槽?	赤・二重口槽?	21.8 (31.6) (6.0)	中・赤苦味・黒苦味少	中・赤苦味・黒苦味少	口にぶい黒味(内)赤苦味	口にぶい黒味(内)赤苦味	口にぶい黒味(内)赤苦味
698	73 谷7上槽 赤・二重口槽?	赤・二重口槽?	22.1	中・赤苦味・黒苦味少	中・赤苦味・黒苦味少	口にぶい黒味(内)赤苦味	口にぶい黒味(内)赤苦味	口にぶい黒味(内)赤苦味
699	73 谷7上槽 赤・二重口槽?	赤・二重口槽?	27.2	中・赤苦味・黒苦味少	中・赤苦味・黒苦味少	口にぶい黒味(内)赤苦味	口にぶい黒味(内)赤苦味	口にぶい黒味(内)赤苦味
700	73 谷7上槽 赤・二重口槽?	赤・二重口槽?	12.3	中・赤苦味・黒苦味少	中・赤苦味・黒苦味少	口にぶい黒味(内)赤苦味	口にぶい黒味(内)赤苦味	口にぶい黒味(内)赤苦味
701	73 谷7上槽 赤・二重口槽?	赤・二重口槽?	12.6	中・赤苦味・黒苦味少	中・赤苦味・黒苦味少	口にぶい黒味(内)赤苦味	口にぶい黒味(内)赤苦味	口にぶい黒味(内)赤苦味
702	73 谷7上槽 赤・二重口槽?	赤・二重口槽?	15.6	中・赤苦味・黒苦味少	中・赤苦味・黒苦味少	口にぶい黒味(内)赤苦味	口にぶい黒味(内)赤苦味	口にぶい黒味(内)赤苦味

種類	学名	日本名	分布	高さ	花期	花被	外観		内面観	果実形	宿存
							地土	葉形			
アカツキヒユウガ	Thlaspi arvense	アカツキヒユウガ	日本全国	13.7	5月上旬	葉被	田:石英多・黒粉多 ・赤色较少	狭披针形 葉先鋸歯無く鋸歯有り 葉裏無毛	口縁:ハクリアメツ ナツナデ・ハクリ・アツ リ	口縁:ハクリアメツ ナツナデ・ハクリ	2/6
ヒヤマヒユウガ	Thlaspi alpinum	ヒヤマヒユウガ	日本全国	15.6	5月上旬	葉被	田:石英多・黒粉多 ・赤色较少	狭披针形 葉先鋸歯無く鋸歯有り 葉裏無毛	口縁:ヨコナデ ナツナデ	口縁:ヨコナデ ナツナデ	1/6
ヒヤマヒユウガ	Thlaspi alpinum	ヒヤマヒユウガ	日本全国	13.8	5月上旬	葉被	中:石英多・黒粉多 ・赤色较少	狭披针形 葉先鋸歯無く鋸歯有り 葉裏無毛	口縁:ヨコナデ ナツナデ	口縁:ヨコナデ ナツナデ	1/6
ヒヤマヒユウガ	Thlaspi alpinum	ヒヤマヒユウガ	日本全国	14.2	5月上旬	葉被	中:石英多・黒粉多 ・赤色较少	狭披针形 葉先鋸歯無く鋸歯有り 葉裏無毛	口縁:ヨコナデ ナツナデ	口縁:ヨコナデ ナツナデ	1/6
ヒヤマヒユウガ	Thlaspi alpinum	ヒヤマヒユウガ	日本全国	12.6	5月上旬	葉被	中:石英多・黒粉多 ・赤色较少	狭披针形 葉先鋸歯無く鋸歯有り 葉裏無毛	口縁:ヨコナデ ナツナデ	口縁:ヨコナデ ナツナデ	1/6
ヒヤマヒユウガ	Thlaspi alpinum	ヒヤマヒユウガ	日本全国	11.8	5月上旬	葉被	中:石英多・黒粉多 ・赤色较少	狭披针形 葉先鋸歯無く鋸歯有り 葉裏無毛	口縁:ヨコナデ ナツナデ	口縁:ヨコナデ ナツナデ	1/6
ヒヤマヒユウガ	Thlaspi alpinum	ヒヤマヒユウガ	日本全国	14.0	5月上旬	葉被	中:石英多・黒粉多 ・赤色较少	狭披针形 葉先鋸歯無く鋸歯有り 葉裏無毛	口縁:ヨコナデ ナツナデ	口縁:ヨコナデ ナツナデ	1/6
ヒヤマヒユウガ	Thlaspi alpinum	ヒヤマヒユウガ	日本全国	14.8	5月上旬	葉被	中:石英多・黒粉多 ・赤色较少	狭披针形 葉先鋸歯無く鋸歯有り 葉裏無毛	口縁:ヨコナデ ナツナデ	口縁:ヨコナデ ナツナデ	1/6
ヒヤマヒユウガ	Thlaspi alpinum	ヒヤマヒユウガ	日本全国	16.1	5月上旬	葉被	中:石英多・黒粉多 ・赤色较少	狭披针形 葉先鋸歯無く鋸歯有り 葉裏無毛	口縁:ヨコナデ ナツナデ	口縁:ヨコナデ ナツナデ	1/6
ヒヤマヒユウガ	Thlaspi alpinum	ヒヤマヒユウガ	日本全国	14.5	5月上旬	葉被	中:石英多・黒粉多 ・赤色较少	狭披针形 葉先鋸歯無く鋸歯有り 葉裏無毛	口縁:ヨコナデ ナツナデ	口縁:ヨコナデ ナツナデ	1/6
ヒヤマヒユウガ	Thlaspi alpinum	ヒヤマヒユウガ	日本全国	16.0	5月上旬	葉被	中:石英多・黒粉多 ・赤色较少	狭披针形 葉先鋸歯無く鋸歯有り 葉裏無毛	口縁:ヨコナデ ナツナデ	口縁:ヨコナデ ナツナデ	1/6
ヒヤマヒユウガ	Thlaspi alpinum	ヒヤマヒユウガ	日本全国	15.4	5月上旬	葉被	中:石英多・黒粉多 ・赤色较少	狭披针形 葉先鋸歯無く鋸歯有り 葉裏無毛	口縁:ヨコナデ ナツナデ	口縁:ヨコナデ ナツナデ	1/6

標記	回数	通名	部番	口直	25cm	直徑	15.0	直徑	13.2	直徑	14.1	直徑	18.0	直徑	17.6	直徑	(外)直角(内)直角	内面調査	外面調査	所持者	備考
																		色調	(外)直角(内)直角	色調	(外)直角(内)直角
761	谷子上槽	赤・黒																口調：マツメツ・ハカリ 体 高さ：ヨコナナ・タツ 体 幅：ハタリ・ハカリ	口調：マツメツ・ハカリ 体 高さ：ヨコナナ・タツ 体 幅：ハタリ・ハカリ	1/8	
762	谷子上槽	赤・黒																口調：ヨコナダ 体 高さ：ヨコナダ 体 幅：ハタリ・ハカリ	口調：ヨコナダ 体 高さ：ヨコナダ 体 幅：ハタリ・ハカリ	1/8	
763	谷子上槽	赤・黒																口調：ヨコナダ 体 高さ：ヨコナダ 体 幅：ハタリ・ハカリ	口調：ヨコナダ 体 高さ：ヨコナダ 体 幅：ハタリ・ハカリ	1/8	体調下半面 偏行者
764	谷子上槽	赤・黒																口調：ヨコナダ 体 高さ：ヨコナダ 体 幅：ハタリ・ハカリ	口調：ヨコナダ 体 高さ：ヨコナダ 体 幅：ハタリ・ハカリ	1/8	
765	谷子上槽	赤・黒																マツメ・ハカリ 体 高さ：ヨコナダ 体 幅：ハタリ・ハカリ	マツメ・ハカリ 体 高さ：ヨコナダ 体 幅：ハタリ・ハカリ	1/8	
766	74 谷子上槽	赤・黒?																マツメ・ハカリ 体 高さ：ヨコナダ 体 幅：ハタリ・ハカリ	マツメ・ハカリ 体 高さ：ヨコナダ 体 幅：ハタリ・ハカリ	1/8	
767	74 谷子上槽	赤・黒?																マツメ・ハカリ 体 高さ：ヨコナダ 体 幅：ハタリ・ハカリ	マツメ・ハカリ 体 高さ：ヨコナダ 体 幅：ハタリ・ハカリ	1/8	体調下半面 偏行者
768	74 谷子上槽	赤・黒																マツメ・ハカリ 体 高さ：ヨコナダ 体 幅：ハタリ・ハカリ	マツメ・ハカリ 体 高さ：ヨコナダ 体 幅：ハタリ・ハカリ	1/8	
769	74 谷子上槽	赤・黒																マツメ・ハカリ 体 高さ：ヨコナダ 体 幅：ハタリ・ハカリ	マツメ・ハカリ 体 高さ：ヨコナダ 体 幅：ハタリ・ハカリ	1/8	
770	74 谷子上槽	赤・黒																マツメ・ハカリ 体 高さ：ヨコナダ 体 幅：ハタリ・ハカリ	マツメ・ハカリ 体 高さ：ヨコナダ 体 幅：ハタリ・ハカリ	1/8	外側底面右 偏行者
771	谷子上槽	赤・黒																マツメ・ハカリ 体 高さ：ヨコナダ 体 幅：ハタリ・ハカリ	マツメ・ハカリ 体 高さ：ヨコナダ 体 幅：ハタリ・ハカリ	1/8	体調下半面 偏行者
772	谷子上槽	赤・黒																マツメ・ハカリ 体 高さ：ヨコナダ 体 幅：ハタリ・ハカリ	マツメ・ハカリ 体 高さ：ヨコナダ 体 幅：ハタリ・ハカリ	1/8	
773	谷子上槽	赤・黒																マツメ・ハカリ 体 高さ：ヨコナダ 体 幅：ハタリ・ハカリ	マツメ・ハカリ 体 高さ：ヨコナダ 体 幅：ハタリ・ハカリ	1/8	
774	谷子上槽	赤・黒																マツメ・ハカリ 体 高さ：ヨコナダ 体 幅：ハタリ・ハカリ	マツメ・ハカリ 体 高さ：ヨコナダ 体 幅：ハタリ・ハカリ	1/8	

標高	地名	立派名	面積	口直井	筋井	透井	衛土	色	外観	内観	井体	備考
814	谷上村	谷・大沢井	30.4	■	■	■	■	■	口直井は最も多く、内井戸も少く、外井戸も少ない。透井は全くない。	口直井：壁ナメの後コナデ 筋井：壁ナメの後コナデ 透井：壁ナメの後コナデ	2/6	
815	谷上村	谷・大沢井	31.8	■	■	■	■	■	口直井は西側に多く、東側に少く、外井戸は全くない。	口直井：壁ナメの後コナデ 筋井：壁ナメの後コナデ 透井：壁ナメの後コナデ	2/6	
816	谷上村	谷・大沢井	32.8	■	■	■	■	■	口直井は北側に多く、南側に少く、外井戸は全くない。	口直井：壁ナメの後コナデ 筋井：壁ナメの後コナデ 透井：壁ナメの後コナデ	2/6	
817	谷上村	谷・大沢井	22.0	14.9	4.1	■	■	■	口直井は北側で、やや傾いて、外井戸は南側で、やや傾いて、透井は東西に多くある。	口直井：壁ナメの後コナデ 筋井：壁ナメの後コナデ 透井：壁ナメの後コナデ	2/6	
818	谷上村	谷・大沢井	10.1	5.0	■	■	■	■	口直井は北側で、やや傾いて、外井戸は南側で、やや傾いて、透井は東西に多くある。	口直井：壁ナメの後コナデ 筋井：壁ナメの後コナデ 透井：壁ナメの後コナデ	2/6	
819	谷上村	谷・大沢井	13.7	8.0	■	■	■	■	口直井は北側で、やや傾いて、外井戸は南側で、やや傾いて、透井は東西に多くある。	口直井：壁ナメの後コナデ 筋井：壁ナメの後コナデ 透井：壁ナメの後コナデ	2/6	
820	谷上村	谷・ニニユア	4.6	5.0	■	■	■	■	口直井は、口井頭は傾いて、周辺はよく傾く。	口直井：壁ナメの後コナデ 筋井：壁ナメの後コナデ 透井：壁ナメの後コナデ	2/6	
821	谷上村	谷・ニニユア	6.0	■	■	■	■	■	口直井は、口井頭は傾いて、周辺はよく傾く。	口直井：壁ナメの後コナデ 筋井：壁ナメの後コナデ 透井：壁ナメの後コナデ	2/6	
822	谷上村	谷・ニニユア	5.8	4.4	■	■	■	■	口直井は、口井頭は傾いて、周辺はよく傾く。	口直井：壁ナメの後コナデ 筋井：壁ナメの後コナデ 透井：壁ナメの後コナデ	2/6	
823	谷上村	谷・ニニユア	4.1	3.4	■	■	■	■	口直井は、口井頭は傾いて、周辺はよく傾く。	口直井：壁ナメの後コナデ 筋井：壁ナメの後コナデ 透井：壁ナメの後コナデ	2/6	
824	谷上村	谷・?	5.0	■	■	■	■	■	口直井は、口井頭は傾いて、周辺はよく傾く。	口直井：壁ナメの後コナデ 筋井：壁ナメの後コナデ 透井：壁ナメの後コナデ	2/6	
825	谷上村	谷・?	4.2	■	■	■	■	■	口直井は、口井頭は傾いて、周辺はよく傾く。	口直井：壁ナメの後コナデ 筋井：壁ナメの後コナデ 透井：壁ナメの後コナデ	2/6	
826	谷上村	谷・大沢井	15.1	■	■	■	■	■	口直井は、口井頭は傾いて、周辺はよく傾く。	口直井：壁ナメの後コナデ 筋井：壁ナメの後コナデ 透井：壁ナメの後コナデ	2/6	
827	谷上村	谷・?	■	■	■	■	■	■	口直井は、口井頭は傾いて、周辺はよく傾く。	口直井：壁ナメの後コナデ 筋井：壁ナメの後コナデ 透井：壁ナメの後コナデ	2/6	
828	谷上村	谷・?	■	■	■	■	■	■	口直井は、口井頭は傾いて、周辺はよく傾く。	口直井：壁ナメの後コナデ 筋井：壁ナメの後コナデ 透井：壁ナメの後コナデ	2/6	
829	谷上村	谷・?	■	■	■	■	■	■	口直井は、口井頭は傾いて、周辺はよく傾く。	口直井：壁ナメの後コナデ 筋井：壁ナメの後コナデ 透井：壁ナメの後コナデ	2/6	
830	谷上村	谷・?	■	■	■	■	■	■	口直井は、口井頭は傾いて、周辺はよく傾く。	口直井：壁ナメの後コナデ 筋井：壁ナメの後コナデ 透井：壁ナメの後コナデ	2/6	
831	谷上村	谷・?	11.8	■	■	■	■	■	口直井は、口井頭は傾いて、周辺はよく傾く。	口直井：壁ナメの後コナデ 筋井：壁ナメの後コナデ 透井：壁ナメの後コナデ	2/6	
832	谷上村	谷・?	15.0	■	■	■	■	■	口直井は、口井頭は傾いて、周辺はよく傾く。	口直井：壁ナメの後コナデ 筋井：壁ナメの後コナデ 透井：壁ナメの後コナデ	2/6	

学年	部類	種類	器種	口径	高さ	底径	相土	色調	表面調査	外因調査	内因調査	持主	備考
833	谷7上層	灰・灰口壺		15.0			中・石青・黒青少 ・赤色少	(外)青釉(内)灰青	表面や外側に2段ちり上り、強く外反する。 へぬき上づつ、外側に小孔が2つある。	ヨコナダの後頭とがき	ヨコナダの後頭とがき	5/6	
834	谷7上層	灰・灰口壺		24.0			中・石青多・黒青少 ・赤色少	(外)墨(内)褐	表面は直立して2段ちり上り、強やか灰反。 へぬき上づつ、外側に小孔がある。	ハクリ 体原：西ナカバ エイ・ハカリ	ハクリ 体原：西ナカバ エイ・ハカリ	5/6	
835	77 谷7上層	灰・灰		9.5	11.1		中・石青多・黒青少 ・赤色少	(外)墨(内)褐	口縁は強やかに2段ちり上りして外反し、強やか灰反。 へぬき上づつ、外側に小孔がある。	ヨコナダ 体原：西ナカバ エイ・ハカリ 体原：西ナカバ エイ・ハカリ	ヨコナダ 体原：西ナカバ エイ・ハカリ	5/6	
836	77 谷7上層	土・壺		11.8	15.0		中・石青多・黒青少 ・赤色少	(外)墨(内)褐	口縁は強やかに2段ちり上りして外反し、強やか灰反。 へぬき上づつ、外側に小孔がある。	ヨコナダ 体原：西ナカバ エイ・ハカリ 体原：西ナカバ エイ・ハカリ	ヨコナダ 体原：西ナカバ エイ・ハカリ	5/6	
837	谷7上層	灰・壺		15.4			中・石青・墨青少 ・赤色少	(外)墨(内)褐	口縁は強やかに2段ちり上りして外反し、強やか灰反。 へぬき上づつ、外側に小孔がある。	ヨコナダ 体原：西ナカバ エイ・ハカリ 体原：西ナカバ エイ・ハカリ	ヨコナダ 体原：西ナカバ エイ・ハカリ	5/6	
838	谷7上層	灰・壺		15.0			中・石青・墨青少 ・赤色少	(外)墨(内)褐	口縁は強やかに2段ちり上りして外反し、強やか灰反。 へぬき上づつ、外側に小孔がある。	ヨコナダ 体原：西ナカバ エイ・ハカリ 体原：西ナカバ エイ・ハカリ	ヨコナダ 体原：西ナカバ エイ・ハカリ	5/6	
839	谷7上層	灰・壺		15.6			中・石青少・墨青多 ・赤色少	(外)墨(内)褐	口縁は強やかに2段ちり上りして外反し、強やか灰反。 へぬき上づつ、外側に小孔がある。	ヨコナダ 体原：西ナカバ エイ・ハカリ 体原：西ナカバ エイ・ハカリ	ヨコナダ 体原：西ナカバ エイ・ハカリ	5/6	
840	谷7上層	灰・壺		18.4			中・石青多・墨青少 ・赤色少	(外)墨(内)褐	口縁は強やかに2段ちり上りして外反し、強やか灰反。 へぬき上づつ、外側に小孔がある。	ヨコナダ 体原：西ナカバ エイ・ハカリ 体原：西ナカバ エイ・ハカリ	ヨコナダ 体原：西ナカバ エイ・ハカリ	5/6	
841	谷7上層	灰・小玉瓶		15.1			中・石青多・墨青少 ・赤色少	(外)墨(内)褐	口縁は強やかに2段ちり上りして外反し、強やか灰反。 へぬき上づつ、外側に小孔がある。	ヨコナダ 体原：西ナカバ エイ・ハカリ 体原：西ナカバ エイ・ハカリ	ヨコナダ 体原：西ナカバ エイ・ハカリ	5/6	
842	谷7上層	灰・小玉瓶		11.8			中・石青多・墨青少 ・赤色少	(外)墨(内)褐	口縁は強やかに2段ちり上りして外反し、強やか灰反。 へぬき上づつ、外側に小孔がある。	ヨコナダ 体原：西ナカバ エイ・ハカリ 体原：西ナカバ エイ・ハカリ	ヨコナダ 体原：西ナカバ エイ・ハカリ	5/6	
843	谷7上層	灰・小玉瓶		11.8			中・石青多・墨青少 ・赤色少	(外)墨(内)褐	口縁は強やかに2段ちり上りして外反し、強やか灰反。 へぬき上づつ、外側に小孔がある。	ヨコナダ 体原：西ナカバ エイ・ハカリ 体原：西ナカバ エイ・ハカリ	ヨコナダ 体原：西ナカバ エイ・ハカリ	5/6	
844	谷7上層	灰・壺		13.5			中・石青少・墨青多 ・赤色少	(外)墨(内)褐	口縁は強やかに2段ちり上りして外反し、強やか灰反。 へぬき上づつ、外側に小孔がある。	ヨコナダ 体原：西ナカバ エイ・ハカリ 体原：西ナカバ エイ・ハカリ	ヨコナダ 体原：西ナカバ エイ・ハカリ 体原：西ナカバ エイ・ハカリ	5/6	
845	50 136	灰・足金壺		4.4			中・石青・墨青少 ・赤色少	(外)白(内)乳白	口縁は強やかに2段ちり上りして外反し、強やか灰反。 へぬき上づつ、外側に小孔がある。	ヨコナダ 体原：西ナカバ エイ・ハカリ 体原：西ナカバ エイ・ハカリ	ヨコナダ 体原：西ナカバ エイ・ハカリ 体原：西ナカバ エイ・ハカリ	5/6	
846	77 谷7壺上層	灰・壺		12.0			中・石青多・墨青少 ・赤色少	(外)墨(内)褐	口縁は強やかに2段ちり上りして外反し、強やか灰反。 へぬき上づつ、外側に小孔がある。	ヨコナダ 体原：西ナカバ エイ・ハカリ 体原：西ナカバ エイ・ハカリ	ヨコナダ 体原：西ナカバ エイ・ハカリ 体原：西ナカバ エイ・ハカリ	5/6	
849	77 谷7壺上層	粗粘器・粗粘器		中・石青少・墨青多 ・赤色少	(外)白(内)乳白				表面は凹凸があるが堅硬。底部は丸。	ヨコナダ 逸原・田村 カズリ 逸原・田村	ヨコナダ 逸原・田村 カズリ 逸原・田村	5/6	
850	77 谷7壺上層	灰・壺		10.5			少	(外)灰白(内)乳白	表面は強やかに2段ちり上りして外反し、 へぬき上づつ、外側に小孔がある。	ヨコナダ 体原：西ナカバ エイ・ハカリ 体原：西ナカバ エイ・ハカリ	ヨコナダ 体原：西ナカバ エイ・ハカリ 体原：西ナカバ エイ・ハカリ	5/6	
851	谷7壺上層	灰・灰口壺		18.6			中・石青・墨青少 ・赤色少	(外)墨(内)褐	口縁は強やかに2段ちり上りして外反し、 へぬき上づつ、外側に小孔がある。	ヨコナダ 体原：西ナカバ エイ・ハカリ 体原：西ナカバ エイ・ハカリ	ヨコナダ 体原：西ナカバ エイ・ハカリ 体原：西ナカバ エイ・ハカリ	5/6	
852	谷7壺上層	灰・灰口壺		19.8			中・石青多・墨青少 ・赤色少	(外)墨(内)褐	口縁は強やかに2段ちり上りして外反し、 へぬき上づつ、外側に小孔がある。	ヨコナダ 逸原・田村 カズリ 逸原・田村	ヨコナダ 逸原・田村 カズリ 逸原・田村	5/6	

種類	学名	通称	形態	口吐	器官	選性	地上	外因観察	内因観察	操作手
880	70 岩上	土・高干	色濃	20.2	中：石英質・黒色少 (外) 黄 (内) 白	中：石英質・黒色少 (外) 黄 (内) 白	中：石英質・黒色少 (外) 黄 (内) 白	呼吸：上呼吸ハケ？アリ、呼吸：喉嚨部の後ヨコナデ	呼吸：上呼吸ハケ？アリ、呼吸：喉嚨部の後ヨコナデ	6/6
881	70 岩上	土・高干	色濃	(24.2) [16.2]	14.7 中：石英質・黒色少 (外) 黄 (内) 白	中：石英質・黒色少 (外) 黄 (内) 白	中：石英質・黒色少 (外) 黄 (内) 白	呼吸：ハカリ、ヨコナデ？	呼吸：ハカリ、ヨコナデ？	5/6
882	70 岩上	土・高干	色濃	20.6	15.4 13.3 中：石英質・黒色少 (外) 黄 (内) 白	中：石英質・黒色少 (外) 黄 (内) 白	中：石英質・黒色少 (外) 黄 (内) 白	呼吸：ハカリ、ヨコナデ？	呼吸：ハカリ、ヨコナデ？	6/6
883	70 岩上	土・高干	色濃	20.6	15.6 14.0 中：石英質・黒色少 (外) 黄 (内) 白	中：石英質・黒色少 (外) 黄 (内) 白	中：石英質・黒色少 (外) 黄 (内) 白	呼吸：上呼吸ハリ、呼吸：喉嚨部の後ヨコナデ	呼吸：上呼吸ハリ、呼吸：喉嚨部の後ヨコナデ	6/6
884	70 岩上	土・高干	色濃	20.6	15.6 14.0 中：石英質・黒色少 (外) 黄 (内) 白	中：石英質・黒色少 (外) 黄 (内) 白	中：石英質・黒色少 (外) 黄 (内) 白	呼吸：下呼吸ハリ、呼吸：喉嚨部の後ヨコナデ	呼吸：下呼吸ハリ、呼吸：喉嚨部の後ヨコナデ	6/6
885	70 岩上	土・高干	色濃	20.6	15.6 14.0 中：石英質・黒色少 (外) 黄 (内) 白	中：石英質・黒色少 (外) 黄 (内) 白	中：石英質・黒色少 (外) 黄 (内) 白	呼吸：喉嚨部の後ヨコナデ	呼吸：喉嚨部の後ヨコナデ	6/6
886	70 岩上	土・高干	色濃	11.2	中：石英質・黑色少 (外) 黄 (内) 白	中：石英質・黑色少 (外) 黄 (内) 白	中：石英質・黑色少 (外) 黄 (内) 白	呼吸：呼吸ナデ	呼吸：呼吸ナデ	6/6
886	70 岩上	土・高干	色濃	14.6	中：石英少・黑色少 (外) 黄 (内) 白	中：石英少・黑色少 (外) 黄 (内) 白	中：石英少・黑色少 (外) 黄 (内) 白	呼吸：呼吸ナデ	呼吸：呼吸ナデ	6/6
887	70 岩上	土・高干	色濃	12.3	中：石英多・黑色少 (外) 黄 (内) 白	中：石英多・黑色少 (外) 黄 (内) 白	中：石英多・黑色少 (外) 黄 (内) 白	呼吸：呼吸ナデ	呼吸：呼吸ナデ	6/6
888	80 岩上	土・脚	色濃	8.1	中：石英少・黑色少 (外) 黄 (内) 白	中：石英少・黑色少 (外) 黄 (内) 白	中：石英少・黑色少 (外) 黄 (内) 白	呼吸：呼吸ナデ	呼吸：呼吸ナデ	7/6
889	80 岩上	土・脚	色濃	11.4	7.1 8.6 砂質：石英質・黑色少 (外) 黄 (内) 白	砂質：石英質・黑色少 (外) 黄 (内) 白	砂質：石英質・黑色少 (外) 黄 (内) 白	呼吸：呼吸ナデ	呼吸：呼吸ナデ	5/6
890	80 岩上	土・脚	色濃	11.4	7.1 8.6 砂質：石英質・黑色少 (外) 黄 (内) 白	砂質：石英質・黑色少 (外) 黄 (内) 白	砂質：石英質・黑色少 (外) 黄 (内) 白	呼吸：呼吸ナデ	呼吸：呼吸ナデ	7/6
901	80 岩上	土・脚	色濃	14.2	中：石英・黑色少 (外) 黄 (内) 白	中：石英・黑色少 (外) 黄 (内) 白	中：石英・黑色少 (外) 黄 (内) 白	呼吸：呼吸ナデ	呼吸：呼吸ナデ	1/6
902	80 岩上	土・脚	色濃	8.7	中：石英少・黑色少 (外) 黄 (内) 白	中：石英少・黑色少 (外) 黄 (内) 白	中：石英少・黑色少 (外) 黄 (内) 白	呼吸：呼吸ナデ	呼吸：呼吸ナデ	1/6
903	80 岩上	土・脚	色濃	9.4	13.0 中：石英質 (外) 黄 (内) 白	中：石英質 (外) 黄 (内) 白	中：石英質 (外) 黄 (内) 白	呼吸：呼吸ナデ	呼吸：呼吸ナデ	4/6
904	80 岩上	土・脚	色濃	9.4	13.0 中：石英質 (外) 黄 (内) 白	中：石英質 (外) 黄 (内) 白	中：石英質 (外) 黄 (内) 白	呼吸：呼吸ナデ	呼吸：呼吸ナデ	6/6

年月	日付	地名	路名	門番	玄関	通番	番号	外造	内造	内造調査	特許年	備考
905	谷7丁目8番	原・堀越区		10.4	中：石井寺・黒色社子	(外)漆(内)原白	色簾	外造調査	内造	内造調査	1/6	
906	谷7丁目8番	原・堀			11.5：墨：石井寺・黒色社子	(外)漆(内)原白		口構：回転ナシ 体感：上半身回転ナシ、下半身回転ナシの外構として立てるが故に、口構造は全く構成せず、構成ナシ	回転ナシ・体感ナシ	回転ナシ・体感ナシ	1/6	
907	谷7丁目8番	原・堀		8.0	中：石井寺	(外)漆(内)原白		外構ケツリの内構ナシ	回転ナシ	回転ナシ	1/6	
908	谷7丁目8番	原・堀			10.2：墨：石井寺・黒色社子	(外)漆(内)原白	口構：墨や白で外構として立てるが故に、外構は回転ナシ	回転ナシ・体感ナシ	回転ナシ・体感ナシ	回転ナシ・体感ナシ	1/6	
909	80 谷7丁目8番	原・堀			13.6	中：石井寺・黒色社子	(外)漆(内)原白	外構は墨や白で外構として立てるが故に、外構は回転ナシ	回転ナシ・体感ナシ	回転ナシ・体感ナシ	1/6	体と上部外構自然軸
910	80 谷7丁目8番	原・堀			11.8	中：石井寺・赤色社子	(外)リード漆(内)原白	外構は墨や白で外構として立てるが故に、外構は回転ナシ	回転ナシ・体感ナシ	回転ナシ・体感ナシ	1/6	
911	谷7丁目8番	原・堀			13.5	中：石井寺	(外)漆(内)原白	外構は墨や白で外構として立てるが故に、外構は回転ナシ	回転ナシ・体感ナシ	回転ナシ・体感ナシ	1/6	
912	80 谷7丁目8番	原・堀			22.4	中：石井寺・黒色社子	(外)漆(内)原白	外構は墨や白で外構として立てるが故に、外構は回転ナシ	回転ナシ・体感ナシ	回転ナシ・体感ナシ	1/6	
913	谷7丁目8番	原・堀			27.8	中：石井寺・黒色社子	(外)漆(内)原白	外構は墨や白で外構として立てるが故に、外構は回転ナシ	回転ナシ・体感ナシ	回転ナシ・体感ナシ	1/6	
914	80 谷7丁目8番	原・堀			25.2	中：石井寺・黒色社子	(外)漆(内)原白	外構は墨や白で外構として立てるが故に、外構は回転ナシ	回転ナシ・体感ナシ	回転ナシ・体感ナシ	1/6	
915	80 谷7丁目8番	原・堀			20.4 (45.9)	中：石井寺・黒色社子	(外)漆(内)原白	外構は墨や白で外構として立てるが故に、外構は回転ナシ	回転ナシ・体感ナシ	回転ナシ・体感ナシ	1/6	
916	80 谷7丁目8番	原・堀			11.6	中：石井寺・黒色社子	(外)漆(内)原白	外構は墨や白で外構として立てるが故に、外構は回転ナシ	回転ナシ・体感ナシ	回転ナシ・体感ナシ	1/6	
917	81 谷7丁目8番	原・堀			12.0	中：石井寺・黒色社子	(外)漆(内)原白	外構は墨や白で外構として立てるが故に、外構は回転ナシ	回転ナシ・体感ナシ	回転ナシ・体感ナシ	1/6	
918	5月8日01	土・堀			11.6	中：石井寺・黒色社子	(外)漆(内)原白	外構は墨や白で外構として立てるが故に、外構は回転ナシ	回転ナシ・体感ナシ	回転ナシ・体感ナシ	1/6	
919	5月8日01	原・堀			12.0	中：石井寺・黒色社子	(外)漆(内)原白	外構は墨や白で外構として立てるが故に、外構は回転ナシ	回転ナシ・体感ナシ	回転ナシ・体感ナシ	1/6	
920	5月8日06	土・堀?		(20.4)	中：石井寺・黒色社子	(外)漆(内)原白	外構は墨や白で外構として立てるが故に、外構は回転ナシ	回転ナシ・体感ナシ	回転ナシ・体感ナシ	回転ナシ・体感ナシ	1/6	
921	5月8日07	土・堀			14.0	中：石井寺・黒色社子	(外)漆(内)原白	外構は墨や白で外構として立てるが故に、外構は回転ナシ	回転ナシ・体感ナシ	回転ナシ・体感ナシ	1/6	
922	5月8日07	原・堀			12.4	中：石井寺・黒色社子	(外)漆(内)原白	外構は墨や白で外構として立てるが故に、外構は回転ナシ	回転ナシ・体感ナシ	回転ナシ・体感ナシ	1/6	

番号	部位名	種類	口径	断面	地土	色調	外観説明	内訳説明	発生率	備考
1004	S X 14	砂・粗			砂：石英質	(外)灰白	表面は砂の粒を含み、表面はやや不規則な形で、表面はやや凹凸がある。表面を洗う。	体质：頭皮ナメ 亂毛：頭皮ナメ 亂毛：頭皮ナメ テカリ洗濯後不要方ナメ	1/6	
1005	S X 14	砂・台付陶	10.2		中：石英少・黒色粒少(外)灰白(内)灰白	(外)灰白	表面は砂の粒を含み、表面はやや凹凸があり、表面を洗う。	頭皮ナメ 小泡ナメ	1/6	
1006	81 S X 14	砂・鉢	15.8	6.5	中：石英多	(外)灰白(内)灰白	表面は砂の粒を含み、表面はやや凹凸があり、表面を洗う。	頭皮ナメ 塵・頭皮：頭皮ナメ 表皮・不整	4/6	
1007	S X 14	砂・壺			中：石英少	(外)灰白(内)灰白	表面は砂の粒を含み、表面はやや凹凸があり、表面を洗う。	頭皮ナメ 方向ナメ	1/6	
1008	S X 14	砂・壺	22.0		中：石英多	(外)灰白(内)灰白	表面は砂の粒を含み、表面はやや凹凸があり、表面を洗う。	頭皮ナメ 方向ナメ	1/6	
1009	S X 14	砂・壺	(29.2)		中：石英多・黒色粒少(外)灰白(内)灰白	(外)灰白	表面は砂の粒を含み、表面はやや凹凸があり、表面を洗う。	頭皮ナメ アメツ	1/6	
1010	S X 14	土・壺			中：石英多・赤色粒少(外)黄褐色(内)黄褐色	(外)灰白	表面は砂の粒を含み、表面はやや凹凸があり、表面を洗う。	頭皮ナメ 自然物	1/6	
1011	82 S X 14	土・灰	15.4		中：石英少・黑色粒少(外)灰白	(外)灰白	表面は砂の粒を含み、表面はやや凹凸があり、表面を洗う。	頭皮・頭・ガタキ 亂毛：頭・ガタキ 亂毛：頭・ガタキ	1/6	
1012	S X 14	土・壺	12.2		中：石英多・赤色粒少(外)灰白	(外)灰白	表面は砂の粒を含み、表面はやや凹凸があり、表面を洗う。	頭皮：ヨコナメ テカリ	1/6	
1013	S X 14	土・壺	19.0		中：石英少・黑色粒少(外)灰白	(外)灰白	表面は砂の粒を含み、表面はやや凹凸があり、表面を洗う。	頭皮：ヨコナメ テカリの後上半コナメナメ	1/6	
2014	S X 14	土・壺	20.9		中：石英少・黑色粒少(外)灰白	(外)灰白	表面は砂の粒を含み、表面はやや凹凸があり、表面を洗う。	頭皮：ヨコナメ テカリの後ヨコナメ	1/6	
2015	S X 14	土・壺	18.6		中：石英多・赤色粒少(外)灰白	(外)灰白	表面は直立して立ち上がり、表面はやや凹凸があり、表面を洗う。	頭皮：ヨコナメ テカリの後ヨコナメ	1/6	
2016	82 S X 14	土・壺	15.6	15.1	中：石英少・黑色粒少(外)灰白	(外)灰白	表面はやや直立して凹凸があり、表面を洗う。	頭皮：ハゲの後ヨコナメ 体：頭・ハゲ 乱毛：ハゲの後ヨコナメ	7/8	体部外観中位 傷跡有
2017	S X 14	土・壺	20.4		中：石英少・黑色粒少(外)灰白	(外)灰白	表面は直立して凹凸があり、表面を洗う。	頭皮：ヨコナメ 体：頭・幹部 シエの後ナメ	1/6	
2018	83 S X 14	土・壺			中：石英少・黑色粒少(外)灰白	(外)灰白	表面は直立して凹凸があり、表面を洗う。	頭皮：ヨコナメ エ・ナメ	5/8	
2019	89 S X 14	土・頭皮器	6.8		中：石英多・黑色粒少(外)灰白	(外)灰白	表面は直立して凹凸があり、表面を洗う。	頭子ナメ・ナメ・アメツ	1/6	
2020	S X 14	土・壺	(29.1)		中：石英少・黑色粒少(外)灰白	(外)灰白	表面は直立して凹凸があり、表面を洗う。	頭皮ナメ 方向ナメ	1/6	
2021	S X 14	土・壺	(36.2)		中：石英少・黑色粒少(外)灰白	(外)灰白	表面は直立して凹凸があり、表面を洗う。	頭皮：ヨコナメ 体：頭・ハゲ ハゲの後一過ヨコナメ	1/6	

種類	品目	通路名	管径	口径	静圧	通路	色調	内面調査	外面調査	操作中	備考
[022]	S X 14	土・堀				中：石英多・黒雲母少 [外]透明白(白)	無土・ 中：石英少	口構造はやや粗く、作成時に外壁として用いた。 内面に凹凸や隙間を作らせる。	口構造：ヨコナデ 体格：斜ハケ ケの後側面ナデ 体格：斜モエ	口構造：ヨコナデ 体格：斜ハケ	
[025]	S X 15	土・46		15.6		中：石英少・黒雲母少 [外]透明白(白)	無土・ 中：石英少	口構造は内面に不規則、端部が特に尖る。	口構造：ヨコナデ 体格：斜ハケ ヨコナデの後ヨコナデ	口構造：ヨコナデ 体格：斜ハケ	2/6
[026]	S X 15	土・47		13.8		中：石英多・黒雲母少 [外]透明白(白)	無土・ 中：石英少	底面より内面しつつ開き、端部が特に尖る。	口構造：ヨコナデ 体格：斜ハケ ヨコナデの後ヨコナデ	口構造：ヨコナデ 体格：斜ハケ	2/6
[027]	S X 15	土・47		13.6		中：石英多 [外]透明白(白)	無土・ 中：石英少	底面より内面しつつ開き、端部が特に尖る。	口構造：ヨコナデ 体格：斜ハケ ヨコナデの後ヨコナデ	口構造：ヨコナデ 体格：斜ハケ	1/6
[028]	S X 15	土・48		24.8		中：石英多・黒雲母少 [外]透明白(白)	無土・ 中：石英少	底面より内面しつつ開き、端部が特に尖る。	口構造：ヨコナデ 体格：斜ハケ ヨコナデの後ヨコナデ	口構造：ヨコナデ 体格：斜ハケ	1/6
[029]	S X 15	土・堀		18.0		中：石英多・黒雲母少 [外]透明白(白)	無土・ 中：石英少	底面より内面しつつ開き、端部が特に尖る。	口構造：ヨコナデ 体格：斜ハケ ヨコナデの後ヨコナデ	口構造：ヨコナデ 体格：斜ハケ	1/6
[030]	S X 15	土・堀		(11.4)		中：石英多・黒雲母少 [外]透明白(白)	無土・ 中：石英少	底面より内面しつつ開き、端部が特に尖る。	口構造：ヨコナデ 体格：斜ハケ ヨコナデの後ヨコナデ	口構造：ヨコナデ 体格：斜ハケ	1/6
[031]	S X 15	土・堀		10.8		中：石英多・黒雲母少 [外]透明白(白)	無土・ 中：石英少	底面より内面しつつ開き、端部が特に尖る。	口構造：ヨコナデ 体格：斜ハケ ヨコナデの後ヨコナデ	口構造：ヨコナデ 体格：斜ハケ	1/6
[032]	S X 15	土・井蓋		12.0		中：石英多・黒雲母少 [外]透明白(白)	無土・ 中：石英少	口構造は内面しつつドロ、端部は丸く鈍角。	口構造：ヨコナデ 体格：斜ハケ ヨコナデの後ヨコナデ	口構造：ヨコナデ 体格：斜ハケ	1/6
[033]	S X 15	土・堀		9.6		中：石英少 [外]透明白(白)	無土・ 中：石英少	底面は丸く、内面は直線的で端部が丸い。	口構造：ヨコナデ 体格：斜ハケ ヨコナデの後ヨコナデ	口構造：ヨコナデ 体格：斜ハケ	1/6
[034]	S X 15	土・堀		12.0		中：石英少・黒雲母少 [外]透明白(白)	無土・ 中：石英少	底面は丸く、内面は直線的で端部が丸い。	口構造：ヨコナデ 体格：斜ハケ ヨコナデの後ヨコナデ	口構造：ヨコナデ 体格：斜ハケ	1/6
[035]	S X 15	土・堀		15.7		中：石英多 [外]透明白(白)	無土・ 中：石英少	底面は丸く、内面は直線的で端部が丸い。	口構造：ヨコナデ 体格：斜ハケ ヨコナデの後ヨコナデ	口構造：ヨコナデ 体格：斜ハケ	1/6
[036]	S X 16	土・堀		(12.0)		中：石英多・黒雲母少 [外]透明白(白)	無土・ 中：石英少	底面は丸く、内面は直線的で端部が丸い。	口構造：ヨコナデ 体格：斜ハケ ヨコナデの後ヨコナデ	口構造：ヨコナデ 体格：斜ハケ	1/6
[037]	S X 16	土・堀		15.6 (12.8)		中：石英多・黒雲母少 [外]透明白(白)	無土・ 中：石英少	底面は丸く、内面は直線的で端部が丸い。	口構造：ヨコナデ 体格：斜ハケ ヨコナデの後ヨコナデ	口構造：ヨコナデ 体格：斜ハケ	1/6
[038]	S X 16	土・堀		16.0	13.3	中：石英多・黒雲母少 [外]透明白(白)	無土・ 中：石英少	底面は丸く、内面は直線的で端部が丸い。	口構造：ヨコナデ 体格：斜ハケ ヨコナデの後ヨコナデ	口構造：ヨコナデ 体格：斜ハケ	2/6
[039]	S X 16	土・堀		20.6		中：石英多・黒雲母少 [外]透明白(白)	無土・ 中：石英少	底面は丸く、内面は直線的で端部が丸い。	口構造：ヨコナデ 体格：斜ハケ ヨコナデの後ヨコナデ	口構造：ヨコナデ 体格：斜ハケ	1/6
[040]	S X 16	土・堀		16.8		中：石英多・黒雲母少 [外]透明白(白)	無土・ 中：石英少	底面は丸く、内面は直線的で端部が丸い。	口構造：ヨコナデ 体格：斜ハケ ヨコナデの後ヨコナデ	口構造：ヨコナデ 体格：斜ハケ	1/6
[041]	S S X 16	土・堀		16.0		中：石英多・黒雲母少 [外]透明白(白)	無土・ 中：石英少	底面は丸く、内面は直線的で端部が丸い。	口構造：ヨコナデ 体格：斜ハケ ヨコナデの後ヨコナデ	口構造：ヨコナデ 体格：斜ハケ	3/6
[042]	S S X 16	上・把手				中：石英多・黒雲母少 [外]透明白(白)	無土・ 中：石英少	底面は丸く、内面は直線的で端部が丸い。	口構造：ヨコナデ 体格：斜ハケ ヨコナデの後ヨコナデ	口構造：ヨコナデ 体格：斜ハケ	5/6

標題	地點	通名	母性	口状	體狀	斑紋	地上	色調	形態	外觀體質	外觀體質	實存年	備考
1985 85	SDII 69	土、草?	石英多	37.4	中	石英多	[外]に古い黄色の斑	青	口端は古く黒く、先端は乳頭状に膨らむ。前面は高さ立しき テナリ。後面は側方に張り出る。	口端：ヨコナデ 外縁：横板 ナデ	口端：ヨコナデ ハタツ ナデ	1985	標片
1986	SDII 69	土、草?	石英質	中	石英質	[外灰]内)灰白	無	無	口端部は側方に立ち上がり、前面は 高く尖る。先端は円錐状である。	口端：ヨコナデ 外縁：横板 ナデ	口端：ヨコナデ 外縁：横板 ナデ	1986	標片
1987	SDII 69	原、草?	石英少	12.1	無	[外灰]内)灰	無	無	体は側方に立ち上がり、口端部は小 さく屈曲して正面に立ちきをく離れる。	口端：ヨコナデ 外縁：横板 ナデ	口端：ヨコナデ 外縁：横板 ナデ	1987	標片
1988	SDII 69	原、草?	石英少	10.9	3.8	6.1	石英多・石英少	[外灰]内)灰灰	口端より側してえぐわり。口端部は小 さく屈曲して正面に立ちきをく離れる。 側面はやや立ち上がり、先端を立ち上げる。	口端：ヨコナデ 外縁：横板 ナデ	口端：ヨコナデ 外縁：横板 ナデ	1988	標片
1989	SDII 69	原、草?	石英少	8.8	0.8	[外灰]内)灰	無	無	口端部は側方に立ち上がり、口端部は小 さく屈曲して正面に立ちきをく離れる。	口端：ヨコナデ 外縁：横板 ナデ	口端：ヨコナデ 外縁：横板 ナデ	1989	標片
1990	SDII 69	原、草?	石英少	22.4	中	石英多・石英少	[外灰]内)灰	無	口端部は側方に立ち上がり、口端部は小 さく屈曲して正面に立ちきをく離れる。 側面はやや立ち上がり、先端を立ち上げる。	口端：ヨコナデ 外縁：横板 ナデ	口端：ヨコナデ 外縁：横板 ナデ	1990	標片
1991	SDII 69	土、植物質	石英少	10.0	0.0	[外灰]内)青灰	無	無	平野地帯の野の手毛の底に 低地はやや外方へ傾く断面底の低い 所を付す。	アメフハタクリ アメフハタ	アメフハタクリ アメフハタ	1991	標片
1992	SDII 71	原、草?	石英少	9.8	0.0	[外灰]内)灰	無	無	断面外縁はやや下方へ傾く断面底 の底を付す。	口端：ヨコナデ 外縁：横板 ナデ	口端：ヨコナデ 外縁：横板 ナデ	1992	標片
1993	SDII 71	原、草?	石英少	5.0	0.0	[外灰]内)灰	無	無	断面平滑。	口端：ヨコナデ 外縁：横板 ナデ	口端：ヨコナデ 外縁：横板 ナデ	1993	標片
1995	SDII 71	土、草?	石英少	11.0	2.2	6.8	石英多・石英少	[外]に古い黄色の斑	口端部は側方に立ち上がり、口端部は小 さく屈曲してえぐわり、側面は 側面はやや内側にしつつ開き、側面はほんく りと開ける。	口端：ヨコナデ 外縁：横板 ナデ	口端：ヨコナデ 外縁：横板 ナデ	1995	標片
1996	SDII 71	土、草?	石英少	10.4	2.1	5.7	石英多・石英少	[外灰]内)灰白	口端部は側方に立ち上がり、口端部は小 さく屈曲してえぐわり、側面はほんく りと開ける。	口端：ヨコナデ 外縁：横板 ナデ	口端：ヨコナデ 外縁：横板 ナデ	1996	標片
1997	SDII 71	土、草?	石英少	10.7	2.5	7.7	石英多・石英少	[外]灰灰	口端部は側方に立ち上がり、側面はほんく りと開ける。	口端：ヨコナデ 外縁：横板 ナデ	口端：ヨコナデ 外縁：横板 ナデ	1997	標片
1998	SDII 71	土、草?	石英少	14.1	4.4	9.6	石英少・石英少	[外灰]内)灰白	口端部は側方に立ち上がり、側面はほんく りと開ける。	口端：ヨコナデ 外縁：横板 ナデ	口端：ヨコナデ 外縁：横板 ナデ	1998	標片
1999	SDII 71	土、草?	石英少	16.6	0.0	[外灰]内)灰	無	無	体はやや内側して開く、口端部はほんく りと開ける。	口端：ヨコナデ 外縁：横板 ナデ	口端：ヨコナデ 外縁：横板 ナデ	1999	標片
1000	SDII 71	土、草?	石英少	16.6	0.0	[外灰]内)灰	無	無	体は側方に立ち上がり、口端部はほんく りと開ける。	口端：ヨコナデ 外縁：横板 ナデ	口端：ヨコナデ 外縁：横板 ナデ	1000	標片
1001	SDII 71	土、草?	石英少	16.9	0.0	[外灰]内)灰	無	無	口端部は側方に立ち上がり、口端部はほんく りと開ける。	口端：ヨコナデ 外縁：横板 ナデ	口端：ヨコナデ 外縁：横板 ナデ	1001	標片
1002	SDII 71	土、草?	石英少	16.9	0.0	[外灰]内)灰	無	無	口端部は側方に立ち上がり、口端部はほんく りと開ける。	口端：ヨコナデ 外縁：横板 ナデ	口端：ヨコナデ 外縁：横板 ナデ	1002	標片
1003	SDII 71	土、草?	石英少	16.9	0.0	[外灰]内)灰	無	無	口端部は側方に立ち上がり、口端部はほんく りと開ける。	口端：ヨコナデ 外縁：横板 ナデ	口端：ヨコナデ 外縁：横板 ナデ	1003	標片
1004	SDII 71	土、草?	石英少	15.9	0.0	[外灰]内)灰	無	無	口端部は側方に立ち上がり、口端部はほんく りと開ける。	口端：ヨコナデ 外縁：横板 ナデ	口端：ヨコナデ 外縁：横板 ナデ	1004	標片
1005	SDII 71	土、草?	石英少	15.6	0.0	[外灰]内)灰	無	無	口端部は側方に立ち上がり、口端部はほんく りと開ける。	口端：ヨコナデ 外縁：横板 ナデ	口端：ヨコナデ 外縁：横板 ナデ	1005	標片
1006	SDII 71	土、草?	石英少	19.0	0.0	[外灰]内)灰	無	無	口端部は側方に立ち上がり、口端部はほんく りと開ける。	口端：ヨコナデ 外縁：横板 ナデ	口端：ヨコナデ 外縁：横板 ナデ	1006	標片
1007	SDII 71	土、草?	石英少	20.4	0.0	[外灰]内)灰	無	無	口端部は側方に立ち上がり、口端部はほんく りと開ける。	ヨコナデ	ヨコナデ	1007	標片

剖面	地名	地標名	母材	山地	山地	地質	地土	色調	地表	外因影響	内因影響	特件等	番号
[141]	S P B 063	土・草		10.5	2.3	6.6 岩：石英岩・赤色粉少 砂	(外) 清涼感(内) 清涼 感	口掛岩は内因風化に弱く、溶出が大きく進 み。	口掛：固ナダ 風化：固板 固板ナダ	口掛：固ナダ 風化：固板 固板ナダ	2/8		
[142]	S P B 043	土・草		9.6	2.2	6.0 岩：石英岩・赤色粉少 砂	(外) に古い岩の内) 砂	口掛岩は外因風化に弱く、溶出が大きく進 み。	口掛：固ナダ ハクリ 壤：固板ナダ、ハクリ 風化：固板ハクリ 切り、ハクリ 壤：固板ナダハクリ	口掛：固ナダ ハクリ 壊れ：固板 固板ナダ	5/8		
[143]	S P B 069	土・草		9.7	2.6	5.6 岩：石英岩・赤色粉少 砂	(外) 清涼感(内) 清涼 感	口掛岩は外因風化しつつ強く、溶出が大 きく進み。	口掛：ハクリ・メアフ 壤：固板ナダハクリ	口掛：ハクリ・メアフ 壤：固板 固板ナダ	5/8		
[144]	S P B 043	瓦・草		12.3	3.2	7.9 岩：石英岩 砂	(外) 清涼感(内) 清涼 感	口掛岩は外因風化しつつ強く、溶出は多く進 み。	口掛：固ナダ 風化：固板 固板ナダ	口掛：固ナダ 風化：固板 固板ナダ	5/8	西村地	
[145]	S P B 043	土・草				9.4 岩：石英岩・黑雲母少 砂	(外) 清涼感(内) 清涼 感	口掛岩は外因風化しつつ強く、外山ロクロ 谷：岩：固ナダ	口掛：固ナダ 風化：固板 固板ナダマメアフ	口掛：固ナダ 風化：固板 固板ナダ	3/8		
[146]	S P B 056	土・草		10.0	6.3	7.0 岩：石英岩・黑雲母少 砂	(外) 清涼感(内) 清涼	口掛岩は外因風化しつつ強く、溶出は多く進 み。	口掛：ハクリ 壤：固板	口掛：ハクリ 壊れ：固板 固板	3/8		
[147]	S P B 056	土・草		10.3	2.5	6.9 岩：石英岩・赤色粉少 砂	(外) 清涼感(内) 清涼	口掛岩はやや外因風化に弱く、溶出は少く 進み。	口掛：固ナダ 風化：固板 固板ナダ	口掛：固ナダ 風化：固板 固板ナダ	1/8		
[148]	S P B 063	土・草		9.3	1.9	4.7 岩：石英岩・赤色粉少 砂	(外) 清涼感(内) 清涼	口掛岩は外因風化して強く、溶出は多く進 み。	口掛：固ナダ 風化：固板 固板ナダ	口掛：固ナダ 風化：固板 固板ナダ	1/8		
[149]	S P B 102	土・草		9.8	5.2	6.0 岩：石英岩・黑雲母少 砂	(外) 清涼感(内) 清涼	口掛岩は外因風化で固く、固板ナダ	口掛：固ナダ	口掛け：固ナダ	1/8		
[150]	S P B 043	土・草		8.3	1.4	4.2 岩：石英岩・赤色粉少 砂	(外) 清涼感(内) 清涼	口掛けはやや外因風化しつつ強く、溶出は多く 進み。	口掛け：固ナダ	口掛け：固ナダマメアフ	1/8		
[151]	S P B 043	土・草		12.1	12.0	7.4 岩：石英岩 砂	(外) 清涼感(内) 清涼	口掛けは外因風化して強く、溶出は多く進 み。	口掛け：ハクリ 壊れ：固板 固板ナダ	口掛け：ハクリ 壊れ：固板 固板ナダ	2/8		
[152]	S P B 043	土・草		12.2	2.4	8.6 岩：石英岩 砂	(外) 清涼感(内) 清涼	口掛けは外因風化で固く、溶出は多く進 み。	口掛け：マツカ 壊れ：固板 固板ナダ	口掛け：マツカ 壊れ：固板 固板ナダ	2/8		
[153]	S P B 170	土・草		(16.0)	1.9	(6.3) 中：石英岩・黑雲母少 砂	(外) 清涼感(内) 清涼	口掛けはやや外因風化に弱く、溶出は多く 進み。	口掛け：マツカ 壊れ：固板 固板ナダ	口掛け：マツカ 壊れ：固板 固板ナダ	1/8	外因風化带	
[154]	S P B 072	土・草		41.2	4	7.0 岩：石英岩 砂	(外) 清涼感(内) 清涼	口掛けは外因風化によって強めに固く、固 く、溶出は多く進む。	口掛け：マツカ 壊れ：固板 固板ナダ	口掛け：マツカ 壊れ：固板 固板ナダ	1/8		
[155]	S P B 094	土・草		24.4	1	6.0 岩：石英岩・黑雲母少 砂	(外) 清涼感(内) 清涼	口掛けは外因風化によって強めに固く、固 く、溶出は多く進む。	口掛け：マツカ 壊れ：固板 固板ナダ	口掛け：マツカ 壊れ：固板 固板ナダ	1/8	外因風化带	
[156]	S P B 170	土・草		35.0	中：石英岩・黑雲母少 砂	(外) に古い岩の内) 砂	(外) に古い岩の内) 砂	口掛けは外因風化によって強めに固く、固 く、溶出は多く進む。	口掛け：マツカ 壊れ：固板 固板ナダ	口掛け：マツカ 壊れ：固板 固板ナダ	1/8		
[157]	S P B 170	土・草		34.2	2	6.6 岩：石英岩 砂	(外) に古い岩の内) 砂	口掛けは外因風化によって強めに固く、固 く、溶出は多く進む。	口掛け：マツカ 壊れ：固板 固板ナダ	口掛け：マツカ 壊れ：固板 固板ナダ	1/8		
[158]	S K B 05	土・草		12.2	2.8	6.6 岩：石英岩 砂	(外) に古い岩の内) 砂	口掛けは外因風化によって強めに固く、固 く、溶出は多く進む。	口掛け：マツカ 壊れ：固板 固板ナダ	口掛け：マツカ 壊れ：固板 固板ナダ	1/8		
[159]	S K B 05	土・草		10.6	2.3	7.2 岩：石英岩 砂	(外) 清涼感(内) 清涼	口掛けは外因風化によって強めに固く、固 く、溶出は多く進む。	口掛け：固ナダ 風化：固板 固板ナダ	口掛け：固ナダ 風化：固板 固板ナダ	7/8		
[160]	S K B 05	土・草		24.4	1	6.0 岩：石英岩・黑雲母少 砂	(外) に古い岩の内) 砂	内因風化の体感で弱く、口掛けは強く折り返 してやや外因風化で固く、溶出は多く進む。	口掛け：固ナダ 風化：固板 固板ナダ	口掛け：固ナダ 風化：固板 固板ナダ	7/8		
[161]	S K B 05	土・草		27.4	1	6.0 岩：石英岩・黑雲母少 砂	(外) に古い岩の内) 砂	口掛けは外因風化によって強めに固く、固 く、溶出は多く進む。	口掛け：固ナダ 風化：固板 固板ナダ	口掛け：固ナダ 風化：固板 固板ナダ	1/8		

測定番号	測定日	測定名	母地	口面積	断面	断土	色調	外見特徴	内部構造	持存率	保水性
1164	S.K.II.06	陶・砂伴	22.0	7.4	11.0	石英質	(外)に灰・黄褐色(内)に灰・黄褐色	体積は外側にして底盤に向て逐段する。端部は丸く削り、口縁は丸く削り、底盤は丸く削り。	口縁・底盤ナダ 体積：断面 ナダの底盤面7.4cm ² 体積：断面 ナダ	2/8	弱
1165	S.K.II.05	土・土焼	33.0	-	-	■■■ 石英多・黑雲母多	(外)灰・白灰質(内)に灰・白灰質	口縫隙は周囲を固めて、内部隙間に特に上方向へ向て、端部は円形のつぶ、内側へ向て、端部は円形のつぶ、内側へ向て、	口縫隙ナダ 体積：断面 ナダ	2/8	弱
1166	S.K.II.40	土・■■	9.0	{ 1.7 }	5.0	■■■ 石英多・黑雲母多	(外)灰(内)白灰質	口縫隙は周囲を固めて、端部は四角形のつぶ	口縫隙ナダ	2/8	弱
1167	S.K.II.40	土・灰	-	-	4.9	中・灰・石英少・半砂少	(外)灰質(内)灰質	体積は外側にして底盤に向て逐段する。底盤は丸く削り、口縫隙は丸く削り、底盤は丸く削り、	ハタリ・マメフ	1/8	弱
1168	S.K.II.40	土・足底	-	-	-	中・石英多・黑雲母少	(外)灰質(内)灰質	口縫隙は丸く削り、端部は丸く削る。	口縫隙ナダ・マメフ	1/8	弱
1169	S.K.II.40	土・焼	37.6	-	-	中・石英多・黑雲母少	(外)灰質(内)灰質	口縫隙は丸く削り、端部は丸く削る。底盤は丸く削り、口縫隙は丸く削り、端部は丸く削る。	口縫隙ナダ 体積：断面 ナダ	2/8	弱
1170	S.K.II.48	瓦・砂伴	29.0	-	-	■■■ 石英多・黑雲母少	(外)灰質(内)灰質	口縫隙は周囲を固めて、端部は丸く削り、底盤は丸く削り、口縫隙は丸く削り、底盤は丸く削る。	口縫隙ナダ	2/8	弱
1171	S.K.II.48	土・足底	{ 20.0 }	-	-	■■■ 石英多・黑雲母少	(外)灰質(内)灰質	口縫隙は周囲を固めて、端部は丸く削り、底盤は丸く削る。	ハタリ・マメフ	1/8	弱
1172	S.K.II.48	土・田	10.6	{ 1.9 }	5.6	■■■ 石英少・半砂少	(外)灰(内)灰	口縫隙は周囲を固めて、端部は丸く削り、底盤は丸く削る。	ハタリ	1/8	弱
1173	S.K.II.48	土・田	{ 9.6 } { 1.9 }	{ 5.6 }	中・石英少	(外)灰質(内)灰質	口縫隙は周囲を固めて、端部は丸く削り、底盤は丸く削る。	ハタリ	1/8	弱	
1174	S.K.II.48	土・田	9.8	2.2	5.6	■■■ 石英少・半砂少	(外)灰質(内)灰	口縫隙は周囲を固めて、端部は丸く削り、底盤は丸く削る。	ハタリ・マメフ	1/8	弱
1175	S.K.II.60	土・焼(口)	-	-	-	中・石英多・黑雲母少	(外)灰	口縫隙は周囲を固めて、端部は丸く削り、底盤は丸く削る。	口縫隙ナダ 体積：断面 ナダ	2/8	弱
1176	S.K.II.62	土・焼(口)	-	-	-	中・石英少	(外)灰質(内)灰質	口縫隙は周囲を固めて、端部は丸く削り、底盤は丸く削る。	ハタリ	1/8	弱
1177	S.K.II.62	土・焼	30.0	-	-	中・石英多・黑雲母少	(外)灰質(内)灰質	口縫隙は周囲を固めて、端部は丸く削り、底盤は丸く削る。	ハタリ・マメフ	1/8	弱
1178	S.K.II.62	土・焼	21.4	-	-	中・石英少	(外)灰質(内)灰質	口縫隙は周囲を固めて、端部は丸く削り、底盤は丸く削る。	ハタリ・マメフ	1/8	弱
1179	S.K.II.62	陶・田	-	-	5.6	粉砂	(陶)灰オリーブ(内)灰白	口縫隙は周囲を固めて、端部は丸く削り、底盤は丸く削る。	口縫隙ナダ 体積：断面 ナダ	1/8	弱
1180	S.K.II.62	陶・田	11.0	-	-	粉砂	(陶)灰質(内)灰質	口縫隙は周囲を固めて、端部は丸く削り、底盤は丸く削る。	口縫隙ナダ 体積：断面 ナダ	1/8	弱
1181	S.K.II.62	土・砂伴	28.6	-	-	■■■ 石英多・黑雲母少	(外)に灰・白・電(内)灰	口縫隙は周囲を固めて、端部は丸く削り、底盤は丸く削る。	口縫隙ナダ 体積：断面 ナダ	1/8	弱
1182	S.K.II.62	土・砂伴	21.8	10.2	11.8	中・石英少・黑雲母多	(外)灰質(内)灰質	口縫隙は周囲を固めて、端部は丸く削り、底盤は丸く削る。	口縫隙ナダ 体積：断面 ナダ	1/8	弱
1183	S.K.II.62	土・焼	27.2	-	-	■■■ 石英少	(外)灰質(内)灰質	口縫隙は周囲を固めて、端部は丸く削り、底盤は丸く削る。	口縫隙ナダ 体積：断面 ナダ	1/8	弱
1184	S.K.II.62	土・焼	26.6	{ 14.3 }	-	■■■ 石英少	(外)灰質(内)灰質	口縫隙は周囲を固めて、端部は丸く削り、底盤は丸く削る。	口縫隙ナダ 体積：断面 ナダ	1/8	弱

標名	通称名	固根	口道	筋高	筋径	中：右毛少・黑色多 外灰青白(内)浅黄 外灰青白	色調	内面潤滑 内側する半透明より、透明にして透明部は内側 して左毛少より伸びる。内側部外 に透明に於く透明した部分付し、また凹凸 を伴う外側より伸びる。	外面部潤滑 透明して内側部は内側より 透明に於く透明した部分付し、また凹凸 を伴う外側より伸びる。	口絆：ヨコナデ 体筋・筋毛 ナデ	口絆：ヨコナデ 体筋・筋毛 ナデ	筋外面部潤滑 筋外面部潤滑
1185	S X 02	土・鶴		25.4								
1186	S X 06	脚・脚伸		12.6		中：右毛多 外灰青白(内)浅黄 外灰青白						
1187	S X 06	土・足茎?		21.2		中：右毛多 外灰青白(内)浅黄 外灰青白						
1188	S X 06	脚・脚伸		30.4		中：右毛多 外灰青白(内)浅黄 外灰青白						
1189	S X 06	土・土塊		40.0		中：右毛多 外灰青白(内)浅黄 外灰青白						
1190	S X 06	土・土塊		10.4		中：右毛少 外灰青白(内)浅黄 外灰青白						
1191	S D 06	脚・足		24.4		中：右毛多 外灰青白(内)浅黄 外灰青白						
1192	S D 06	脚・足		21.8		中：右毛多 外灰青白(内)浅黄 外灰青白						
1193	S D 06	土・鶴		10.0		中：右毛多 外灰青白(内)浅黄 外灰青白						
1194	S D 06	脚・足		11.8	2.6	中：右毛多 外灰青白(内)浅黄 外灰青白						
1195	S D 06	土・足茎		7.0	2.3	中：右毛多 外灰青白(内)浅黄 外灰青白						
1196	S D 06	土・鶴		11.8	2.6	中：右毛多 外灰青白(内)浅黄 外灰青白						
1197	S D 06	土・足		11.8	2.6	中：右毛多 外灰青白(内)浅黄 外灰青白						
1198	S D 06	土・足		8.8		中：右毛多 外灰青白(内)浅黄 外灰青白						
1199	S D 06	脚・足		27.6		中：右毛少 外灰青白(内)浅黄 外灰青白						
1200	S D 06	土・鶴		20.4		中：右毛少 外灰青白(内)浅黄 外灰青白						
1201	S D 06	脚・脚伸		20.4		中：右毛少 外灰青白(内)浅黄 外灰青白						
1202	S D 130	土・鶴	(26.3)			中：右毛多 外灰青白(内)浅黄 外灰青白						
1203	S D 130	土・足茎	(27.1)			中：右毛多 外灰青白(内)浅黄 外灰青白						
1204	S D 130	脚・足				中：右毛多 外灰青白(内)浅黄 外灰青白						
1205	S D 130	足・鶴				中：右毛多 外灰青白(内)浅黄 外灰青白						
1206	S D 131	土・足茎	(26.4)			中：右毛多 外灰青白(内)浅黄 外灰青白						
1207	S D 131	脚・鶴	(21.8)			中：右毛多 外灰青白(内)浅黄 外灰青白						
1208	S D 135	土・足茎?	(26.7)			中：右毛多 外灰青白(内)浅黄 外灰青白						

地図	地図名	岩相名	岩種	口径	透視	風景	地土	色調	岩相	外因環境	内因環境	保存年	保存者
[1211]	SD 44#48 土・粘?			9.2	1.9	6.0	中：石英少・赤色鉄少	(外)灰白(内)灰白	口縫隙部はやや肥厚してくぼむ。端部はよく外反して開き、端部はよく折れ。	断面ナメ	断面ナメ	西村栄	
[1212]	SD 44#48 土・粘			9.6	2.1	4.8	中：石英少・赤色鉄少	(外)灰青(内)透青	口縫隙部はやや外傾して開き、端部はよく折れ。	断面ナメ	断面ナメ	西村栄	
[1213]	SD 44#48 土・粘			9.6	2.1	4.8	中：石英少・赤色鉄少	(外)灰青(内)透青	口縫隙部は内傾してつづく。端部はよく折れ。	断面ナメ	断面ナメ	西村栄	
[1214]	SD 44#48 土・粘			9.9	2.1	6.3	中：石英多・高含量少	(外)灰青(内)灰青	口縫隙部はやや外反して開き、端部はよく折れ。	断面ナメ	断面ナメ	西村栄	
[1215]	SD 44#48 土・粘			11.3	2.1	6.1	中：石英少	(外)明青青(内)透青	口縫隙部はやや外傾して開き、端部はよく折れ。	断面ナメ	断面ナメ	西村栄	
[1216]	SD 44#48 土・粘			9.9	5.8	中：石英少	(外)灰白(内)灰白	口縫隙部はやや外傾して開き、端部はよく折れ。	断面ナメ	断面ナメ	西村栄		
[1217]	SD 44#48 土・粘			9.6	2.2	5.7	中：石英少・黒含量少	(外)灰(内)灰	口縫隙部はやや外傾して開き、端部はよく折れ。	断面ナメ	断面ナメ	西村栄	
[1218]	SD 44#48 土・粘			10.0		中：石英少	(外)にぶい黄青(内)透青	口縫隙部はやや外傾して開き、端部はよく折れ。	断面ナメ	断面ナメ	西村栄		
[1219]	SD 44#48 土・見透					中：石英多・赤色鉄少	(外)透青(内)透青	口縫隙部はやや外傾して開き、端部はよく折れ。	断面ナメ	断面ナメ	西村栄		
[1220]	SD 44#48 土・灰鉄					中：石英少・黒含量少	(外)暗灰青(内)灰	口縫隙部はやや外傾して開き、端部はよく折れ。	断面ナメ	断面ナメ	西村栄		
[1221]	SD 44#48 土・鉄鉱					中：石英多・黒含量少	(外)灰(内)灰	口縫隙部はやや外傾して開き、端部はよく折れ。	断面ナメ	断面ナメ	西村栄		
[1222]	SD 44#48 土・足場			30.0		中：石英多・赤色鉄少	(外)灰(内)透青	口縫隙部はやや外傾して開き、端部はよく折れ。	断面ナメ	断面ナメ	西村栄		
[1223]	SD 44#48 土・足場					中：石英多・黒含量少	(外)にぶい黄(内)透	口縫隙部はやや内傾して開き、端部はよく折れ。	断面ナメ	断面ナメ	西村栄		
[1224]	SD 44#48 土・透					中：石英少・赤色鉄少	(外)灰(内)透青	口縫隙部はやや内傾して開き、端部はよく折れ。	断面ナメ	断面ナメ	西村栄		
[1225]	SD 44#48 土・井			30.0		中：石英多・赤色鉄少	(外)灰青青(内)灰青	口縫隙部はやや外傾して開き、端部はよく折れ。	断面ナメ	断面ナメ	西村栄		
[1226]	SD 44#48 土・鉄鉱			(29.2)	10.9	(13.0)	中：石英少・黒含量少	(外)灰青白(内)透	口縫隙部はやや外傾して開き、端部はよく折れ。	断面ナメ	断面ナメ	西村栄	
[1227]	SD 44#48 土・粘			30.0		中：石英少・白色鉄少	(外)灰青(内)透	口縫隙部は内傾にして開き、端部はよく折れ。	断面ナメ	断面ナメ	西村栄		
[1228]	SD 47#70 土・鉄鉱					中：石英多・黒含量少	(外)明青(内)透	口縫隙部はやや外傾して開き、端部はよく折れ。	断面ナメ	断面ナメ	西村栄		
[1229]	SD 47#70 土・粘			9.0		中：石英少・黑色鉄少	(外)灰(内)灰	口縫隙部は内傾して開き、端部はよく折れ。	断面ナメ	断面ナメ	西村栄		
[1230]	SP 1006 土・粘			14.0		中：粘	(施)灰オーバー	口縫隙部は外傾して開き、端部はよく折れ。	断面ナメ	断面ナメ	西村栄		
[1231]	SP 1003 土・粘			15.0		中：粘	(施)灰白(内)透	口縫隙部は内傾して開き、端部はよく折れ。	断面ナメ	断面ナメ	西村栄		

標名	部名	通称名	容積	口径	蓄積	底質	標：石英少・黑岩多 (外)海綿質(内)海綿質	色調	特徴	外因要素	体感：ヨリナデ 体感：ナダ	内因要素	体感：ヨリナデ 体感：ナダ	操作手本	備考
1232	SP II 25	土・礫	40.0	蓄積	底：石英少・黑岩多 (外)海綿質(内)海綿質	砂	口縁部は内側にやや傾斜して、底はまぐく 折れ込む。	白色	口縁部はヨリナデで、底はナダ ナダ。	口縁：ヨリナデ 体感：ナダ	口縁：ヨリナデ 体感：ナダ	目板ナダの施設目立点と、目板	目板ナダの施設目立点と、目板	1/8	
1233	SK II 01	陶・礫	22.8	蓄積	底：石英少 (外)海綿質(内)海綿質	砂	内側は外傾して、底はまぐく折れ込む。 目板は記載して、上方に一歩傾いて、内側 に傾きの施設をもつ。	白色	口縁部はヨリナデで、底はナダ ナダ。	口縁：ヨリナデ 体感：ナダ	口縁部はヨリナデで、底はナダ ナダ。	目板ナダの施設目立点と、目板	目板ナダの施設目立点と、目板	1/8	
1234	SK II 01	陶・陶	10.2	蓄積	底質	砂	内側して立ち上がり、口縁部はまぐく折 れ込み。	白色	底質	底質	底質	底質	底質	2/8	堅物底、2水
1237	SK II 01	陶・陶	10.2	蓄積	底質	砂	内側して立ち上がり、口縁部はまぐく折 れ込み。	白色	底質	底質	底質	底質	底質	1/8	堅物底、2水
1238	SK II 01	陶・陶	4.3	蓄積	底質	砂	やや厚めの内壁より外側にして2段上がる。 底質はやや外方へ傾きる高めの底台を行 く。	白色	底質	底質	底質	底質	底質	1/8	堅物底、2水
1239	SK II 01	陶・陶	25.2	蓄積	底質	砂	底質はやや内傾して出でたく開く。 底質は水平に2段へ傾む。	白色	口縁部は ヨリナデで、底はナダ ナダ。	口縁部は ヨリナデで、底はナダ ナダ。	口縁部は ヨリナデで、底はナダ ナダ。	口縁部は ヨリナデで、底はナダ ナダ。	口縁部は ヨリナデで、底はナダ ナダ。	2/8	堅物底、2水
1240	SK II 02	陶・皿	4.4	蓄積	底質	砂	内側はヨリナデで、底はナダ ナダ。	白色	口縁部はヨリナデで、底はナダ ナダ。	口縁部は ヨリナデで、底はナダ ナダ。	口縁部は ヨリナデで、底はナダ ナダ。	口縁部は ヨリナデで、底はナダ ナダ。	口縁部は ヨリナデで、底はナダ ナダ。	2/8	堅物底、2水
1241	SK II 03	陶・陶	5.2	蓄積	底：石英少 (外)海綿質(内)海綿質	砂	内側はヨリナデで、底はナダ ナダ。	白色	口縁部はヨリナデで、底はナダ ナダ。	口縁部は ヨリナデで、底はナダ ナダ。	口縁部は ヨリナデで、底はナダ ナダ。	口縁部は ヨリナデで、底はナダ ナダ。	口縁部は ヨリナデで、底はナダ ナダ。	2/8	堅物底
1242	SK II 03	土・陶?	5.2	蓄積	底質	砂	内側はヨリナデで、底はナダ ナダ。	白色	口縁部はヨリナデで、底はナダ ナダ。	口縁部は ヨリナデで、底はナダ ナダ。	口縁部は ヨリナデで、底はナダ ナダ。	口縁部は ヨリナデで、底はナダ ナダ。	口縁部は ヨリナデで、底はナダ ナダ。	2/8	堅物底
1243	SK II 03	陶・陶	10.4	蓄積	底：石英少 (外)海綿質(内)海綿質	砂	内側はヨリナデで、底はナダ ナダ。	白色	口縁部はヨリナデで、底はナダ ナダ。	口縁部は ヨリナデで、底はナダ ナダ。	口縁部は ヨリナデで、底はナダ ナダ。	口縁部は ヨリナデで、底はナダ ナダ。	口縁部は ヨリナデで、底はナダ ナダ。	2/8	堅物底
1246	SK II 06	陶・陶	10.4	蓄積	底質	砂	内側はヨリナデで、底はナダ ナダ。	白色	口縁部はヨリナデで、底はナダ ナダ。	口縁部は ヨリナデで、底はナダ ナダ。	口縁部は ヨリナデで、底はナダ ナダ。	口縁部は ヨリナデで、底はナダ ナダ。	口縁部は ヨリナデで、底はナダ ナダ。	2/8	堅物底
1247	SK II 06	陶・陶	5.0	蓄積	底質	砂	内側はヨリナデで、底はナダ ナダ。	白色	口縁部はヨリナデで、底はナダ ナダ。	口縁部は ヨリナデで、底はナダ ナダ。	口縁部は ヨリナデで、底はナダ ナダ。	口縁部は ヨリナデで、底はナダ ナダ。	口縁部は ヨリナデで、底はナダ ナダ。	2/8	堅物底
1253	SK II 11	陶・陶	5.2	蓄積	底質	砂	内側はヨリナデで、底はナダ ナダ。	白色	口縁部はヨリナデで、底はナダ ナダ。	口縁部は ヨリナデで、底はナダ ナダ。	口縁部は ヨリナデで、底はナダ ナダ。	口縁部は ヨリナデで、底はナダ ナダ。	口縁部は ヨリナデで、底はナダ ナダ。	2/8	中国底
1254	SK II 11	陶・陶	8.4	蓄積	底質	砂	内側はヨリナデで、底はナダ ナダ。	白色	口縁部はヨリナデで、底はナダ ナダ。	口縁部は ヨリナデで、底はナダ ナダ。	口縁部は ヨリナデで、底はナダ ナダ。	口縁部は ヨリナデで、底はナダ ナダ。	口縁部は ヨリナデで、底はナダ ナダ。	2/8	堅物底
1255	SK II 11	陶・陶	9.9	蓄積	底質	砂	内側はヨリナデで、底はナダ ナダ。	白色	口縁部はヨリナデで、底はナダ ナダ。	口縁部は ヨリナデで、底はナダ ナダ。	口縁部は ヨリナデで、底はナダ ナダ。	口縁部は ヨリナデで、底はナダ ナダ。	口縁部は ヨリナデで、底はナダ ナダ。	2/8	堅物底
1256	SK II 11	陶・陶	10.5	蓄積	底質	砂	内側はヨリナデで、底はナダ ナダ。	白色	口縁部はヨリナデで、底はナダ ナダ。	口縁部は ヨリナデで、底はナダ ナダ。	口縁部は ヨリナデで、底はナダ ナダ。	口縁部は ヨリナデで、底はナダ ナダ。	口縁部は ヨリナデで、底はナダ ナダ。	2/8	堅物底
1257	SK II 11	陶・陶	4.2	蓄積	底質	砂	内側はヨリナデで、底はナダ ナダ。	白色	口縁部はヨリナデで、底はナダ ナダ。	口縁部は ヨリナデで、底はナダ ナダ。	口縁部は ヨリナデで、底はナダ ナダ。	口縁部は ヨリナデで、底はナダ ナダ。	口縁部は ヨリナデで、底はナダ ナダ。	2/8	堅物底
1258	SK II 11	陶・陶	5.0	蓄積	底質	砂	内側はヨリナデで、底はナダ ナダ。	白色	口縁部はヨリナデで、底はナダ ナダ。	口縁部は ヨリナデで、底はナダ ナダ。	口縁部は ヨリナデで、底はナダ ナダ。	口縁部は ヨリナデで、底はナダ ナダ。	口縁部は ヨリナデで、底はナダ ナダ。	2/8	堅物底
1259	SK II 11	陶・陶?	6.4	蓄積	底質	砂	内側はヨリナデで、底はナダ ナダ。	白色	口縁部はヨリナデで、底はナダ ナダ。	口縁部は ヨリナデで、底はナダ ナダ。	口縁部は ヨリナデで、底はナダ ナダ。	口縁部は ヨリナデで、底はナダ ナダ。	口縁部は ヨリナデで、底はナダ ナダ。	2/8	堅物底
1260	SK II 11	陶・陶	15.0	蓄積	底質	砂	内側はヨリナデで、底はナダ ナダ。	白色	口縁部はヨリナデで、底はナダ ナダ。	口縁部は ヨリナデで、底はナダ ナダ。	口縁部は ヨリナデで、底はナダ ナダ。	口縁部は ヨリナデで、底はナダ ナダ。	口縁部は ヨリナデで、底はナダ ナダ。	2/8	堅物底
1261	SK II 11	陶・陶	4.5	蓄積	底質	砂	底質はヨリナデで、底はナダ ナダ。	白色	底質	底質	底質	底質	底質	1/8	泥底
1262	SK II 11	陶・陶	4.5	蓄積	底質	砂	底質はヨリナデで、底はナダ ナダ。	白色	底質	底質	底質	底質	底質	1/8	泥底
1263	SK II 11	陶・陶	4.6	蓄積	底質	砂	底質はヨリナデで、底はナダ ナダ。	白色	底質	底質	底質	底質	底質	2/8	泥底

種別	回数	道名	群名	口語	音高	経度	衛土	色調	内面顔面	外顔面	内面顔面	外顔面	内面顔面	外顔面
種別回数	SK 011	福・東		3.9 頭微		3.9 頭微	(地) 勝利灰(地) 深白 (地) 背後	褐色	勝利・是込み灰の目地割	勝利・是込み灰の目地割	2/3	肥前系	2/3	肥前系
1264	SK 011	福・東		4.3 頭微		4.3 頭微	(地) 勝利灰(地) 深白 (地) 背後	褐色	勝利・是込み灰の目地割	勝利・是込み灰の目地割	5/6	肥前系	5/6	肥前系
1265	SK 011	福・東		4.2 頭微		4.2 頭微	(地) 勝利灰(地) 深白 (地) 背後	褐色	勝利・是込み灰の目地割	勝利・是込み灰の目地割	1/3	肥前系	1/3	肥前系
1266	SK 011	福・東		4.2 頭微		4.2 頭微	(地) 勝利灰(地) 深白 (地) 背後	褐色	勝利・是込み灰の目地割	勝利・是込み灰の目地割	5/6	肥前系	5/6	肥前系
1267	SK 011	福・東?		5.1 頭微		5.1 頭微	(地) 勝利灰(地) 深白 (地) 背後	褐色	勝利・是込み灰の目地割	勝利・是込み灰の目地割	2/3	肥前系	2/3	肥前系
1268	SK 011	福・東		4.3 頭微		4.3 頭微	(地) 勝利灰(地) 深白 (地) 背後	褐色	勝利・是込み灰の目地割	勝利・是込み灰の目地割	2/3	肥前系	2/3	肥前系
1269	SK 011	福・東		5.4 頭微		5.4 頭微	(地) 勝利灰(地) 深白 (地) 背後	褐色	勝利・是込み灰の目地割	勝利・是込み灰の目地割	2/3	肥前系	2/3	肥前系
1270	SK 011	福・東		4.2 頭微		4.2 頭微	(地) 勝利灰(地) 深白 (地) 背後	褐色	勝利・是込み灰の目地割	勝利・是込み灰の目地割	2/3	肥前系	2/3	肥前系
1271	SK 011	福・東		3.9 頭微		3.9 頭微	(地) 勝利灰(地) 深白 (地) 背後	褐色	勝利・是込み灰の目地割	勝利・是込み灰の目地割	5/8	肥前系	5/8	肥前系
1272	SK 011	福・東		4.4 頭微		4.4 頭微	(地) 勝利灰(地) 深白 (地) 背後	褐色	勝利・是込み灰の目地割	勝利・是込み灰の目地割	7/8	肥前系	7/8	肥前系
1273	SK 011	福・東		3.1	3.1	3.1	(地) 勝利灰(地) 深白 (地) 背後	褐色	勝利・是込み灰の目地割	勝利・是込み灰の目地割	2/3	肥前系	2/3	肥前系
1274	SK 011	福・東		4.3 頭微		4.3 頭微	(地) 勝利灰(地) 深白 (地) 背後	褐色	勝利・是込み灰の目地割	勝利・是込み灰の目地割	5/8	肥前系	5/8	肥前系
1275	SK 011	福・東		5.1 頭微		5.1 頭微	(地) 勝利灰(地) 深白 (地) 背後	褐色	勝利・是込み灰の目地割	勝利・是込み灰の目地割	5/8	肥前系	5/8	肥前系
1276	SK 011	福・東		7.0 頭微		7.0 頭微	(地) 勝利灰(地) 深白 (地) 背後	褐色	勝利・是込み灰の目地割	勝利・是込み灰の目地割	5/8	肥前系	5/8	肥前系
1277	SK 011	福・東		4.4 頭微		4.4 頭微	(地) 勝利灰(地) 深白 (地) 背後	褐色	勝利・是込み灰の目地割	勝利・是込み灰の目地割	7/8	肥前系	7/8	肥前系
1278	SK 011	福・東		10.2		10.2	(地) 勝利灰(地) 深白 (地) 背後	褐色	勝利・是込み灰の目地割	勝利・是込み灰の目地割	2/3	肥前系	2/3	肥前系
1279	SK 011	福・東		10.0		10.0	(地) 勝利灰(地) 深白 (地) 背後	褐色	勝利・是込み灰の目地割	勝利・是込み灰の目地割	5/8	肥前系	5/8	肥前系
1280	SK 011	福・東		9.8	6.5	4.7 頭微	(地) 勝利灰(地) 深白 (地) 背後	褐色	勝利・是込み灰の目地割	勝利・是込み灰の目地割	5/8	肥前系	5/8	肥前系
1281	SK 011	福・東		4.5 頭微		4.5 頭微	(地) 勝利灰(地) 深白 (地) 背後	褐色	勝利・是込み灰の目地割	勝利・是込み灰の目地割	7/8	肥前系	7/8	肥前系
1282	SK 011	福・東		4.2 頭微		4.2 頭微	(地) 勝利灰(地) 深白 (地) 背後	褐色	勝利・是込み灰の目地割	勝利・是込み灰の目地割	5/8	肥前系	5/8	肥前系
1283	SK 011	福・東		4.55 頭・石毛少		4.55 頭・石毛少	(地) 勝利灰(地) 深白 (地) 背後	褐色	勝利・是込み灰の目地割	勝利・是込み灰の目地割	4/8	肥前系	4/8	肥前系
1284	SK 011	福・東		4.2 頭微		4.2 頭微	(地) 勝利灰(地) 深白 (地) 背後	褐色	勝利・是込み灰の目地割	勝利・是込み灰の目地割	1/8	肥前系	1/8	肥前系
1285	SK 011	福・東		4.2 頭微		4.2 頭微	(地) 勝利灰(地) 深白 (地) 背後	褐色	勝利・是込み灰の目地割	勝利・是込み灰の目地割	7/8	肥前系	7/8	肥前系
1286	SK 011	福・東		9.9	7.2	4.5 頭微	(地) 勝利灰(地) 深白 (地) 背後	褐色	勝利・是込み灰の目地割	勝利・是込み灰の目地割	1/8	肥前系	1/8	肥前系

種別	固有名	通称名	器種	口径	高さ	底径	胎土	色調	剖面	外観特徴	内部構造	内部構造	参考
[1311]	S K 011	陶・皿	6.7 直鉢	6.7	直鉢	(陶) 陶質灰褐色の灰白色 (陶) 青白	口部の底盤よりやや内側にしづつ大きくなる 高台を有す。 底盤はやや内側にしづつなる断面合板状の 高台を有す。	施釉	丸み立たる自然輪	施釉	丸み立たる自然輪	4.6	毫毛系
[1312]	S K 011	陶・皿	9.0 直鉢	9.0	直鉢	(陶) 陶質灰褐色の灰白色 (陶) 青白	底盤はやや内側にしづつなる断面合板状の 高台を有す。	施釉	丸み立たる自然輪	施釉	丸み立たる自然輪	2.6	毫毛系
[1313]	S K 011	陶・鉢	8.4 中・石灰少	8.4	中・石灰少	(陶) 陶質灰褐色の灰白色 (陶) 青白	底盤はやや内側にしづつなる断面合板状の 高台を有す。 底盤はやや内側にしづつなる断面合板状の 高台を有す。	施釉	丸み立たる自然輪	施釉	丸み立たる自然輪	2.6	毫毛系
[1314]	S K 011	陶・鉢	16.5	9.4	7.3 直鉢	(陶) 陶質灰褐色の灰白色 いも柄	底盤はやや内側にしづつなる断面合板状の 高台を有す。 底盤はやや内側にしづつなる断面合板状の 高台を有す。	施釉	上・半施釉	施釉	上・半施釉	3.6	毫毛系
[1315]	S K 011	陶・鉢	27.6		直鉢	(陶) 陶質灰褐色の灰白色	底盤はやや内側にしづつなる断面合板状の 高台を有す。 底盤はやや内側にしづつなる断面合板状の 高台を有す。	施釉	自然輪	自然輪	自然輪	相片	毫毛系
[1316]	S K 011	陶・鉢	30.6		直鉢	(陶) 陶質灰褐色の灰白色 いも柄	底盤はやや内側にしづつなる断面合板状の 高台を有す。 底盤はやや内側にしづつなる断面合板状の 高台を有す。	施釉	自然輪	自然輪	自然輪	相片	毫毛系
[1317]	S K 011	陶・鉢	8.6 直鉢	8.6	直鉢	(陶) 陶質灰褐色の灰白色 いも柄	底盤はやや内側にしづつなる断面合板状の 高台を有す。	施釉	自然輪	自然輪	自然輪	相片	毫毛系
[1318]	S K 011	陶・鉢?	9.0 直鉢	9.0	直鉢	(陶) 陶質灰褐色の灰白色 いも柄	底盤はやや内側にしづつなる断面合板状の 高台を有す。	施釉	自然輪	自然輪	自然輪	相片	毫毛系
[1319]	S K 011	陶・鉢	12.1 直・石灰少	12.1	直・石灰少	(陶) 陶質灰褐色の灰白色 いも柄	底盤はやや内側にしづつなる断面合板状の 高台を有す。	施釉	自然輪	自然輪	自然輪	相片	毫毛系
[1320]	S K 011	陶・鉢	13.4 中・石灰多・青灰少	13.4	中・石灰多・青灰少	(陶) 陶質灰褐色の灰白色 いも柄	底盤はやや内側にしづつなる断面合板状の 高台を有す。	施釉	自然輪	自然輪	自然輪	相片	毫毛系
[1321]	S K 011	陶・香炉	9.6		直鉢	(陶) 陶質灰褐色の灰白色 いも柄	底盤はやや内側にしづつなる断面合板状の 高台を有す。	施釉	自然輪	自然輪	自然輪	相片	毫毛系
[1322]	S K 011	陶・片口鉢	19.0		中・石灰少	(陶) 陶質灰褐色の灰白色 いも柄	底盤はやや内側にしづつなる断面合板状の 高台を有す。	施釉	自然輪	自然輪	自然輪	相片	毫毛系
[1323]	S K 011	陶・瓶	30.6		中・石灰少	(陶) 陶質灰褐色の灰白色 いも柄	底盤はやや内側にしづつなる断面合板状の 高台を有す。	施釉	自然輪	自然輪	自然輪	相片	毫毛系
[1324]	S K 011	陶・瓶	36.0		瓶・石灰少	(陶) 陶質灰褐色の灰白色 いも柄	底盤はやや内側にしづつなる断面合板状の 高台を有す。	施釉	自然輪	自然輪	自然輪	相片	毫毛系
[1325]	S K 011	陶・瓶	47.0		瓶・石灰少	(陶) 陶質灰褐色の灰白色 いも柄	底盤はやや内側にしづつなる断面合板状の 高台を有す。	施釉	自然輪	自然輪	自然輪	相片	毫毛系
[1326]	S K 011	陶・器	34.0		中・石灰少	(陶) 陶質灰褐色の灰白色 いも柄	底盤はやや内側にしづつなる断面合板状の 高台を有す。	施釉	自然輪	自然輪	自然輪	相片	毫毛系
[1327]	S K 011	陶・器	29.3	12.8	11.8 直・石灰少	(陶) 陶質灰褐色の灰白色 いも柄	底盤はやや内側にしづつなる断面合板状の 高台を有す。	施釉	自然輪	自然輪	自然輪	相片	毫毛系
[1328]	S K 011	陶・器	32.8	14.3	16.0 中・石灰少	(陶) 陶質灰褐色の灰白色 いも柄	底盤はやや内側にしづつなる断面合板状の 高台を有す。	施釉	自然輪	自然輪	自然輪	相片	毫毛系
[1329]	S K 011	陶・器			中・石灰少・青灰少	(陶) 陶質灰褐色の灰白色 いも柄	底盤はやや内側にしづつなる断面合板状の 高台を有す。	施釉	自然輪	自然輪	自然輪	相片	毫毛系
[1330]	S K 011	陶・?			中・石灰少	(陶) 陶質灰褐色の灰白色 いも柄	底盤はやや内側にしづつなる断面合板状の 高台を有す。	施釉	自然輪	自然輪	自然輪	相片	毫毛系

研究番号	採取地名	採取場所	石炭種	石炭	口徑	熟成度	地質	外因性変異		内因性変異		特徴ナメラ	参考文献
								色調	外因性変異	内因性変異	特徴ナメラ		
1331	SK 011	南・西			9.6		中: 石炭少	(外)灰白(内)灰白	石炭の外因性変異は必ずしも熱によるものではなく、風化によるものである。	固結ナメラ	固結ナメラ	2/6	風化地
1332	SK 011	南・東			18.2	中: 石炭少	(外)灰白(内)灰黄	石炭の外因性変異は必ずしも熱によるものである。	固結ナメラ	固結ナメラの過度オサエ・ナメラ	固結ナメラ	2/6	風化地
1333	SK 011	土・足跡?			21.4	偏: 石炭少・黑色斑多	(外)灰白(内)灰白	体積は約半分である。口部はやや角張り、下部開口部は直角に開いており、底面に岩の跡を付ける。	固結ナメラ	固結ナメラの過度オサエ・ナメラ	固結ナメラ	2/6	風化地
1334	SK 011	土・足跡?			22.4	中: 石炭少	(外)灰白(内)灰白	口部は角張りをしており、底面はややくぼむ。	固結ナメラ	固結ナメラ	固結ナメラ	1/6	風化地
1335	SK 011	土・足跡?			26.6	中: 石炭少・黑色斑少	(外)灰白(内)灰白	口部は角張りをしており、底面はややくぼむ。	固結ナメラ	固結ナメラ	固結ナメラ	1/6	風化地
1336	SK 011	土・樹木			27.4?2	偏: 石炭少	(外)灰白(内)灰白	口部は角張りをしており、底面はややくぼむ。	固結ナメラ	固結ナメラ	固結ナメラ	1/6	風化地
1337	SK 011	土・樹木			28.0	偏: 石炭少・黑色斑少	(外)灰白(内)灰白	口部は角張りをしており、底面はややくぼむ。	固結ナメラ	固結ナメラ	固結ナメラ	1/6	風化地
1338	SK 011	瓦・樹木			38.8	中: 石炭多	(外)灰白(内)灰白	口部は角張りをしており、底面はややくぼむ。	固結ナメラ	固結ナメラ	固結ナメラ	1/6	風化地
1339	SK 011	土・樹木			32.2	偏: 石炭多	(外)灰白(内)灰白	口部は角張りをしており、底面はややくぼむ。	固結ナメラ	固結ナメラ	固結ナメラ	1/6	風化地
1340	SK 011	土・樹木?			37.9?	中: 石炭少	(外)灰白(内)灰白	口部は角張りをしており、底面はややくぼむ。	固結ナメラ	固結ナメラ	固結ナメラ	1/6	風化地
1341	SK 011	土・樹木			20.7	偏: 石炭少・黑色斑少	(外)灰白(内)灰白	口部は角張りをしており、底面はややくぼむ。	固結ナメラ	固結ナメラ	固結ナメラ	1/6	風化地
1342	SK 011	土・樹木?			11.0	中: 石炭少・黑色斑少	(外)灰白(内)灰白	口部は角張りをしており、底面はややくぼむ。	固結ナメラ	固結ナメラ	固結ナメラ	1/6	風化地
1343	SK 011	土・樹木			115.2?	中: 石炭少・黑色斑少	(外)灰白(内)灰白	口部は角張りをしており、底面はややくぼむ。	固結ナメラ	固結ナメラ	固結ナメラ	1/6	風化地
1344	SK 011	土・樹木			40.2	中: 石炭少・黑色斑少	(外)灰白(内)灰白	口部は角張りをしており、底面はややくぼむ。	固結ナメラ	固結ナメラ	固結ナメラ	1/6	風化地
1345	SK 011	土・樹木			32.2	中: 石炭少・黑色斑少	(外)灰白(内)灰白	口部は角張りをしており、底面はややくぼむ。	固結ナメラ	固結ナメラ	固結ナメラ	1/6	風化地
1346	SK 011	土・樹木?			134.2?	中: 石炭少・黑色斑少	(外)灰白(内)灰白	口部は角張りをしており、底面はややくぼむ。	固結ナメラ	固結ナメラ	固結ナメラ	1/6	風化地
1347	SK 011	土・樹木?			134.6?	中: 石炭少・黑色斑少	(外)灰白(内)灰白	口部は角張りをしており、底面はややくぼむ。	固結ナメラ	固結ナメラ	固結ナメラ	1/6	風化地
1348	SK 011	土・樹木?			136.4?	中: 石炭少・黑色斑少	(外)灰白(内)灰白	口部は角張りをしており、底面はややくぼむ。	固結ナメラ	固結ナメラ	固結ナメラ	1/6	風化地
1349	SK 011	土・樹木?			136.6?	中: 石炭少・黑色斑少	(外)灰白(内)灰白	口部は角張りをしており、底面はややくぼむ。	固結ナメラ	固結ナメラ	固結ナメラ	1/6	風化地

標注(頭版)	通称名	岩相	口溶 (36.0)	溶出 率	粘土 率	粘土 中: 粘土多・黑泥少 -: 黑泥多	色調 (外)淡青綠(内)褐	外觀特徵 口溶漿はやや中間調で、黒泥は強く構成する。灰白色に近い。	内觀特徵 リードサエの鉛鉱ナダ+ハクナ	研究者 横井	備考
SK 911	土・礫少?										
SK 911	土・礫少?	46.4				中: 灰多 -: 黑泥少	(外)にぶい黄褐色(内) -: 黑泥少	口溶漿は灰に近い。ただし、黒泥は強く構成する。	リードサエの鉛鉱ナダ+ハクナ	横井	
SK 911	土・礫少?	53.6				中: 灰多 -: 黑泥少	(外)にぶい黄褐色(内) -: 黑泥少	口溶漿は灰に近い。ただし、黒泥は強く構成する。	リードサエの鉛鉱ナダ+ハクナ	横井	
SK 911	土・礫少?	31.4				中: 石英多・黑泥少 -: 黑泥少	(外)にぶい黄褐色(内) -: 黑泥少	口溶漿は灰に近い。ただし、黒泥は強く構成する。	リードサエの鉛鉱ナダ+ハクナ	横井	
SK 911	土・礫少?	46.0				中: 灰多 -: 黑泥少	(外)にぶい黄褐色(内) -: 黑泥少	口溶漿は灰に近い。ただし、黒泥は強く構成する。	リードサエの鉛鉱ナダ+ハクナ	横井	
SK 912	土・黑泥少		30.0	225.0		中: 灰多 -: 黑泥少	(外)淡青綠(内)褐 (外)淡青綠(内)褐	口溶漿は灰に近い。ただし、黒泥は強く構成する。	リードサエの鉛鉱ナダ+ハクナ	横井	体・底層外因 侵食
SK 912	土・黑泥少		44.3			中: 灰多 -: 黑泥少	(外)淡青綠(内)褐 (外)淡青綠(内)褐	口溶漿は灰に近い。ただし、黒泥は強く構成する。	リードサエの鉛鉱ナダ+ハクナ	横井	
SK 912	土・黑泥少		4.8	1.5	1.4	同前	(外)淡青綠(内)褐 (外)淡青綠(内)褐	口溶漿は灰に近い。ただし、黒泥は強く構成する。	リードサエの鉛鉱ナダ+ハクナ	横井	
SK 912	土・黑泥少		11.0			同前	(外)淡青綠(内)褐 (外)淡青綠(内)褐	口溶漿は灰に近い。ただし、黒泥は強く構成する。	リードサエの鉛鉱ナダ+ハクナ	横井	
SK 912	土・黑泥少		3.6	同前		同前	(外)淡青綠(内)褐 (外)淡青綠(内)褐	口溶漿は灰に近い。ただし、黒泥は強く構成する。	リードサエの鉛鉱ナダ+ハクナ	横井	
SK 912	土・黑泥少		5.0	同前		同前	(外)淡青綠(内)褐 (外)淡青綠(内)褐	口溶漿は灰に近い。ただし、黒泥は強く構成する。	リードサエの鉛鉱ナダ+ハクナ	横井	
SK 912	土・黑泥少		12.8			同: 灰多 -: 黑泥少	(外)淡青綠(内)褐 (外)淡青綠(内)褐	口溶漿は灰に近い。ただし、黒泥は強く構成する。	リードサエの鉛鉱ナダ+ハクナ	横井	
SK 912	土・黑泥少		24.7			中: 灰多 -: 黑泥少	(外)淡青綠(内)褐 (外)淡青綠(内)褐	口溶漿は灰に近い。ただし、黒泥は強く構成する。	リードサエの鉛鉱ナダ+ハクナ	横井	
SK 912	土・黑泥少		3.2	同前		同前	(外)淡青綠(内)褐 (外)淡青綠(内)褐	口溶漿は灰に近い。ただし、黒泥は強く構成する。	リードサエの鉛鉱ナダ+ハクナ	横井	
SK 912	土・黑泥少		5.4	同前		同前	(外)淡青綠(内)褐 (外)淡青綠(内)褐	口溶漿は灰に近い。ただし、黒泥は強く構成する。	リードサエの鉛鉱ナダ+ハクナ	横井	
SK 912	土・黑泥少		30.5			中: 石英少 -: 黑泥少	(外)にぶい黄褐色(内) -: 黑泥少	口溶漿は灰に近い。ただし、黒泥は強く構成する。	リードサエの鉛鉱ナダ+ハクナ	横井	
SK 913	土・黑泥少		5.0	同前		同前	(外)淡青綠(内)褐 (外)淡青綠(内)褐	口溶漿は灰に近い。ただし、黒泥は強く構成する。	リードサエの鉛鉱ナダ+ハクナ	横井	
SK 913	土・黑泥少		13.6			同前	(外)淡青綠(内)褐 (外)淡青綠(内)褐	口溶漿は灰に近い。ただし、黒泥は強く構成する。	リードサエの鉛鉱ナダ+ハクナ	横井	
SK 913	土・黑泥少		4.3	同前		同前	(外)淡青綠(内)褐 (外)淡青綠(内)褐	口溶漿は灰に近い。ただし、黒泥は強く構成する。	リードサエの鉛鉱ナダ+ハクナ	横井	

標題	部類	送達名	書名	印行所	著者	版次	刷数	版土	色調	右欄	外語摘要	内面摘要	撰述者	備考
1445	S D 001	脚・脚	(脚)オリーブ(脚)			4.2	脚綴		黒地	脚綴 - 高台綴	脚綴 - 打掛毛目文 - 高台綴	脚綴 - 高台綴毛目文	5/6	脚綴
1446	S D 001	脚・脚	9.0	6.2	4.5	脚綴		(脚)オリーブ(脚)	黒地	脚綴 - 高台綴	脚綴 - 高台綴毛目文	5/6	脚綴	
1447	S D 001	脚・脚				4.6	脚綴		黒地	脚綴 - 高台綴	脚綴 - 高台綴毛目文	5/6	脚綴	
1448	S D 001	脚・脚				4.3	脚綴	(脚)オリーブ(脚) 黒地	黒地	脚綴 - 高台綴	脚綴 - 高台綴毛目文	5/6	脚綴	
1449	S D 001	脚・脚	9.9	6.3	3.6	脚綴		(脚)オリーブ(脚) 黒地	黒地	脚綴 - 高台綴	脚綴 - 高台綴毛目文	5/6	脚綴	
1450	S D 001	脚・脚				4.0	脚綴	(脚)オリーブ(脚) 黒地	黒地	脚綴 - 高台綴	脚綴 - 高台綴毛目文	2/6	脚綴	
1451	S D 001	脚・脚	11.6			脚綴		(脚)オリーブ(脚) 黒地	黒地	脚綴 - 高台綴	脚綴 - 高台綴毛目文	1/6	脚綴	
1452	S D 001	脚・脚	10.6			脚綴		(脚)オリーブ(脚) リード	黒地	脚綴 - 高台綴	脚綴 - 高台綴毛目文	1/6	脚綴	
1453	S D 001	脚・脚	10.0			脚綴		(脚)オリーブ(脚) リード	黒地	脚綴 - 高台綴	脚綴 - 高台綴毛目文	1/6	脚綴	
1454	S D 001	脚・脚	10.0			脚綴		(脚)オリーブ(脚) リード	黒地	脚綴 - 高台綴	脚綴 - 高台綴毛目文	1/6	脚綴	
1455	S D 001	脚・脚	10.8			脚綴		(脚)オリーブ(脚) リード	黒地	脚綴 - 高台綴	脚綴 - 高台綴毛目文	1/6	脚綴	
1456	S D 001	脚・脚				5.2	脚綴	(脚)オリーブ(脚) リード	黒地	脚綴 - 高台綴	脚綴 - 高台綴毛目文	2/6	脚綴	
1457	S D 001	脚・脚				4.0	脚綴	(脚)オリーブ(脚) リード	黒地	脚綴 - 高台綴	脚綴 - 高台綴毛目文	3/6	脚綴	
1458	S D 001	脚・脚	10.4	6.8	5.2	脚綴		(脚)オリーブ(脚) リード	黒地	脚綴 - 高台綴	脚綴 - 高台綴毛目文	3/6	脚綴	
1459	S D 001	脚・脚	10.2	6.6	4.2	脚綴		(脚)オリーブ(脚) リード	黒地	脚綴 - 高台綴	脚綴 - 高台綴毛目文	4/6	脚綴	
1460	S D 001	脚・脚	10.2			脚綴		(脚)オリーブ(脚) リード	黒地	脚綴 - 高台綴	脚綴 - 高台綴毛目文	5/6	脚綴	
1461	S D 001	脚・脚	10.2			脚綴		(脚)オリーブ(脚) リード	黒地	脚綴 - 高台綴	脚綴 - 高台綴毛目文	6/6	脚綴	
1462	S D 001	脚・脚				4.7	脚綴	(脚)オリーブ(脚) リード	黒地	脚綴 - 高台綴	脚綴 - 高台綴毛目文	3/6	脚綴	
1463	S D 001	脚・脚				4.2	脚綴	(脚)オリーブ(脚) リード	黒地	脚綴 - 高台綴	脚綴 - 高台綴毛目文	2/6	脚綴	
1464	S D 001	脚・脚				4.4	脚綴	(脚)オリーブ(脚) リード	黒地	脚綴 - 高台綴	脚綴 - 高台綴毛目文	6/6	脚綴	
1465	S D 001	脚・脚				4.7	脚綴	(脚)オリーブ(脚) リード	黒地	脚綴 - 高台綴	脚綴 - 高台綴毛目文	6/6	脚綴	

地番	地名	面積	丘陵	谷底	凹地	凸地	鞍部	盆地
1466	道場北	附・東			4.1	斜坡		
1467	SD H 01	附・東			4.2	斜坡		
1468	SD H 01	附・東			10.2	斜坡		
1469	SD H 01	附・東			10.6	斜坡		
1470	SD D 01	附・東			10.2	斜坡		
1471	SD D 01	附・東			5.0	斜坡		
1472	SD D 01	附・東			10.0	斜坡		
1473	SD D 01	附・東			3.0	斜坡		
1474	SD D 01	附・東			3.0	斜坡		
1475	SD D 01	附・東			9.9	斜坡		
1476	SD D 01	附・東			3.9	斜坡		
1477	SD D 01	附・東			9.8	斜坡		
1478	SD H 01	附・東			8.3	5.9	4.4	斜坡
1479	SD H 01	附・東				3.6	斜坡	
1480	SD H 01	附・東				4.5	斜坡	
1481	SD D 01	附・東				19.6	斜坡	
1482	SD D 01	附・東				5.1	斜坡	
1483	SD D 01	附・東			8.0	▲ 石炭少		
1484	SD D 01	附・東			20.6	斜坡		
1485	SD D 01	附・東			13.2	▲ 石炭少		
1486	SD H 01	附・東			14.6	斜坡		
1487	SD H 01	附・東			5.0	斜坡		
1488	SD H 01	附・東			3.9	斜坡		

番号	通名	通名	呼名	口元	音高	音速	振幅	相位	色彩	音色	音量	外面調査	内部調査	操作手
1489	S D 01	陶・繩		10.3	音	相位	相位	相位	(外)音楽(内)音楽	口輪郭は内側へ立ち上がり。開閉はくち	口輪郭は内側へ立ち上がり。開閉はくち	相位ナダ	相位ナダ	相手
1490	S D 01	瓦・繩		8.4	音	相位	相位	相位	(外)瓦(内)瓦	口輪郭より内側へ立ち上がり。口輪郭は小さく外側へ。喉頭は喉へ来る。	口輪郭より内側へ立ち上がり。口輪郭は小さく外側へ。喉頭は喉へ来る。	相位ナダ	相位ナダ	相手
1491	S D 01	土・皿		7.6	1.5	4.6	4.6	4.6	(外)音楽(内)音楽	口輪郭より内側へ立ち上がり。喉頭は喉へ来る。	口輪郭より内側へ立ち上がり。喉頭は喉へ来る。	相位ナダ	相位ナダ	相手
1492	S D 01	瓦・羽茎		11.8	中: 石英少	-	-	-	(外)瓦(内)瓦白	口輪郭は殆ど立ち上がり。喉頭は喉へ来る。	口輪郭は殆ど立ち上がり。喉頭は喉へ来る。	相位ナダ	相位ナダ	相手
1493	S D 01	陶・繩		30.8	音: 石英				(外)音楽(内)音楽	口輪郭は内側へ立ち上がり。口輪郭は最も強く鳴る。	口輪郭は内側へ立ち上がり。口輪郭は最も強く鳴る。	相位ナダ	相位ナダ	相手
1494	S D 01	陶・繩		34.0	中: 石英少				(外)音楽(内)音楽	口輪郭は内側へ立ち上がり。口輪郭は最も強く鳴る。	口輪郭は内側へ立ち上がり。口輪郭は最も強く鳴る。	相位ナダ	相位ナダ	相手
1495	S D 01	陶・繩		33.6	■: 石英少				(外)にぶい音(内)音	口輪郭は内側へ立ち上がり。口輪郭は最も強く鳴る。	口輪郭は内側へ立ち上がり。口輪郭は最も強く鳴る。	相位ナダ	相位ナダ	相手
1496	S D 01	土・羽茎		21.4	■: 石英少 - 黑苔出少				(外)土(内)瓦	口輪郭は内側へ立ち上がり。口輪郭は最も強く鳴る。	口輪郭は内側へ立ち上がり。口輪郭は最も強く鳴る。	相位ナダ	相位ナダ	相手
1497	S D 01	土・羽茎		20.0	中: 石英少 - 黑苔出少				(外)土(内)瓦白	口輪郭は内側へ立ち上がり。口輪郭は最も強く鳴る。	口輪郭は内側へ立ち上がり。口輪郭は最も強く鳴る。	相位ナダ	相位ナダ	相手
1498	S D 01	土・羽茎		38.6	■: 石英少 - 玉色出少				(外)土(内)瓦	口輪郭は内側へ立ち上がり。口輪郭は最も強く鳴る。	口輪郭は内側へ立ち上がり。口輪郭は最も強く鳴る。	相位ナダ	相位ナダ	相手
1499	S D 01	土・羽茎		40.8	中: 石英少 - 黑苔出少				(外)土(内)瓦白	口輪郭は内側へ立ち上がり。口輪郭は最も強く鳴る。	口輪郭は内側へ立ち上がり。口輪郭は最も強く鳴る。	相位ナダ	相位ナダ	相手
1500	S D 01	瓦・繩		40.4	■: 石英少				(外)瓦(内)瓦	口輪郭は内側へ立ち上がり。口輪郭は最も強く鳴る。	口輪郭は内側へ立ち上がり。口輪郭は最も強く鳴る。	相位ナダ	相位ナダ	相手
1501	S D 01	土・繩	?	28.4	中: 石英少 - 黑苔出少				(外)音楽(内)音楽	口輪郭は内側へ立ち上がり。口輪郭は最も強く鳴る。	口輪郭は内側へ立ち上がり。口輪郭は最も強く鳴る。	相位ナダ	相位ナダ	相手
1502	S D 01	土・繩	(34.2)	■: 石英少					(外)音楽(内)音	口輪郭は内側へ立ち上がり。口輪郭は最も強く鳴る。	口輪郭は内側へ立ち上がり。口輪郭は最も強く鳴る。	相位ナダ	相位ナダ	相手
1503	S D 01	土・繩	(37.0)	■: 石英少					(外)音楽(内)音	口輪郭は内側へ立ち上がり。口輪郭は最も強く鳴る。	口輪郭は内側へ立ち上がり。口輪郭は最も強く鳴る。	相位ナダ	相位ナダ	相手
1504	S D 01	土・繩		(38.2)	■: 瓦 - 石英多 - 玉色出少 - 玉色出少				(外)音楽(内)音	口輪郭は内側へ立ち上がり。口輪郭は最も強く鳴る。	口輪郭は内側へ立ち上がり。口輪郭は最も強く鳴る。	相位ナダ	相位ナダ	相手
1505	S D 01	土・繩		(38.0)	中: 石英少				(外)音楽(内)音	口輪郭は内側へ立ち上がり。口輪郭は最も強く鳴る。	口輪郭は内側へ立ち上がり。口輪郭は最も強く鳴る。	相位ナダ	相位ナダ	相手
1506	S D 01	土・繩		10.7	6.2	3.9	3.9	3.9	(外)瓦(内)瓦白	口輪郭は内側へ立ち上がり。口輪郭は最も強く鳴る。	口輪郭は内側へ立ち上がり。口輪郭は最も強く鳴る。	相位ナダ	相位ナダ	相手
1507	S D 01	土・繩		4.7	4.7	4.7	4.7	4.7	(外)音楽(内)音白	口輪郭は内側へ立ち上がり。口輪郭は最も強く鳴る。	口輪郭は内側へ立ち上がり。口輪郭は最も強く鳴る。	相位ナダ	相位ナダ	相手

種類	部屋名	面積	口日付	着床	進歩	施土	色調	外因性	内因性	操作手	会考
1517	S D 03	宿・廊	12.4	3.1	5.6	初期	(施)灰白(自)高(施)	筋筋は内側に開き、そのまま口唇間に沿 る。口唇部は丸く膨らむ。舌は厚 く、口唇部より舌へ引けられる。	筋筋・薄荷筋	筋筋文	4/3 肥前系
1518	S D 04	宿・廊	13.2	3.1	7.8	初期	(施)灰灰灰灰灰灰灰灰灰灰灰灰灰 (自)灰	口唇部は直立立ち上がり、筋筋をく れる。舌は直立立ち上がり、筋筋をく れる。舌は筋筋三重弓の低い筋筋を行 く。	筋筋・薄荷筋	コシニヤク特五 元気	肥前系
1519	S D 05	宿・廊	15.2	8.8	4.3	初期	(施)灰灰灰灰灰灰 (自)灰白	筋筋のやや後退めの筋筋を見せる。 筋筋はやや厚く、筋筋をくめる高 い筋筋を見る。	筋筋・薄荷筋	「大作手筋」 筋筋	3/3 肥前系
1520	S D 06	宿・廊	11.0			初期	(施)灰灰灰灰灰灰 (自)灰灰灰灰灰灰	内側して立ち上がり、口唇部はよく斜 れる。口唇部はよく斜める。	筋筋・薄荷筋	筋筋	1/6 鹿前系?
1521	S D 07	宿・廊	10.0			初期	(施)灰灰灰灰灰灰 (自)灰	筋筋は内側して立ち上がり、口唇部はよく斜 れる。口唇部はよく斜める。	筋筋・薄荷筋	筋筋	1/6 鹿前系
1522	S D 08	宿・廊	10.2	6.3	4.3	初期	(施)灰灰灰灰灰灰 (自)灰白(自)灰	筋筋は直立して立ち上がり、口唇部はよく斜 れる。筋筋は直立して立ち上がり、口唇部はよく斜 れる。	筋筋・薄荷筋	筋筋	3/3 肥前系
1523	S D 09	宿・廊	9.3	6.7		初期	(施)原ナリーブ灰 (自)灰灰灰灰灰灰灰灰	筋筋は厚く、内側で筋筋をくめる。口唇部 はやや厚く、内側で筋筋をくめる。舌は直 立する筋筋と舌を立てる筋筋を見る。	筋筋・薄荷筋	筋筋文	2/3 肥前系
1524	S D 10	宿・廊	11.2	6.9	4.3	初期	(施)原ナリーブ灰 (自)灰灰灰灰灰灰	筋筋は厚く、内側で筋筋をくめる。口唇部はも く筋筋を見る。舌は直立する筋筋と舌を立てる筋筋 を見る。	筋筋・薄荷筋	筋筋	1/6 肥前系
1525	S D 11	宿・廊	4.6			初期	(施)灰灰灰灰灰灰 (自)灰灰灰灰灰灰	筋筋を内側して立ち上がり、やややややめの筋 筋を見る。舌は直立する筋筋と舌を立てる筋筋	筋筋・薄荷筋	筋筋	7/3 肥前系
1526	S D 12	宿・廊	3.9			初期	(施)原ナリーブ灰 (自)灰灰灰灰灰灰	筋筋は直立する筋筋と舌を立てる筋筋	筋筋・薄荷筋	筋筋	7/3 巴前系
1527	S D 13	宿・廊	4.0			初期	(施)原ナリーブ灰 (自)灰	筋筋は直立する筋筋と舌を立てる筋筋	筋筋	7/3 巴前系	
1528	S D 14	宿・廊	4.4			初期	(施)原ナリーブ灰 (自)灰	筋筋は直立する筋筋と舌を立てる筋筋	筋筋・先丸み筋筋	筋筋	7/3 外因 蟹型
1529	S D 15	宿・廊	4.9			初期	(施)原ナリーブ灰 (自)灰	筋筋は厚く、筋筋の筋筋影の高さを作り出す。	筋筋・筋筋影	筋筋・筋筋影	7/3 鹿前系
1530	S D 16	宿・廊	4.0			初期	(施)にぶい筋筋 (自)にぶい筋筋	やや厚めの筋筋より筋筋影に大きく聞く。	筋筋・筋筋	筋筋	4/3 鹿前系、蟹行 四
1531	S D 17	宿・廊	6.0			初期	(施)原ナリーブ灰 (自)灰	筋筋は低い筋筋と舌を立てる筋筋	筋筋・筋筋	筋筋	3/3 中臣族
1532	S D 18	宿・廊	9.8			初期	(施)原ナリーブ灰 (自)灰	筋筋より筋筋影に大きく聞く。	筋筋・筋筋	筋筋	2/3 不約組、 肥前系
1533	S D 19	宿・廊	31.4			初期	(施)原ナリーブ灰 (自)灰	筋筋は内側で大きめ筋筋。口唇部はく れる。筋筋をくめる筋筋と舌を立てる筋筋	筋筋・筋筋影	筋筋	1/3 肥前系
1534	S D 20	宿・廊	10.7	2.0	4.0	初期	(外)にぶい筋筋 (自)灰	子供の筋筋より聞く。口唇部はく れる。口唇部はくめる筋筋と舌を立てる筋筋	筋筋・筋筋	筋筋ナード・筋土	3/3 肥前系
1535	S D 21	土・地蔵間	4.9			初期	(外)にぶい筋筋 (自)灰	子供の筋筋より聞く。筋筋は筋筋と筋筋 で立ち並ぶ。母の外筋は八角形に筋筋	筋筋・筋筋	筋筋文	2/3 豊前行
1536	S D 22	土・地蔵	37.2			初期	(外)原ナリーブ灰 (自)灰	外筋して六角形聞く筋筋より、筋筋をく める筋筋。	筋筋・筋筋	コシナダナデ? メハナリ	新近系、外版 蟹行
1537	S D 23	土・地蔵	39.0			初期	(外)原ナリーブ灰 (自)灰	外筋して四角形筋筋より、口唇部は筋筋と筋筋 で立ち並ぶ。	筋筋・筋筋	コシナダナデ・ヨリナデ メハナリ	1/3 原本系、外 版蟹行

種名	学名	部位	口歯	歯列	毛色	鱗片	色斑	鱗片	色斑	鱗片	色斑	口歯	歯列	毛色	鱗片	色斑	口歯	歯列	毛色	鱗片	色斑	口歯	歯列	毛色	鱗片	色斑	口歯	歯列	毛色	鱗片	色斑
1564 鳞鰐	Sceloporus	土・地表	42.6	中：万葉多・角吻行？	(外)灰黒(内)に点々と有り。吻側は濃く輪状。向後は尾に有する。体瘦。	口歯：横ハケ・側サテ	外顎吸盤	中：万葉多・角吻行？	(外)灰黒(内)に点々と有り。吻側は濃く輪状。向後は尾に有する。体瘦。	口歯：横ハケ・側サテ	細片	背面赤	1/8																		
1572	-	土・草	11.0	中：万葉多・黒頭少	(外)灰黒(内)頭部より外反して幅広く輪状。吻側は濃く輪状。向後は尾に有する。体瘦。	ヨコナデ・側サエ・マツツ	ヨコナデ・側サエ・マツツ	1/8																							
1573	包含帶Ⅱ	土・草葉	10.8	中：万葉多・黒頭少	(外)灰黒(内)頭部より外反して幅広く輪状。向後は尾に有する。体瘦。	ヨコナデ・側サエ・マツツ	ヨコナデ・側サエ・マツツ	1/8																							
1574	-	土・草	9.3	4.1	中：万葉多・石黒少	(外)灰黒(内)頭部より外反して幅広く輪状。向後は尾に有する。体瘦。	ヨコナデ・側サエ・マツツ	ヨコナデ・側サエ・マツツ	1/8																						
1575	包含帶Ⅲ	土・草	14.5	9.5	中：万葉多	(外)灰黒(内)頭部より外反して幅広く輪状。向後は尾に有する。体瘦。	ヨコナデ・側サエ・マツツ	ヨコナデ・側サエ・マツツ	1/8																						
1576	-	草・林蔭	-	7.9	中：万葉多	(外)灰黒(内)頭部より外反して幅広く輪状。向後は尾に有する。体瘦。	ヨコナデ・側サエ・マツツ	ヨコナデ・側サエ・マツツ	1/8																						
1577	包含帶Ⅳ	草・林蔭	-	9.3	中：万葉多・黑色多	(外)灰黒(内)頭部より外反して幅広く輪状。向後は尾に有する。体瘦。	ヨコナデ・側サエ・マツツ	ヨコナデ・側サエ・マツツ	1/8																						
1578	包含帶Ⅴ	草・蔓	6.8	中：万葉多	(外)灰黒(内)頭部より外反して幅広く輪状。向後は尾に有する。体瘦。	ヨコナデ・側サエ・マツツ	ヨコナデ・側サエ・マツツ	1/8																							
1579	包含帶Ⅵ	草・長葉草	-	19.0	中：万葉多・黑色多	(外)灰黒(内)頭部より外反して幅広く輪状。向後は尾に有する。体瘦。	ヨコナデ・側サエ・マツツ	ヨコナデ・側サエ・マツツ	1/8																						
1580	-	土・蔓	15.6	中：万葉多・黑色多	(外)灰黒(内)頭部より外反して幅広く輪状。向後は尾に有する。体瘦。	ヨコナデ・側サエ・マツツ	ヨコナデ・側サエ・マツツ	1/8																							
1581	-	土・刺田	24.5	中：万葉多・黑色多	(外)灰黒(内)頭部より外反して幅広く輪状。向後は尾に有する。体瘦。	ヨコナデ・側サエ・マツツ	ヨコナデ・側サエ・マツツ	1/8																							
1582	-	草・林	-	中：万葉多・黑色多	(外)灰黒(内)頭部より外反して幅広く輪状。向後は尾に有する。体瘦。	ヨコナデ・側サエ・マツツ	ヨコナデ・側サエ・マツツ	1/8																							
1583	-	土・高草	17.1	中：万葉多・黑色多	(外)灰黒(内)頭部より外反して幅広く輪状。向後は尾に有する。体瘦。	ヨコナデ・側サエ・マツツ	ヨコナデ・側サエ・マツツ	1/8																							
1584	包含帶	土・足葉	23.2	中：万葉多・黒頭少	(外)灰黒(内)頭部より外反して幅広く輪状。向後は尾に有する。体瘦。	ヨコナデ・側サエ・マツツ	ヨコナデ・側サエ・マツツ	1/8																							
1585	包含帶	土・足葉	32.5	中：万葉多・黒頭少	(外)灰黒(内)頭部より外反して幅広く輪状。向後は尾に有する。体瘦。	ヨコナデ・側サエ・マツツ	ヨコナデ・側サエ・マツツ	1/8																							
1586	包含帶	土・火棘?	22.4	中：万葉多・黒頭少	(外)灰黒(内)頭部より外反して幅広く輪状。向後は尾に有する。体瘦。	ヨコナデ・側サエ・マツツ	ヨコナデ・側サエ・マツツ	1/8																							
1587	包含帶	草・片口棘	37.2	中：万葉多	(外)灰黒(内)頭部より外反して幅広く輪状。向後は尾に有する。体瘦。	ヨコナデ・側サエ・マツツ	ヨコナデ・側サエ・マツツ	1/8																							
1588	塊	-	35.8	中：万葉多・黑色多	(外)灰黒(内)頭部より外反して幅広く輪状。向後は尾に有する。体瘦。	ヨコナデ・側サエ・マツツ	ヨコナデ・側サエ・マツツ	1/8																							

軒丸瓦觀察表

種別	図版	造 構 名	全長	瓦当径	瓦當	文様区隔	内区隔	周縁部	瓦面厚	胎 土	色調	凸面調整	凹面調整	輪郭調整	本口調整	備考
1355	S K 011		13.0	3.6	9.6	5.5	1.7	左	13	細；石英質・黒雲母少	灰					
1392	S E II 01下層		15.2	2.3	9.0	5.8	2.6	1.7 左	12	中；石英質・黒雲母少	灰					
1506	S D II 01	(11.7)			8.4	4.4	1.6	左	13~14	中；石英質・黒雲母少	灰白	織ミガキ	布目調の後ナダ			
1507	S D II 01	(14.4)	1.6	(9.4)	(5.2)	2.4	左	12?	中；石英質	灰						
1508	S D II 01	14.0	1.8	8.5	5.4	2.3	1.9 左	11	中；石英質	明灰	織ナダ	輪郭の後ナダ？マツリ				
1565	S D II 09	12.6	1.9	8.4	5.3	2.1	左	12	細；石英少・黒雲母少	灰						
1566	S D II 09	12.8	1.6	8.6	5.5	2.0	1.6 左	12	中；石英多	灰	織ナダ	布目・ナダ	織ナダ			
1567	S D II 09	12.7	1.7	9.2	5.0	1.9	左	11	中；石英質・黒雲母少	灰						
1591	横瓦	14.0	2.1	8.4	5.9	2.3	右	10	中；石英質・黒雲母少	黄灰						
1592	横瓦	13.0	1.5	8.2	5.6	2.0	右	10	中；石英少・黒雲母少	暗灰						

軒平瓦觀察表

種別	図版	造 構 名	上瓦層	文様区隔	下幅	瓦当高	文様区高	下附縫隙	瓦当原	胎 土	色調	凸面調整	凹面調整	輪郭調整	本口調整	備考
1391	S E II 01下層								1.1	中；石英質・黒雲母少	灰					
1538	S D II 03					(4.1)	(2.1)	0.7	(1.5)	細；石英質	黑	織ナダ	織ナダの後延ミガキ			
1568	S D II 09		(10.0)			3.6	1.8	0.9	1.1	中；石英多・黒雲母少	黑	織ナダ	織ナダ			

棟瓦觀察表

種別	図版	造 構 名	全长	全幅	厚さ	瓦面切妻	平滑度(凹面)	平滑度(凸面)	胎 土	色調	凸面調整	凹面調整	輪郭調整	本口調整	備考
1366	S K 011		1.6	2.7					中；石英多・黒雲母少	灰青・灰	板ナダ?	マツリ	板ナダ	煙付着	
1367	S K 011		1.6		3.3				中；石英多・黒雲母少	暗灰・灰青	ナダ	板ナダ	板ナダ?	煙付着	
1513	S D II 01		1.7			1.3	(1.3)	中；石英質・黒雲母少	灰	板ナダ	板ナダ	板ナダ?	板ナダ		

丸瓦觀察表

種固	固版	造構名	全長	玉縁長	玉縁高	体形幅	玉縁幅	体形闊	玉縁闊	胎土	色調	凸面調整	側面調整	木口面調整	備考
1159	87	9区S.P.Ⅱ	4.0	(3.0)	1.8	(5.7)	11.7	中:石英質・黒色粒少	灰	玉縁:横ナメ体形: タキの後継ナメ	有圧真	マントリ			
1356	S.K.II.1				2.1		中:石英質・黒雲母少	灰	玉縲:横ナメ	有目真	ナデ?	横ナメ			
1357	S.K.II.1				2.1		中:石英多・黒雲母少	黒褐	マメツ	有圧真	ケズリ?	・マメツ	土師質		
1358	S.K.II.1				1.9		組:石英少	灰白	龍ナメ?	自然輪	有圧真	・マメツ	側面質		
1359	S.K.II.1				1.7		中:石英質	にふい青褐	マメツ	有圧真	マントリ			土師質	
1383	S.E.II.01下		3.6	3.0	1.8	10.9	13.6	中:石英質・黒雲母少	灰	玉縲:横ナメ 横ナメの後継ミガキ	有圧真の後 横ナメ	マントリ			
1410	S.X.II.19	31.6	2.7	4.1	1.6	13.0	15.9	中:石英少・黒雲母少	灰	玉縲:横ナメ 横ナメの後継ミガキ	有圧真の後 横ナメ	ヨコナメ	横ケズリ		
1569	S.D.II.01				1.6		中:石英少・黒色粒少	灰	マメツ	有圧真	・マメツ				

平瓦觀察表

種固	固版	造構名	長さ	幅	厚	胎土	色調	凸面調整	側面調整	底面調整	備考
1191	S.X.II.06			1.3	中:石英質・赤色粒少	灰黄	龍ナメ	マメツ	ケズリの後ナメ	ナデ?	土師質?
1244	S.K.II.03			1.4	組:石英質・金雲母少	灰	龍ナメ	ナデ?	マメツ	横ナメ	
1360	S.K.II.11			1.5	中:石英質	灰	組ナメ	有目真	ケズリ	横ナメ	側面質
1361	S.K.II.11			1.4	中:石英質	灰	組ナメ	ケズリの後ナメ	ケズリ?	ケズリ	側面質
1362	S.K.II.11			1.3	中:石英質・黒雲母少・赤色粒少	灰	組ナメ・自然輪	有目	ケズリの後ナメ	ケズリ?	側面質
1363	S.K.II.11			1.4	中:石英質	灰	組目タキの後ナメ	有目	ケズリの後ナメ	ケズリ?	側面質
1364	S.K.II.11			1.8	組:石英少・金雲母少	灰	砂付滑	有目?	ケズリの後ナメ	ヨコナメ	側面質
1365	S.K.II.11			1.7	組:石英少・金雲母少	黑地	有目?	ケズリ	ケズリの後ナメ	ヨコナメ	土師質
1378	S.K.II.24		2.6	中:石英質・金雲母少	黒	組板ナメ	横ナメ?	マメツ	ケズリの後ナメ	横ナメ	
1385	S.E.II.02		15.0	組:石英質・金雲母多	黒灰	横ケズリの後継ナメ?	横板ナメ	ナデ?	ヨコナメ	ヨコナメ	
1510	S.D.II.01		1.7	中:石英質	黒褐	横ナメ	ヨコナメ		ヨコナメ	ヨコナメ	
1511	S.D.II.01		(2.4)	中:石英少	灰白	横ケズリ	有目真の後ナメ	取ナメ?	ヨコナメ	ヨコナメ	側面質
1512	S.D.II.01		1.7	中:石英少	灰	ヨコナメ	ヨコナメ	取ナメ?	ヨコナメ	ヨコナメ	
1539	S.D.II.03		1.7	中:碧玉質	黒	組ナメ	ヨコナメ	取ナメ?	ヨコナメ	ヨコナメ	
1589	包含層		2.6	中:石英質・赤色粒少	にふい黒	格子タキ	有目	—	—	—	土師質
1590	包含層		2.3	中:石英少	灰	組目タキ	有目	—	—	—	側面質

石器・石製品調査表

種別	器種	器種	遺存量(注意)	重量	石材	備考
39	剥片	SK II 47	長5.1/幅3.4/厚1.0	19.84	サスカイト	
88	砥石	SK II 22中層	現存長10.1/幅12.8/厚0.6	845.12	砂岩	半裁・被熱
89	石頭未製品?	SK II 22下層	長6.0/幅3.3/厚0.6	9.24	サスカイト	
90	台石?	SK II 22下層	現存長35.0/幅29.2/厚7.9		砂岩	被熱・剝離
105	砥石	SK II 24下層	現存長29.6/幅29.5/厚14.0		砂岩	一部欠損
236	塊状剥片石核	10a区谷7下層	長7.4/幅4.4/厚1.5	43.04	サスカイト	
237	塊状石器	10a区谷7下層	長3.7/幅2.5/厚0.7	9.19	サスカイト	
238	剥片	10a区谷7下層	現存長2.3/幅3.3/厚0.7	5.02	サスカイト	
239	剥片	10a区谷7下層	現存長2.7/幅2.5/厚0.5	2.55	サスカイト	下端部欠損
459	砥石	10a区谷7中層	現存長18.6/幅16.0/厚4.5		砂岩	被熱・剝離
460	剥片	10a区谷7中層	現存長9.1/幅3.1/厚1.9	36.26	サスカイト	
526	スクレイバー	10b区谷7中層	現存長7.4/幅3.3/厚0.8	25.11	サスカイト	
527	塊状剥片石核	10b区谷7中層	現存長5.8/幅2.7/厚1.2	17.10	サスカイト	
528	剥片	10b区谷7中層	現存長4.6/幅3.2/厚1.4	19.37	サスカイト	
529	砥石	10b区谷7中層	現存長17.8/幅9.4/厚7.0	1611.09	砂岩	
680	打製石槌丁	11区谷7中層	長8.6/幅7.3/厚0.9	37.33	サスカイト	
681	剥片	11区谷7中層	現存長5.5/幅4.7/厚0.5	12.99	サスカイト	
846	剥片	10b区谷7上層	長2.4/幅4.8/厚0.9	6.24	サスカイト	
919	ナイフ形石器	10b区谷7上層	現存長4.2/幅1.4/厚0.8	5.22	サスカイト	
920	剥片	11区谷7上層	現存長2.9/幅6.7/厚0.9	14.39	サスカイト	下端折損
921	塊状石器	11区谷7上層	現存長2.4/幅4.7/厚0.6	9.47	サスカイト	
922	塊状石器	10b区谷7上層	現存長6.9/幅2.7/厚2.0	34.66	サスカイト	
935	剥片	SH II 02	長4.9/幅3.2/厚1.4	15.48	サスカイト	
970	剥片	9b区SP II 006	長7.6/幅1.7/厚1.6	16.15	サスカイト	
1023	叩き石	SK II 14	長10.8/幅7.8/厚5.8	658.46	砂岩	
1024	砥石	SK II 14	長5.8/幅7.0/厚4.7	169.58	流紋岩	被熱
1057	石繩	SD II 15	現存長1.8/幅1.7/厚0.4	1.17	サスカイト	平基式
1059	スクレイバー	SD II 21	長8.0/幅4.6/厚1.4	35.14	サスカイト	
1073	塊状石器	SD II 61	現存長5.9/幅2.6/厚1.2	16.23	サスカイト	
1079	剥片	SD II 68	長5.8/幅4.2/厚1.3	27.31	サスカイト	白色風化
1113	スクレイバー	SD II 71下層	現存長8.3/幅4.1/厚1.2	48.50	サスカイト	
1128	剥片	SD II 71上層	現存長3.6/幅4.5/厚1.2	19.37	サスカイト	
1129	剥片	SD II 71上層	長6.7/幅3.9/厚2.2	41.02	サスカイト	
1130	剥片	SD II 71上層	長3.7/幅3.9/厚0.8	12.31	サスカイト	
1131	剥片	SD II 71上層	現存長2.9/幅2.2/厚0.5	4.05	サスカイト	
1132	剥片	SD II 71上層	現存長3.0/幅4.6/厚0.9	9.86	サスカイト	

石器・石製品觀察表

辨別	圖版	器 型	遺 槟 名	殘存量 (法量)	重 量	石 材	備 考
1192	1206	磨石	S X II 06	現存長11.7/闊10.6/厚6.8	1092.84	砂岩	被熱・刺燒
	90	輪片	S D II 30	現存長2.3/闊5.3/厚1.0	8.61	サスカイト	一部欠損
1246	93	砾石	S K II 06	現存長20.1/闊8.8/厚8.1	1971.16	砂岩	欠損
1249	93	砾石	S K II 06	現存長32.3/闊16.1/厚9.9		砂岩	
1250	92	石臼	S K II 07	徑30.2/厚10.1		角礫巖	
1251	92	石臼	S K II 07	徑31.5/厚14.0		角礫巖	
1252	92	石臼	S K II 07	徑31.5/厚10.6		角礫巖	
1268	93	砾石	S K II 11	現存長12.4/闊8.5/厚8.5	1194.92	砂岩	欠損
1369	1370	磨石	S K II 11	長10.9/闊8.6/厚6.1	837.48	砂岩	
	93	砾石	S K II 11	長16.1/闊10.7/厚4.4	1244.95	砂岩	
1371	93	砾石	S K II 11	長16.3/闊5.4/厚1.6	209.82	流紋岩	
1372	石臼		S K II 11	徑元徑29.8/厚7.4		角礫巖	欠損
1373	石臼		S K II 11	徑元徑29.5/厚10.1		角礫巖	欠損
1374	石臼		S K II 11	徑元徑27.4/厚7.0		砂岩	欠損
1386	93	砾石	S K II 30	長23.1/闊8.8/厚6.1	2336.75	砂岩	
1387	91	打擊石塊丁	S K II 30	現存長4.6/闊4.7/厚1.1	29.20	サスカイト	
1402	石臼		S X II 04	徑元徑28.1/厚9.1		角礫巖	欠損
1514	92	砾石	S D II 01	現存長5.6/闊4.0/厚1.8	45.17	薄板岩	一部欠損
1571	石灯籠?		S D II 09	現存長11.5/闊12.0/厚6.5		角礫巖	
1593	90	橫長削片石核	10b 区部位不明	現存長6.7/闊2.8/厚1.8	17.05	サスカイト	欠損
1594	90	橫長削片石核	6 a 区部位不明	現存長10.8/闊4.5/厚3.5	147.88	サスカイト	一部欠損
1595	90	剝片	11区 田耕土	現存長5.9/闊5.7/厚1.9	27.47	サスカイト	
1596	91	楔形石器	10b 区部位不明	長4.4/闊2.8/厚1.1	12.05	サスカイト	
1597	91	剝片	10b 区部位不明	長2.3/闊3.1/厚0.5	3.63	サスカイト	
1598	91	橫長削片石核	6 a 区部位不明	長8.6/闊3.5/厚1.4	45.26	サスカイト	
1599	剝片		11区 田耕土	現存長6.9/闊3.3/厚0.7	16.01	サスカイト	
1600	橫長削片石核?		8 区部位不明	現存長6.2/闊3.2/厚1.6	26.08	サスカイト	

木製品觀察表

埠國	圖版	遺 様 名	器 種	現存長	最大幅	木取り	備 考
31	95	S K I 46	臺?	(7.6)	(3.6)	0.5	コナラ属アカガシ重属
32	95	S K I 46	不明	(6.1)	4.3	0.5	クスノキ科
33	95	S K I 46	不明	(8.8)	5.0	5.0	タブノキ
34	95	S K I 46	不明	(10.3)	1.9	1.1	ヤブツバキ
35	96	S K I 46	不明	(7.1)	2.6	1.1	コナラ属アカガシ重属
36	96	S K I 46	記除	(33.1)	22.3	0.8	コナラ属アカガシ重属
37	95	S K I 46	枕	(25.9)	3.7	1.1	コナラ属
240	95	10 a 区谷7下骨	曲解又缺	(30.3)	(4.1)	1.1	コナラ属アカガシ重属
830	95	10 a 区谷7上骨	不明	(34.8)	10.2	8.1	ツアライ
923	95	11区谷7數上骨	不明	(24.4)	10.7	コナラ属コナラ属アカガシ重属	
924	96	10 b 区谷7數上骨	刀形	(30.6)	4.1	3.0	コナラ属アカガシ重属
925	97	10 b 区谷7數上骨	棒	(34.4)	3.1	1.6	スギ
926	10 b 区谷7數上骨	枕?	枕?	(26.3)	2.7	コナラ属コナラ属クヌギ節	
927	—	11区谷7數上骨	枕	(27.7)	6.9	コナラ属コナラ属クヌギ節	
928	97	10 b 区谷7數上骨	不明	(46.0)	3.2	コナラ属アカガシ重属	
929	96	10 b 区谷7數上骨	不明	(17.0)	2.3	コナラ属アカガシ重属	
930	97	10 b 区谷7數上骨	枕	(57.1)	3.4	ハシノキ属ヤシマシ亞属	
931	97	10 b 区谷7數上骨	枕	(68.4)	4.5	ケヤキ	
1114	98	S D I 71 F骨	入形	60.4	5.6	0.8	ツツキ科モミ属
1115	98	S D I 71 下骨	直串	(63.7)	5.0	0.9	スギ
1116	—	S D I 71 下骨	板材	(21.2)	4.2	1.1	サワラ
1175	—	S K I 49 下骨	不明	(10.3)	2.2	1.7	ツツキ属複雜管束亞属
1245	—	S K I 03	橢圓板?	(12.1)	8.1	1.3	ツツキ属複雜管束亞属

金屬器觀察表

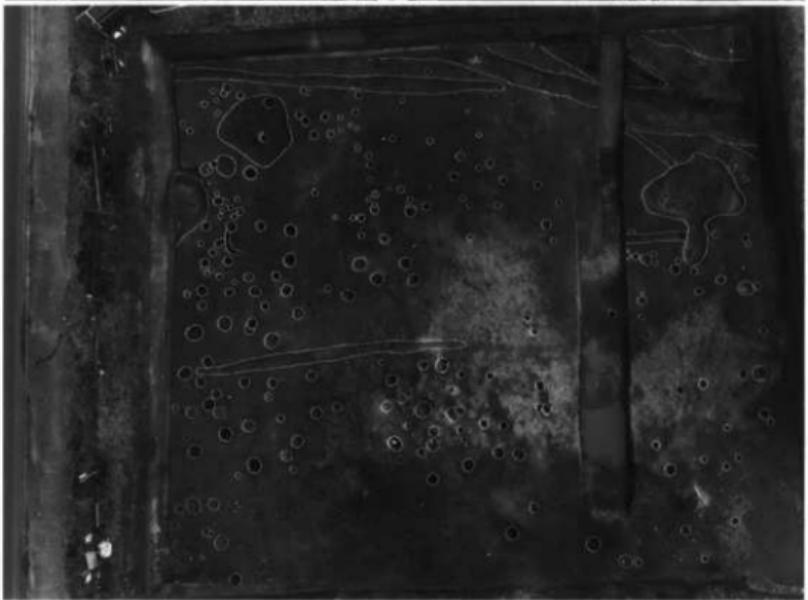
埠國	圖版	器 種	遺 様 名	現存量・法量	残存量・法量	木取り	備 考
847	94	錠	10 b 区谷7上唇	現存長4.9/側身部長3.4/回轉0.2	現存長4.9/側身部長3.4/回轉0.2	無	無
1158	94	和銛	6 a 区 S P II 330	現存長7.4/側身部厚0.5/側身部厚0.4	現存長7.4/側身部厚0.5/側身部厚0.4	3/4欠損	3/4欠損
1233	94	刀子?	6 a 区 S P III 559	現存長6.3/最大幅1.1/最大厚0.3	現存長6.3/最大幅1.1/最大厚0.3	小片	小片
1234	94	煙管	6 a 区 S P III 694	現存長5.5/最大幅0.7	現存長5.5/最大幅0.7	小片	小片
1375	94	錫錢	S K I 12	現存長2.4	現存長2.4	錢形不明	錢形不明
1542	94	不明	S D I 05	現存長4.8/最大幅1.1/厚0.5	現存長4.8/最大幅1.1/厚0.5	下端欠損, 断面矩形	下端欠損, 断面矩形
1569	94	鉄釘	S D I 09	現存長5.0/頭部径0.3/厚0.3	現存長5.0/頭部径0.3/厚0.3	下端欠損	下端欠損
1570	94	鉄釘	S D I 09	現存長13.0/頭部径0.9/中位厚0.4	現存長13.0/頭部径0.9/中位厚0.4	下端欠損	下端欠損

図 版



遺跡周辺航空写真（上が北、国土地理院1962年撮影）

図版 2

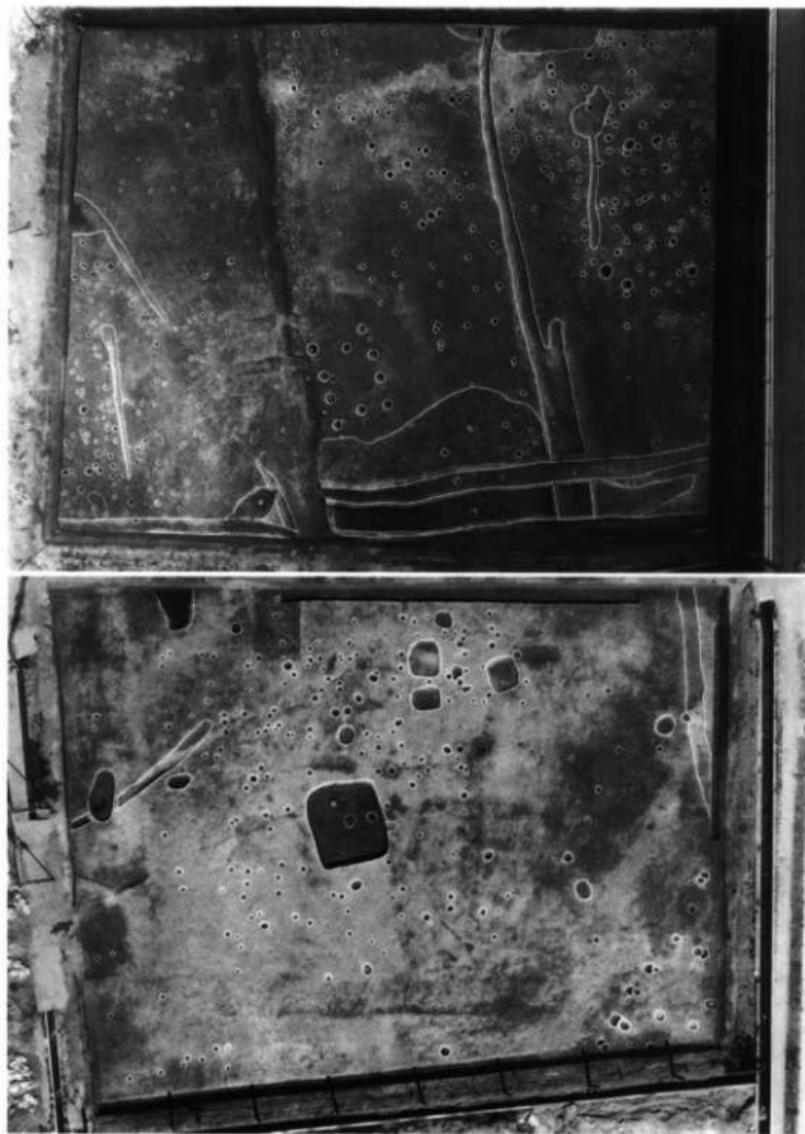


上 遺跡遠景（東→） 下 7a区全量（左が北）



6区 全景 (左が北)

図版 4

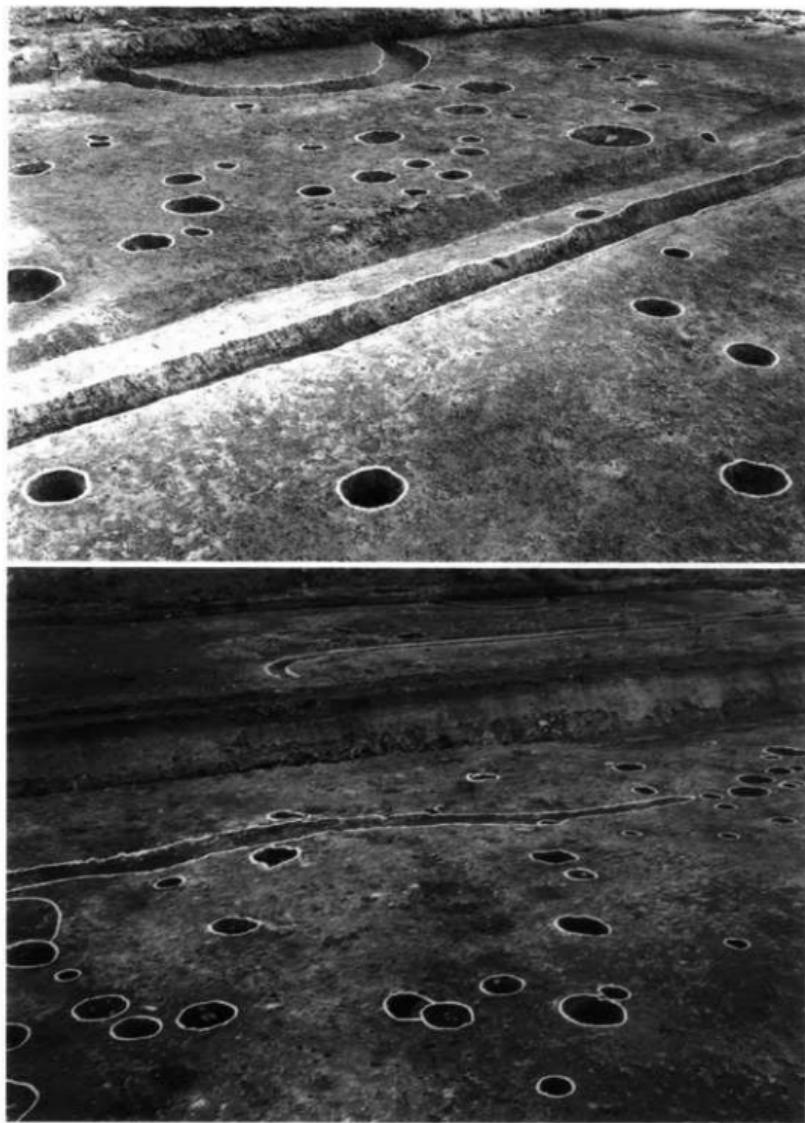


上 8区全景 (左が北) 下 9区全景 (上が北)

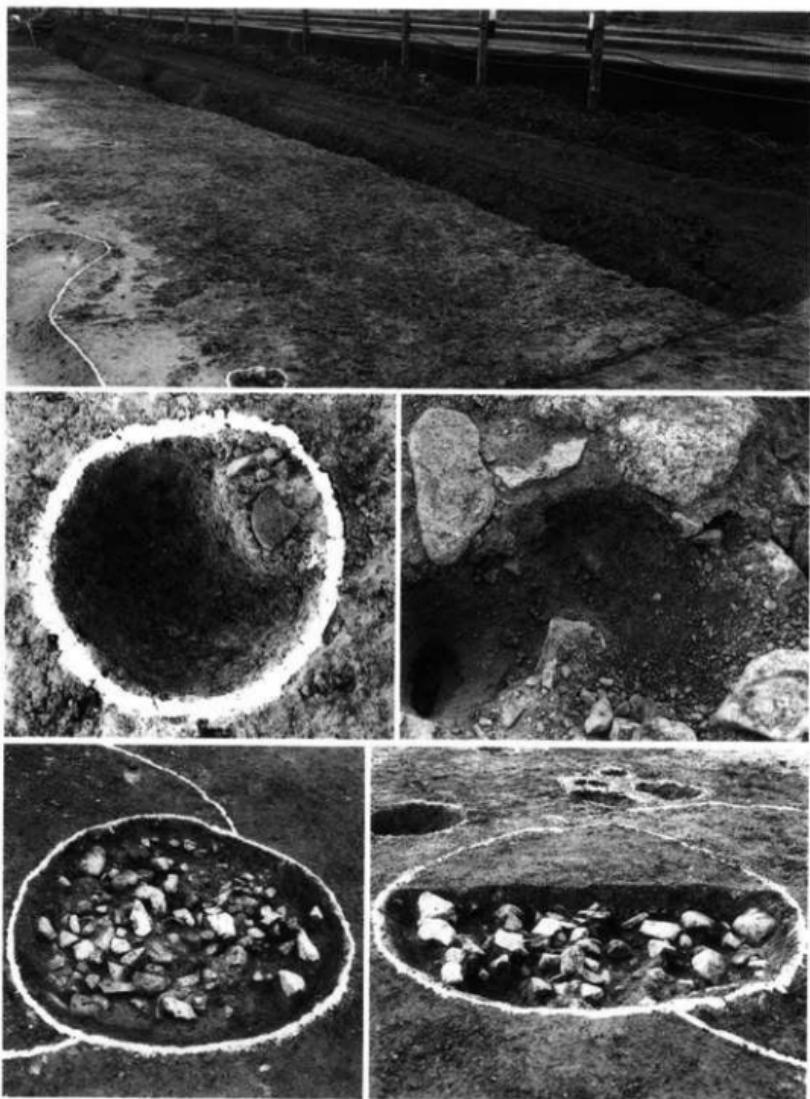


上 7 b 区全景（左が北） 下 6 区西半全景（北東→）

図版 6



上 6 a 区 S B II 03全景 (南→) 下 6 b 区 S B II 04全景 (南→)



上 6 b 区南壁土層断面（北西→）

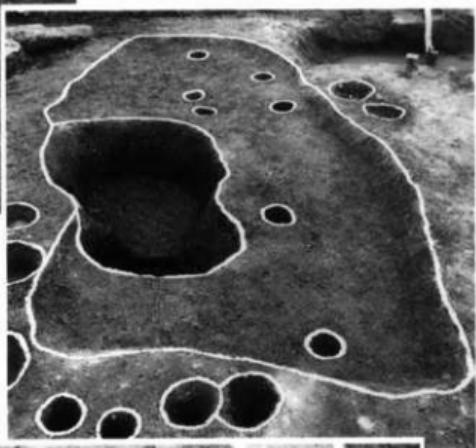
中左 6 a 区 S P II 330 和鏡出土状況（南→）

下左 6 a 区 S K II 02 集石出土状況（西→）

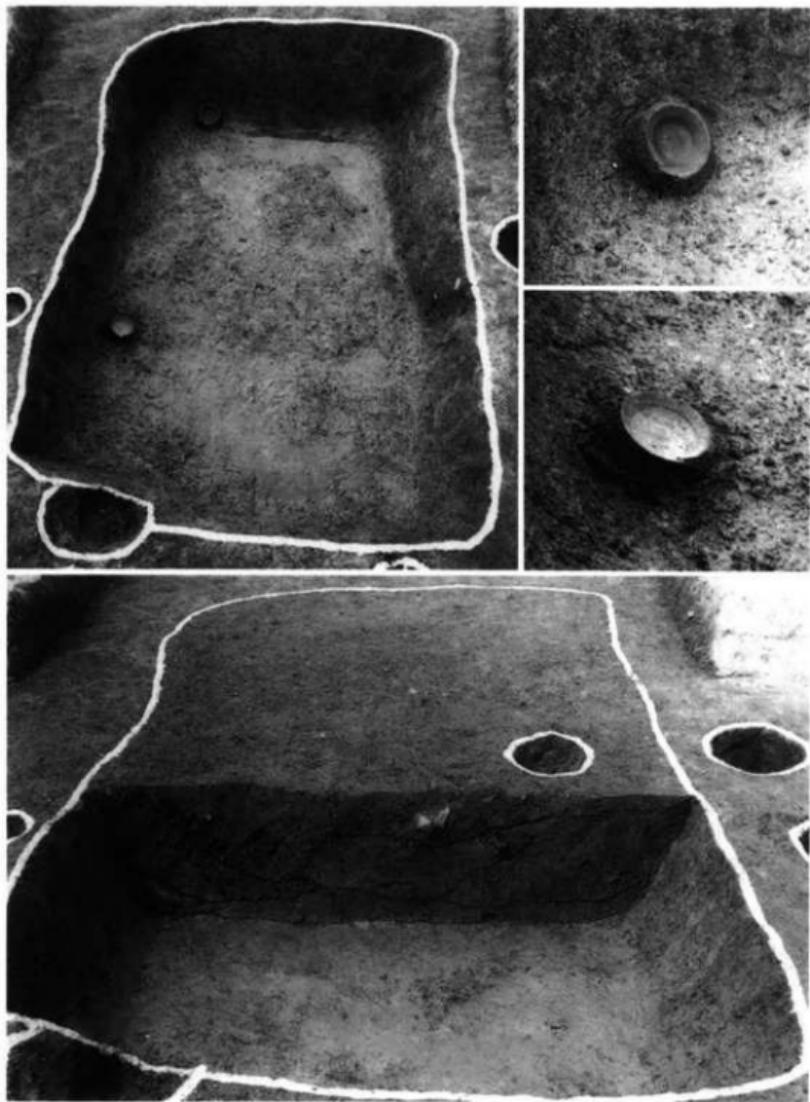
中右 6 a 区 S K II 01 漆器壺出土状況（東→）

下右 6 a 区 S K II 02 土層断面（南→）

図版 8



上 6a区SK II 03上面集石出土状況（北→） 中 6a区SK II 03全景（北→）
下 6a区SK II 03桶出土状況（西→）



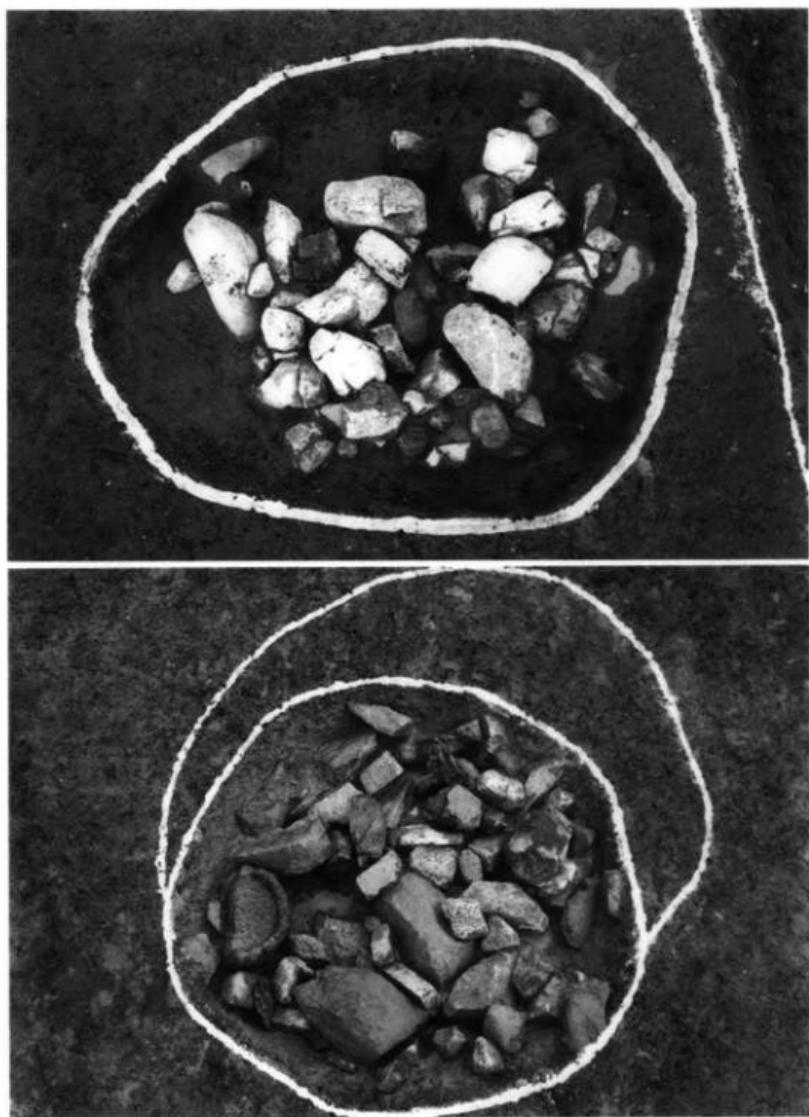
上左 6a区SK II-05全景(東→)

上右下 6a区SK II-05遺物出土状況(東→)

上右上 6a区SK II-05遺物出土状況(東→)

下 6a区SK II-05土層断面(東→)

图版10



上 6 a 区 S K II 06 集石出土状况 (南→) 下 6 a 区 S K II 07 集石出土状况 (北→)

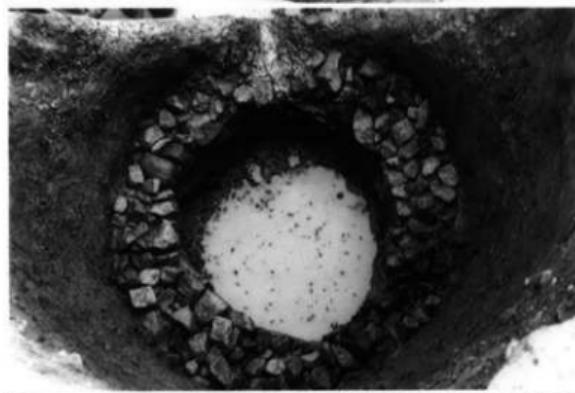


上 6 b 区 SK II 12 遺物出土状況 (北→) 中 6 a 区 SK II 23 遺物出土状況 (西→)
下 6 a 区 SK II 23 土層断面 (西→)

図版12



6 b 区 S E II 01
上面丸太材出土状況（北→）



6 b 区 S E II 01
石組上面（北→）



6 b 区 S E II 01
石組検出状況（南→）

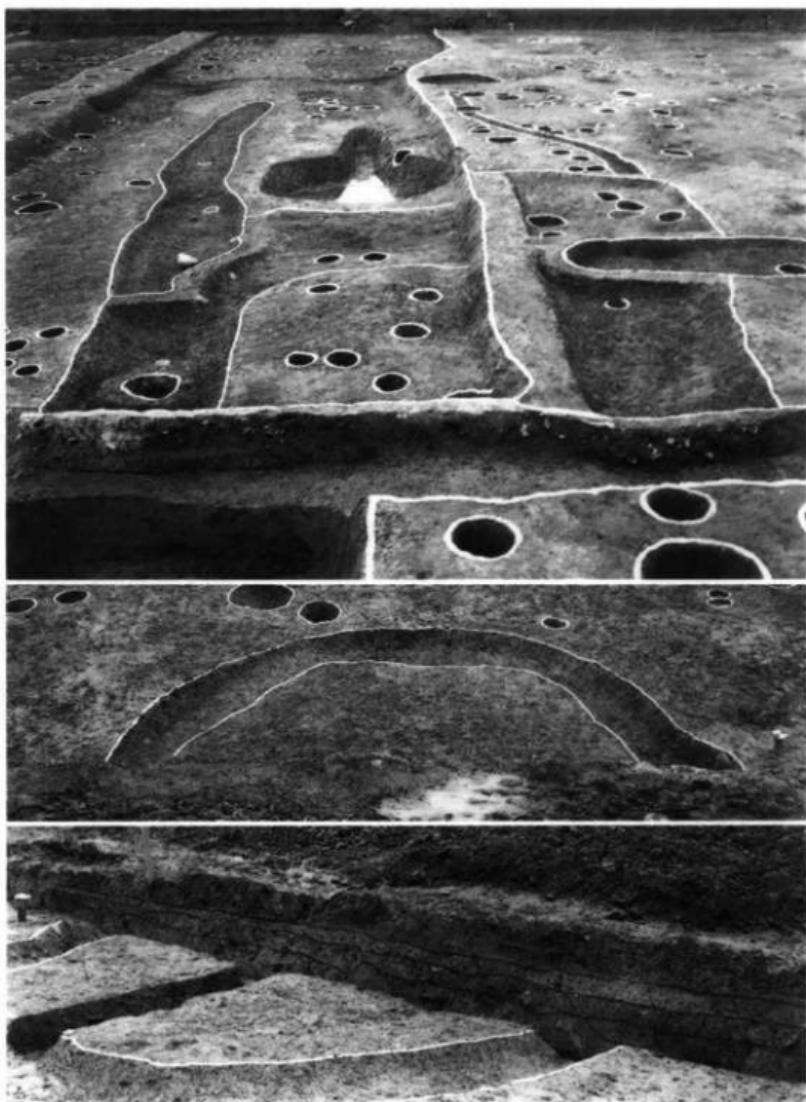


6 a区SK II 11・SD II 01全景
(東→)

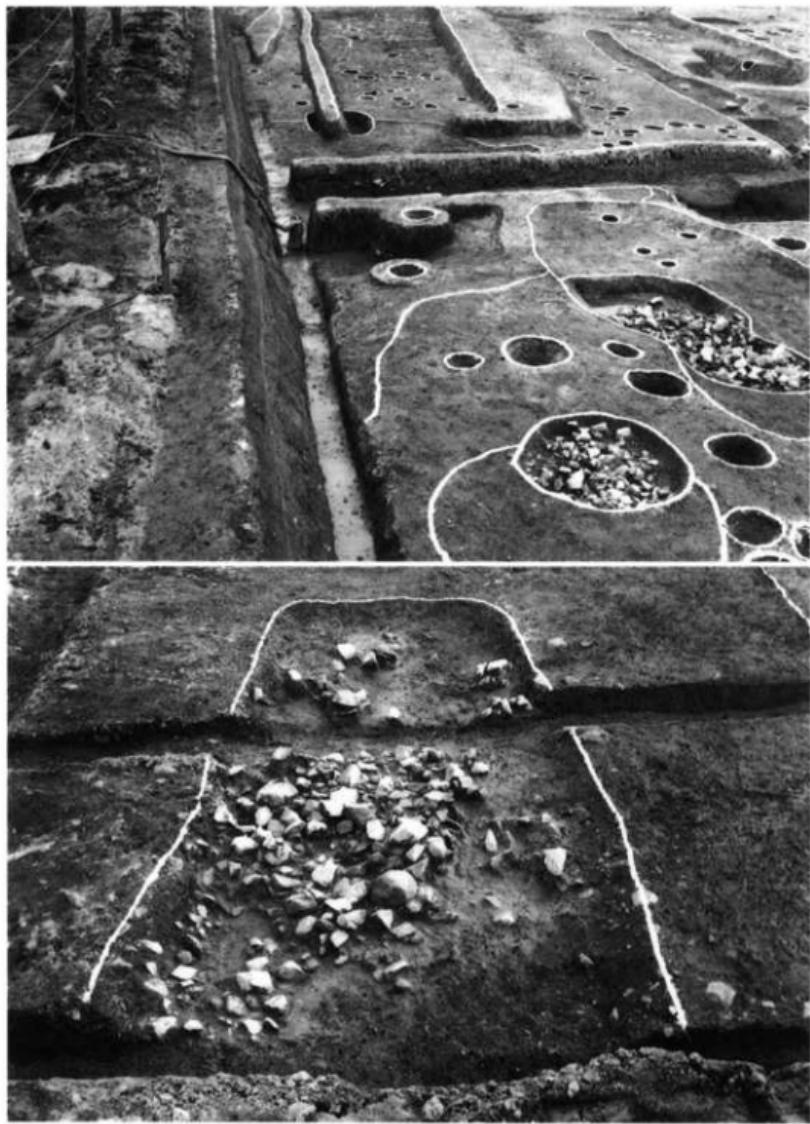


中 6 a区SK II 11土層断面 (西→) 下 6 a区SD II 01・SX II 02土層断面 (西→)

図版14



上 6a区SDII02全景(北→) 中 6a区SDII08全景(北→)
下 6a区SDII08土層断面(南→)

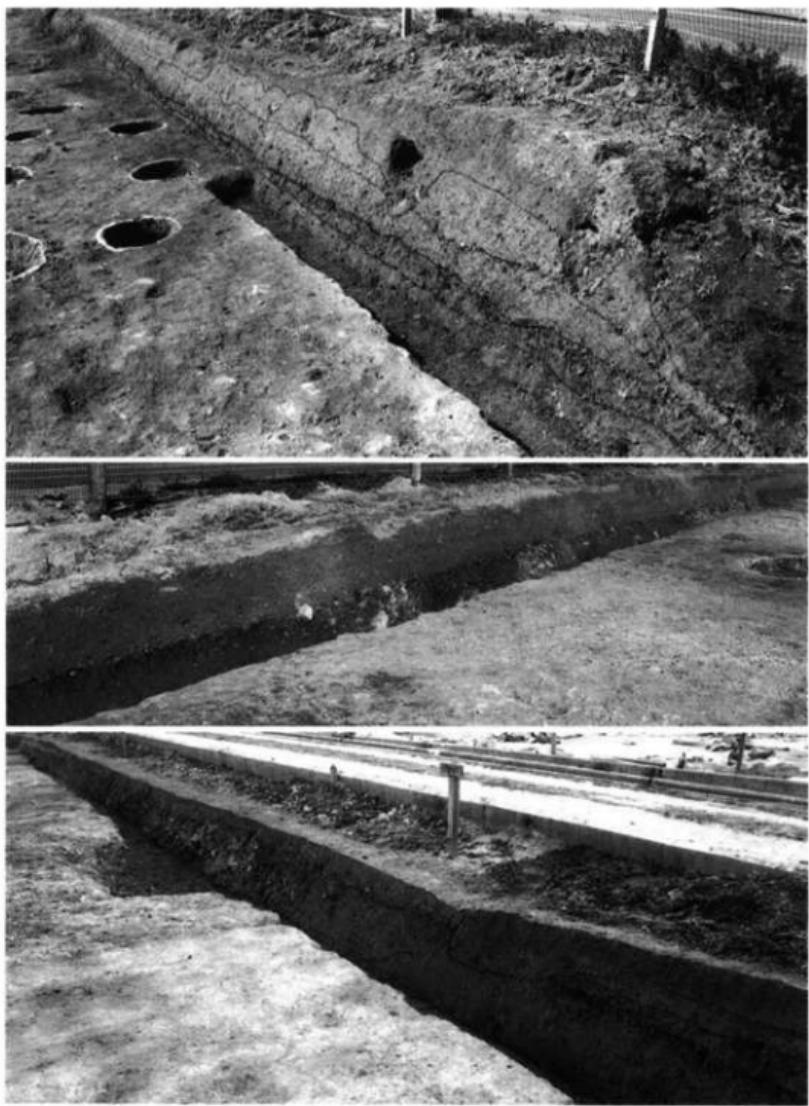


上 6a区SX II 02全景 (北→) 下 6a区SX II 06全景 (北→)

図版16

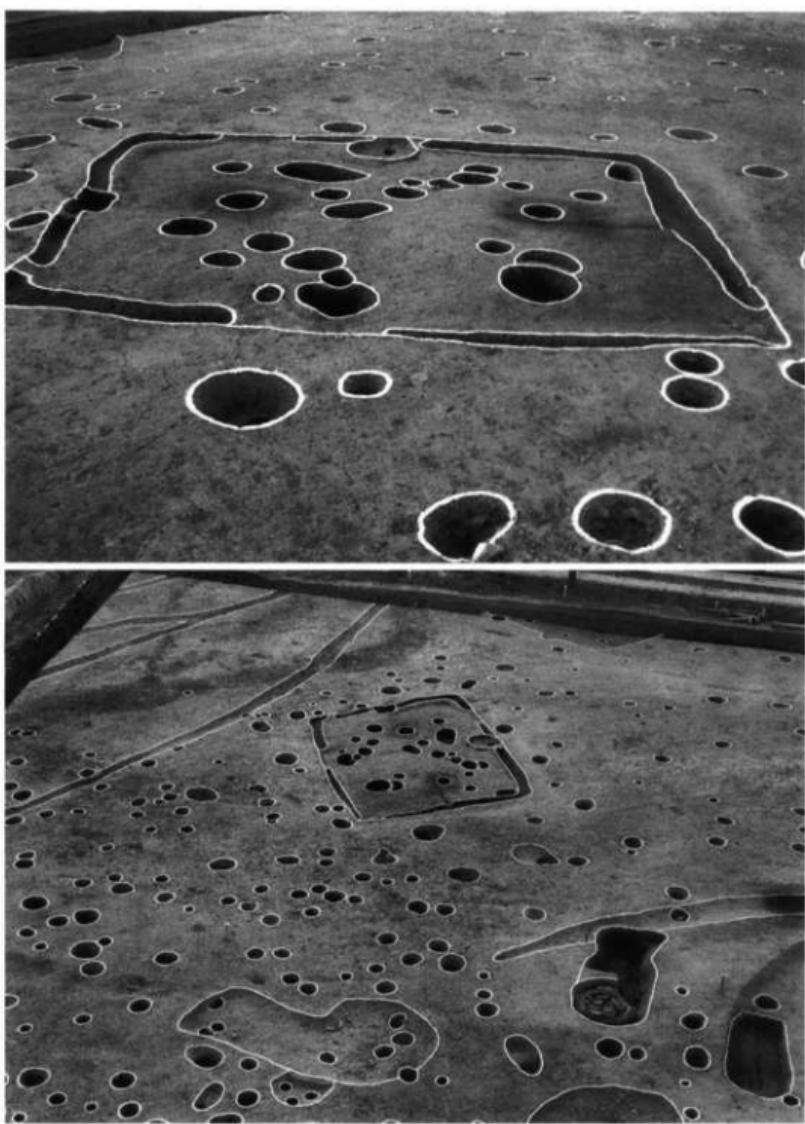


上 7 a 区全景 (西→) 下 7 b 区全景 (東→)

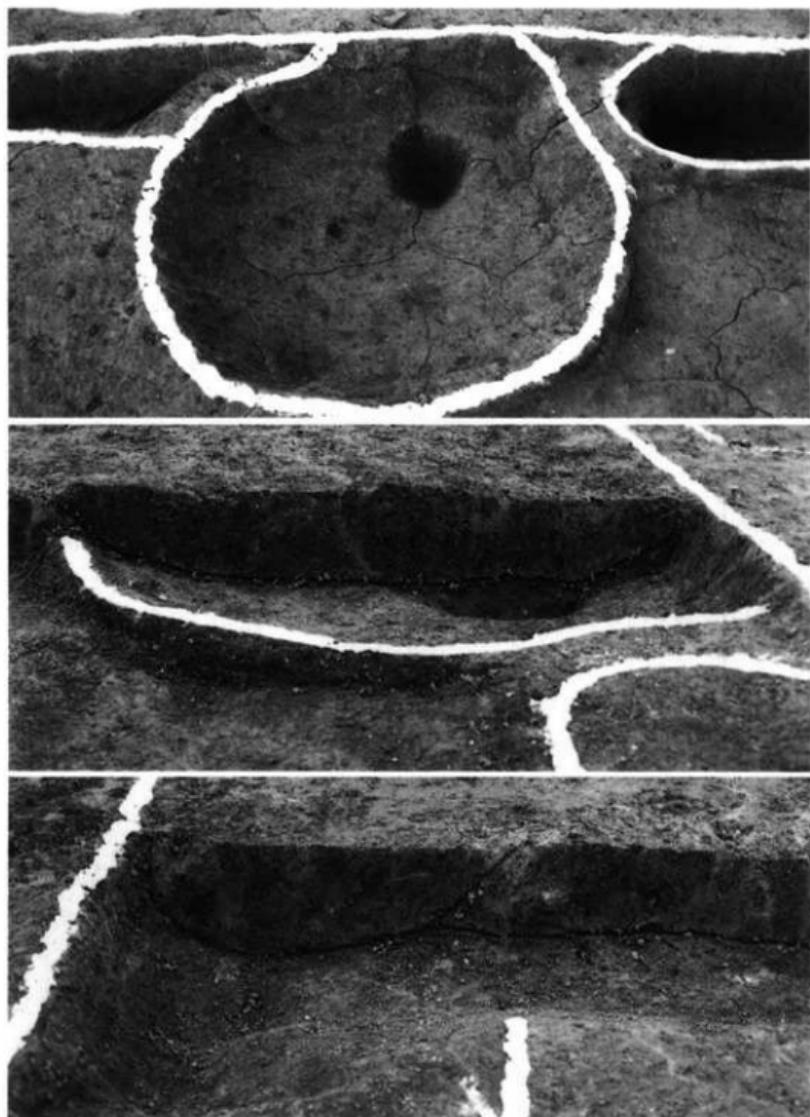


上 7 a 区北壁土層断面（南→） 中 7 b 区北壁土層断面（南西→）
下 7 b 区西壁土層断面（北東→）

図版18

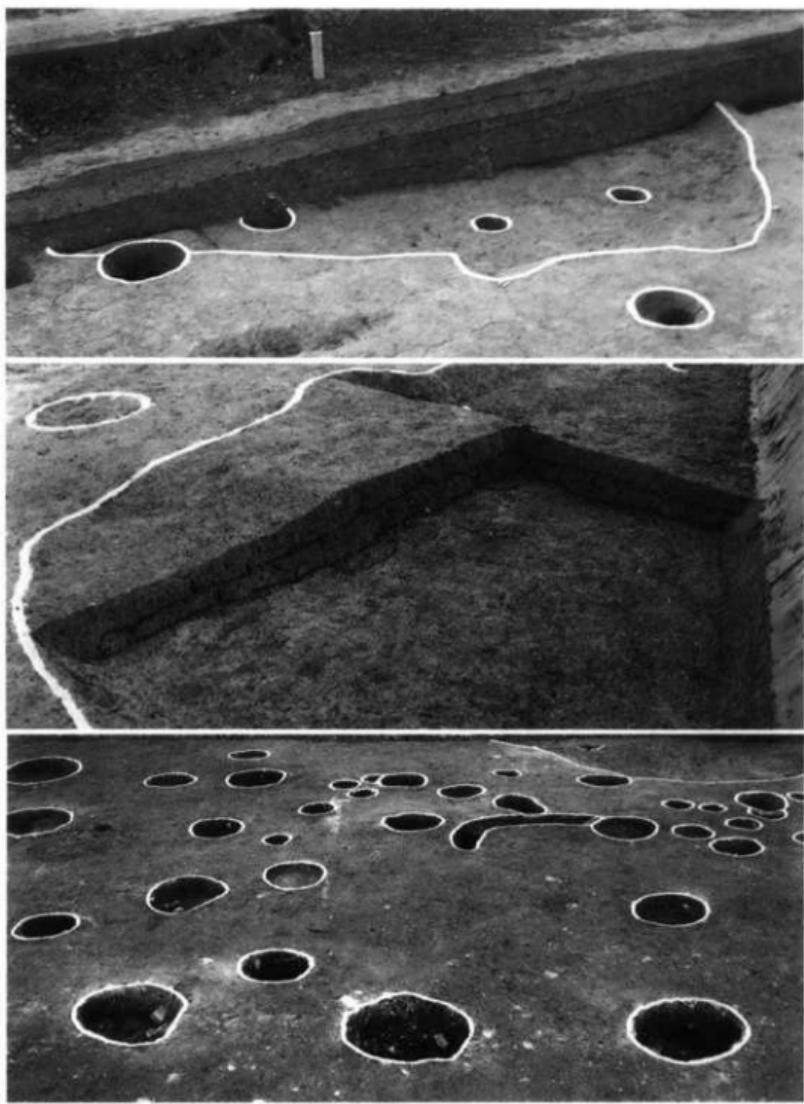


上 7b区SH II 01全景（南→） 下 7b区SH II 01全景（東→）

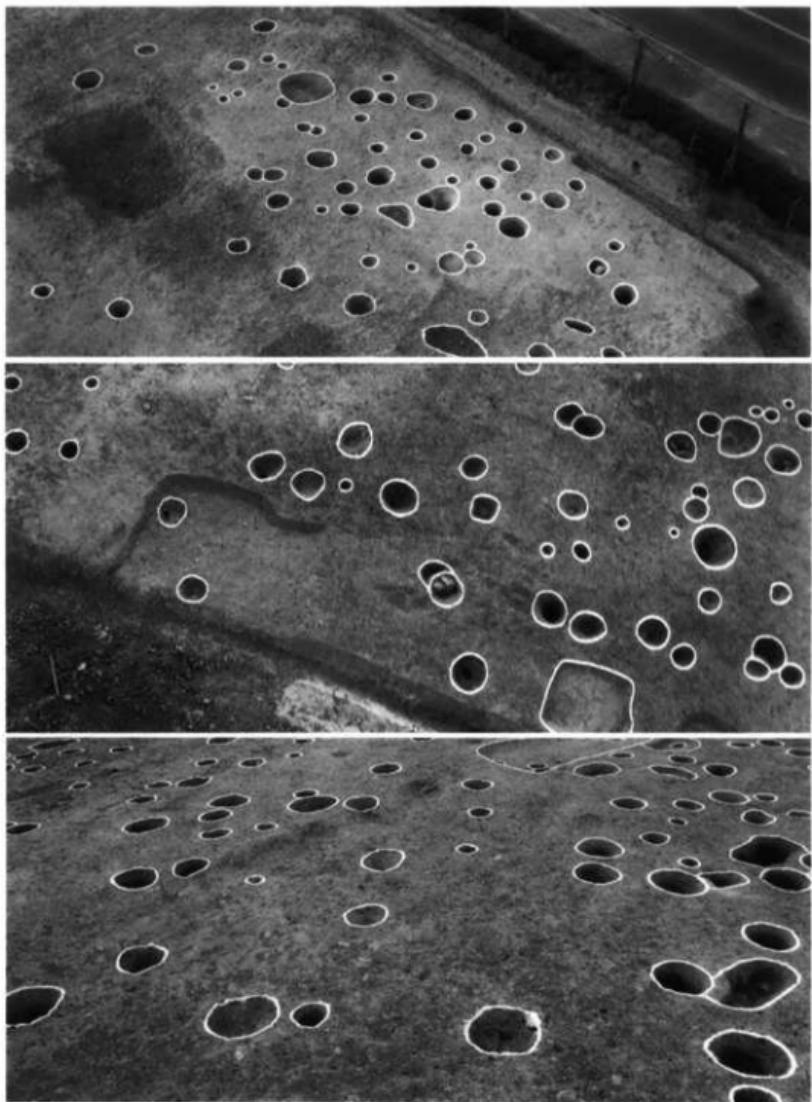


上 7b区SH II 01竪検出状況(南→) 中 7b区SH II 01竪断面(東→)
下 7b区SH II 01壁溝断面(北→)

図版20

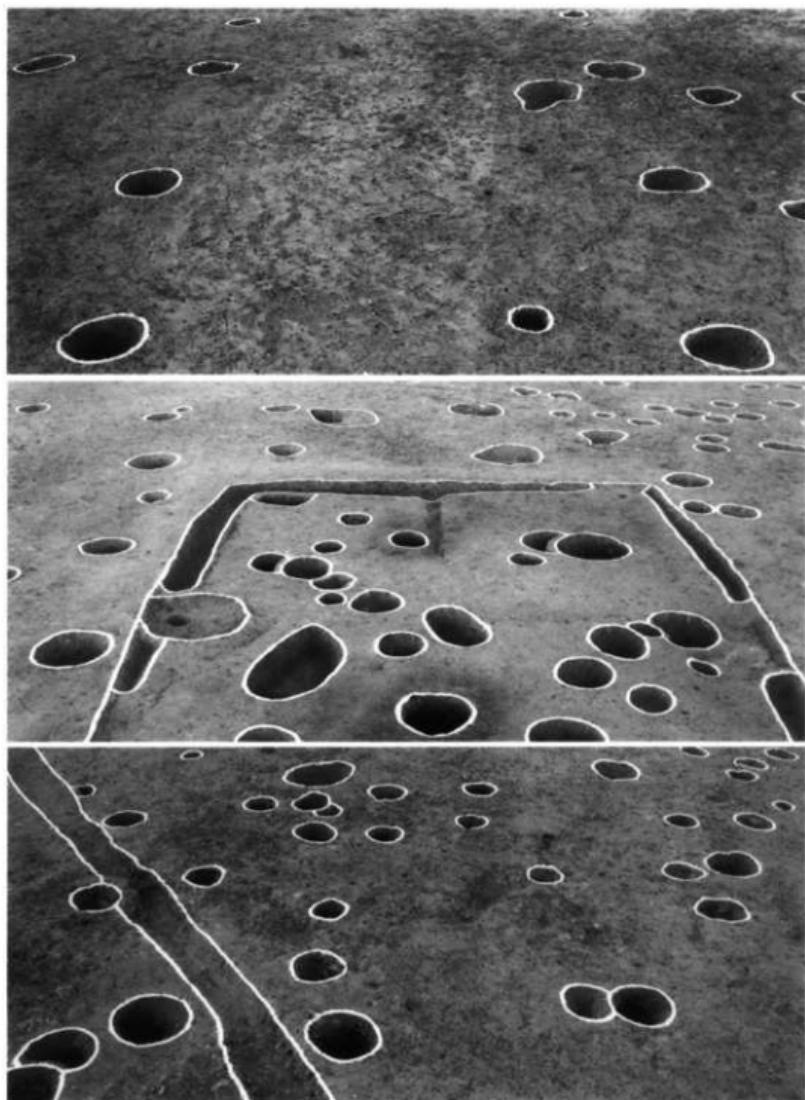


上 7 b 区 SH II 02全景 (東→) 中 7 b 区 SH II 02土層断面 (北西→)
下 7 a 区 SB II 05全景 (南→)



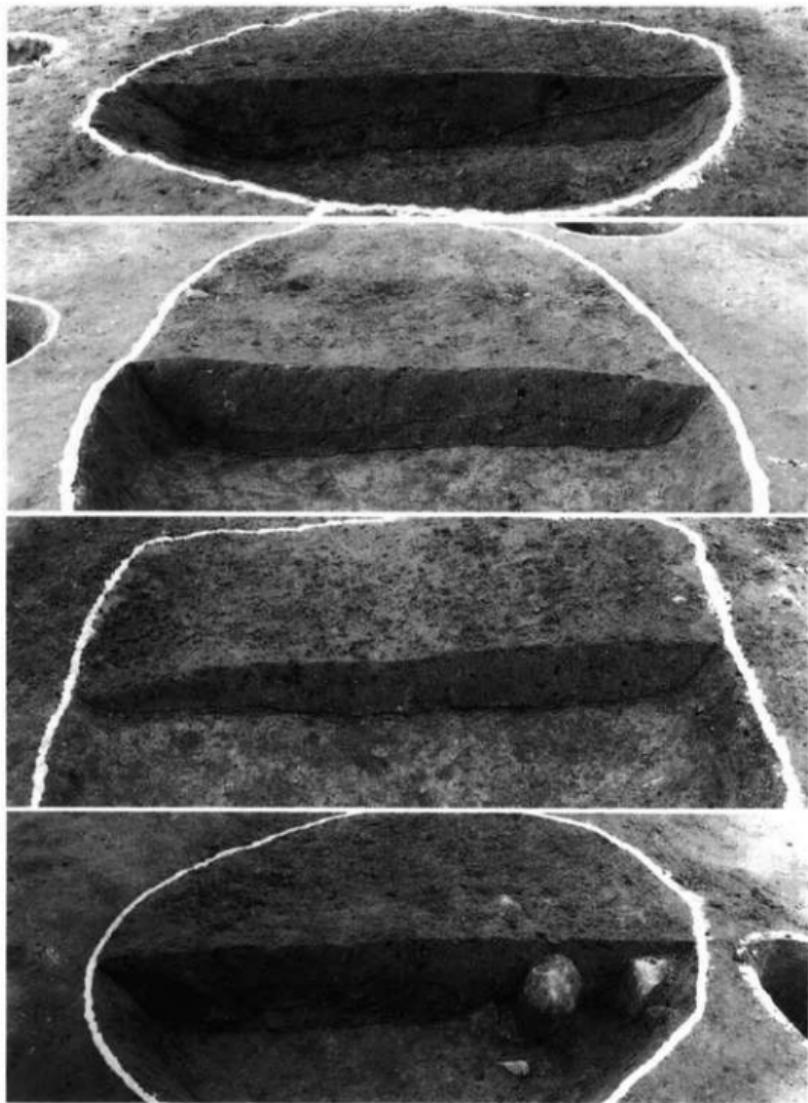
上 7 b 区 SB II 15・16・17 全景 (東→) 中 7 b 区 SB II 20 全景 (東→)
下 7 b 区 SB II 26 全景 (南→)

図版22



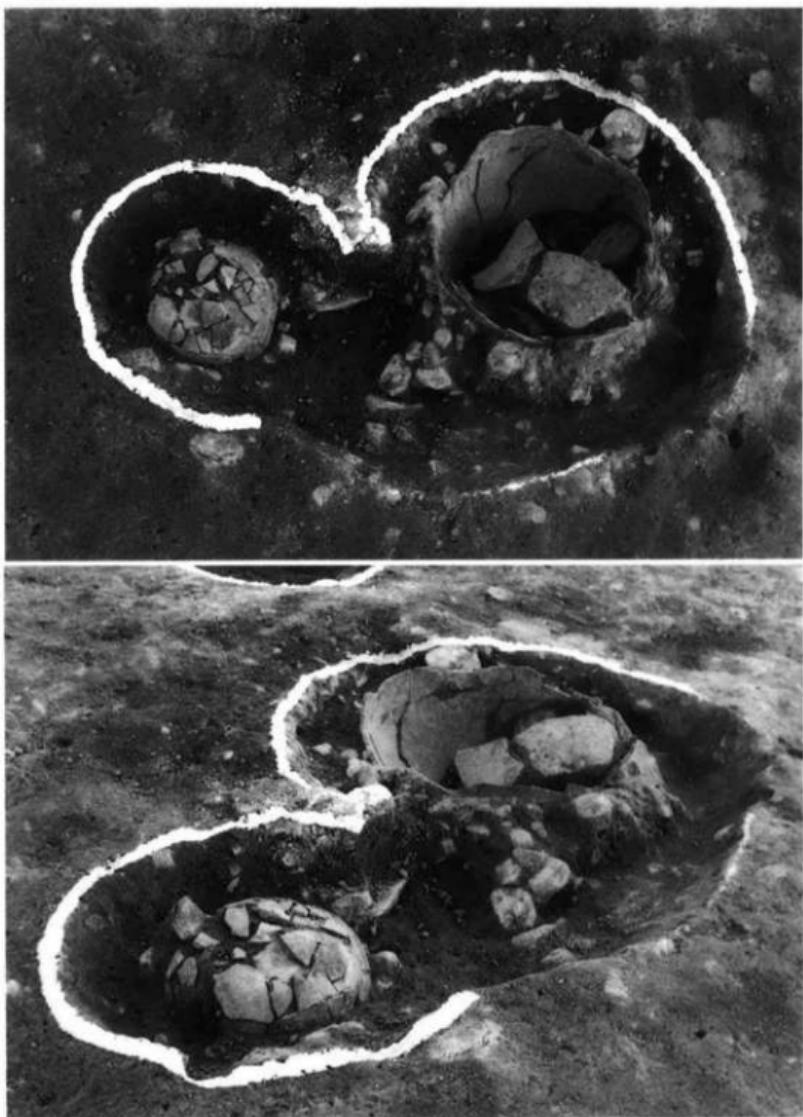
上 7b区SB II 27全景 (南→) 中 7b区SB II 28全景 (西→)
下 7b区SB II 31全景 (南→)

図版23



上 7b区SK II 26土層断面（南→） 中上 7b区SK II 27土層断面（南→）
中下 7b区SK II 28土層断面（南→） 下 7b区SK II 29土層断面（南→）

図版24



上 7b区 ST II 01・02土器棺出土状況（西→） 下 7b区 ST II 01・02全景（北→）